

加賀塚遺跡2

(第4次調査)

—横野平工業団地分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集—

2011

群馬県安中市教育委員会

図絵1



加賀塚遺跡全景



加賀塚遺跡北端部 H-65号住居址周辺

図絵2



H-65号住居址張り出し部



H-99号住居址カマド

序

加賀塚遺跡のある中野谷地区は、碓氷川の南側、妙義山の麓に広がる横野台地にあります。この横野台地は、こんにゃく、ネギ、ゴボウ等を中心とした畑作地帯であり、緑豊かな自然との共存した地域であります。そして、最近では、県営畠地帯総合整備事業によって、県内でも有数の農業地帯として生まれ変わりつつあります。また、工業団地造成や県道建設の整備も行われ、新たな産業の発展も期待されています。

こうした開発に伴い多くの遺跡が発見され、発掘調査を実施してきたところ、旧石器時代から、この地に人々の営みが続けられてきたことが明らかとなりました。

今回報告する加賀塚遺跡は、安中市土地開発公社が計画する横野平工業団地（A団地）分譲事業に伴うもので、平成17年度に一部を発掘調査し、その成果は、平成18年度に報告しました。発掘調査の結果から、古墳時代を中心とする住居址が多数発見され、この地域の拠点的な集落が存在していたことが明らかとなりました。

本報告が、学術分野に寄与するだけではなく、地域を学ぶ郷土資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、過酷な気象条件の下で発掘調査に従事していただいた方々、調査にご協力いただいた各関係機関をはじめとする皆様には感謝申し上げる次第です。

平成23年2月

安中市教育委員会
教育長 中澤 四郎

例　言

1 本書は安中市土地開発公社が計画した横野平工業団地（A団地）分譲事業に伴う加賀塚遺跡（遺跡略称G－46 C）第4次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、1～3次調査の成果は、平成18年度で報告している（『加賀塚遺跡1』）。

本報告書では、遺物觀察表、各種集計表、写真図版等をデータ化し、CD-ROMとして添付した。

2 加賀塚遺跡は安中市中野谷字加賀塚地内に所在する。

3 確認調査については国庫補助金・県費補助金により、平成18年度に安中市教育委員会が実施し、本調査及び遺物整理は、安中市土地開発公社の負担により、平成20～22年度に安中市教育委員会が直営で実施した。

4 確認調査及び発掘調査、資料整理は安中市教育委員会学習の森文化財係主査（文化財保護主事）井上慎也が担当し、発掘調査については、（有）毛野考古学研究所との管理委託業務にもとづき、石丸敦史が調査員として従事した。資料整理業務については、（有）毛野考古学研究所（図面、写真関係）、（有）前橋文化財研究所（遺物関係）に委託した。報告書作成業務は、（有）毛野考古学研究所に委託した。

5 確認調査は平成19年2月26日より3月29日まで実施した。発掘調査は平成20年10月1日より平成21年3月31日まで、実施した。遺物整理は、調査終了後より平成22年11月30日まで実施した。報告書作成は、平成22年4月6日より平成23年2月28日まで実施した。

6 本書の編集は石丸・井上が行い、全体総括は、井上が行った。本文執筆は、I、II、III、IV-1・2の一部・3・6の一部、V-2は、井上、IV-1・4・5・6の一部、V-3は、石丸、V-1は、三浦京子氏（（有）前橋文化財研究所）、縄文土器は日沖剛史、埴輪は菅原龍彦が行った。

主な作業分担は以下のとおりである。

遺構図作成・トレース及び各種押図作成・デジタル図集・写真データ編集：（有）毛野考古学研究所
遺物分類・台帳作成・復元・遺物実測・觀察標作成・遺物写真撮影：（有）前橋文化財研究所

7 遺構の写真撮影は石丸・井上が行った。

8 航空写真撮影及び遺構測量は、（株）測研に委託した。また、基準杭測量、グリッドの設定、トレンチ設定図作成及びビニール図面の遺構実測用写真は、（株）大成測量に委託した。遺物写真撮影の一部は、（有）前橋文化財研究所（古墳時代土器）、写真家小川忠博氏（集合写真、口絵用等）に委託した。

9 発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

10 発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します（敬称略・順不同）。

外山政子　早田　勉　長井正欣　深澤敦仁　坂口　一　右島和夫　青柳泰介　朴　晟鎮　中里正憲
須貝俊彦　鈴木徳雄　横野平土地改良区

11 調査組織（平成20～22年度）

教育長　中澤四郎

教育部長　本田英夫

学習の森所長（参事）小島成公（平成22年3月退職）

同　（課長）神宮裕子

文化財係長（課長補佐） 藤巻正勝（事務総括）

主査 蜂須賀まゆみ（経理担当）

主査（文化財保護主事）壁 伸明

主査（文化財保護主事）千田茂雄（平成22年3月転出）

主査（文化財保護主事）深町 真

主査（文化財保護主事）井上慎也（発掘調査・遺物整理担当）

主事 小此木克之

主事補 菅原龍彦（平成22年4月採用）

調査参加者（発掘調査・資料整理）

青柳美保 有阪啓子 今井保美 岩坂康男 遠藤基雄 大沢早知子 大月圭子 小林美絵 佐藤いし

佐藤みな江 佐保三代吉 沢田かずえ 塩谷とめ子 清水 正 成願八千代 須賀 翁 菅生陽子

染谷綾子 高澤はつ江 高橋修二 高橋文男 田川真知 武田文吉 多胡茂子 多胡 静

田島せい子 田島幹子 田中吉男 田村信子 田村雄大 遠間宰吉 櫻島太郎 根岸紀和代

野口義則 萩原眞一 萩原静夫 横爪しのぶ 半田あい 広瀬洋子 広瀬良平 町田千明 松田久男

黛 正和 丸岡民子 宮口知三 村椿 健 山中秀雄 濵本久江 和田テル子

凡 例

- 1 遺構の実測図は 1/80 を基本としたが、遺構の大きさにより 1/40、1/200 とした。
- 2 遺構図中の北マークは磁北である。なお、座標は日本測地系を使用した。
本文中に使用した地区は国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図「富岡」、安中市都市計画地図（1/2500）である。
- 3 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

縄文土器：1/4	土器部・須恵器：1/4	（実測図脇の●は須恵器を示す）
縄文石器：2/3（小形）	1/2（石製品）	1/4（中・大形）
石製模造品：1/2	古墳時代の石器：1/2（石製品）	1/4（大形）
鉄製品・土製品：1/2		
- 4 遺物実測図のスクリーントーンは土器内外面は黒色処理（焼）の範囲を示す。
- 5 土層説明中の記号、略称は次のとおりである。
土層名称及び量の基準：「新版標準土色帖」による。
色調＜：より明るい方向を示す（暗く明）
しまり、粘性 ○：あり ○：ややあり △：あまりない ×：なし
混入物の量 ○：大量（30～50%） ○：多量（15～25%） △：少量（5～10%）
※：若干（1～3%）
混入物 R P：ローム粒子（溶け込んだ状態） R B：ロームブロック（固まりの状態）
Y P：板鼻黄色鉱石
- 6 ピットの深さ ○ 0～19cm ○ 20～39cm ○ 40～59cm ○ 60cm以上

7 遺物重量分布及び 遺物分布図マーク

	10g 100g 1,000g 10,000g				10g 100g 1,000g 10,000g				10g 50g 100g 100個				1個	5個	10個
	土器部類系	土器部類系	縄文土器	その他の土器	土器部類系	土器部類系	未完成	未成品	原石・石被	原石	田	田			
勾玉（未成品を含む）	○	○	●	●	防護罩（未成品を含む）	○	○	○	台石	■	■	■	1個	5個	10個
管玉（未成品を含む）	■	■	■	■	籠み物石	+	+	+	圓石	■	■	■	1個	5個	10個
劍形（未成品を含む）	△	△	△	△	未成品	▲	▲	▲	鐵石	○	○	○	1個	5個	10個
有孔円板・方板	●	●	●	●	原石・石被	■	■	■	圓石	○	○	○	1個	5個	10個
臼玉（未成品を含む）	○	○	○	○	器片（PL）	●	●	●	鐵石	▲	▲	▲	1個	5個	10個
その他の石製品 (原石・蛇紋岩・片岩)	▼	▼	▼	▼					其他の石製品 (原石以外の石材・メノウの原石・SSの石製品など)	▲	▲	▲	1個	5個	10個
									鉄製品	×	×	×			

- 8 遺物写真版の大きさ 遺物写真データ（CD内）の縮尺は任意である。
集合写真的縮尺は任意である。
- 9 本書で使用した座標は、前調査地との整合性を保つため 2002 年 4 月改正以前の日本測地系を用いている。

目 次

序

例言

凡例

目次

I 調査の経緯	1	3 弥生時代の遺物	20
1 調査に至る経過	1	(1) 土器	20
2 調査の経過	1	(2) 石器	20
(1) 発掘調査の経過	1	4 古墳時代の遺構	23
(2) 資料整理の経過	3	5 古代以降の遺構	25
6 古墳時代の遺物	117		
II 調査の方法	4	(1) 土師器・須恵器	117
1 発掘調査の手順	4	(2) 石製品・石製模造品・石器	153
2 遺構調査の方法	4	(3) 鉄製品	182
3 資料整理の方法	5	(4) 土製品	182
(5) 墓輪	182		
III 遺跡の地理的・歴史的環境	8	V 成果と問題点	185
1 地理的環境	8	1 古墳時代の土器編年	185
2 歴史的環境	8	2 石製品・石製模造品について	196
3 屢序	14	3 古墳時代の集落	199
IV 検出された遺構と遺物	15	遺構観察表	210
1 遺跡の概要	15	出土土器観察表	214
2 縄文時代の遺構と遺物	18	報告書抄録	
(1) 遺構	18		
(2) 土器	18		
(3) 石器	18		

插图目次

第1图	调查区位置图	2	第61图	H-115号住居址实测图	76
第2图	遗址分布图	9	第62图	H-116号住居址实测图	77
第3图	遗址上层边壁分布图	10	第63图	H-117号住居址实测图	78
第4图	夷夜川流域图	13	第64图	H-118号住居址·H-119号住居址(1) 实测图	79
第5图	基本顺序	14	第65图	H-118号住居址(2)·H-120号住居址实测图	80
第6图	加茂原遗址全貌图	16	第66图	H-121号住居址·H-122号住居址(1) 实测图	81
第7图	加茂原遗址C区·E区全貌图	17	第67图	H-122号住居址(2) 实测图	82
第8图	高文化层剖面图	19	第68图	H-123号住居址·H-124号住居址(1) 实测图	83
第9图	崇生寺遗址简图	21	第69图	H-124号住居址(2) 实测图	84
第10图	魏文·赤石壁夷国图	22	第70图	H-125号住居址·H-126号住居址(1) 实测图	85
第11图	H-52号住居址实测图	26	第71图	H-126号住居址(2) 实测图	86
第12图	H-53号住居址实测图	27	第72图	H-127号住居址实测图	87
第13图	H-54号住居址·55号住居址实测图	28	第73图	H-128号住居址·H-129号住居址(1) 实测图	88
第14图	H-56号住居址·57号住居址实测图	29	第74图	H-129号住居址(2) 实测图	89
第15图	H-58号住居址(1) 实测图	30	第75图	H-130·141号住居址(1) 实测图	90
第16图	H-58号住居址(2)·H-59号住居址(1) 实测图	31	第76图	H-130·141号住居址(2) 实测图	91
第17图	H-59号住居址(2)·H-60号住居址实测图	32	第77图	H-131号住居址·H-132号住居址实测图	92
第18图	H-61号住居址实测图	33	第78图	H-133号住居址(1) 实测图	93
第19图	H-62号住居址实测图	34	第79图	H-133号住居址(2)·H-134号住居址(1) 实测图	94
第20图	H-63号住居址·H-64号住居址实测图	35	第80图	H-134号住居址(2)·H-135号住居址实测图	95
第21图	H-65号住居址(1) 实测图	36	第81图	H-136号住居址实测图	96
第22图	H-65号住居址(2) 实测图	37	第82图	H-137号住居址实测图	97
第23图	H-66号住居址·H-67号住居址实测图	38	第83图	H-138号住居址(1) 实测图	98
第24图	H-68号住居址·H-69号住居址(1) 实测图	39	第84图	H-138号住居址(2) 实测图	99
第25图	H-69号住居址(2)·H-70号住居址实测图	40	第85图	H-139号住居址·H-140号住居址(1) 实测图	100
第26图	H-71号住居址实测图	41	第86图	H-140号住居址(2)·H-142号住居址实测图	101
第27图	H-72号住居址·H-73号住居址(1) 实测图	42	第87图	H-143号住居址·H-144号住居址(1) 实测图	102
第28图	H-73号住居址(2)·H-74号住居址实测图	43	第88图	H-144号住居址(2) 实测图	103
第29图	H-75号住居址·H-76号住居址(1) 实测图	44	第89图	H-145号住居址实测图	104
第30图	H-76号住居址(2)·H-77号住居址实测图	45	第90图	H-146号住居址(1) 实测图	105
第31图	H-77号住居址·H-78号住居址实测图	46	第91图	H-146号住居址(2)·H-147号住居址实测图	106
第32图	H-79号住居址(1) 实测图	47	第92图	H-148号住居址·H-149号住居址(1) 实测图	107
第33图	H-79号住居址(2)·H-80号住居址(1) 实测图	48	第93图	H-149号住居址(2)·H-150号住居址(1) 实测图	108
第34图	H-80号住居址(2)·H-81号住居址实测图	49	第94图	H-150号住居址(2) 实测图	109
第35图	H-82号住居址·H-83号住居址实测图	50	第95图	H-151号住居址实测图	110
第36图	H-84号住居址实测图	51	第96图	H-152号住居址实测图	111
第37图	H-85号住居址实测图	52	第97图	H-153号住居址实测图	112
第38图	H-86号住居址实测图	53	第98图	H-154号住居址实测图	113
第39图	H-87号住居址·H-88号住居址(1) 实测图	54	第99图	E-M-4号房顶实测图	114
第40图	H-88号住居址(2) 实测图	55	第100图	M-3号梯形房顶	115
第41图	H-89号住居址实测图	56	第101图	土坛地沟	116
第42图	H-90号住居址·H-91号住居址·H-92号住居址实测图	57	第102图	出土土器底砾层	119
第43图	H-93号住居址实测图	58	第103图	H-52号·H-53号·H-54号·H-55号(1)	
第44图	H-94A·B号住居址实测图	59		住居址出土土器实测图	120
第45图	H-95号住居址(1) 实测图	60		H-55号(2)·H-56号住居址出土土器实测图	121
第46图	H-95号住居址(2)·H-96号住居址实测图	61		H-56号(2)·H-58号·H-58号(1)	
第47图	H-97号住居址·H-98号住居址实测图	62		住居址出土土器实测图	122
第48图	H-99·101号住居址(1) 实测图	63		H-58号(2)·H-60号·H-61号·H-62号(1)	
第49图	H-99·101号住居址(2) 实测图	64		住居址出土土器实测图	123
第50图	H-100号住居址·H-102号住居址实测图	65		H-62号(2)·H-63号·H-65号(1)	
第51图	H-103号住居址实测图	66		住居址出土土器实测图	124
第52图	H-104号住居址实测图	67		H-65号(2)·H-68号·H-69号·H-70号·H-71号	
第53图	H-105号住居址·H-106号住居址实测图	68		·H-72号住居址出土土器实测图	125
第54图	H-107号住居址(1) 实测图	69		H-73号·H-74号·H-75号住居址出土土器实测图	126
第55图	H-107号住居址(2)·H-108号住居址实测图	70		H-76号·H-77号·H-79号·H-80号	
第56图	H-109号住居址实测图	71		住居址出土土器实测图	127
第57图	H-109号住居址·H-111号住居址(1) 实测图	72		H-83号·H-84号·H-85号·H-86号·H-88号	
第58图	H-111号住居址(2)·H-112号住居址实测图	73		·H-89号住居址出土土器实测图	128
第59图	H-113号住居址(1) 实测图	74		H-90号·H-92号·H-93号(1)	
第60图	H-113号住居址(2)·H-114号住居址实测图	75		住居址出土土器实测图	129

第 113 図 H- 93 号 (2)・H- 94 号・H- 95 号・H- 96 号 ・H- 99 (1) 住居址出土土器実測図	130	第 139 図 石器部類グラフ (1)	164
第 114 図 H- 99 号 (2)・H- 100 号・H- 101 号 ・H- 103 号 (1) 住居址出土土器実測図	131	第 140 図 石器部類グラフ (2)	165
第 115 図 H- 103 号 (2) 住居址出土土器実測図	132	第 141 図 石器部類グラフ (3)	166
第 116 図 H- 104 号・H- 105 号・H- 107 号 (1) 号 住居址出土土器実測図	133	第 142 図 石製品・石器部類品分布図	167
第 117 図 H- 107 号 (2) 住居址出土土器実測図	134	第 143 図 石製品・石器部類品分布図 (1)	168
第 118 図 H- 108 号・H- 111 号 (1) 住居址出土土器実測図	135	第 144 国 石製品・石器部類品分布図 (2)	169
第 119 国 H- 111 号 (2) H- 112 号 住居址出土土器実測図	136	第 145 国 石製品・石器部類品分布図 (3)	170
第 120 国 H- 115 号 (1) 住居址出土土器実測図	137	第 146 国 石製品・石器部類品分布図 (4)	171
第 121 国 H- 115 号 (2) 住居址出土土器実測図	138	第 147 国 石製品・石器部類品分布図 (5)	172
第 122 国 H- 115 号 (3) 住居址出土土器実測図	139	第 148 国 石製品・石器部類品分布図 (6)	173
第 123 国 H- 115 号 (4)・H- 116 号・H- 117 号 (1) 住居址出土土器実測図	140	第 149 国 石製品・石器部類品分布図 (7)	174
第 124 国 H- 117 号 (2)・H- 119 号 住居址出土土器実測図	141	第 150 国 石製品・石器部類品分布図 (8)	175
第 125 国 H- 120 号・H- 122 号・H- 123 号・H- 124 号 住居址出土土器実測図	142	第 151 国 石製品・石器部類品分布図 (9)	176
第 126 国 H- 125 号・H- 126 号 住居址出土土器実測図	143	第 152 国 石製品・石器部類品分布図 (10)	177
第 127 国 H- 127 号 (2) 住居址出土土器実測図	144	第 153 国 石製品・石器部類品分布図 (11)	178
第 128 国 H- 129 号 (2)・H- 130 号・H- 131 号 (1) 住居址出土土器実測図	145	第 154 国 石器実測図 (1)	179
第 129 国 H- 133 号 (2) 住居址出土土器実測図	146	第 155 国 石器実測図 (2)	180
第 130 国 H- 134 号 住居址出土土器実測図	147	第 156 国 石器実測図 (3)	181
第 131 国 H- 136 号・H- 137 号 (1) 住居址出土土器実測図	148	第 157 国 鉄製品実測図 (1)	183
第 132 国 H- 137 号 (2)・H- 138 号 (1) 住居址出土土器実測図	149	第 158 国 鉄製品 (2)・土製品・埴輪実測図	184
第 133 国 H- 138 号 (2)・H- 141 号・H- 143 号・H- 144 号 ・H- 145 号・H- 146 号 住居址出土土器実測図	150	第 159 国 I 期・II 期・Ⅲ期の土器	191
第 134 国 H- 149 号・H- 150 号・H- 151 号・H- 152 号 (1) 住居址出土土器実測図	151	第 160 国 IV 期の土器	192
第 135 国 H- 152 号 (2)・H- 153 号 住居址出土土器実測図	152	第 161 国 V 期の土器	193
第 136 国 石製品・石器部類品計測グラフ (1)	161	第 162 国 VI 期・VII 期の土器	194
第 137 国 石製品・石器部類品計測グラフ (2)	162	第 163 国 VII 期・IX 期・X 期の土器	195
第 138 国 石製品・石器部類品計測グラフ (3)	163	第 164 国 加賀国遺跡出土の時代別石製品・石器部類品集計図 (1)	197

表目次

第 1 表 連絡一覧表	11	第 14 表 出土土器部類表 (6)	219
第 2 表 石製品・石器部類品石材別成表	158	第 15 表 出土土器部類表 (7)	220
第 3 表 石器・石器部類品種別成表 (1)	159	第 16 表 出土土器部類表 (8)	221
第 4 表 石器・石器部類品種別成表 (2)	160	第 17 表 出土土器部類表 (9)	222
第 5 表 連絡部類表 (1)	210	第 18 表 出土土器部類表 (10)	223
第 6 表 連絡部類表 (2)	211	第 19 表 出土土器部類表 (11)	224
第 7 表 連絡部類表 (3)	212	第 20 表 出土土器部類表 (12)	225
第 8 表 連絡部類表 (4)	213	第 21 表 出土土器部類表 (13)	226
第 9 表 出土土器部類表 (1)	214	第 22 表 出土土器部類表 (14)	227
第 10 表 出土土器部類表 (2)	215	第 23 表 出土土器部類表 (15)	228
第 11 表 出土土器部類表 (3)	216	第 24 表 出土土器部類表 (16)	229
第 12 表 出土土器部類表 (4)	217	第 25 表 出土土器部類表 (17)	230
第 13 表 出土土器部類表 (5)	218	第 26 表 出土土器部類表 (18)	231

C D - R O M 収録データ

1 連絡写真 (JPEG 形式)	5 古墳石器部類表 (Excel 形式)	9 関文土器部類表 (Excel 形式)	13 加賀国遺跡総合外観 PDF データ
2 連絡写真 (JPEG 形式)	6 古墳石器部類表 (Excel 形式)	10 佐生土器部類表 (Excel 形式)	14 報告書 PDF データ
3 関文土器部類表 (Excel 形式)	7 古墳石器部類表 (Excel 形式)	11 古墳石器部類表 (Excel 形式)	Excel は米 Microsoft 社の登録商標
4 佐生土器部類表 (Excel 形式)	8 古墳土器部類表 (Excel 形式)	12 族器部類表 (Excel 形式)	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

安中市土地開発公社が計画する横野平工業団地分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成 16 年度に、順次分譲が予定される部分について、埋蔵文化財の取り扱いを協議することになった。平成 17 年度には、A 団地の一部について発掘調査を実施し、平成 18 年度に報告書を刊行した（第 1 集『加賀塚遺跡 1』2007 年）。平成 18 年度には、B 団地全域について発掘調査を実施し、平成 19 年度に報告書を刊行した（第 2 集『向原Ⅲ遺跡』2007 年）。

平成 18 年 11 月 7 日、市土地開発公社から横野平工業団地（A 団地）分譲予定地の埋蔵文化財の状況について、安中市教育委員会へ照会があった。該当場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地（市№ 405）内であることと、該当場所の一部については、平成 17 年度に発掘調査を実施し、古墳時代を中心とする集落が存在することが判明していた。そこで、同年 11 月 15 日、市土地開発公社へ事業地内の土木工事等に係る意見書を提出した。その後、事業計画地における埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、工事に先立ち確認調査を実施することになった。平成 18 年 11 月 17 日、市土地開発公社から市教育委員会へ確認調査の依頼があり、平成 19 年 2 月 26 日～3 月 29 日に市教育委員会で、事業地の残地部分を対象とした確認調査を実施した。調査の結果、今回の事業予定地においても、古墳時代を中心とする遺構が多数確認され、集落跡が広い範囲にわたって存在することが判明した。同年 3 月 29 日、調査結果を、市土地開発公社へ伝え、再度、埋蔵文化財の取り扱いについて協議することを伝えた。協議の結果、現状保存措置及び計画の変更は困難であることから、工事によって遺跡が影響を被る部分を対象に発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。

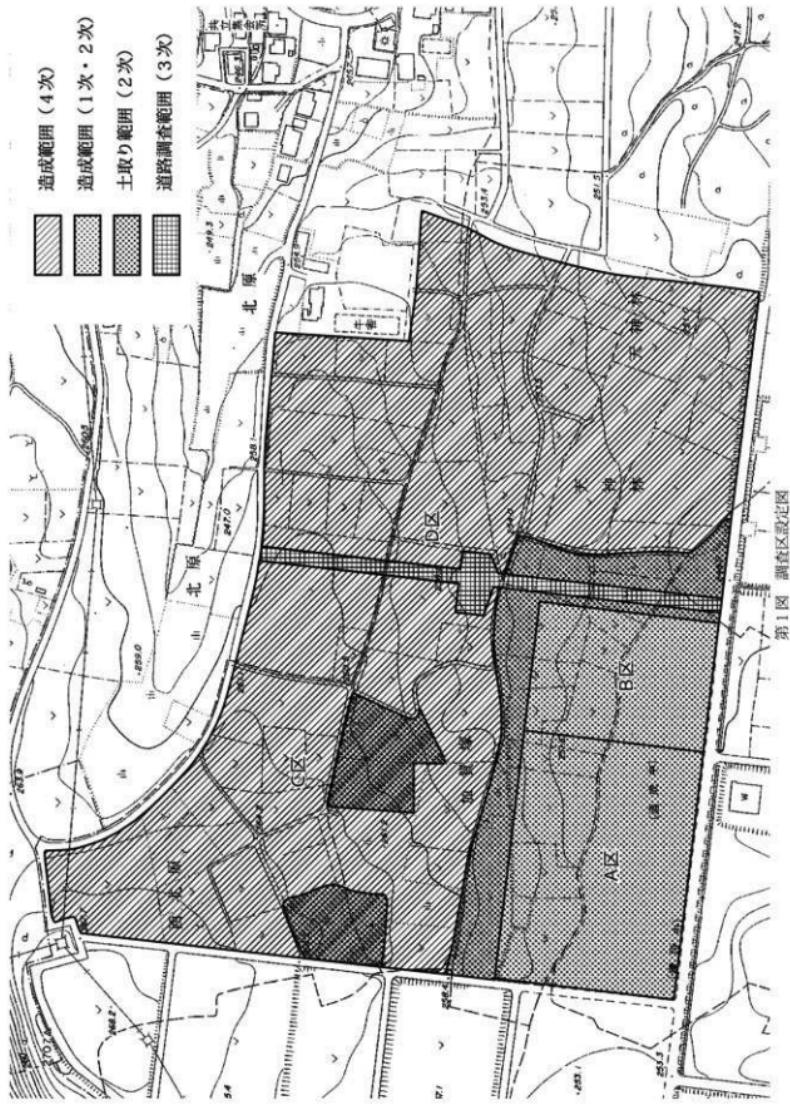
平成 19 年 8 月 20 日、市土地開発公社から、発掘調査の依頼があり、同年 9 月 26 日付で必要書類（法 94 条関係、添付書類）が出された。その後、市土地開発公社と発掘調査に向けて、工事計画等との調整を行い、調査期間、調査体制、調査費等を協議した。協議の結果、市教育委員会が主体となって、実施することになったが、同じ時期に黒岩土地改良事業に伴う発掘調査が予定されていたため、調査担当者 1 人では、発掘調査に対応しきれない状況であった。そこで、調査を円滑に進める緊急性から、調査担当者を補佐する調査員を民間発掘調査組織に委託することになった。平成 20 年 10 月 1 日付けで、市土地開発公社と市教育委員会との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、平成 21 年 3 月 31 日までの 5 ヶ月間を調査期間として、調査を開始した。

（井上慎也）

2 調査の経過

（1）発掘調査の経過

横野平工業団地（A 団地）の分譲事業に先立つ発掘調査は、平成 17 年度に一部実施し、平成 18 年度に報告書を刊行している（1～3 次調査）。今回の 4 次調査については、前回の残り約 119,000m²を対象として、範囲確認調査を平成 19 年 2 月 26 から 3 月 29 日まで実施した。確認調査は、事業区域全域を対象として 54 本のトレンチ（幅 2 m）を設定し、遺跡の範囲確認を行った。調査の結果、事業区



域の西半分で前回調査された古墳時代中期～後期の集落跡の広がりを確認した。東半分については、調査時代中期の遺物包含層、古代の溝等が数ヵ所確認されたのみで、遺構の密度が薄いことが判明した。また、今回の調査区には、東横野6号墳（加賀塚古墳）と推定される地割りが存在していたが、確認調査によって古墳とされる範囲内は、浅間B軽石の純層と厚い黒色土が斜面に沿って自然堆積することが判明し、この部分が古墳ではないことが明らかとなった。この古墳の位置については、東に隣接する畠地で平成17年度に発見された古墳（K-1号古墳）であったことが確定した。

本調査は、現調査体制と調査期間の制約のもと、古墳時代の集落が存在する事業区域の西側半分を調査区に設定し、遺構の分布を確認しながら可能な限り調査区を拡張する方針とした。

調査の経過は、平成20年10月1日からユニットハウス等の撤入を含む調査のための準備を行った。表土掘削は、パックホー(0.7m3)でC区北側から開始し、順次南側へと移動していった。E区については、遺構分布の範囲を較るためのトレーン調査を実施し、その後、調査区の拡張を行った。表土掘削が進んだ段階で、人力による遺構確認を行った。遺構確認は、耕作による攪乱が著しく、土坑及びピット等の小さな遺構を確認することが困難な状況との理由から、遺構精査は、住居址中心となった。遺構の精査は、表土掘削及び遺構確認と並行して北側から開始し、主に住居址を中心に順次南側へと進めた。表土掘削が終了した範囲では、隨時、遺構及び遺物の位置を記録するためのグリッドの設定を行った。遺構精査が終了した範囲については、隨時、デジタル遺構測量による記録を行った。また、3月上旬には、発見された遺構精査がほぼ終了し、ラジコンヘリコプターによる遺跡の全景写真を撮影した。3月中旬から下旬にかけては、住居址の掘り方及び竈等といった遺構と石製模造品が多数出土したグリッドの補足調査を行なった。3月下旬には、全ての調査が完了し、発掘調査現場に設置したユニットハウス等の撤去、道具等の片づけを行なった。

調査面積は、当初、20,000m²を予定していたが、調査区を拡大した結果、最終的には34,000m²以上に及ぶものとなった。

(2) 資料整理の経過

平成21年度

資料整理は、平成21年4月1日から平成22年3月31日までの間、断続的に実施した。本年度は、4・5月に遺物の洗浄・注記を中心に基礎整理の一部を直営で行なった。6月以降は、資料整理のうち、記録類（図面、台帳、写真等）の整理と遺物整理（分類、接合、遺物台帳作成、遺物実測等）を民間調査組織に委託して、3月まで行った。

平成22年度

本年度は、報告書作成を中心に平成22年4月1日から平成23年2月28日まで行った。遺構及び遺物関係等の版下作成、写真図版、観察表、デジタルデータ化等の報告書作成及び編集業務を、市教育委員会の監理のもと有限会社毛野考古学研究所に委託して11月まで行なった。報告書の全体編集は、12月に行い、1月から2月まで校正及び印刷製本を行った。なお、遺物の一部（石器等）の版下作成は、直営で行った。また、報告書編集では、パソコンを使用し、全ての版下をデジタルデータ化した。

（井上慎也）

II 調査の方法

1 発掘調査の手順

発掘調査の方法及び手順は、安中市の調査で採用している独自の方法を基本としている。

発掘調査は調査区の設定後、バックホー(0.7m)で遺構確認面(Ⅲ層下部からⅣ層上面)まで掘削し、人力でジョレンを用いて遺構確認を行った。表土掘削後、基準杭測量及びグリッド設定を行った。検出された遺構については、遺構毎に遺構略称と番号を付け、遺構の内容に応じた精査を行い、土層断面状況及び完掘した遺構をリバーサル及び白黒フィルム(35mm)で写真撮影を行った。遺構精査終了後、ラジコンヘリコプターで遺跡の全景写真撮影を行なった。

2 遺構調査の方法

(1) 積穴住居址の調査方法

積穴住居址の調査は、「分層16分割法」で行った。遺構の範囲を確定後、住居址の中心を東西南北に直交する2本のベルトを設定する(ポイントは赤)。さらに、その間を16分割するための補助点を設定し、16分割区をつくる(ポイントは黄)。南北方向のベルトに平行してサブトレーナーを設定し、土層を分層しながら床面まで人力で掘削する。住居址深さと大きさが決まった後、分層毎に掘り下げを行う。遺物の取り上げは16分割を基本とし、上層の遺物は取り上げ、床直及び下層の遺物はそのまま残し遺構を掘り下げる。電、土坑、ピット等の関連遺構の遺物は遺構毎に取り上げる。ベルトを残しながら床面まで精査が終了した後、土層断面写真を撮影し、土層説明を記録する。土層断面図は「ビニール転写法」を用いて原寸大に転写する。土層の記録が完了した後、ベルトを崩す。床面を精査し柱穴(ピット)、貯蔵穴(土坑)を確認し精査する。平行して電の精査も実施する。電は半分を精査し、土層堆積状況を記録した後、完掘する。竈平面図の一部については、デジタルカメラで垂直撮影し、微細図を作成した。遺構番号は、H-52～154である。

(2) 円形周溝状遺構の調査方法

溝の範囲確認後、溝部分を土層堆積観察用のベルトを十字に設定し、間をさらに分割して分割区を設定した。古墳の可能性も考えられたが、円形内を精査した結果、主体部等の明確な遺構は確認されなかつた点と同時期に類似する遺構が存在する例があることから、周溝状遺構とした。溝内の遺物は区毎に取り上げた。遺構番号は、EM-4である。

(3) 土坑、溝の調査方法

土坑は範囲を確認後半裁し、土層断面図を作成後、残りを精査し完掘した。土坑番号はD-38からである。

溝は任意に土層観察用のベルトを設定し、掘り下げを行った。溝番号は、M-3からである。

(4) 遺構測量、遺物の記録の方法

遺構の平面図：全ての遺構の平面図は、1/40を基本とした。遺構完掘後、デジタル測量によりデータ化（DWG・EPS形式）し、作成図面の校正及び修正をした。

土層断面図・遺構微細図：幅2mの農業用ビニールを使用して、遺構及びその断面にあて原寸大でマジックで転写する方法（「ビニール転写法」）で作成した。

遺物の出土記録：遺構出土の遺物は、分割区毎、層別に取り上げ、遺物出土量を袋の大きさで相対的量（大量・多量・少量・微量）に置き換え、カードに記録し分布図を作成した。なお、土坑、小規模な遺構の覆土中のものは「覆土一括」で取り上げ、出土量を記録した。調査区出土は、グリッド単位で記録した。石製模造品が集中する場所では、通常の肉眼による取り上げと、グリッド単位で土壌洗浄を行った。

（井上慎也）

3 資料整理の方法

(1) 整理の方針

加賀塚遺跡の特徴は、古墳時代中期から後期にかけての大規模な集落遺跡であり、集落景観の復元を目的とした遺構、遺物の整理を行うことにした。そこで、本報告では、遺構、遺物の事実記載及びデータを中心に掲載し、遺跡の総括は、今後の報告で検討することにした。

なお、作業全体の効率化を図るためにデジタル機器を使用して挿図の作成、報告書の編集、写真・データの編集等の作業を行った。

(2) 遺構図整理の方法

住居址：住居址の時期は下層及び竈の遺物によって時期を決定した。重複のある場合は土層堆積状況と遺物出土状況により新旧の判断をした。報告書には各住居址の平面図、土層断面図、遺構断面図、遺物分布図、竈・土坑等の平面・断面図、土層説明表、住居址觀察表を掲載した。平面図には柱穴（ピット）の深さを示し、配列が分かるようにした。

円形周溝状遺構：円形周溝状遺構は、掘り込みが無く全周する溝のみの検出であったため、溝出土の遺物から時期を判断した。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、遺物分布図、土層説明表、觀察表を掲載した。

土坑：全ての土坑については、特定の機能を示さないで用いる「土坑」の用語で統一した。土坑の中には「墓」、「貯蔵用」、「陷穴」と考えられるものもふくまれるが、明確に機能を区別できるものは少ない。時期及び機能については特定するのが難しいため、本報告では形態と出土遺物の性格から判断することにした。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、土層説明表、觀察表を掲載した。

溝：遺構の時期については、確認面及び覆土中の遺物から判断した。集石については礫の石材、状況を検討した。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、土層説明表、觀察表を掲載した。

(3) 遺物整理の方法

土器の整理：土器は縄文土器、弥生土器、古墳時代の土器（土師器、須恵器）に大別し、器種毎に分類した。土器は「量」を把握するために重量を区、層毎に記録し、16 分割を基本とした分布図を作成した。縄文土器は出土遺構毎にまとめ、覆土中の遺物を「群」として捉え土器群を検討した。古墳時代の土器は、廐棄により覆土中（1、2層出土遺物）から出土したものと床面直上及び住居に伴う遺棄（3層及び竈等の遺構出土）されたものとに区別し、後者を一括性をもつ土器群として捉えて検討した。

土器の分類は、破片と復元できる個体に分け、破片については器種毎に重量を記録した。復元できる個体については重量を記録した後、復元率によってランク付け（A～D）を行い、個体台帳を作成し、器種、接合状態、重量を記録した。土器の実測については、住居別、器種組成を優先し、完形もしくは完形に近いものについては極力図示に努めたが、器種内で同形態の土器が多数ある住居では、代表的な土器を図示し、その他は割愛した。遺物の出土量を記録することで破片についての情報も活用でき、遺構全体での遺物の出土傾向が把握できる点で有効性をもつと判断した。報告書には遺構毎に土器群の特徴が検討できるものを優先して掲載した。実測した土器については、個別に観察表を作成した。また、古墳時代の土器群については、特徴及び編年的位置付けの所見を掲載した。

石器の整理：石器は各時代毎に安中市の分類基準で分類し、石器台帳を作成した。縄文時代の石器については、遺構出土のものと時期が特定できるものが少ないと判断したため、全体の器種のみを集計し、写真撮影を行い、図示はしなかった。弥生時代の石器は、全点図示した。

古墳時代の石器の整理は、平成 17 年度の整理方法に準じている。石器は、形態と製作方法で器種を分類し、製作にかかる遺物（素材剥片、破片等）についても全点観察表を作成し、石器全体の器種組成と石材組成（点数と重量）を作成した。この台帳をもとに遺構毎に器種別の分布図を作成した。また、石製模造品等の器種組成、石材組成、器種別各種計測グラフを掲載した。縄物石とその他の石器（台石等）については、集計表と各種計測グラフを掲載した。報告書には、各器種の全点、製作工程に係わる遺物の一節を掲載した。

用語については、古墳時代の石製道具を「石器」として一括した。石製模造品については、学史的に「滑石製模造品」、「(広義) 石製品」等呼称については定まっていないが、本報告では本来の機能性をもたない二次的（祭祀的）機能をもつ石製品を本来の製作工程を経ないで製作される「模造」によるものとして「石製模造品」の用語を用い、道具として実用的で機能と用途が一致する「石製品」とは区別した。石製模造品の器種分類では、製作工程を把握するために完成品と未完成品、原石・石核、素材剥片、調整剥片・碎片に分類した。各器種の大きさと重量を比較するため長幅グラフ、重量度数分布グラフを作成した。また、図示は完成品と未完成品を中心としたが、製作遺物については原石・石核、素材剥片も図示した。それぞれの器種の時期については、製作から廐棄に至るまでの過程があり、単独で時期を特定することが困難であるため、あえて時期細分をせずに一括し、個別の型式学的特徴によって時期差をみだすこととした。

その他の遺物：鉄製品は、ほとんどが鏽による腐食によってクリーニングしても形態が判別できるものが少なく、無理な分類は行わなかった。住居址覆土から出土した埴輪については、分類し、図示した。土製品は、分類し、図示した。

(4) 写真整理の方法

現地で撮影した写真については、リバーサル（カラー）、白黒、ネガ（カラー）別にファイルし、アルバムを作成した。また、カラー写真是、その後の保管（保存）・活用を考慮し、デジタル化した。

遺構写真是、画像を全てデジタル化し、遺構毎のフォルダを作成した。使用カットは遺構全景、遺構土層堆積状況（セクション）、遺物出土状況を基本とし、必要に応じてカットを追加した。デジタル画像は全てカラーとした。

遺物写真是、全てデジタルカメラによって撮影（委託）し、遺構写真と同様、画像をデジタル化した。

遺物写真図版は、単体及び集合写真とし、土器については実測した個体は全て単体で撮影し、一括遺物は集合写真とした。また、石器、石製品、石製模造品、その他の遺物は、器種毎に単体あるいは集合写真とした。

(5) デジタル編集の方法

遺構図及び遺物実測図については、出来るだけデジタル機器を使用して編集した。遺構図については、原図を修正した後、スキャナーで図面を取り込み、デジタルトレースで挿図を作成した。

手書きのトレースや地図については、スキャナーで取り込み、画像を編集し、挿図を作成した。

遺物観察表は表計算ソフトを使用して作成した。写真図版はリバーサルフィルムをデータ化（コダックフォトCD）して、必要な写真を選別し、画像を編集した。

（井上慎也）

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する。市の西部から北部にかけては山地が広がる。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側には並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には、河岸段丘が発達し、下位段丘（磯部、人見地区）、中位段丘（安中・原市地区）、上位段丘（横野地区）が存在する。

加賀塚遺跡は安中市中野谷字加賀塚地内に所在する。本遺跡が存在する中野谷地区は、安中市南部、碓氷川河岸段丘の上位段丘面に存在する。この台地は「横野台地」とも呼ばれ、幾筋もの細長い台地が形成され、その低地部分には湧水点も存在し、小河川が流れる。現状では起伏は緩く、平坦地が続いた地形である。加賀塚遺跡は、低地に接する南斜面に存在する。遺跡の標高は250～260mである。

（井上慎也）

2 歴史的環境

中野谷地区では、大規模土地改良事業、工業団地、道路建設等の開発に伴い、地区のほぼ全域が調査されている。これらの調査の結果、中野谷地区には縄文時代の大規模な集落遺跡と古代の牧関連遺構群を中心とする多数の遺跡が存在する地域として知られている。

ここでは、各時代について概観する。

旧石器時代

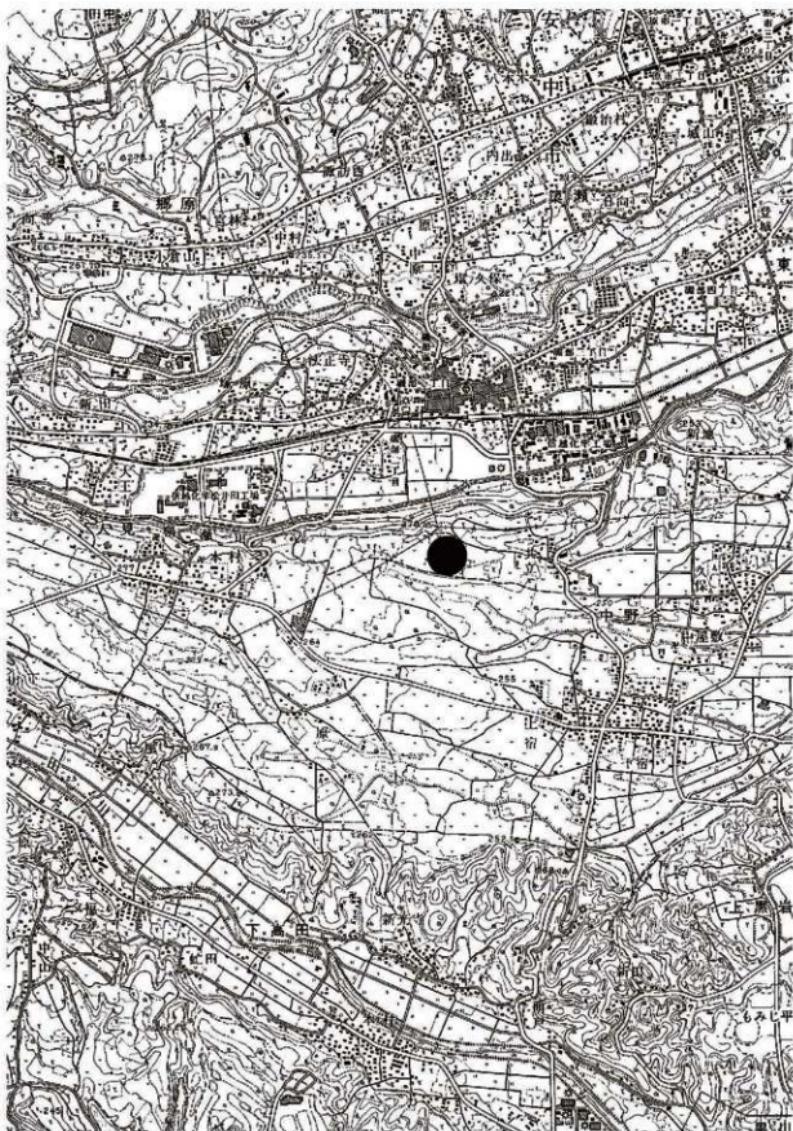
中野谷松原遺跡でA T下位（暗色帶）の石器が出土している。注連引原II遺跡では黒曜石製の尖頭器が出土している。浅間山給原とするローム層の堆積状況が厚いことから、この時代の遺跡は少ない。

縄文時代

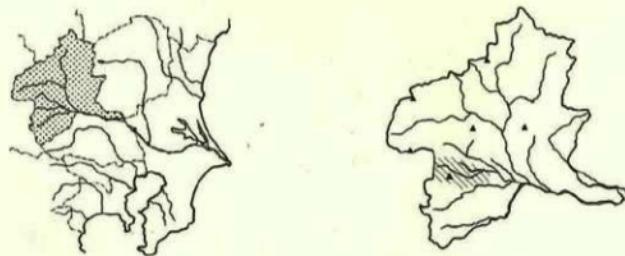
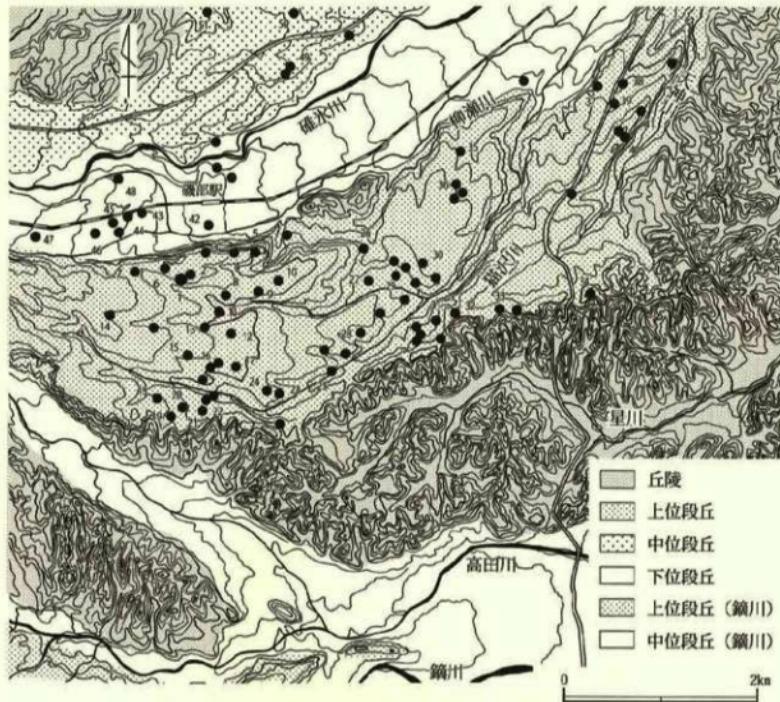
草創期の遺跡は、石器のみが採集されている。早期では、金井谷戸遺跡で押型文土器群とその石器群が検出されている。前期前葉以降、遺跡が増加し、住居址が列状に並ぶ中原遺跡、有尾・黒浜式期から諸磯b式期にかけての拠点的集落である中野谷松原遺跡、中期前葉から中葉の大規模環状集落である砂押遺跡、中期終末から後期初頭にかけての柄鏡形敷石住居址群を主体とする集落の中島I・II遺跡、後期後半の配石遺構である大道南遺跡、後期後半から晩期まで継続する祭祀遺構の天神原遺跡等がある。縄文時代の遺跡は、低地を望む斜面部あるいは台地平坦部に存在する。加賀塚遺跡の東に隣接する天神林遺跡では、前期中葉の焼失住居址、中期初頭の遺物が確認されている。なお、西横野地区では、中期後半を中心とする集落遺跡が多数発見されている。

弥生時代

前期末以降で注連引原遺跡、中期前半の注連引原II遺跡、大上遺跡、原遺跡の集落遺跡と遺物を出土する遺跡が横野台地で点在する。中期後半は、加賀塚遺跡で遺物が出土し、長谷津遺跡では、集落が確認されている。後期初頭になると上北原遺跡で櫛描文系土器群と共に、磨製石器の製作が確認されている。後期後半では大下原遺跡、原遺跡で住居址が確認されている。弥生時代の遺跡分布は、中期前



第2図 遺跡位置図



第3図 遺跡と周辺遺跡分布図

半では、台地の崖端部に分布し、注連引原遺跡群をはじめとする遺跡群を形成する傾向が認められるが、中期後半以降、集落は少なくなり、広い台地に点在する傾向となる。

古墳時代

前期～中期初頭にかけての集落遺跡が点在し、下宿東遺跡、天神原遺跡等で住居址が確認されている。中期以降の集落遺跡は、今まで少ない地域とされてきたが、今回の加賀塚遺跡をはじめ北堤・堤下遺跡、中島I遺跡、原遺跡、上北原遺跡等で確認されている。集落の占地は北堤・堤下遺跡を除き、加賀塚遺跡周辺部に存在する。古墳時代の集落は継続性が認められず、短期間に形成・廃絶する傾向がある。加賀塚遺跡には、隣接して加賀塚古墳が存在する。また、北側には中期の磯部2号墳、磯部3号墳が存在する。磯部3号墳では石製模造品が出土している。なお、西横野地区では、加賀塚遺跡と関連性のある古墳時代中期前半を中心とした拠点的な集落（人見枝谷津・東向原遺跡、人見向原遺跡、人見西原遺跡等）が多數確認されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構として特徴的なのが、牧に関連する遺構群である。この牧は古代上野国に置かれた官牧ではなく、記録にはない。主な遺構は中野谷地区全域を区画する大溝であり、地形によって幾つかの単位で検出され、中原遺跡、下宿東遺跡、上宿南遺跡、原遺跡、上北原遺跡、天神原遺跡等で確認されている。また、関連して鍛冶工房跡が天神原遺跡、下塚田遺跡で確認されている。中原遺跡では区画溝と併設する溜井が確認されている。台地下の下位段丘面には大王寺・新寺地区遺跡群（松井田工業団遺跡、西裏・下新井遺跡等）では、古墳時代以降から継続する古代「磯部郷」に関する伝統的集落が存在する。この遺跡群では鍛冶関連遺構や官衙的色彩の強い壠立柱建物群等が確認されており、牧の經營に関与した遺跡群と推定される。原遺跡では、炭焼土坑が多数検出されている。なお、西横野地区では、牧関連遺構の大溝（区画溝）と伝路と推定される道路状遺構が広範囲に確認されている。また、これらの遺構と同時期の集落跡が周辺に分布する。

中世以降

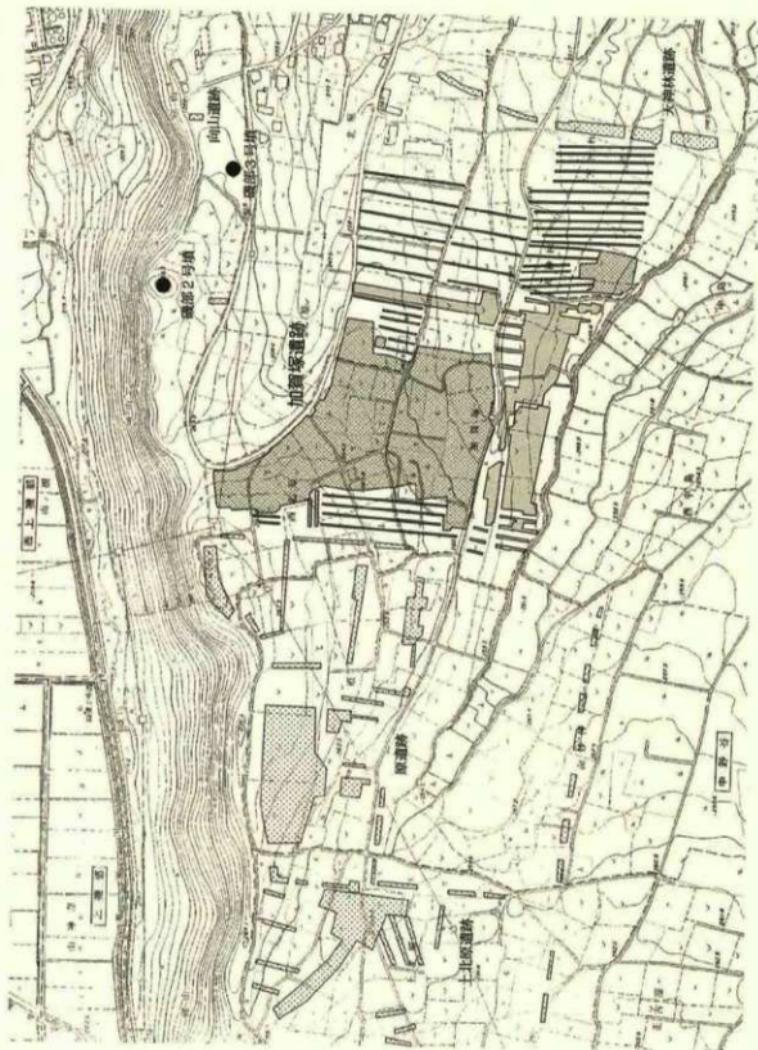
中世以降の遺跡は少なく、遺構としては溝及び土坑等が検出される例が多い。これらの遺構は覆土中に浅間B軽石を含むことから、12世紀以降の所産と思われる。確認できる遺構としては中野谷陣屋（荒屋敷地区）がある。本遺跡名である「加賀塚」の字名は、近世七日市藩の「前田氏」に関連したものと推定され、調査地付近には「前田神社」と祀られた石塔が建立している。

平成17年度調査の加賀塚遺跡の概要

加賀塚遺跡は、平成17年度に3次にわたって発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代では、有尾・黒浜式期の住居址2軒、加曾利E式期の住居址1軒、時期不明1軒、五領ヶ台式期の土坑等が発見された。弥生時代は、石鏡、石鏡のみが出土した。古墳時代は、中期から後期にかけての住居址51軒、円形周溝状遺構3基、竪穴状遺構2基、土坑16基、溝2条、終末期古墳1基が発見された。また、集落内で集中的に滑石製石製模造品を製作する工房跡が確認された。終末期古墳は、「東横野6号墳」として周知されていたが、確認調査によって、周知の場所から東へ約80mの位置していたことが判明した。

（井上慎也）

第4図 調査区域図

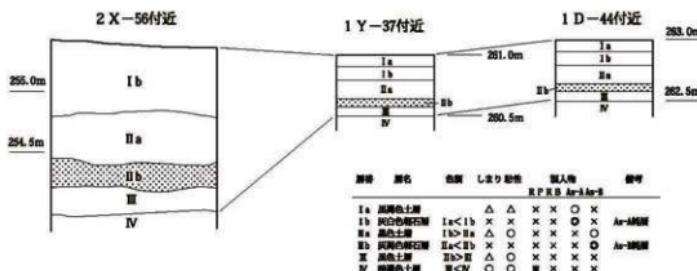


3 層序

加賀塚遺跡は碓氷川右岸の上位段丘（横野台地）に位置する。C区の土層堆積は、畑作地という状況から、表面的な耕作による擾乱（土壤改良及びトレンチャーによる耕作溝等）が及んでいたが、遺構の存在が確認できるⅢ層以下では、堆積状況が良好な場所もみられた。平坦部では、削平により、黒色土の堆積が薄く、I a層（表土）の下がIV層あるいはV層にいたる場所が広い範囲でみられた。斜面部は、黒色土が厚く、浅間A軽石（As-A:1783年）の純層（I b層）と浅間B軽石（As-B:1108年）の純層（II b層）の堆積がみられた。古墳時代の遺構は、遺構のプランが明瞭となるIV層上面で確認できた。また、IV層では、縄文時代前期から中期にかけての遺物包含層を確認した。

調査区内において、土捨て場を兼ねてローム層の堆積状況を観察するための深掘りを実施したところ、横野台地一帯でみられるローム層（浅間山の噴火による火山灰及び軽石など）の安定した堆積がみられた。ローム層の堆積は、浅間板鼻黄色軽石層（As-YP）、浅間大窟沢第1軽石（As-OP1）を含むローム層、広義の浅間板鼻褐色軽石層群（As-BP Group）とその層群中で暗色帯を境に分けられる浅間室田軽石層（As-MP）、さらに、その下層は、粘土層（黒色帶）となり、上部には始良T n火山灰（AT）の純層が堆積が確認できた。黒色帶までの深度は、地表下約5mである。

（井上慎也）



第5図 基本層序

IV 検出された遺構と遺物

1 遺跡の概要

概要

加賀塚遺跡は、「横野台地」の北縁部にあたり、その北側は碓氷川河岸段丘による急峻な崖が形成されている。全体的には北から南へ大きく傾斜するが、北側では碓氷川方向から入り込む小支谷に向かって東へ傾斜している。

発掘調査はこれまで3次にわたって行われ、縄文時代前期前半及び中期初頭の遺構群、古墳時代中期末～後期初頭の集落跡、古墳時代終末期の古墳等が確認されてきた。

今回の調査では、前回調査を行った地区(『加賀塚遺跡1』)の北側及び東側が対象となった(C・E区)。そこでは前回調査に連続する集落址とその範囲を確認した。なお2次調査において、C区の一部を調査しており、古墳時代中期の住居址1棟を調査・報告している(H-51号住居址、『加賀塚遺跡1』)。

主な遺構は古墳時代に帰属し、住居址(堅穴建物)103棟、周溝状遺構1基、堅穴状遺構2基、土坑、溝である。なお周知されていた東横野6号墳は、前回調査したK-1号古墳であることが確定した。

その他、縄文時代の遺物を包含する遺構は検出されず、前期前半、中期初頭の遺物が少数出土した。また、弥生時代の土器・石器も少数出土した。古代以降の遺構・遺物は少數である。

C区

C区は、A・B区の北側に相当する。古墳時代前期～後期に至る住居址が101棟検出され、大規模な集落址が斜面地全面にわたって南北にびがることが確認された。南側の遺構群は前回調査に連続する一群であることが判った。

その他の時代に帰属する遺構・遺物は少ない。縄文時代では、前期前半、中期初頭の包含層を検出したが、陥穴1基以外の遺構は確認されなかった。主な遺物は、関山II式、有尾・黒浜式、五領ヶ台式、加曾利E式の土器、石鐵、打製石斧、スクレイバー、凹石、磨石等である。弥生時代では、中期後半の石器、土器片が出土した。7世紀代のものが下限で、古代以降の遺構は確認されなかった。

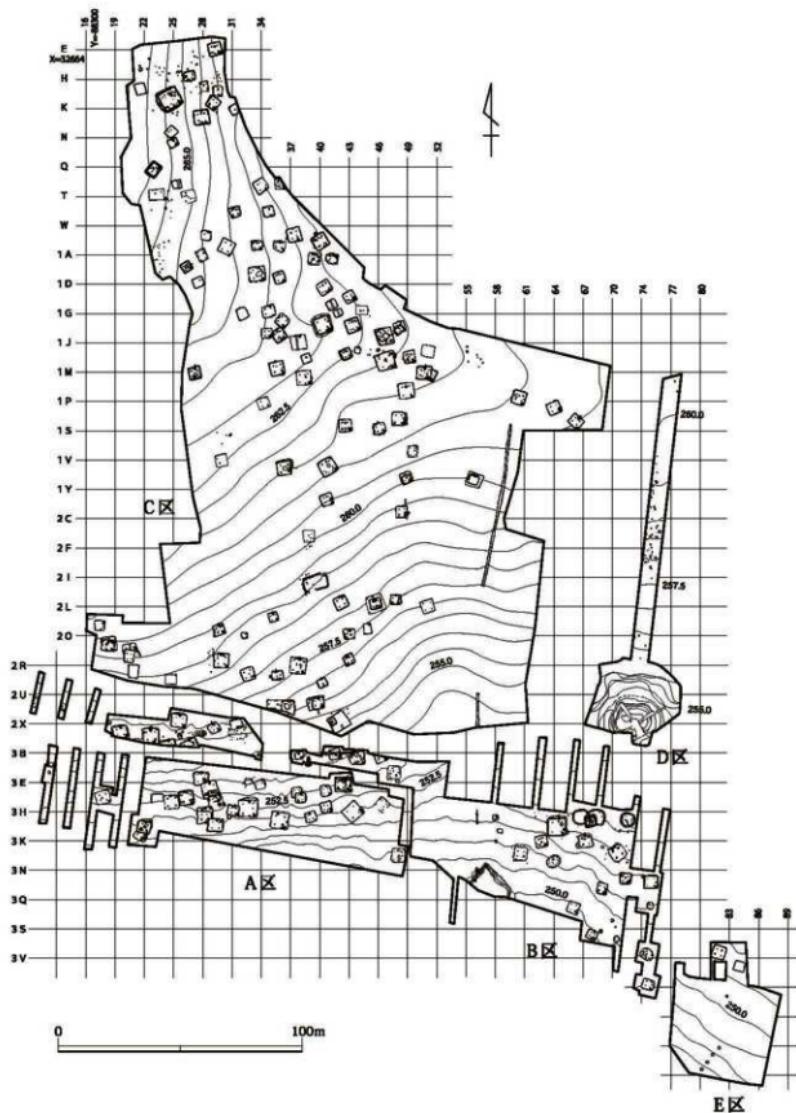
E区

E区は、B区の東側に相当する。集落の東側部分の範囲を確認するためのトレンチ調査を実施した結果、2軒の住居址が検出されたのみで、これ以上の範囲は認められず、集落の東側範囲が今回の調査によって明らかとなった。

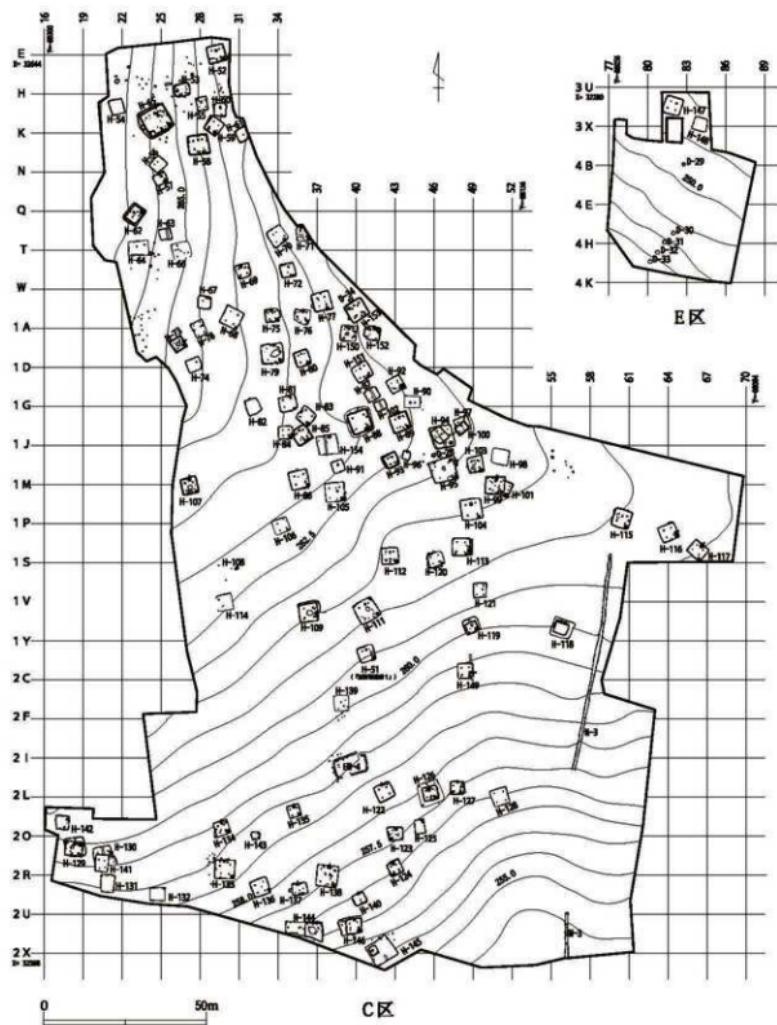
調査区東側部分

トレンチによる確認調査のみである。県道部分までの東側部分では、D区及びE区を境として古墳時代の遺構は確認されなかった。縄文時代では、土坑等の遺構、遺物が少數検出されたが、集落の存在は確認できなかった。また、少數の溝を確認した。調査対象面積が広範囲にわたるにもかかわらず、遺構、遺物ともに密度は低いことが明らかとなった。県道部分で発見された天神林遺跡の範囲は、今回の調査対象範囲までは広がっていないことを確認した。

(石丸敦史・井上慎也)



第6図 加賀塚遺跡全体図



第7図 加賀塚遺跡C区・E区全体図

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構 (第101図)

縄文時代の遺物を伴う遺構はなかったが、D-28号土坑は陥穴である可能性が指摘される。

(2) 土器 (第8図)

1・2は関山Ⅱ式で1は単節羽状縄文後コンバス文、2は組紐文を施すものである。3・4は同一個体で、薄手で胎土に纖維を含んでおらず、口唇部が平坦な深鉢である。文様は口縁部文様帯に先端が鋭角な工具により縱位单沈線を充填させ、体部に単節RL縄文を縱位に施すものである。前期末～中期初頭に帰属するものと想定しておく。5～7は十三菩提式で5・6は集合沈線後に結節浮線文が施される。7は突起で全体的に結節浮線文を充填させ、中央頂部のみ円形状に陰刻する。8～27は五領ヶ台式で、8は横位平行沈線により上下に区画し、区画の上位に集合沈線、下位に瓦状の押引文を施すものである。9は波頂部にあたり、短沈線が施される円形状の突起が付される。また口縁下には短沈線を充填させた玉抱三叉文が施される。10～12は棒状工具による斜位及び弧状の太い沈線区画内に单沈線・三叉文を充填させる特徴を持つ。13は「く」の字状に内折する口縁部形状を呈し、横位平行沈線間に格子目文を施す。口唇部には単節Lの盛り糸を連続して押圧している。14・15・17・19・22・23は縱・横・斜位、弧状の平行沈線による区画内に格子目文が施されるもので、14・15には区画空白部に三叉文が配置される。また、23に限り平行沈線は縫帶に沿って施され、体部には斜位の単節LR縄文が施される。16・18は横位平行沈線で口縁部を区画し、平行沈線から区画内へ向けて三叉文を連続して配し、区画の空白部に单沈線の充填が施される。20・21は刻みを有する横位縫帶により口縁部を区画し、20には縫帶脇の沈線より三叉文が派生し、21には棒状工具による多段の横位沈線が縫帶に沿って施され、口唇部には連続する刻みを有する。24～26には結節回転文が施されており、24・25には羽状と想定される単節縄文、26には単節LR縄文が縦位に施される。27には横位・三角形・格子目状の平行沈線が施され、文様の空白部に三叉文が配される。なお、最上位の平行沈線は有節となっている。

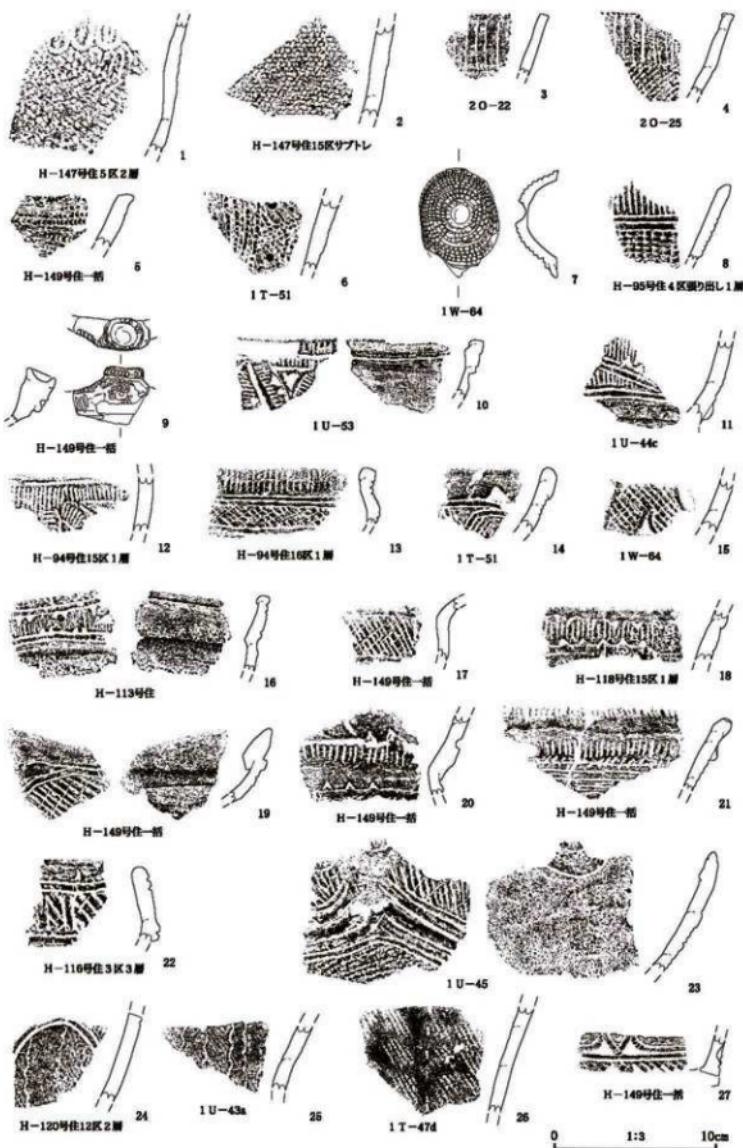
(日沖剛史)

(3) 石器 (第10図)

石器は、土器と同様、遺物包含層及び古墳時代住居址等の遺構覆土中から569点（石器139点、剥片類450点）出土した。石器の時期は、一部を除き、特定することは困難であるため、ここでは、縄文時代の石器を一括して報告する。主な器種は、石鏃32点（うち未成品5点）、スクレイバーA類（黒曜石）2点、楔形石器2点、スクレイバーB類30点、石匙B類1点、打製石斧36点（欠損部分含む）、石核状石器1点、凹石14点、磨石18点、石皿2点、台石状石器1点である。剥片は、黒曜石、黒色頁岩が主体である。

石鏃は、凹基無茎式を主体とするが、凹基有茎式（1～4）、凸基式（5）も認められた。4は、片側縁辺のみに突起がある。打製石斧は、Ⅲ形態が少数認められた。なお、有茎のものは、弥生時代の可能性もある。石器石材は、石鏃には非在地の黒曜石が多用され、石鏃の一部、打製石斧、スクレイバーなどには、在地のチャート、頁岩、安山岩が多用されている。磨石、凹石などの磨石器には、在地の安山岩が多用されている。本遺跡から出土した石器は、時期は不明であっても、周辺地域の縄文時代の石器及び石材との共通性が認められた。

(井上慎也)



第8図 繩文土器実測図

3 弥生時代の遺物

(1) 土器 (第9図)

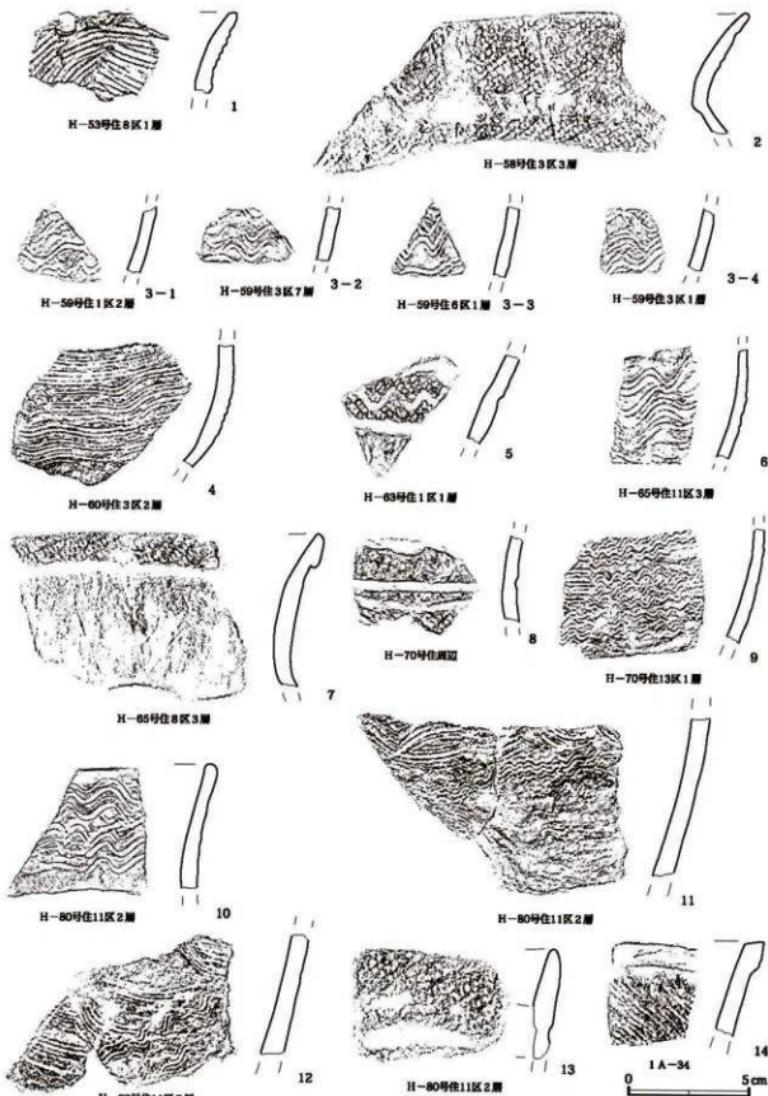
C区北側の古墳時代住居址覆土中から弥生土器片が出土している。それらには、1・5のような弥生中期後半、栗林式の壺・壺や2のような古墳時代初頭、吉ヶ谷式の壺が認められる。出土した弥生土器片は、おむね弥生中期後半から弥生時代後期、古墳時代初頭に帰属するものである。包含層は削平されていたが、遺物分布の状況から判断して、北側を中心とする範囲に中期後半の遺構が存在していた可能性がある。

(井上慎也・石丸教史)

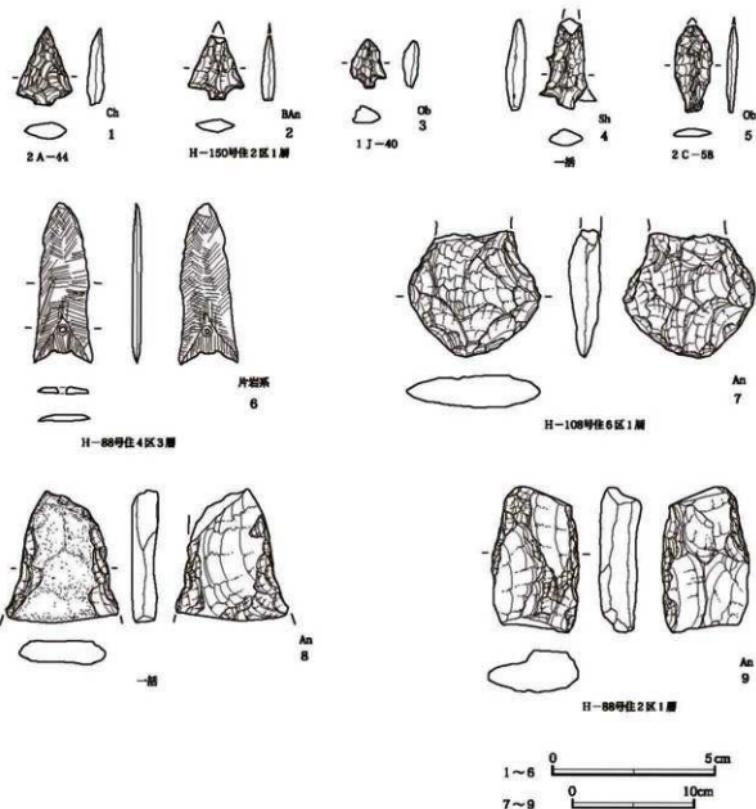
(2) 石器 (第10図)

石器は、磨製石鎌1点と石鋸3点が出土した。いずれも遺構に伴うものではないが、形態から判断して土器群と同時期で、中期後半に帰属するものと思われる。磨製石鎌(6)は、有孔無茎式である。鎌は研磨によって平坦となっている。基部の凹み部分には、2ヵ所の抉りがみられる。石鋸は、剣形(7・8)の欠損品(基部、刃部が欠損)と未成品あるいは両側縁が平行の短冊形である。直接打撃による交互剥離調整が施されている。石材は在地の安山岩である。

(井上慎也)



第9図 弥生土器実測図



第10圖 桐文・弥生石器実測図

4 古墳時代の遺構

(1) 遺構

1 住居址 (第 11 図～第 98 図)

概要

住居址としたものは、いずれも竪穴建物址である。平面方形基調の竪穴を有し、いずれもローム層まで掘り込まれている。ただし、小規模で浅い竪穴のもので機能的にも住居址と判断しかねるものもあったが、調査過程において便宜的に住居址とした。

時期

出土土器から判断される住居址の時期は以下の通りである。

3 世紀後半：3 棟／4 世紀：6 棟（前半 2 棟・後半 1 棟）／5 世紀前半：28 棟／5 世紀後半：24 棟／6 世紀前半：10 棟／6 世紀後半：5 棟／時期不明：26 棟

検出状況

まず、遺構の平面検出は容易にプランが確認できたものとそうでないものがあった。その要因としてまず調査区全域にわたってトレンチャーによる擾乱が広がっていたことが考えられる。しかし、それだけではなく、遺構検出面を高く設定したことによって竪穴周囲の状況が把握されたことが挙げられる。

H - 65 号住では、方形竪穴の周囲にテラス状の深い掘り込みが確認された。そのテラス状の掘り込みは外側へ緩やかに立ち上がっているが、竪穴の周囲を全周せず、西側を中心めぐっている。同様のテラス面は H - 62・H - 88・H - 109・H - 118・H - 126・H - 129・H - 146 号住で確認されている。いずれも外側の立ち上がりが緩やかであり、平面検出時には、不明瞭なプランとして視認できる。

なお多くの場合、全周せず標高の高い側で確認されていることから、傾斜地に立地する竪穴建物の壁面の高さを平坦に調整した結果と考えられる。また外側への緩やかな立ち上がりは周堤帯との関係が想定される。

次に住居址は 102 棟を数えるものの、切り合い関係が認められたのは 3ヶ所に止った。5 世紀前半の H - 65 号住では覆土中に浅間 B 軽石が堆積しており、古代に至るまで竪穴が埋没していなかったことが想定される。そのため埋没していない竪穴が避けられ構築されたと想定される。なお覆土上層で土器が多量に出土するような状況は認められず、土器を多量に竪穴に投棄した様相は窺えなかった。

規模

住居床面面積（住居下端での計測値）でみると、その規模はおおむね I : 49m²以上、II : 49m²未満～36m²以上、III : 36m²未満～25m²以上、IV : 25m²未満～16m²以上、V : 16m²未満に分類される。規模不明のものを除いた各住居件数は以下の通りである。

I : 2 棟／II : 7 棟／III : 19 棟／IV : 39 棟／V : 35 棟

IV に分類されるものが最も多く、5 m × 5 m～4 m × 4 m の床面が主体をなしていると言える。

覆土堆積状況

覆土は自然堆積と想定されるものが大半を占めた。また斜面地に立地しているが、ローム層が短期間に流入したような堆積はみられず、土砂流出といったような状況も認められなかった。

H - 62・H - 65・H - 88・H - 99・H - 118・H - 129・H - 138 号住では浅間 B 軽石がレンズ状に堆積しているのが確認され、古代に至るまで竪穴が残存し緩やかに埋没していったことが判る。そ

の一方で、H-52・H-144号住では土葺き屋根に由来すると考えられる土層が確認された。とくにH-144号住ではハードロームを多く包含するローム層が住居内に平面ドーナツ状に堆積しており、土葺き屋根が崩落した状況が想定される。そのドーナツ状に広がる状況からも、屋根頂部には土は葺かれていなかったものと推測される。またこのH-144号住では、覆土上面において柱痕が平面検出されたことから、とくに柱を抜き取るようなことは行わず、上屋構造は自然崩壊したものと考えられる。

炉・カマド

炉はいずれも地床炉である。住居北側、主柱穴間に設けるものが多い。安山岩製の炉石を置くものが多く見られる。

カマドは住居北側もしくは北東側に設置するのが最も多く、東または南東側に作るものもある。その構造は地山ロームで作られるもの、地山ロームと天井・袖に一部礫を使用するもの、石組のものの3つがある。石組のカマドを有するものは、H-99号住とH-113号住がある。H-99号住は5世紀第Ⅲ四半期に位置づけられ、H-113号住は時期不明である。H-99号住では、平坦面を内側に向けて並立された袖石は住居内に長く伸び、天井石を懸架する。煙道は短く、地山を掘削して作られる。火床および袖石の顯著な被熱は認められなかった。使用された石はいずれも安山岩である。H-113号住も同様の構造をしているが、袖はH-99号住ほどは長く伸びない。袖石基部は地山ロームをわずかに盛って固定している。

住居内土坑

住居内土坑にはいわゆる「貯蔵穴」とされる床面から掘り込まれるものと、「床下土坑」と呼ばれる床面下において掘り込まれるものがあった。

貯蔵穴は平面形態が円形のものが多いが、その周囲に方形枠状の高まりが周るものが認められた。おそらく板材による蓋が想定されるものの、土層觀察によって確認されることはなかった。貯蔵穴内からは土器が出土することが多かったが、いずれも土坑底面から検出されることなく覆土中から出土している。H-115号住では大量の土器が、周囲から貯蔵穴へ流れ込んだ状況が確認され、貯蔵穴の周辺に多量の土器が設置されていたことが想定される。

床下土坑はH-84・H-107・H-109・H-124・H-126・H-127・H-138・H-144・H-150号住において確認された。いずれもカマドを有する住居跡である。多くのものは、住居の中央に設けられている。その平面形態は円形を基調とするが、H-144号住のように不整な方形を呈するものもある。深度は深いもので、120cmを計測するが、80cm程度のものが最も多い。断面形状は方形もしくは底面付近が外側へ広がるフラスコ状を呈する。覆土は黒褐色土・ロームブロックを主体とするが、おおむね人為的埋土と判断される。遺物は包含していない。

柱穴

柱穴は4本主柱穴を方形に配置するあり方が基本となっている。明確な2本主柱穴は確認されていない。柱抜き取り痕が確認されたものはなかった。またH-126号住では、壁外柱穴が確認された。標高の高い住居北側で3基確認され、そのうち2基の深度は80~100cmを計測する深いものである。柱穴が無いもしくは不明なものは、とくに住居規模の小さいもので認められた。竪穴外での確認も行ったが、検出できなかった。

遺物出土状況

出土した遺物には、土師器・須恵器、石製品・石製模造品・石器、鉄器、土製品がある。いずれも遺

棄されたものと考えられ、明確に廃棄された状況が把握されたものはなかった。燃焼施設に炉を有する住居址は、とくに顯著な集中箇所は認められず、必ずしも貯蔵穴周辺や炉周辺といった住居内施設に集中する状況は見られなかった。その一方でカマドを有する住居址では、カマド脇もしくは前面に出土土器が集中する傾向が認められる。

須恵器は5世紀後半から6世紀にかけての住居址で出土している。H-126号住では貯蔵穴に流れ込むような状態で出土している。H-137号住では貯蔵穴の東側床面で出土している。H-146号住では貯蔵穴北側前面で出土している。須恵器は貯蔵穴周辺もしくはカマド周辺で出土する傾向があるようである。

石製品・石製模造品は住居覆土中より出土するものが大半を占めている。ただしH-153号住の等柱形石製品は床面上より出土している。またH-132号住では、浅い住居覆土中より多量の白玉が出土している。ただし、出土する箇所は住居内でも限られていた。

2 周溝状造構（第99図）

C区南側で1基確認された（EM-4号周溝）。その平面プランは明瞭に検出された。

浅い掘り込みの溝が隅丸方形状に廻り、南北2ヶ所に溝が切れる箇所がある。周囲および周溝内側でピットが確認されたものの、その深度は浅い。遺物は出土していない。

遺構の希薄な一帯にあたり、住居群と何らかの関係性が想定される施設であったと考えられる。

3 溝（第100図）

C区東側に南北に走る溝が1条検出された（M-3号溝）。北側は谷の落ち込み稜線上から南に向かって走っている。一部後世の土地改変で損失している部分もあるが、南北に直線的に伸びている。B区において検出されているM-2号溝は本溝に連続するものと考えられ、おそらくB区US1号溜池に接続するものと想定される。

本溝より東側へは集落は展開しないことから、境界としての機能も有していたものと考えられる。

（石丸敦史）

5 古代以降の遺構

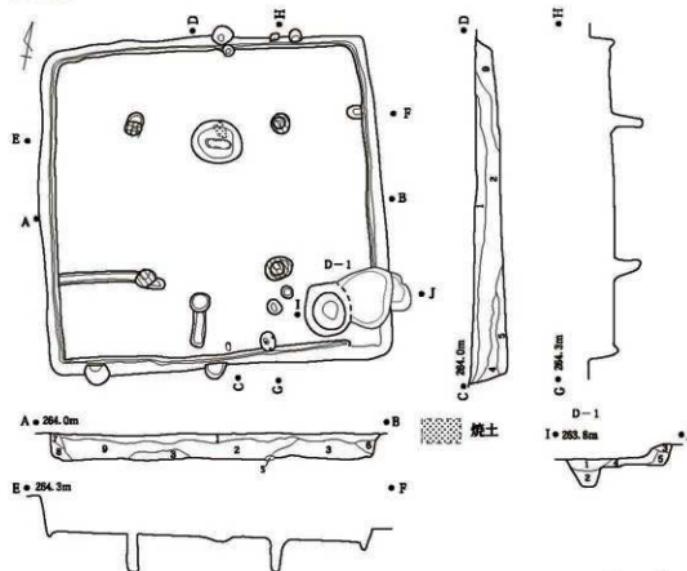
（1）遺構

1 土坑（第101図）

土坑は4基確認されたが、いずれも遺物を包含しておらず時期不明である。E区で確認された土坑4基（D29～33号土坑）は覆土の堆積状況などから中世以降のものであると考えられる。

（石丸敦史）

H-52号住

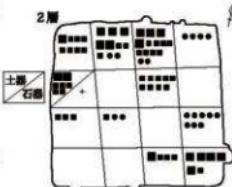
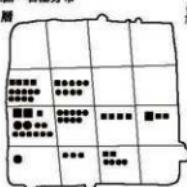


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	測入厚	測定者	備考
H-52	1	高周波セメント層	○	○	■ × × × ×			
	2	高周波セメント層	1>2	○	○ ■ × × × ×			
	3	高周波セメント層	2>3	○	○ ○ ■ △ × × × ×			土質表面の焼土か
	4	高周波セメント層	4<3	○	○ ○ ■ × × × ×			
	5	高周波セメント層	5<4	○	○ ○ ■ × × × ×			
	6	高周波セメント層	6>5	○	○ ○ ■ × × × ×			
	7	高周波セメント層	7<6	△	○ ○ ■ × × × ×			
	8	高周波セメント層	8>9	△	○ ○ ■ △ × × × ×			
	9	高周波セメント層	8>9	○	○ ○ ■ × × × ×			
D-1	1	高周波セメント層	○	○	■ × × × ×			表面付近
	2	高周波セメント層	2<1	△	△ △ × × × ×			底面付近
	3	高周波セメント層	3>5	○	○ ○ × × × ×			ビット頭上
	4	高周波セメント層	4>2	○	○ ○ ■ × × × ×			D-1に先行する土坑
	5	高周波セメント層	5>3	○	○ ■ × × × ×			底面付近

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16

上層部 PR, 512g
260.3g
F 3.50g

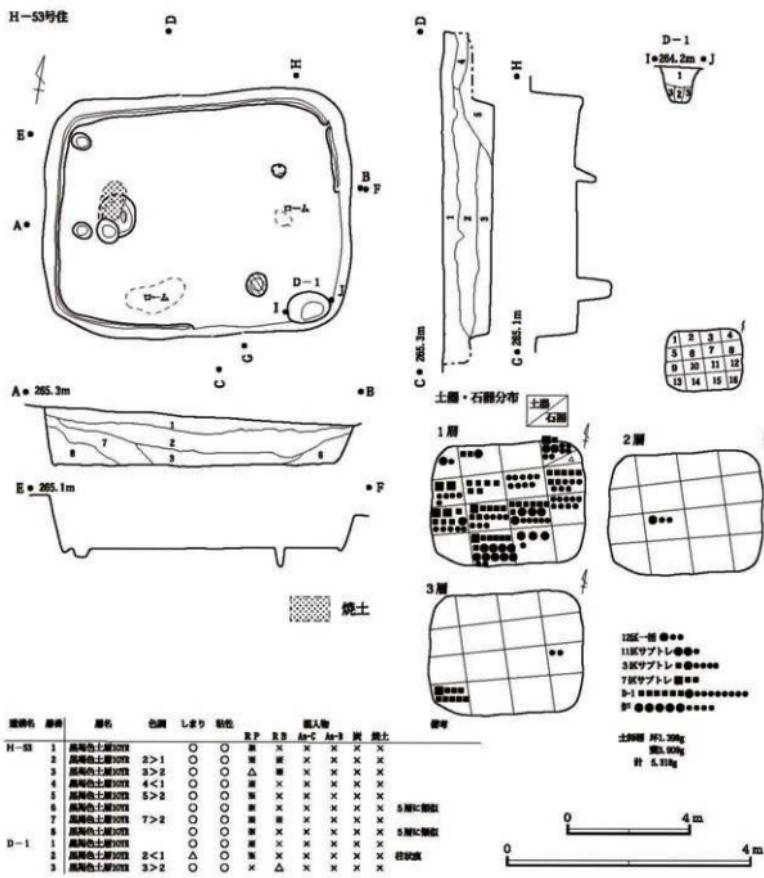
土器・石器分布



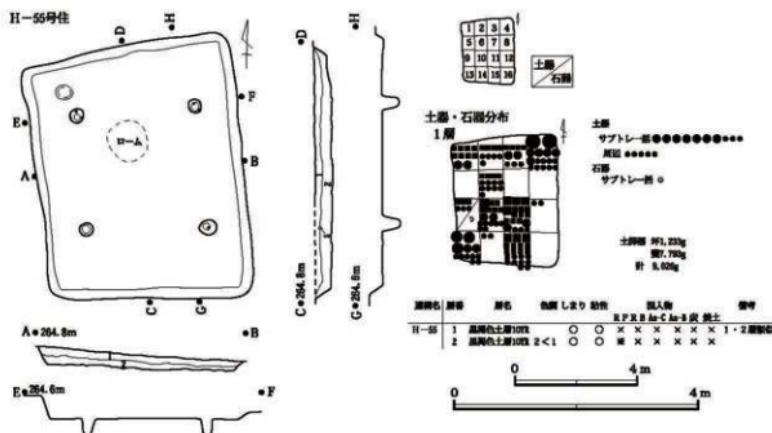
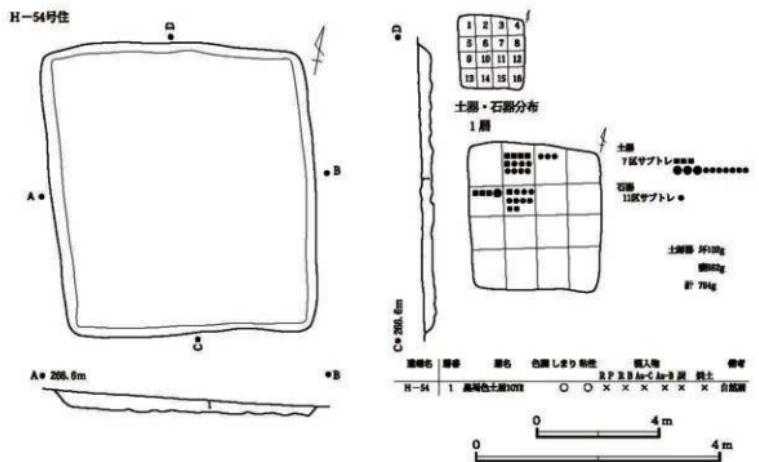
15Kサブトレ *****
3区サブトレ *****
D-1 ***



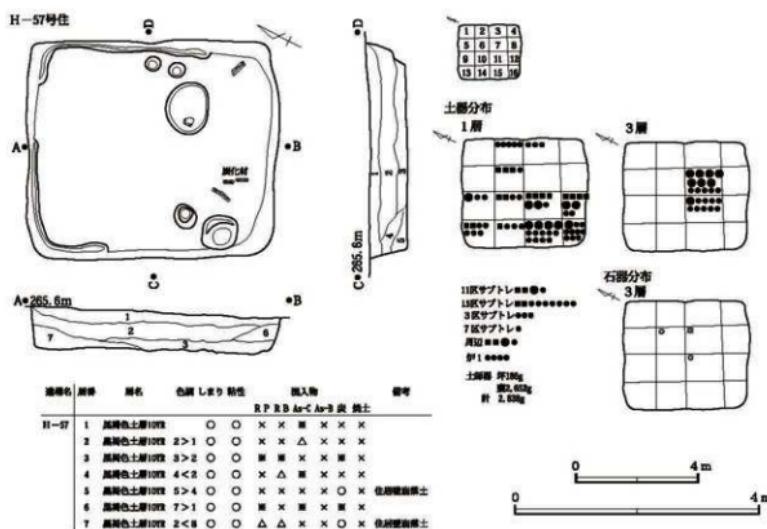
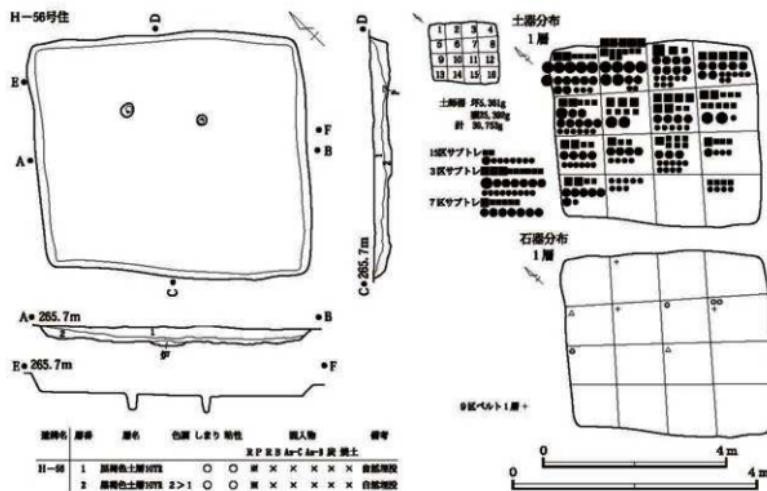
第11図 H-52号住居址実測図



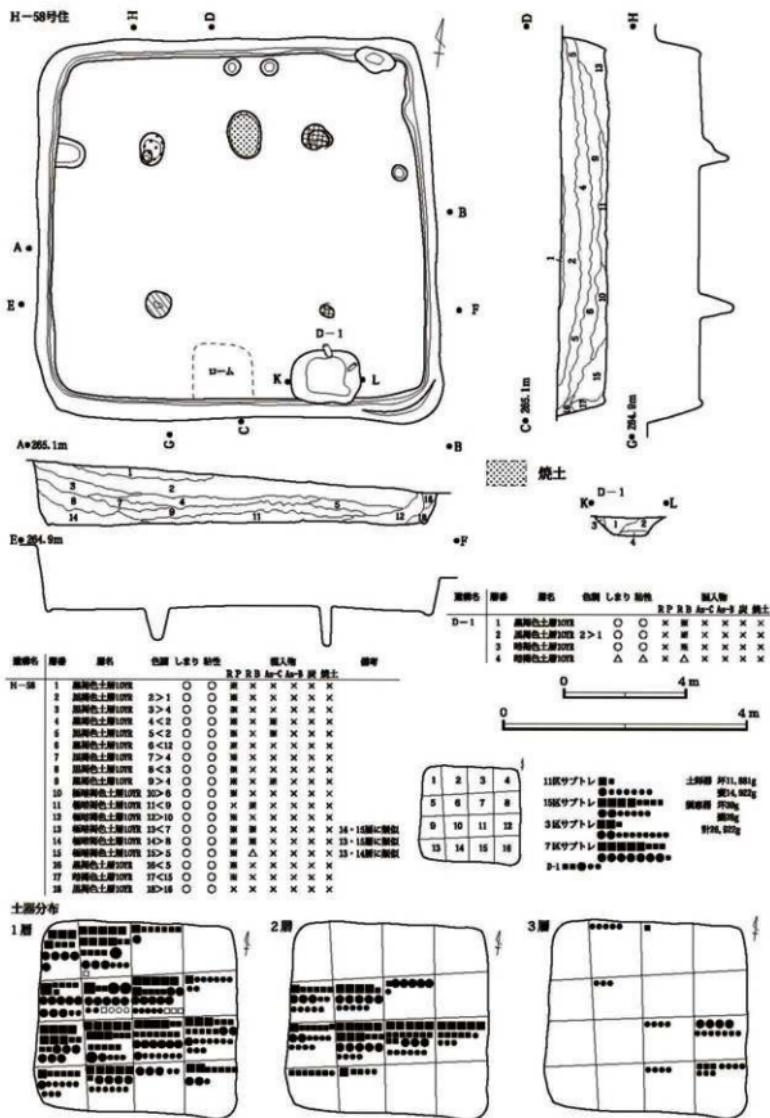
第12図 H-53号住址実測図

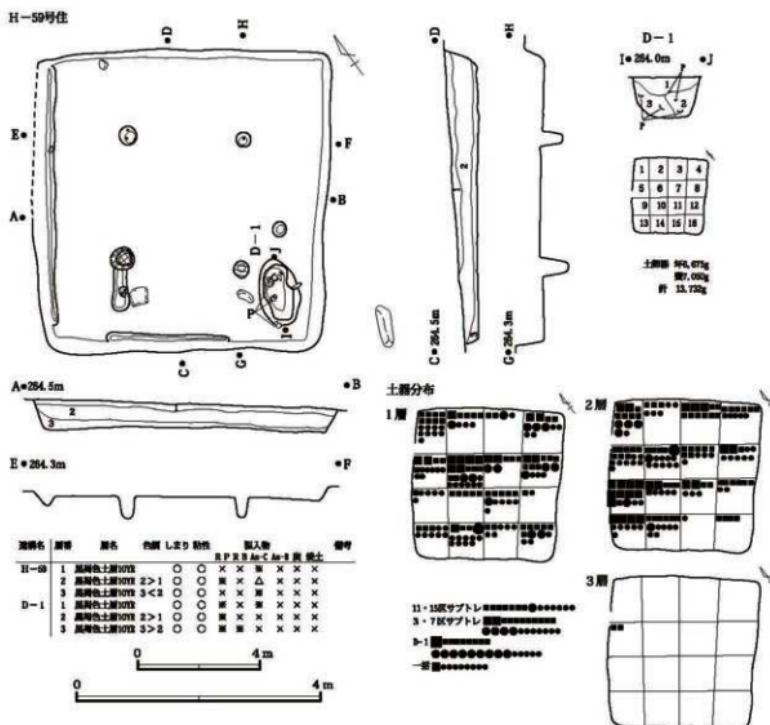
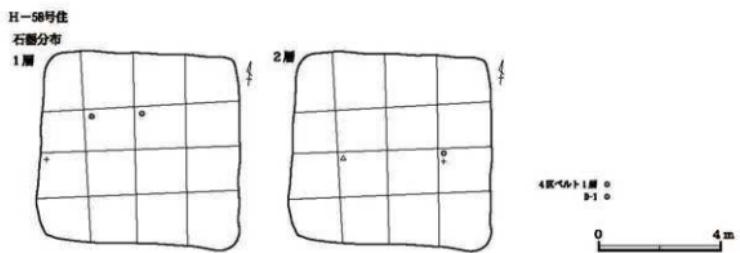


第13図 H-54号住居址・55号住居址実測図

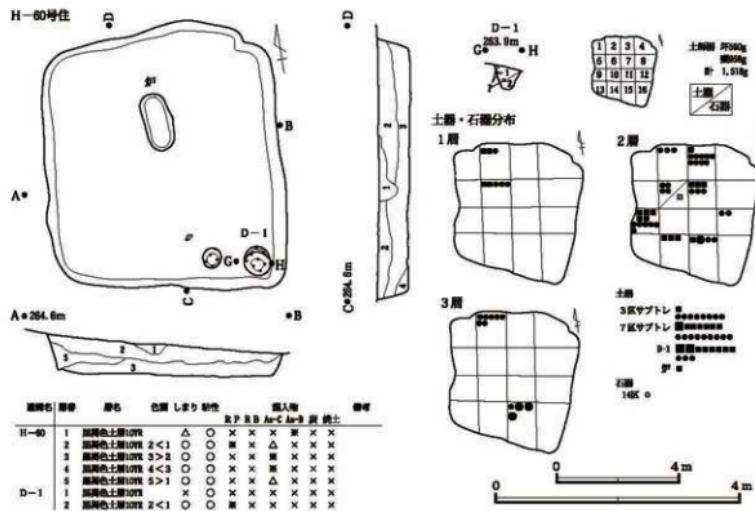
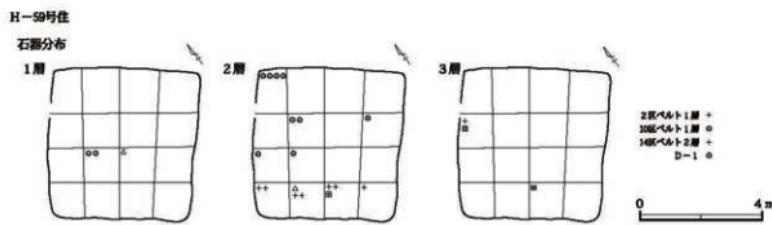


第14図 H-56号住居址・57号住居址実測図

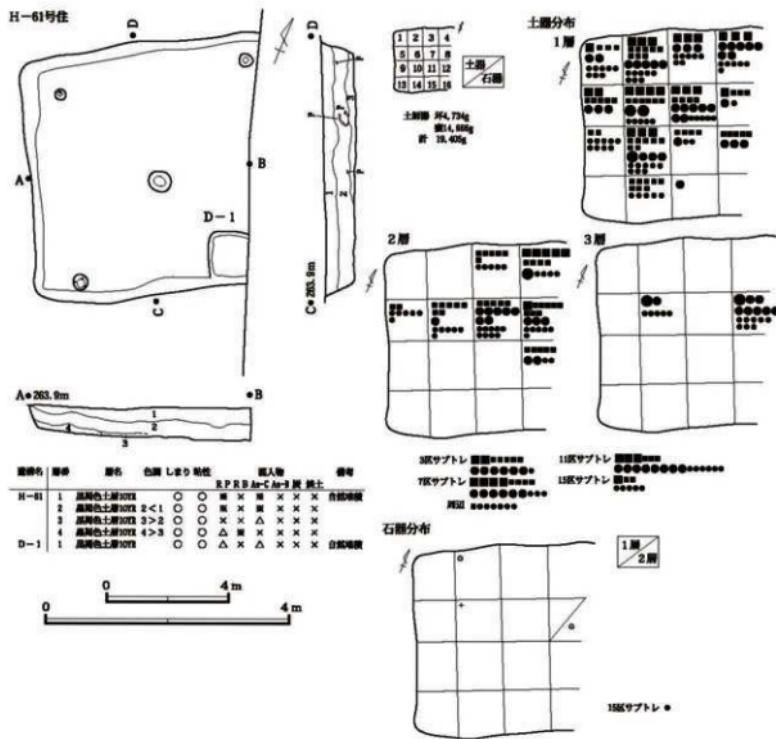




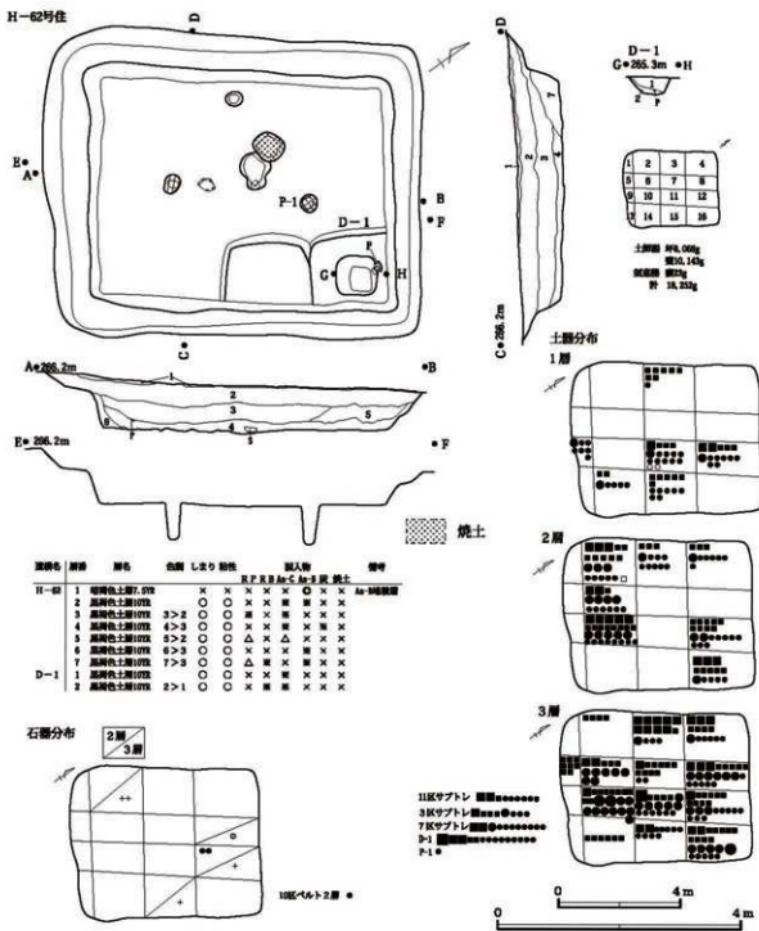
第16図 H-58号住居址(2)・H-59号住居址(1)実測図



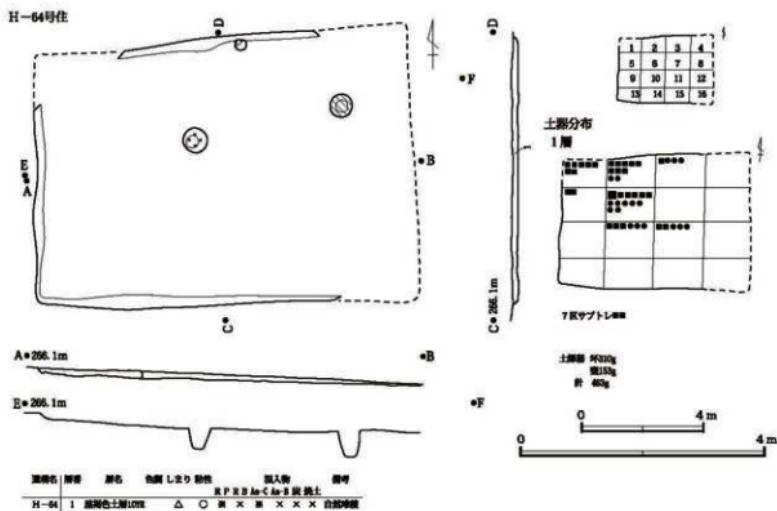
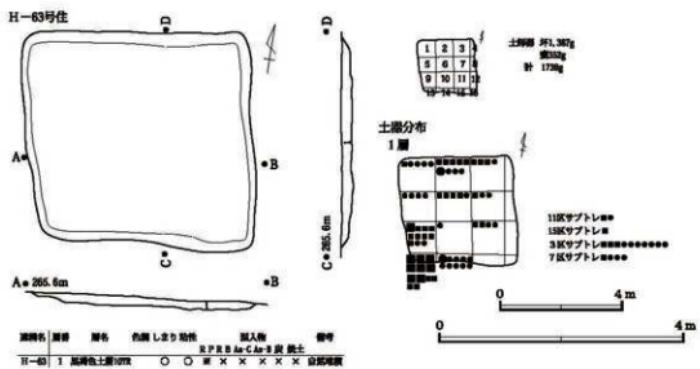
第17図 H-59号住居址(2)・H-60号住居址実測図



第18図 H-61号住居址実測図

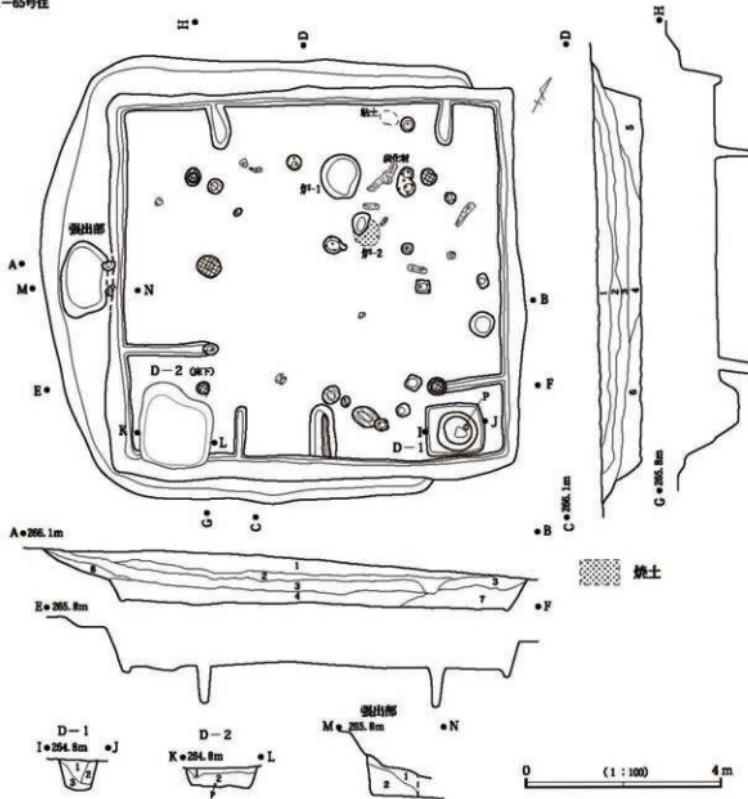


第19図 H-62号住居址実測図



第20図 H-63号住居址・H-64号住居址実測図

H-65号住

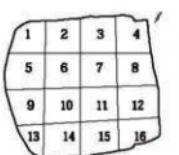


遺跡名	層番	層名	色調	しまり	特徴	測量					備考	
						R	P	E	S	C	Ar-4	
H-65	1	褐色土層10cm		X	X	X	X	X	X	X	X	Ar-5地盤層
	2	褐色土層7.0cm										
	3	褐色土層10cm										
	4	褐色土層10cm	4>3	O	O	O	O	O	O	△	X	
	5	褐色土層10cm	5>3	O	O	O	O	O	X	△	X	
	6	褐色土層10cm	6>3	O	O	O	O	O	X	△	X	
	7	褐色土層10cm	7>3	O	O	O	O	O	△	△	X	
	8	褐色土層10cm	8<2	O	O	O	O	O	X	△	X	
D-1	1	褐色土層10cm										
	2	褐色土層10cm										
D-2	1	褐色土層10cm	2>1	O	O	O	O	O	△	△	X	
	2	褐色土層10cm	3<1	O	O	O	O	O	X	△	X	
門出部	1	褐色土層10cm	2>1	O	O	O	O	O	△	△	X	
	2	褐色土層10cm	2>1	O	O	O	O	O	△	△	X	

第21図 H-65号住居址(1)実測図

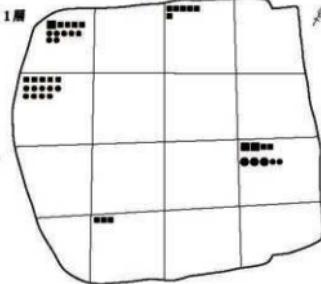
H-65号住

土器分布

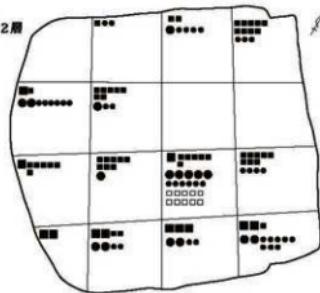


土器総数 468,047
重さ 11,781g
個数割合 20.01%
計 18,915g

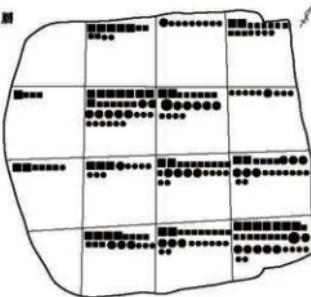
- 1区テラス ***
- 2区テラス ***
- 4区テラス ●●●
- 5区テラス ●●●●
- 9区テラス ○○○○
- 11区サブフレ ■■■■■
- 12区テラス ○○○○
- 13区テラス ○○○○
- 14区サブフレ ■■■■■
- 15区テラス ○○○○
- 16区テラス ○○○○
- 18区サブフレ ■■■■■
- 19区テラス ○○○○
- 20区サブフレ ■■■■■
- 21区テラス ○○○○
- 22区サブフレ ■■■■■
- 23区テラス ○○○○
- 24区サブフレ ■■■■■



2層

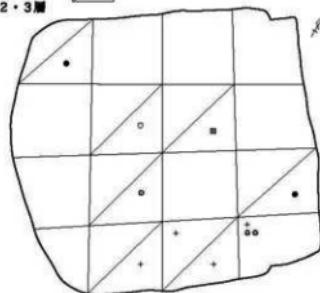


3層



石器分布

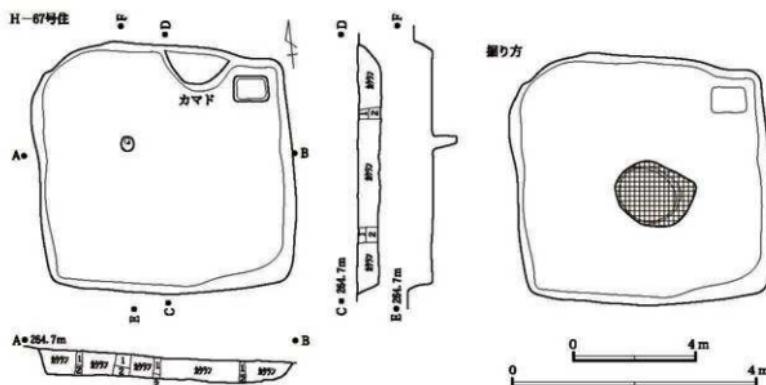
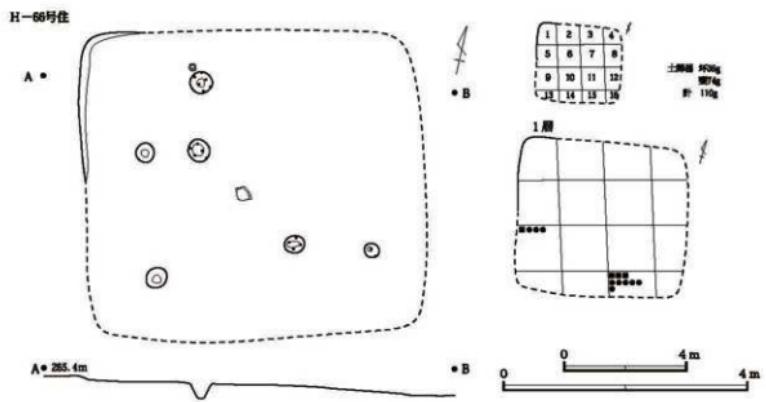
2層
3層



4区テラス △△
6区ベルト1層 ▽
11区ベルト3層 ○●
D-1 △

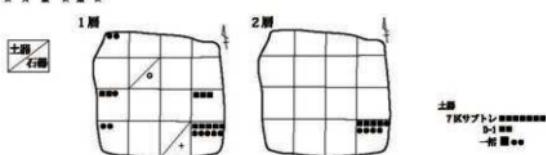
0 4m

第22図 H-65号住居址(2)実測図

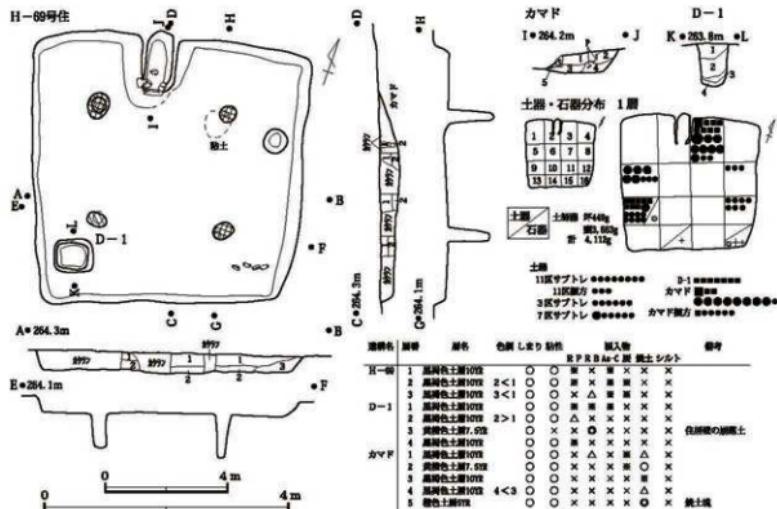
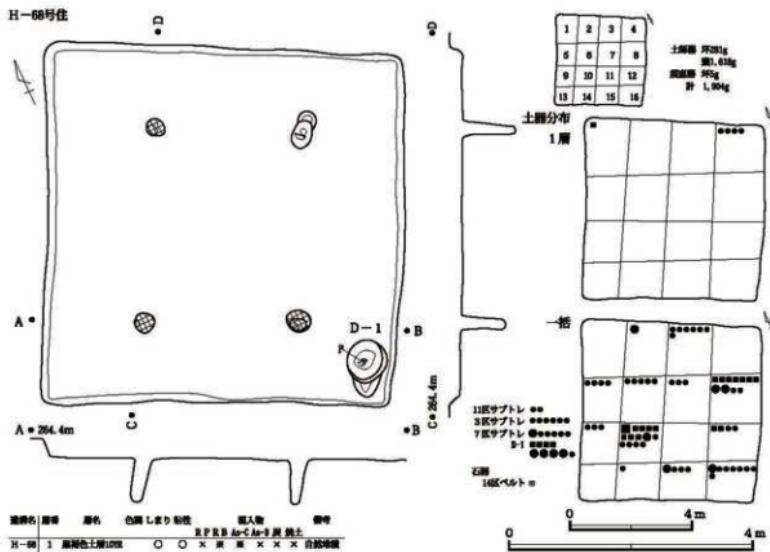


遺物名	形態	名前	色調	しまり	粒性	埋入部	備考
H-67	1	黒褐色土器	102	○	●	×	×
	2	黒褐色土器	102	2>1	○	○	× × × × × ×

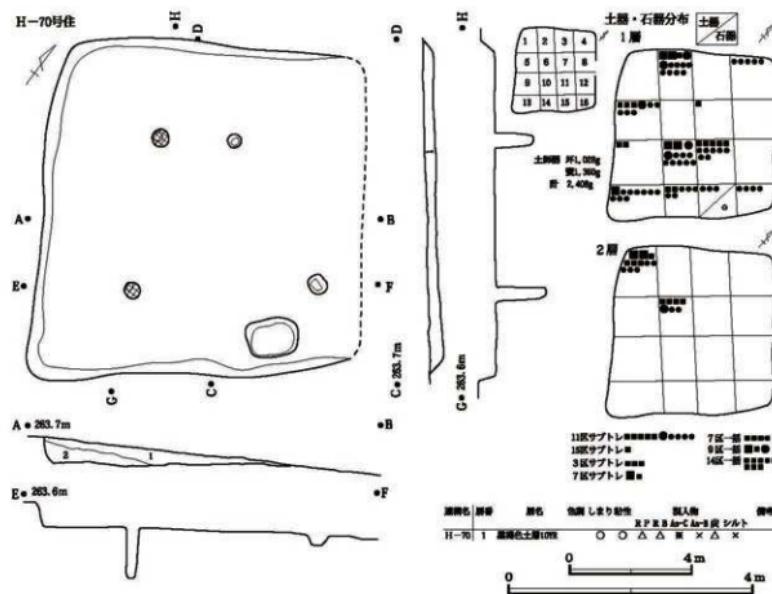
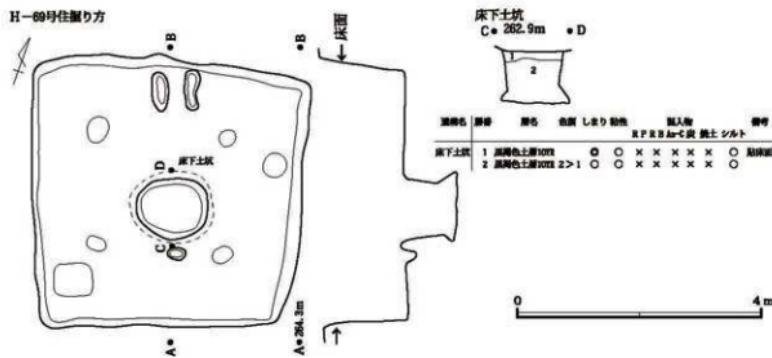
土器・石器分布



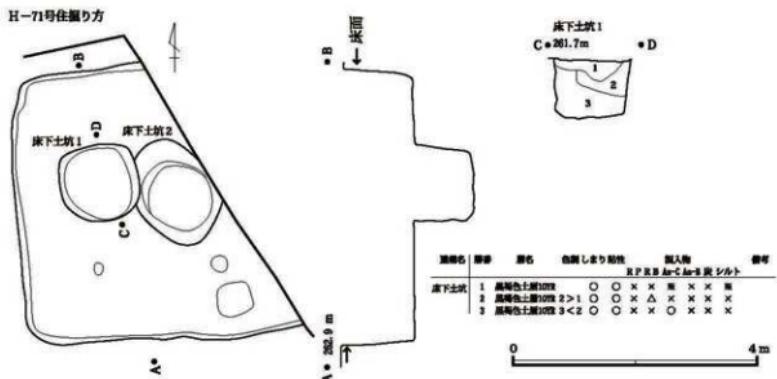
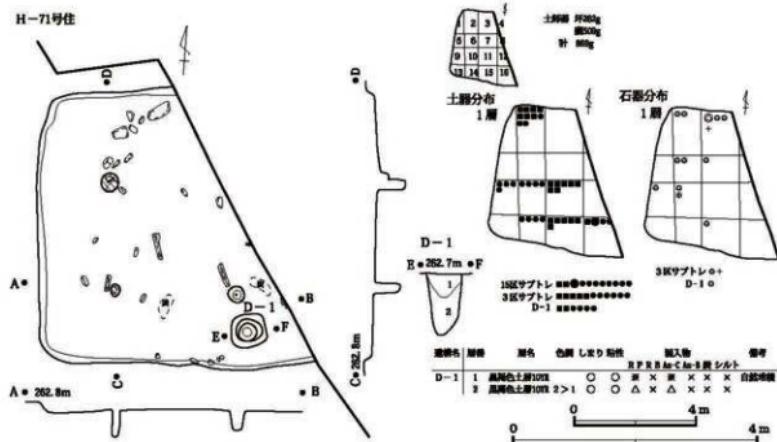
第23図 H-66号住居址・H-67号住居址実測図



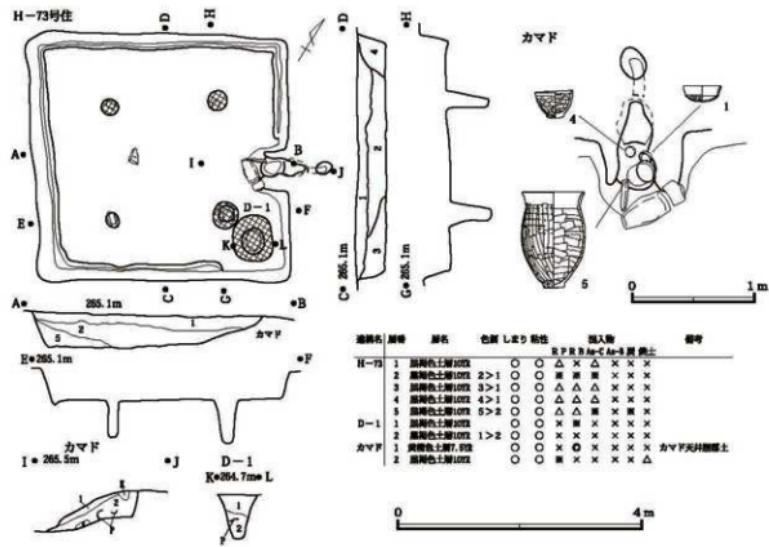
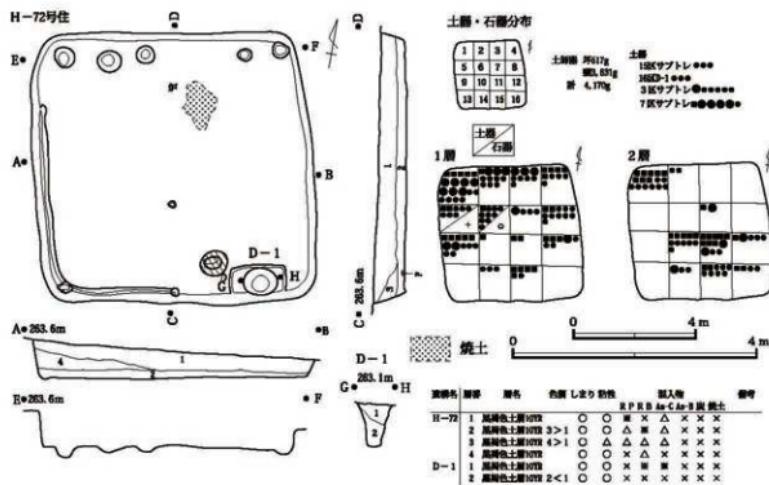
第24図 H-68号住居址・H-69号住居址(1)実測図



第25図 H-69号住居址(2)・H-70号住居址実測図

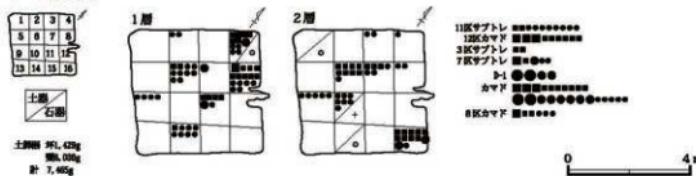


第26図 H-71号住居址実測図

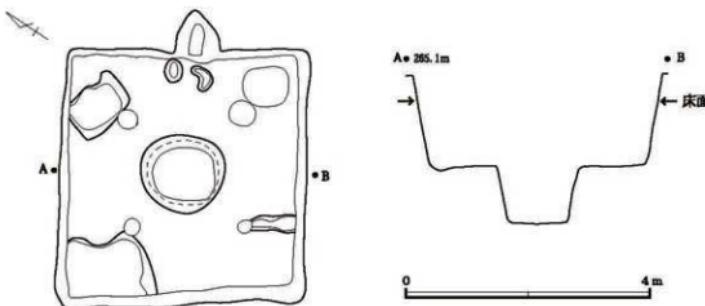


第27図 H-72号住居址・H-73号住居址(1)実測図

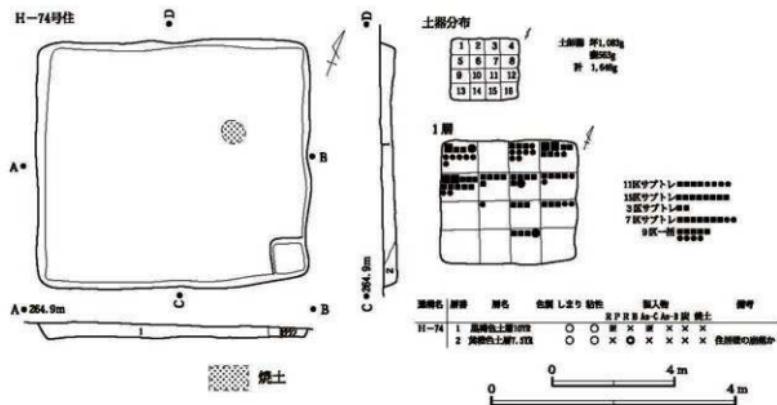
H-73号住(2)



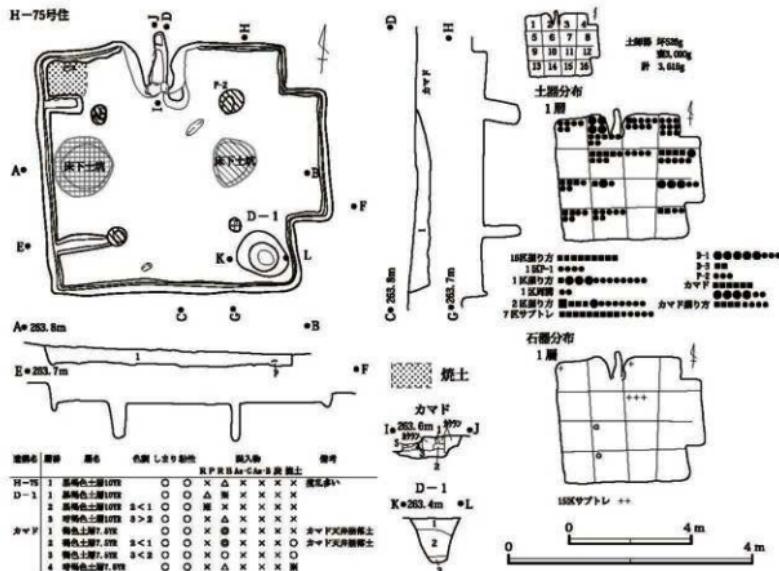
H-73号住掘り方

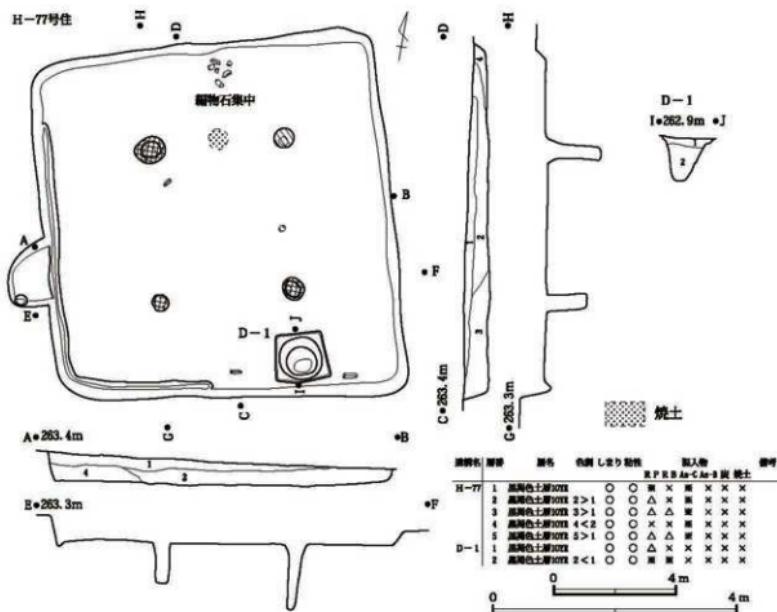
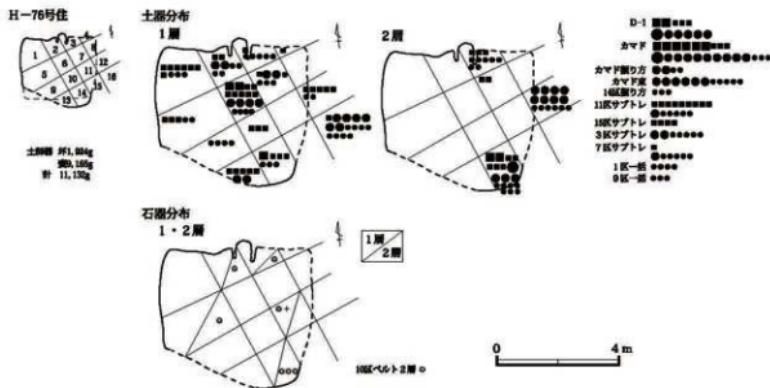


H-74号住

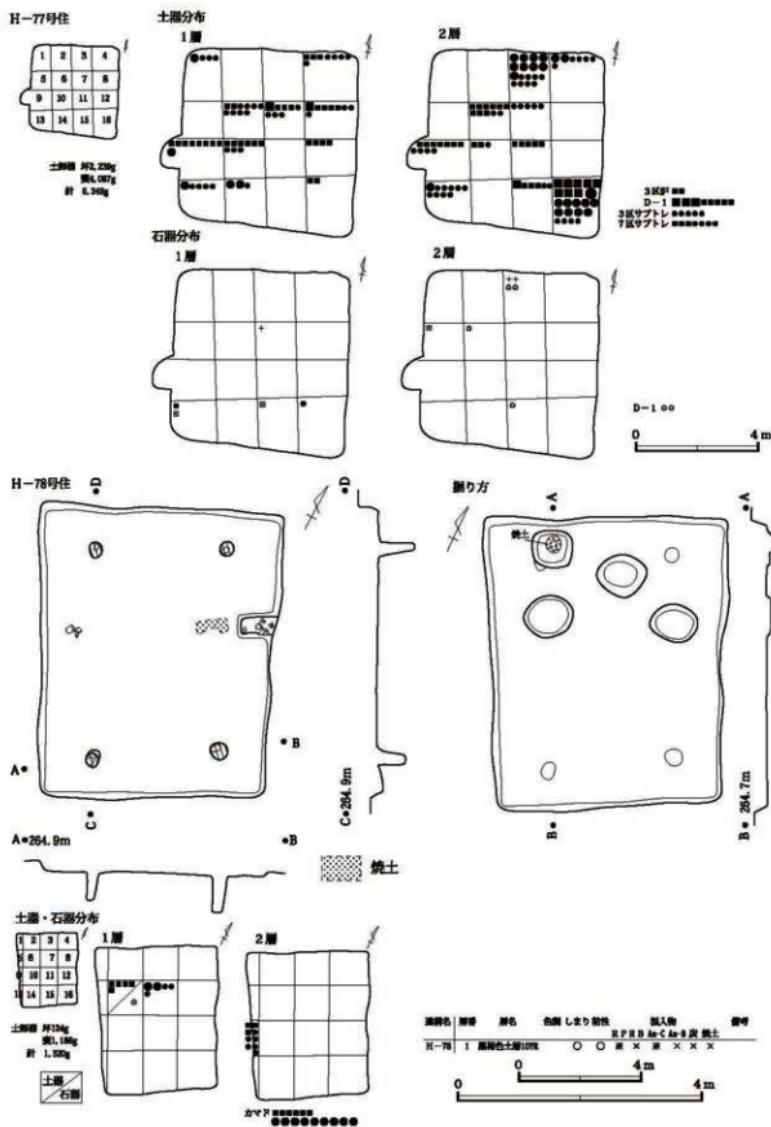


第28図 H-73号住居址(2)・H-74号住居址実測図

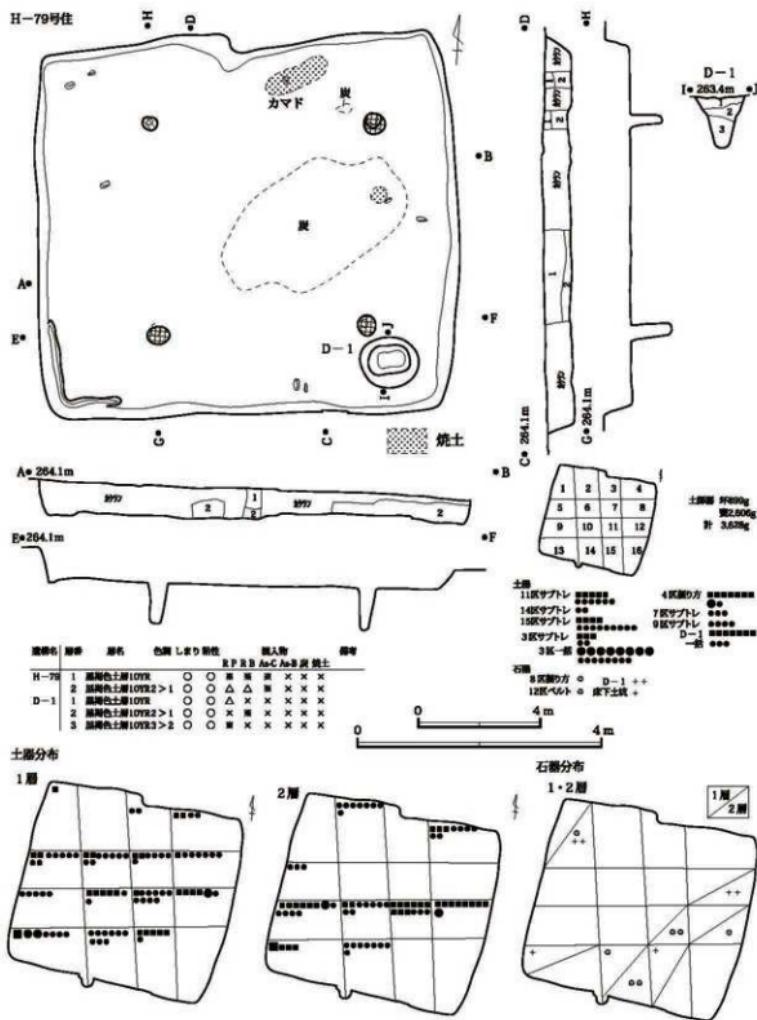




第30図 H-76号居住址(2)・H-77号居住址実測図

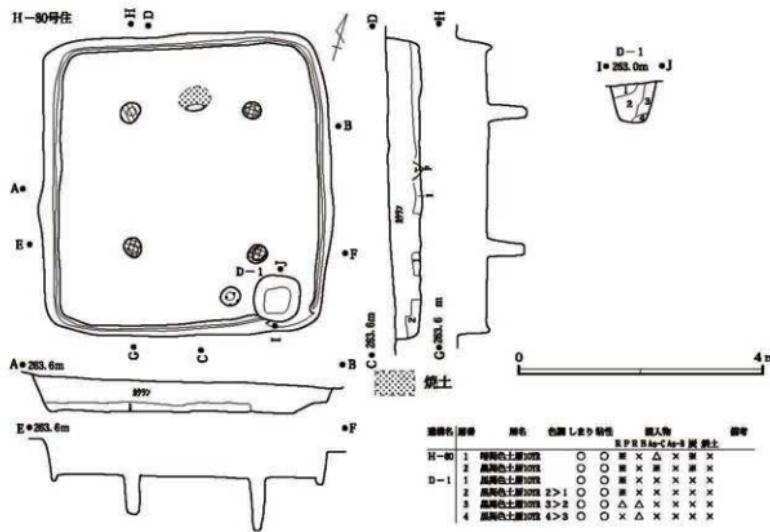
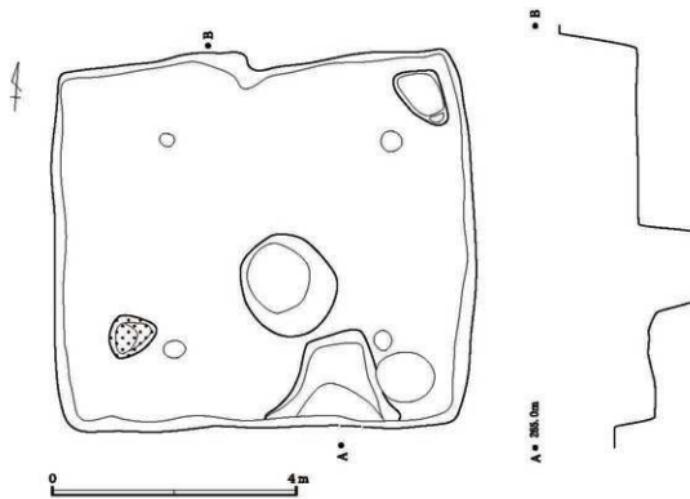


第31図 H-77号住居址・H-78号住居址実測図

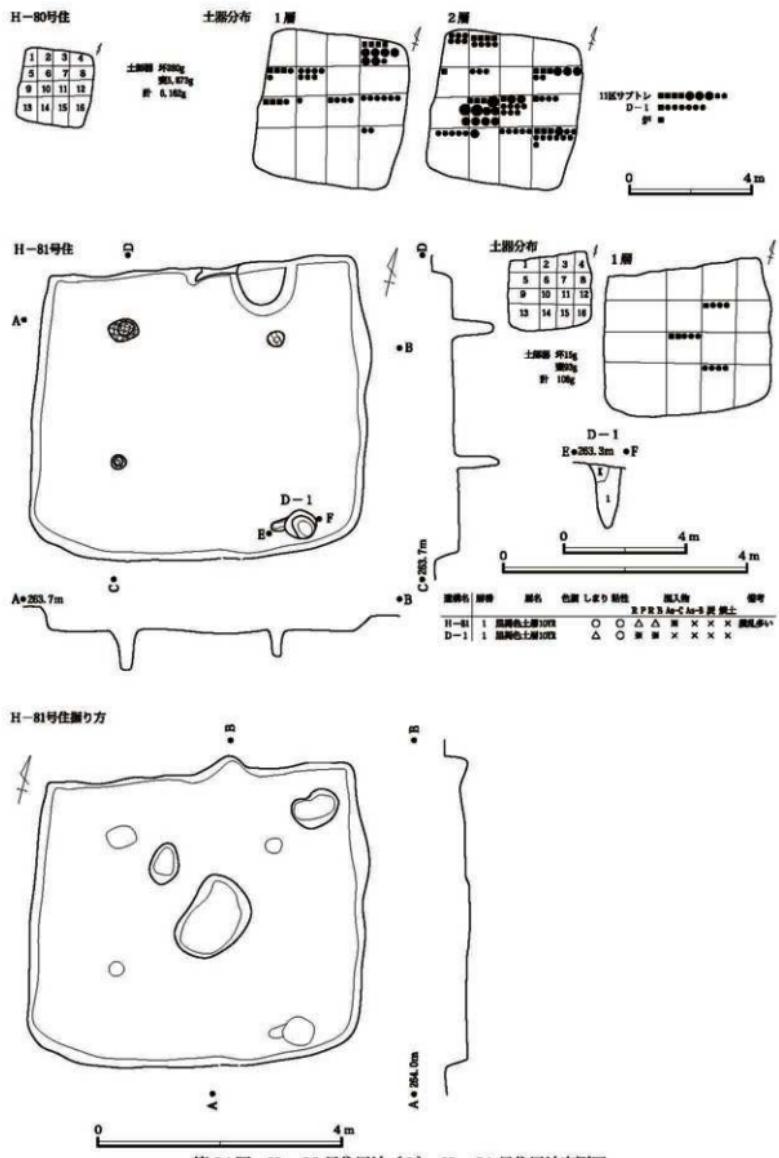


第32図 H-79号住居址(1)実測図

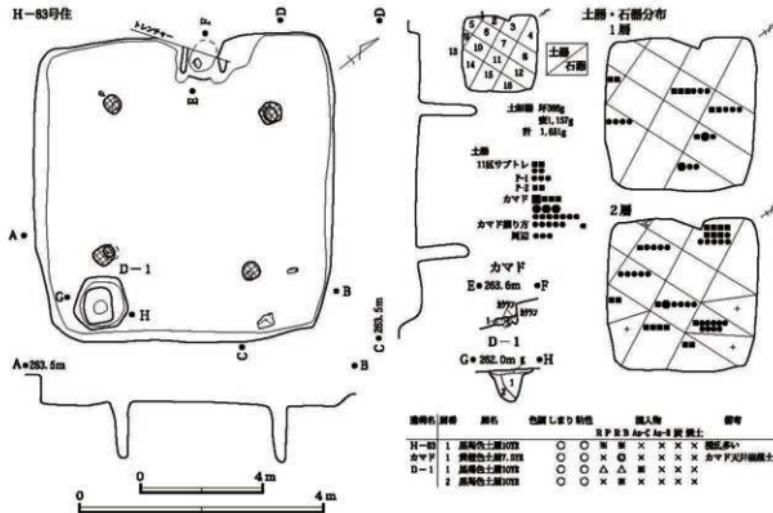
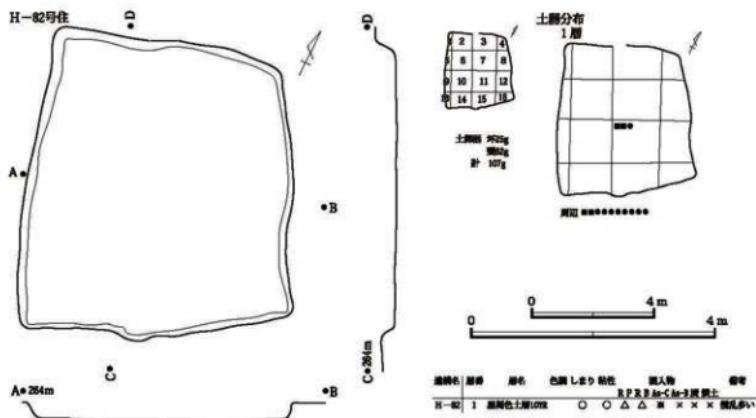
H-79号住居址方



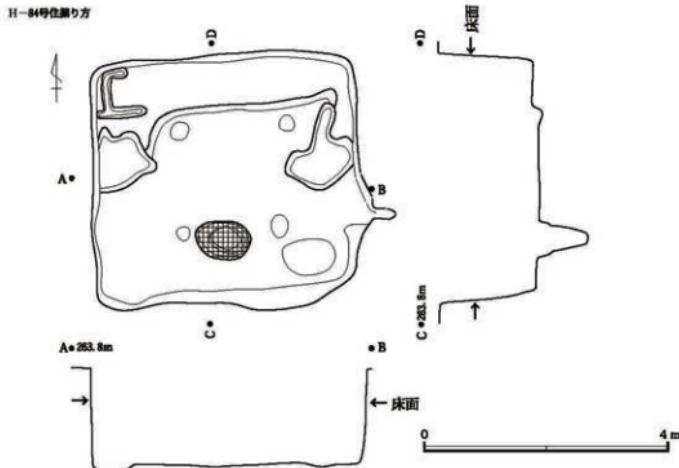
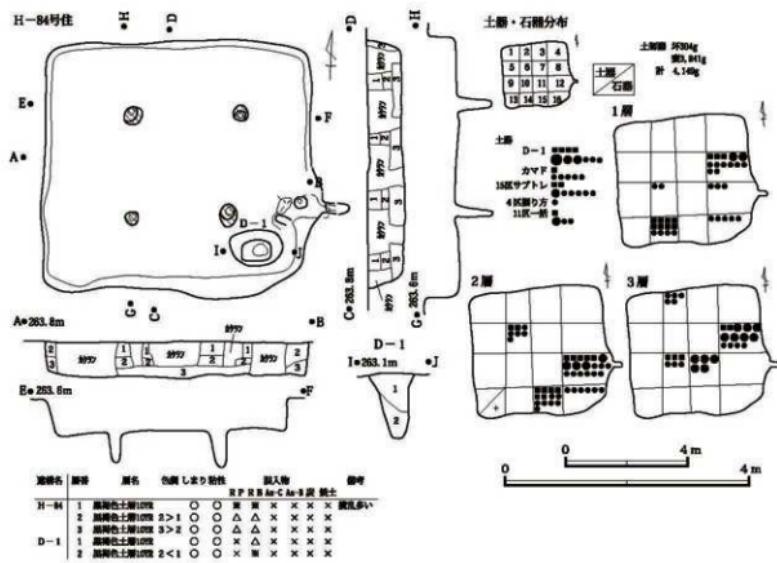
第33図 H-79号住居址(2)・H-80号住居址(1)実測図



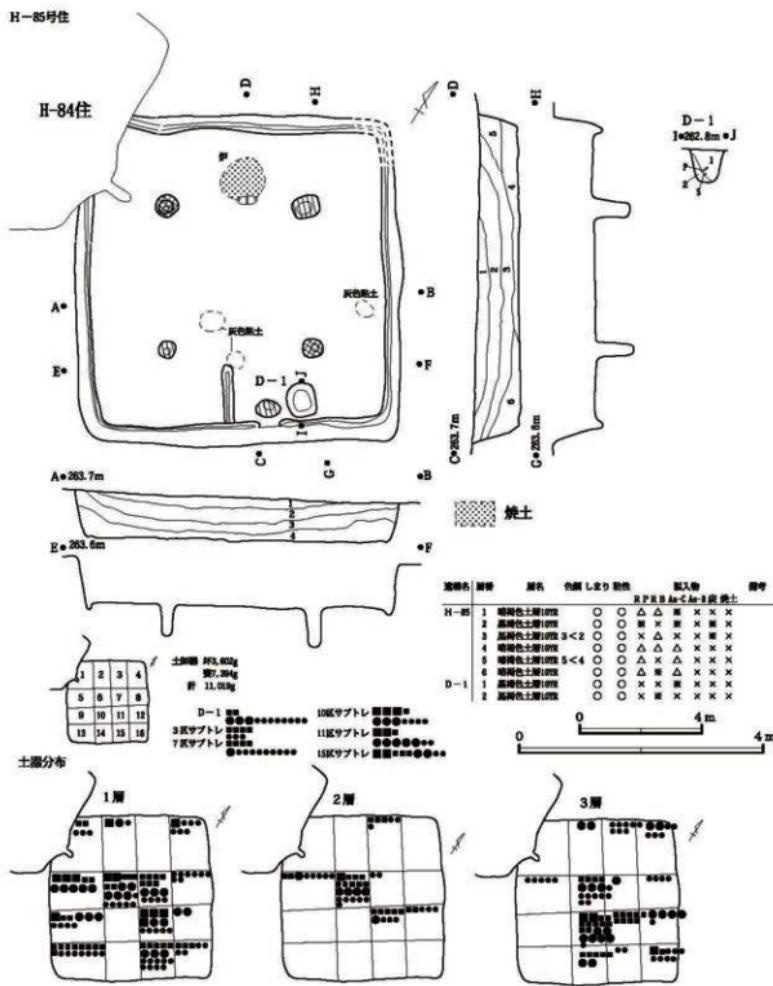
第34図 H-80号住居址(2)・H-81号住居址実測図



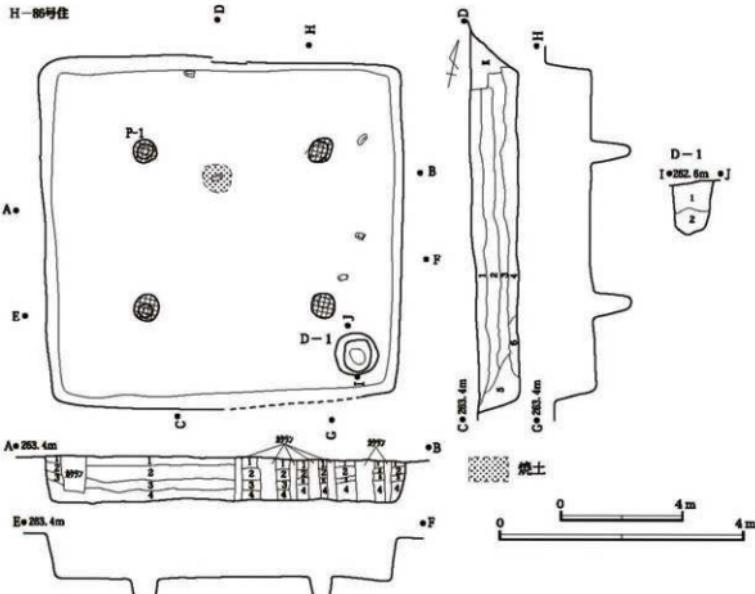
第35図 H-82号住居址・H-83号住居址実測図



第36図 H-84号住居址実測図



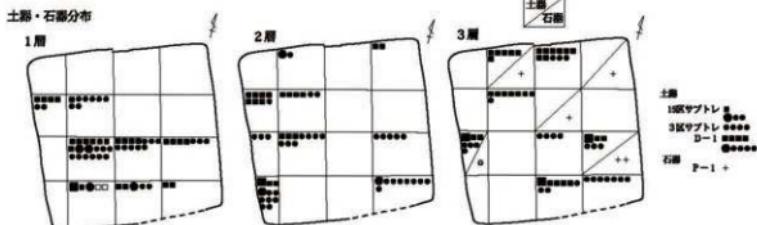
第37図 H-85号住居址実測図



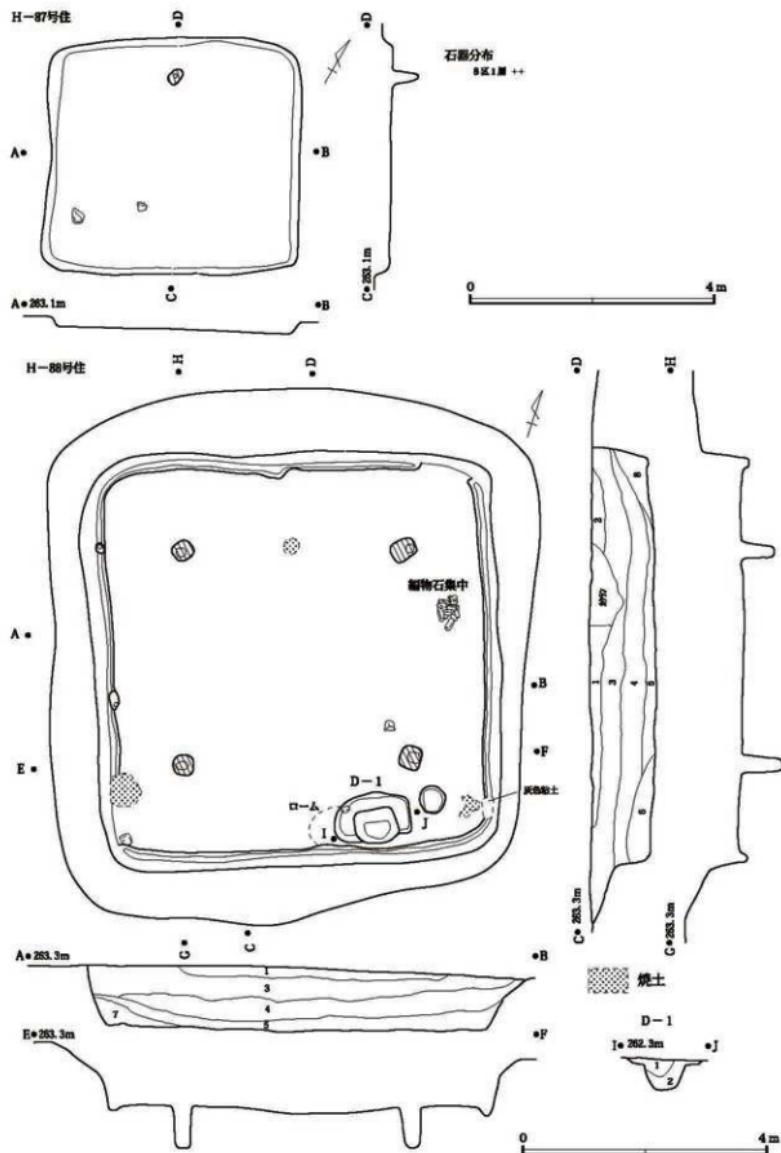
測定名	層名	色調	しまり	形状	測定	目入数	備考
H-86	1 高周波土層	○	○	×	P E R	△ × ×	
	2 鉛鉱化土層	2>1	○	△	△ ×	△ × ×	
	3 鉛鉱化土層	2<1	○	△	△ ×	△ × ×	
	4 鉛鉱化土層	4>3	○	△	△ ×	△ × ×	
	5 鉛鉱化土層	5>4	○	○	△ ×	△ × ×	
	6 鉛鉱化土層	5>7.5	○	○	△ ×	△ × ×	
D-1	1 鉛鉱化土層	5>4	○	○	× × ×	× × ×	鉛鉱化土
	2 非鉛鉱化土層	○	○	×	×	×	鉛鉱化土

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16

土塊
H.L. 16kg
W.L. 61kg
R 3.03%



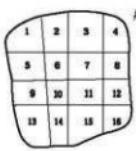
第38図 H-86号住居址実測図



第39図 H-87号住居址・H-88号住居址(1)実測図

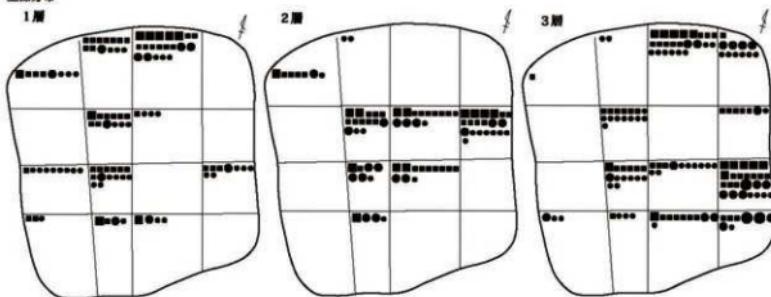
H-88号住

層位名	層番	層名	色調	しまりり物性	腐泥物	目録
H-88	1	黒褐色土層	102	X	△ X X X O X X	R P X 3 Arc-Cla-E 無土
	2	黒褐色土層	102 2 < 1	O	○ ■ X X X ■ X X	
	3	黒褐色土層	102 3 > 2	O	○ ○ △ X △ X X X	
	4	黒褐色土層	102 4 < 3	O	○ ○ △ X △ X X X	
	5	黒褐色土層	102 5 > 4	O	○ ○ X △ X X X X X	
	6	黒褐色土層	102 6 > 5	O	○ ○ X △ X X X X X	
	7	黒褐色土層	102 7 > 6	O	○ ○ X △ X X X X X	
	8	黒褐色土層	102 8 > 7	O	○ ○ X △ X X X X X	
D-1	1	黒褐色土層	102	O	○ ○ X △ X X X X X	
	2	黒褐色土層	102 2 > 1	O	○ ○ △ X X X X X X	

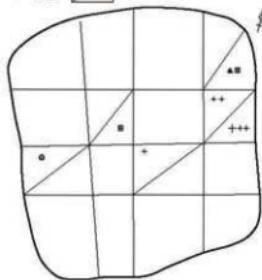


土重総 364.30kg
容積 10.323m³
計 35.33kg

土器分布



石器分布
1・3層

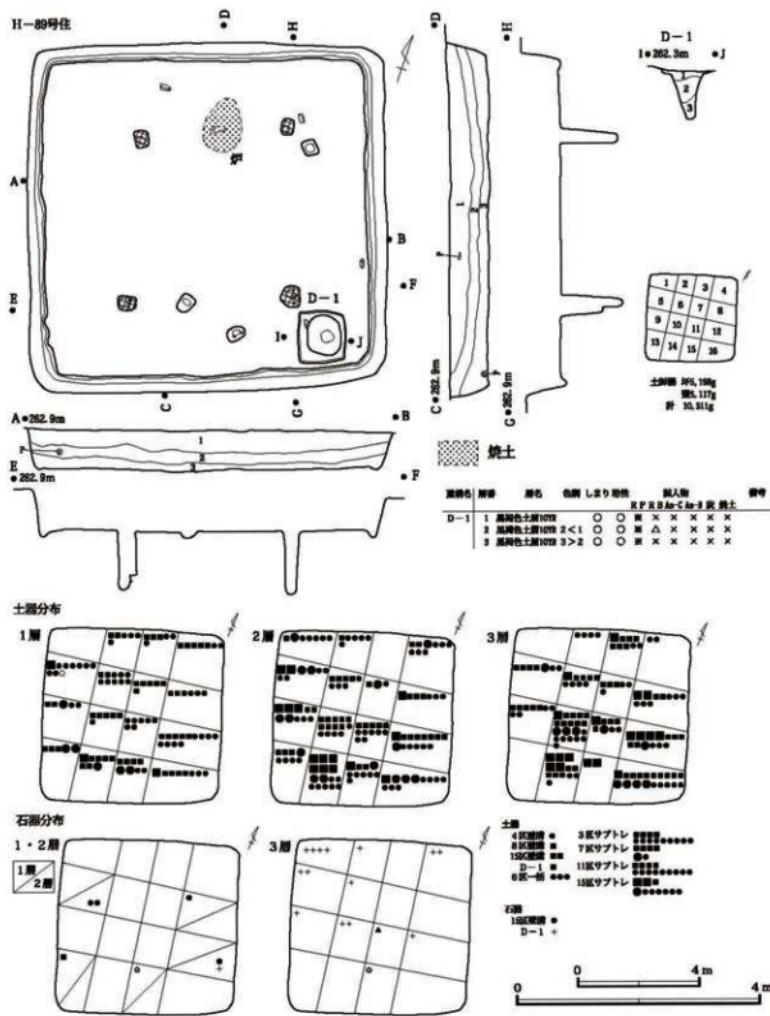


土器
3区サブレ ●
1区サブレ ━━
100mm □
140mm □
1KmBn ⬤
D-1 ⬤●
柱柱 (16-40) ━━

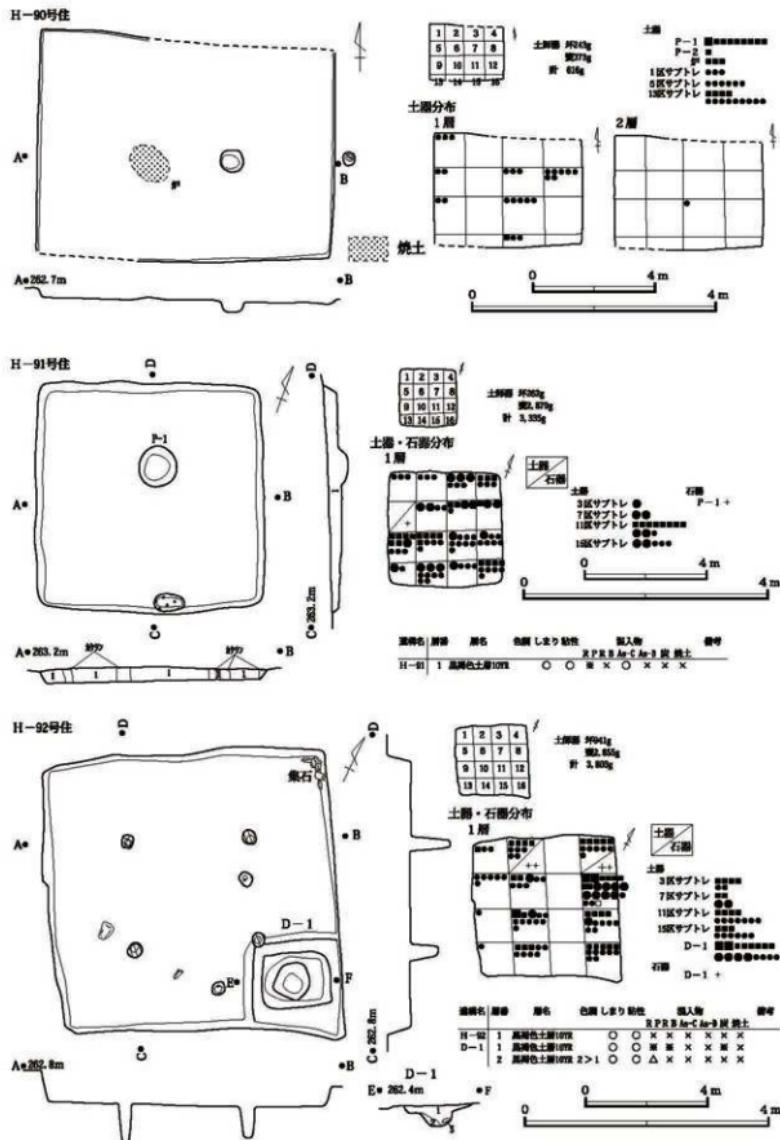
石器 D-1 ◊



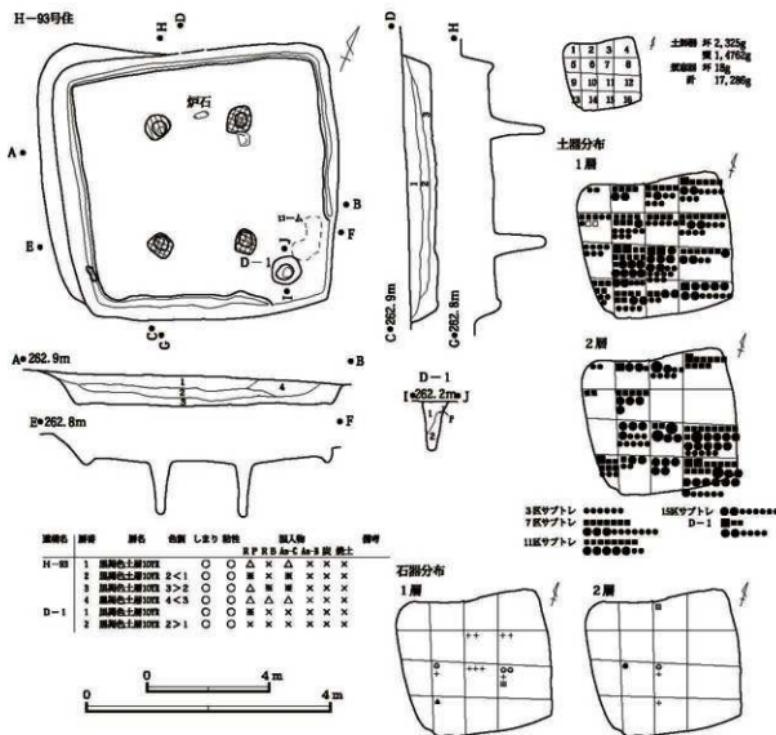
第40図 H-88号住居址(2)実測図



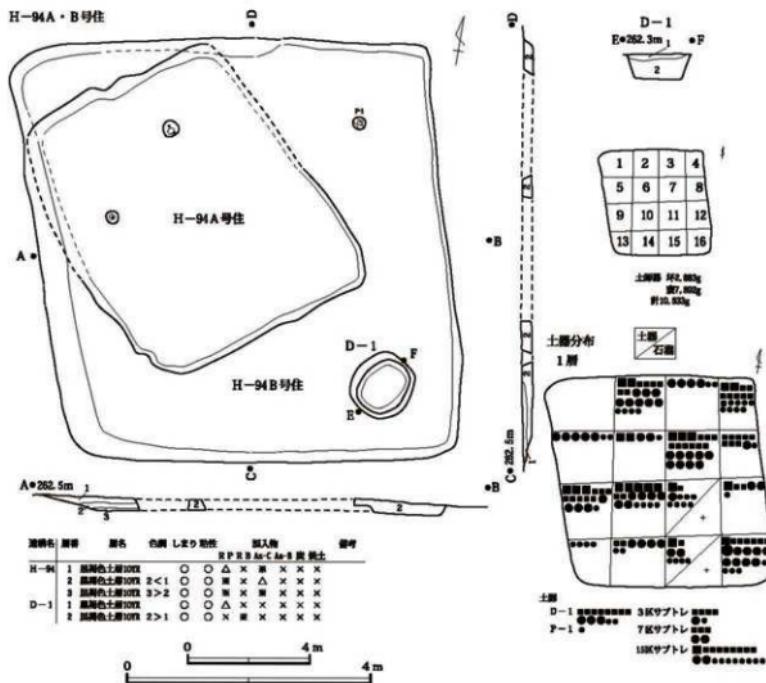
第41図 H-89号住址実測図



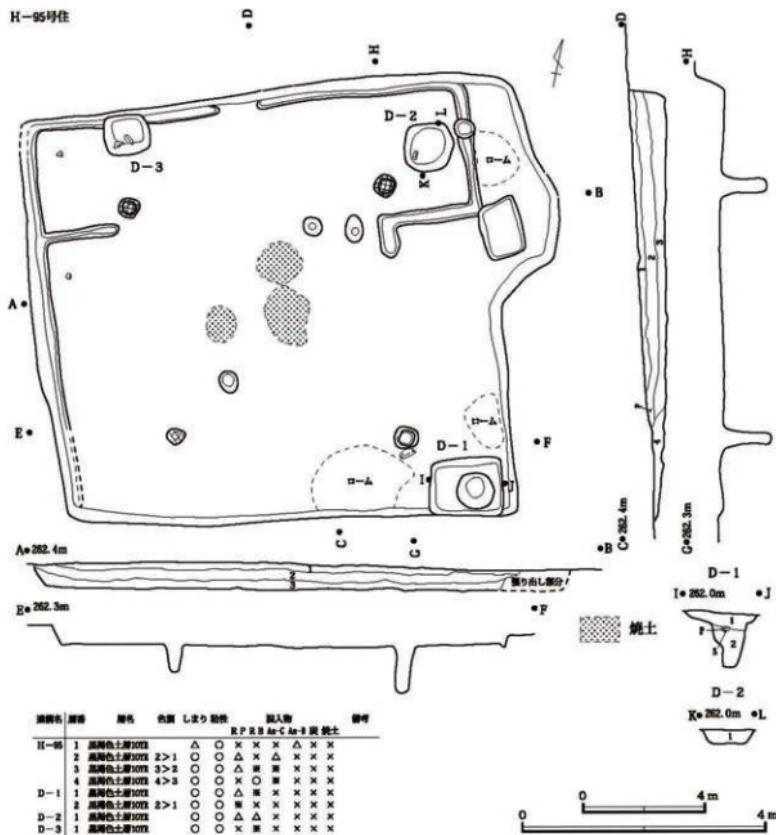
第42図 H-90号住居址・H-91号住居址・H-92号住居址実測図



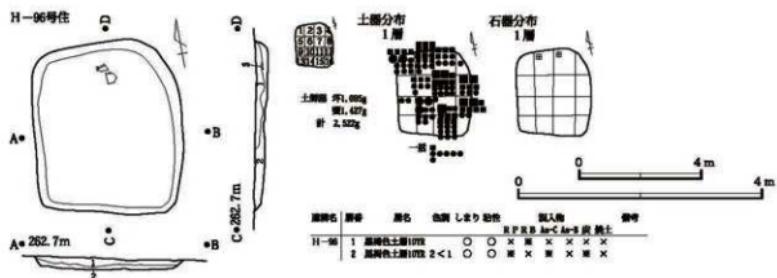
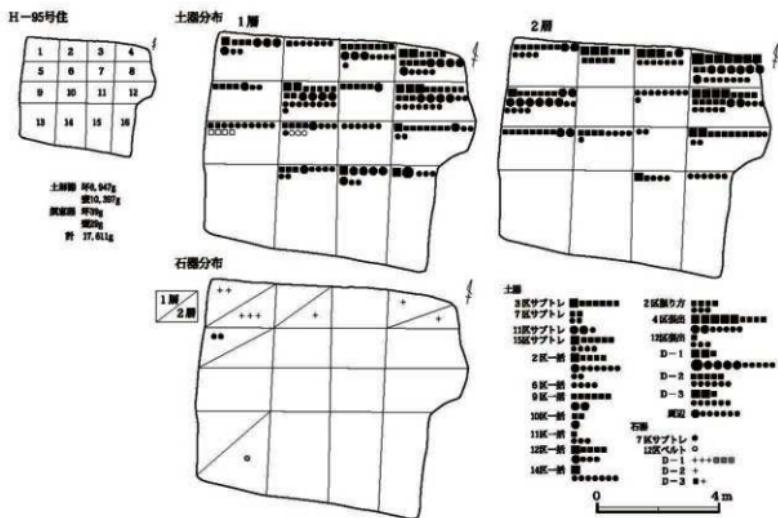
第43図 H-93号住居址実測図



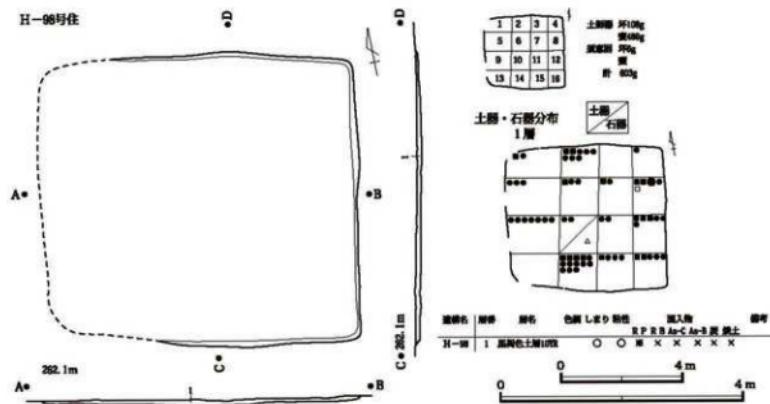
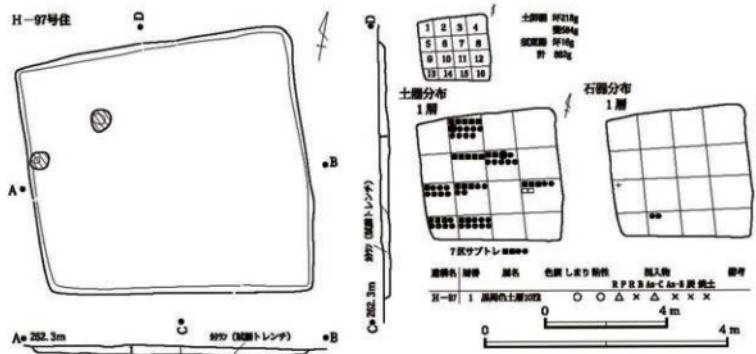
第44図 H-94 A・B号住居址実図



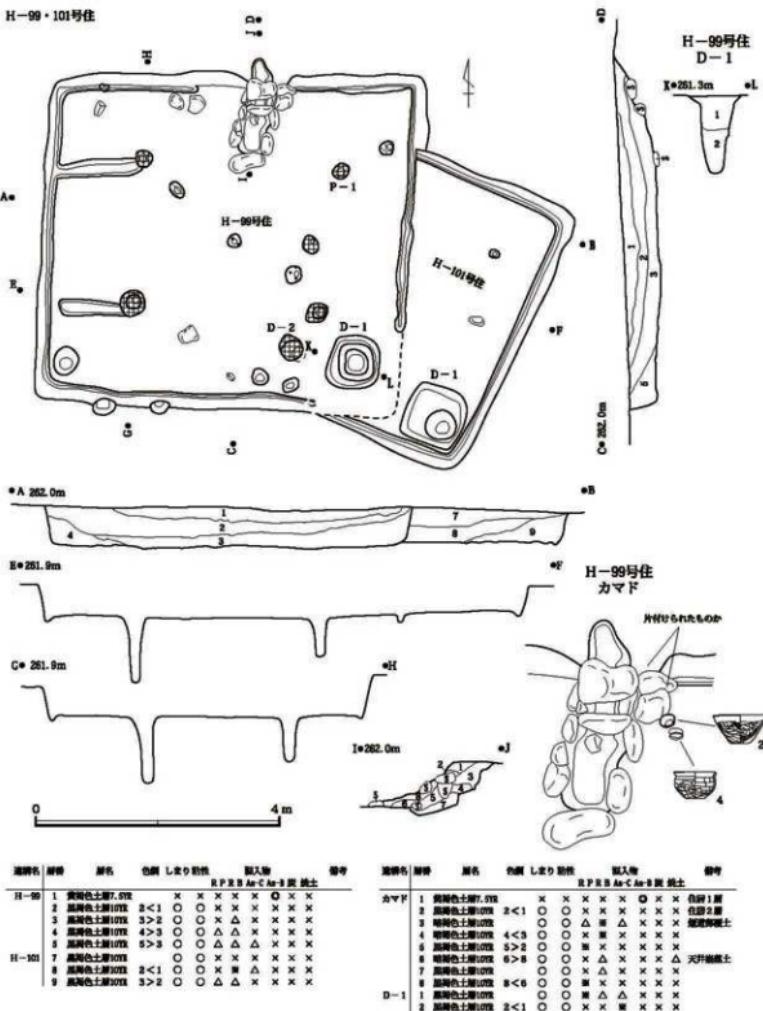
第45図 H-95号住居址(1)実測図



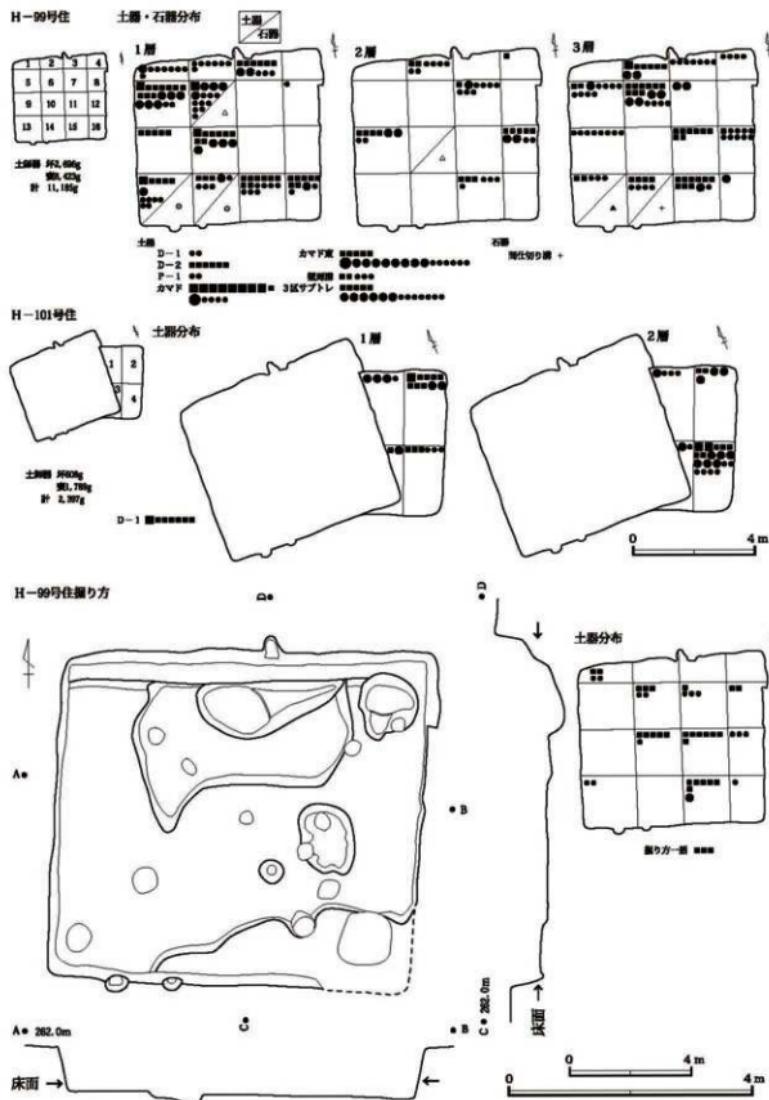
第46図 H-95号住居址(2)・H-96号住居址実測図



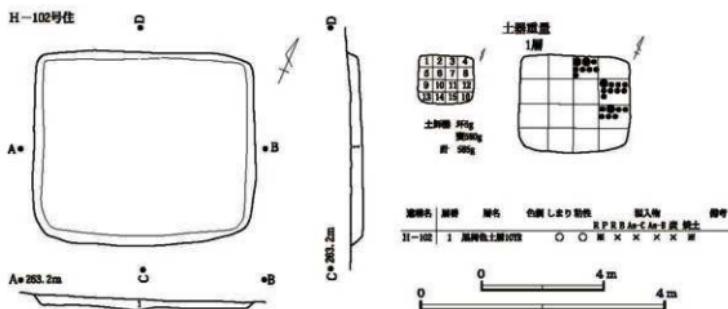
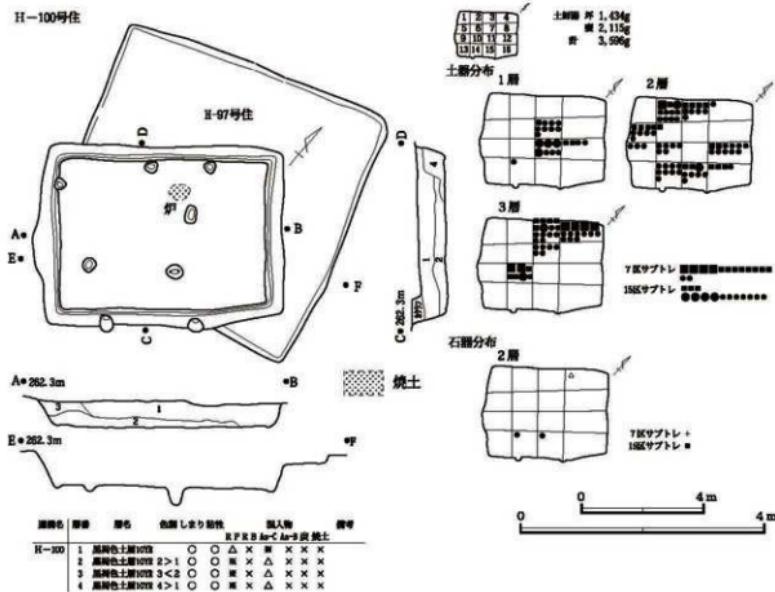
第47図 H-97号住居址・H-98号住居址実測図



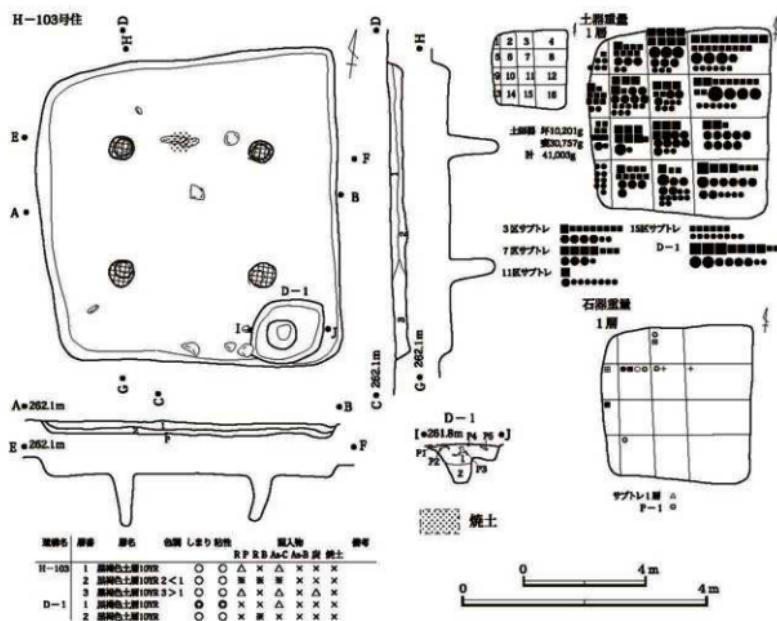
第48図 H-99・101号住居址(1)実測図



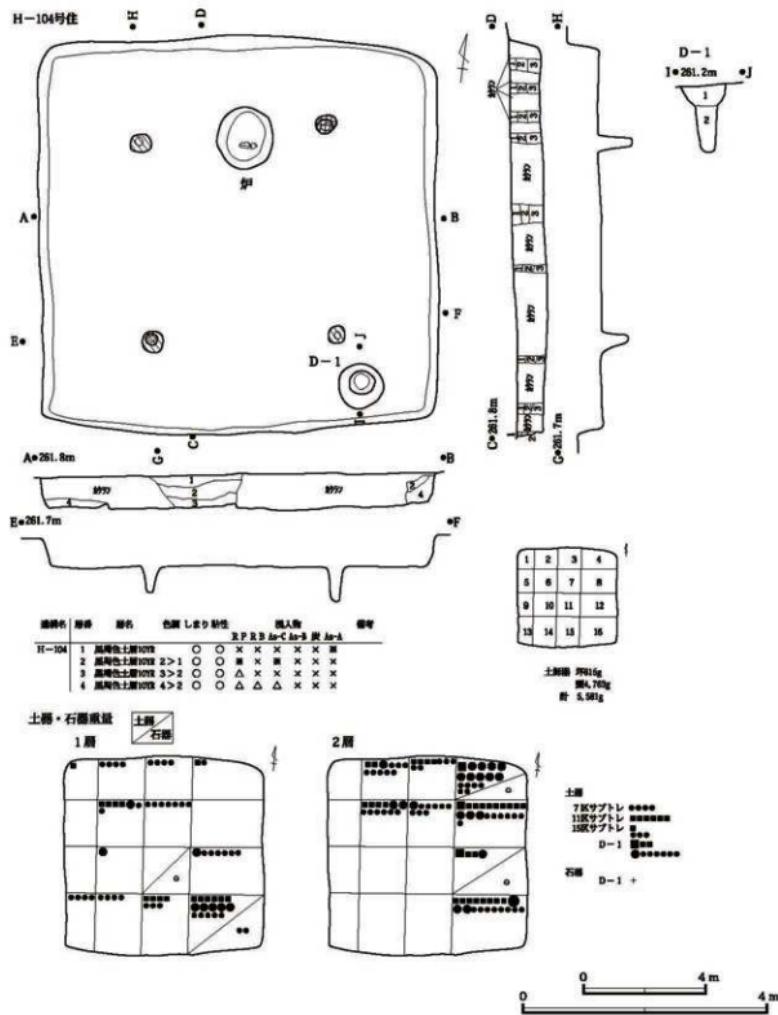
第49図 H-99・101号住居址(2)実測図



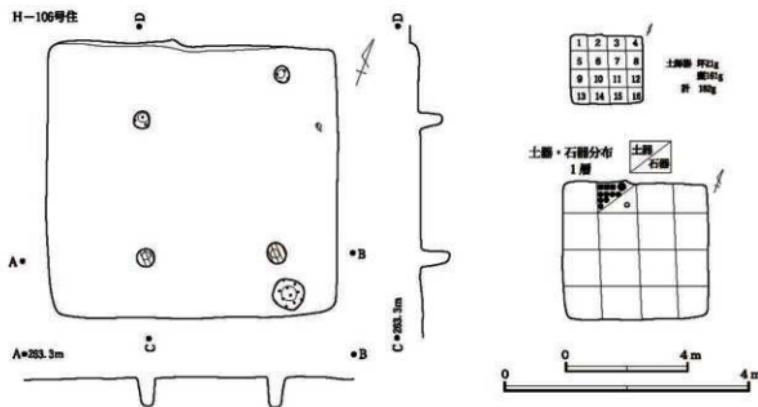
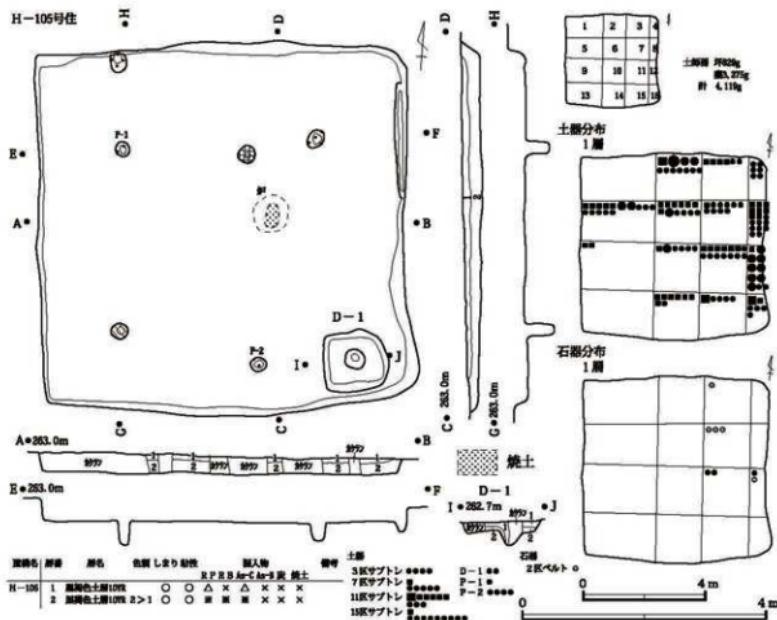
第 50 図 H-100 号住居址・H-102 号住居址実測図



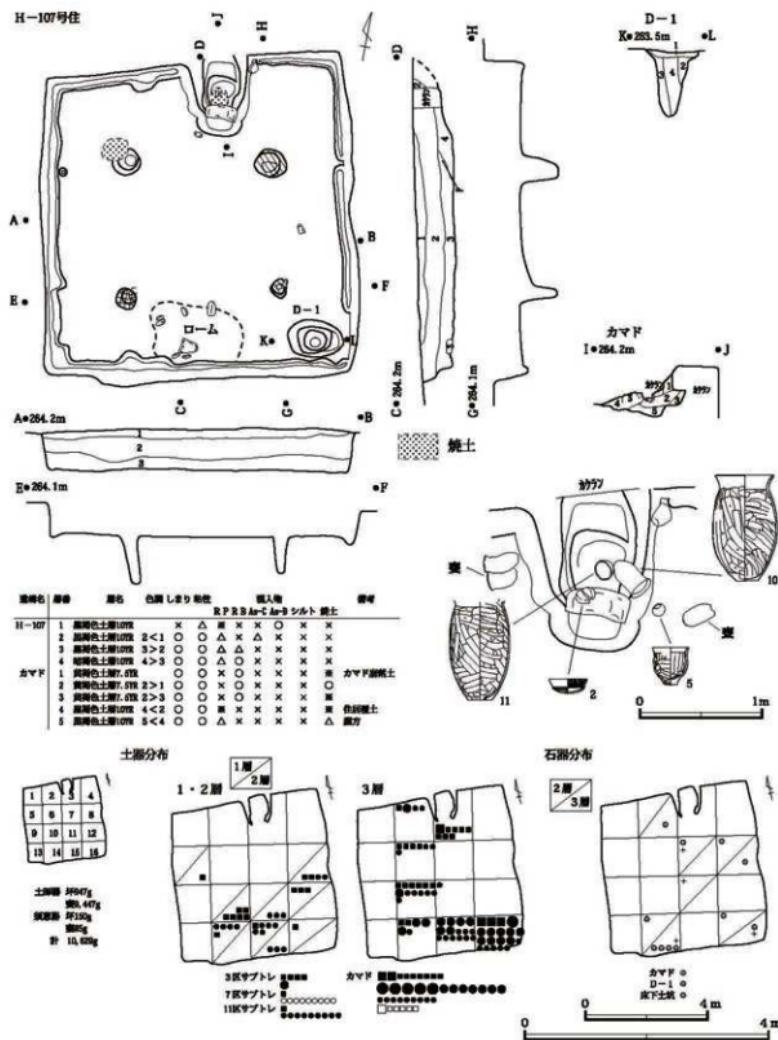
第51図 H-103号住居址実測図



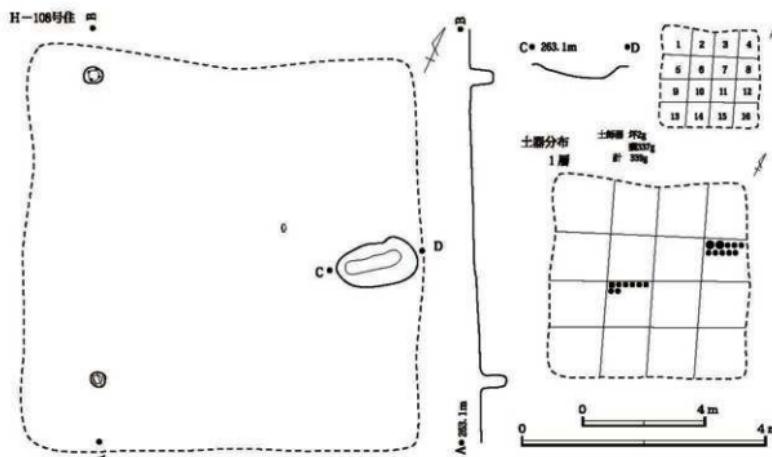
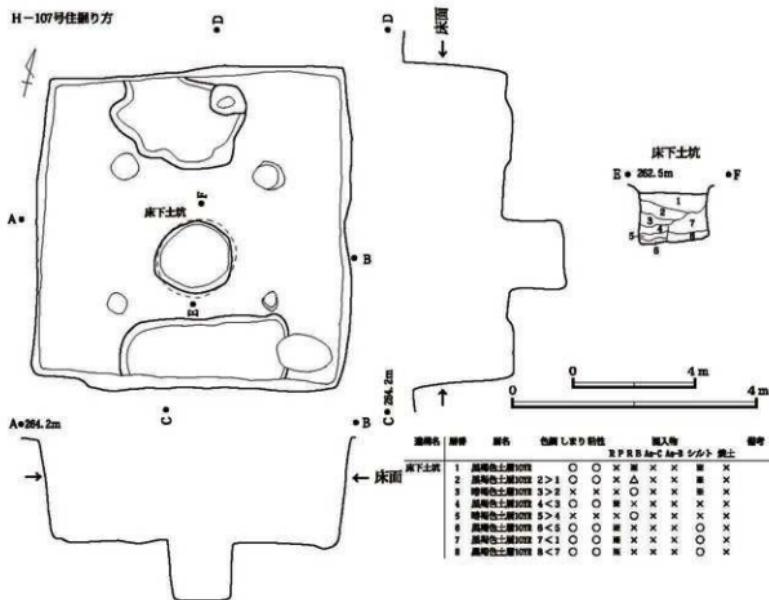
第 52 図 H-104 号住居址実測図



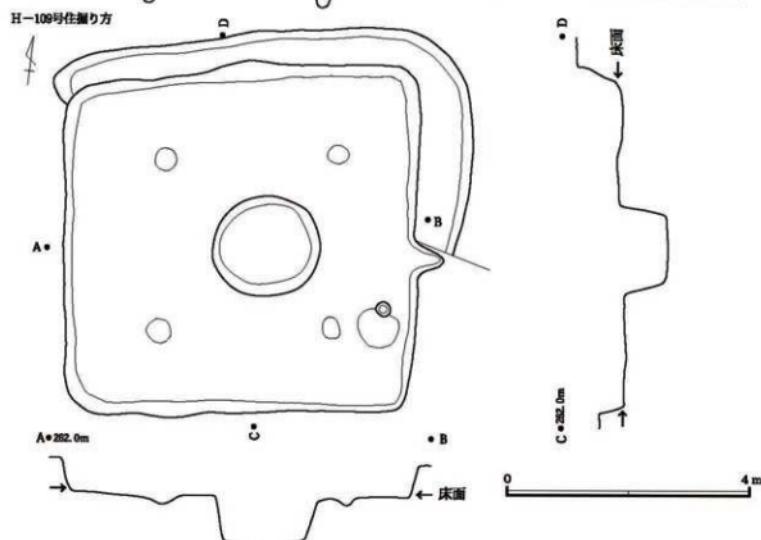
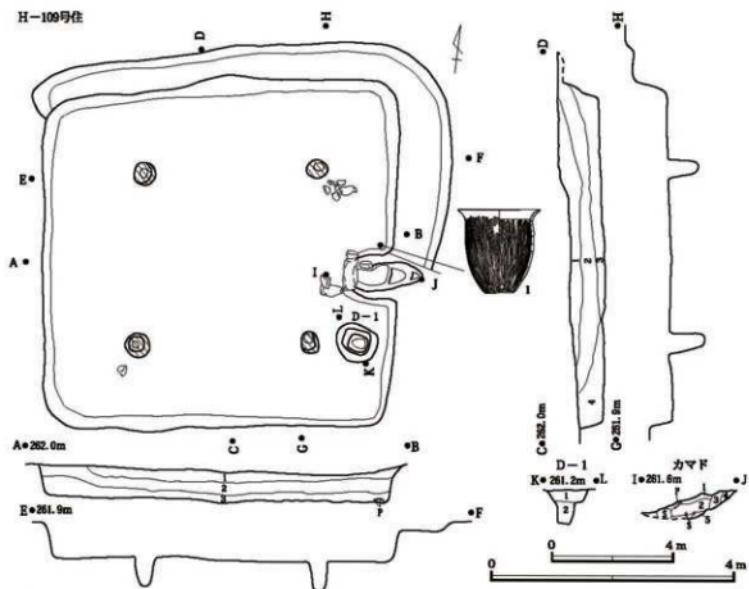
第53図 H-105号住居址・H-106号住居址実測図



第54図 H-107号住居址(1)実測図

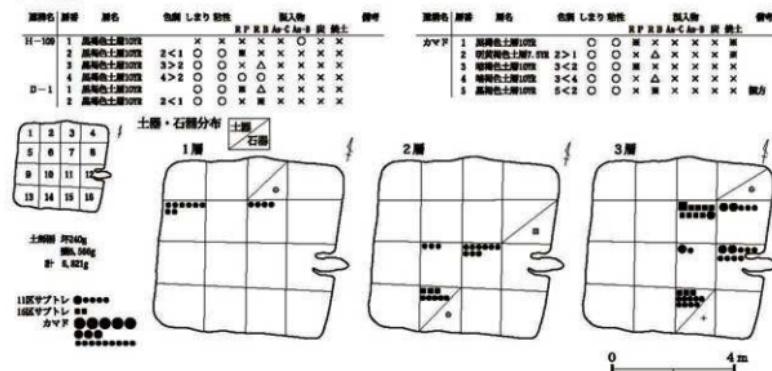


第55図 H-107号住居址(2)・H-108号住居址実測図

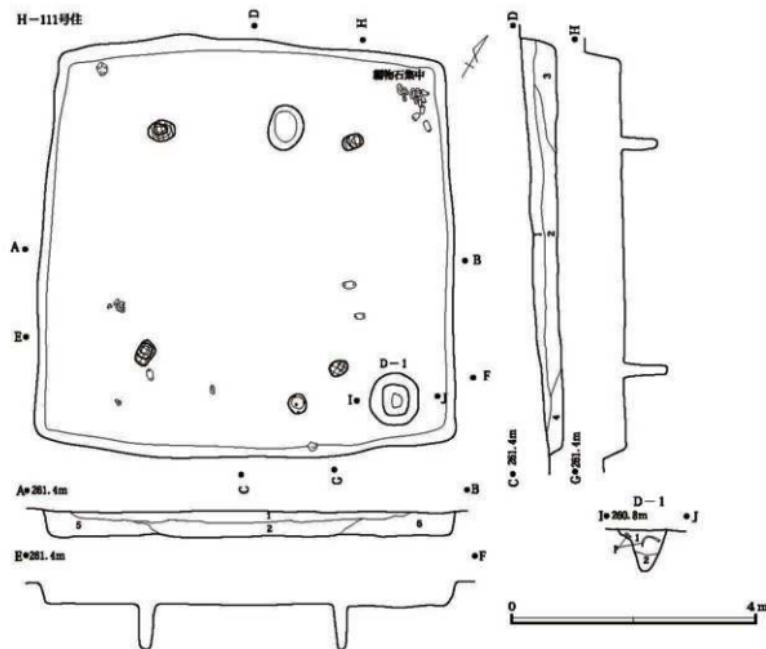


第56図 H-109号住居址実測図

H-109号住



H-111号住



第57図 H-109号住居址・H-111号住居址(1)実測図

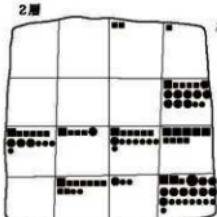
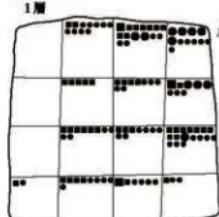
H-111号住

測定名	層番	層名	色調	しまり	粒性	固有物	R P R B A n-C A n-S	鉄	銅	土	標号
H-111	1	黒褐色土質1078	○ ○	■	△	▲	△	△	×	×	
	2	黒褐色土質1078 2>1	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	×	×	×	
	3	黒褐色土質1078 3>1	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	×	×	×	
	4	黒褐色土質1078 4>1	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	×	×	×	
	5	黒褐色土質1078 5>1	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	×	×	×	
	6	黒褐色土質1078 6>1	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	×	×	×	
D-1	1	黒褐色土質1078	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	×	×	×	
	2	黒褐色土質1078 2<1	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	×	×	×	

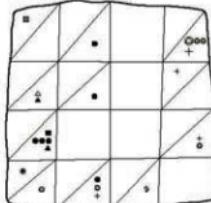
1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16

土総量 kg 2,847
石総量 kg 0,751
計 kg 3,798

土層分布

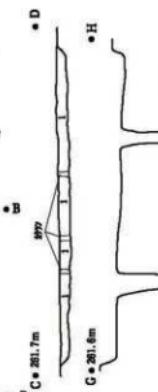
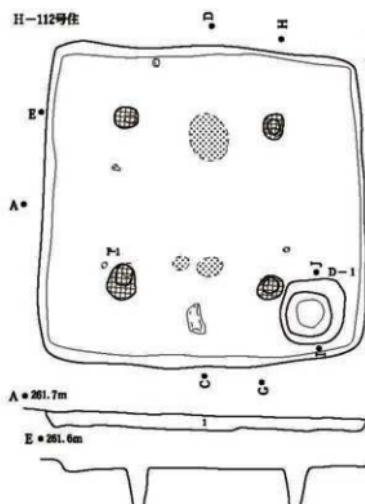


石層分布
1・2層



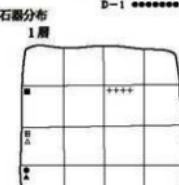
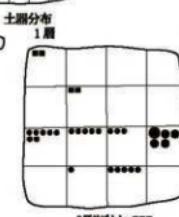
16区サブトレ ■
D-1 □ 0 4 m

H-112号住



1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16

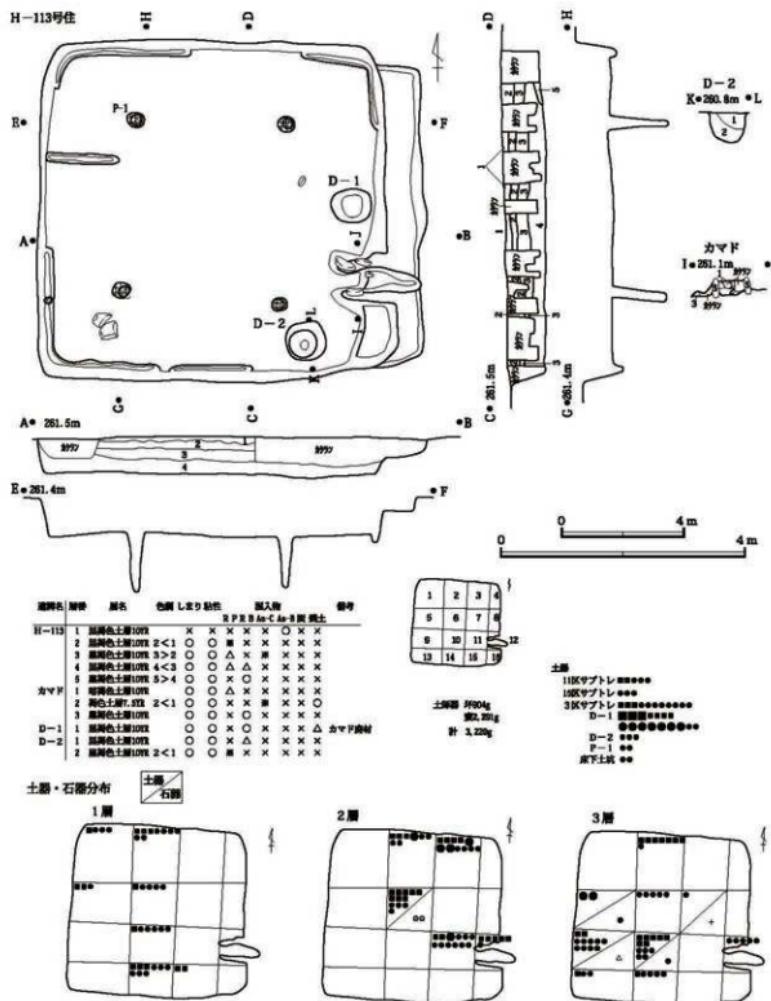
土総量 kg 402
石総量 kg 0,005
計 kg 402,005



0 4 m 4 m

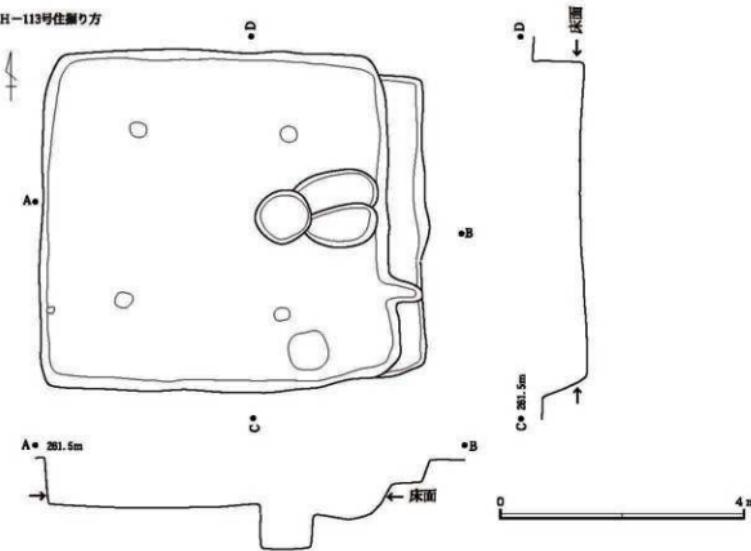
測定名	層番	層名	色調	しまり	粒性	固有物	R P R B A n-C A n-S	鉄	銅	土	標号
H-112	1	黒褐色土質1078	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	△ △	×	×	
	1	黒褐色土質1078	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	△ △	×	×	
D-1	2	黒褐色土質1078 2<1	○ ○	○ ○	△ △	▲ ▲	△ △	△ △	×	×	

第 58 図 H-111号住居址(2)・H-112号住居址実測図

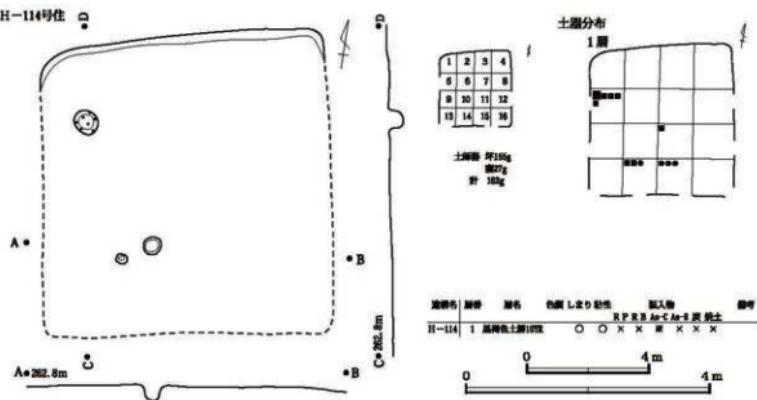


第59図 H-113号住居址(1)実測図

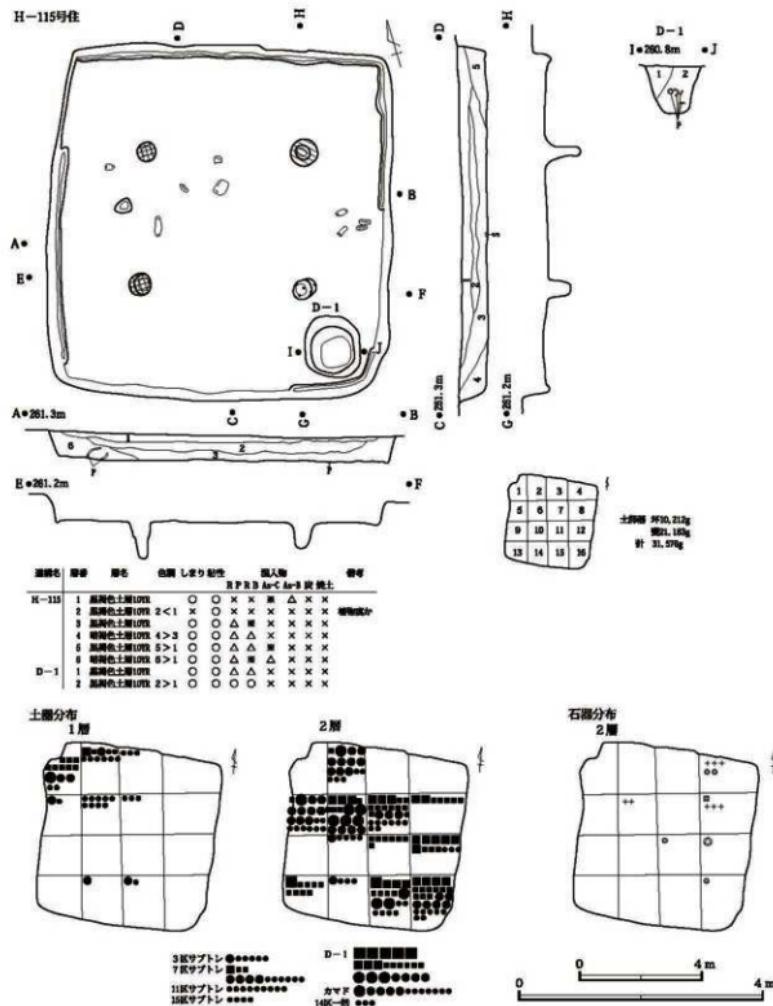
H-113号住居方



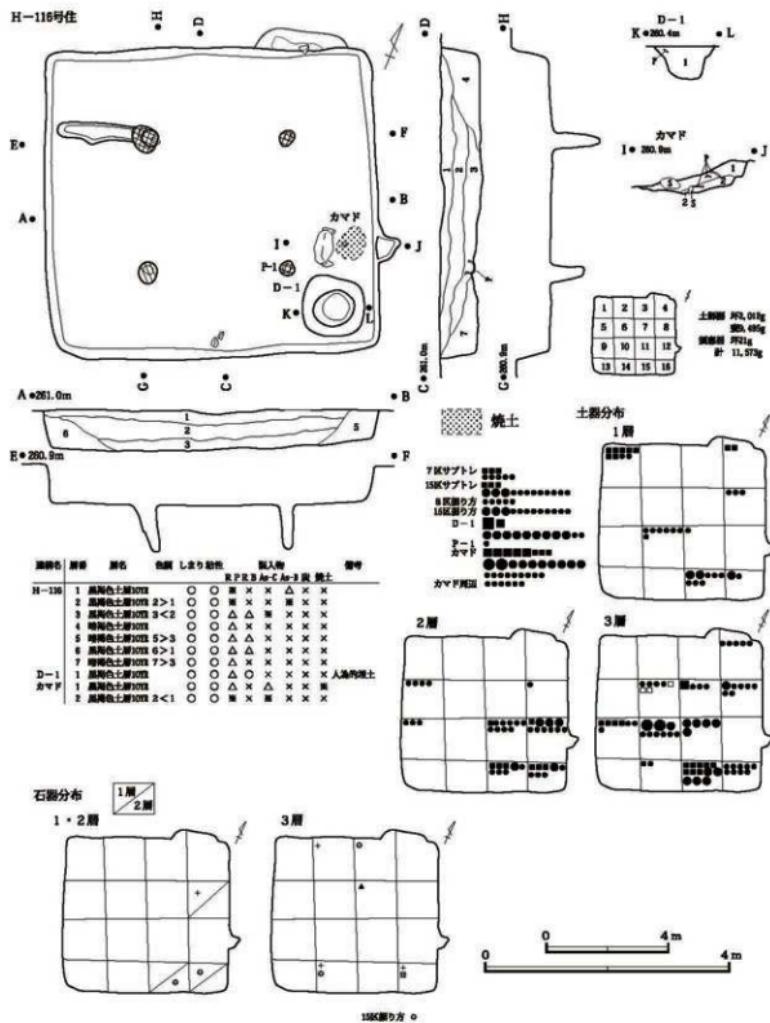
H-114号住



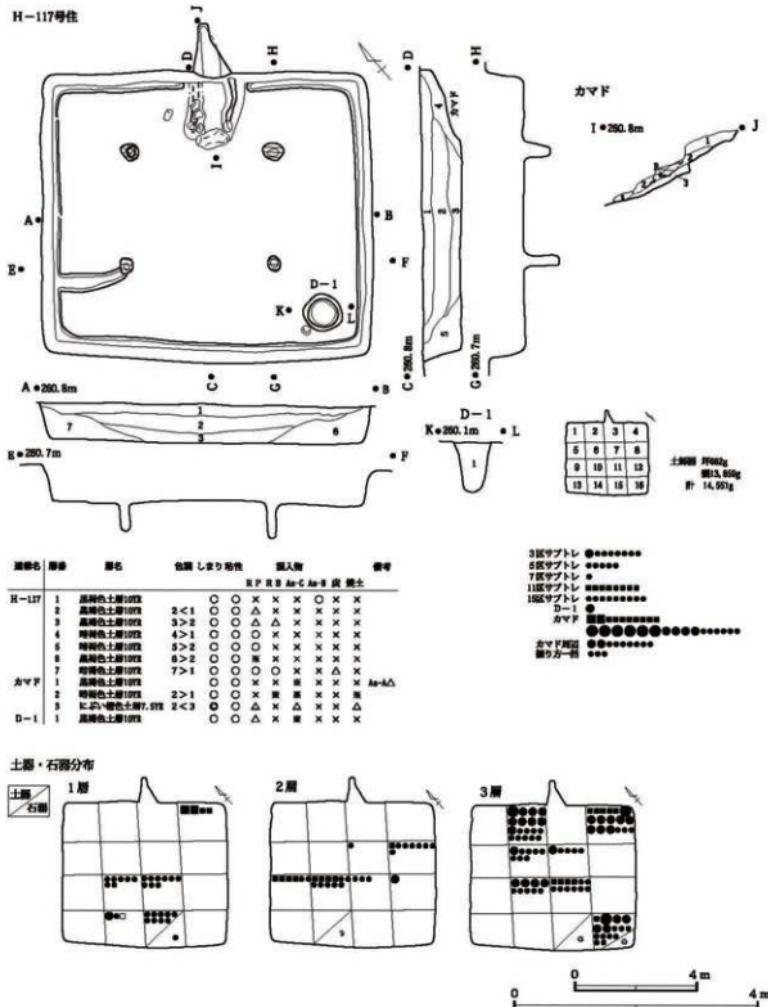
第60図 H-113号住居址(2)・H-114号住居址実測図



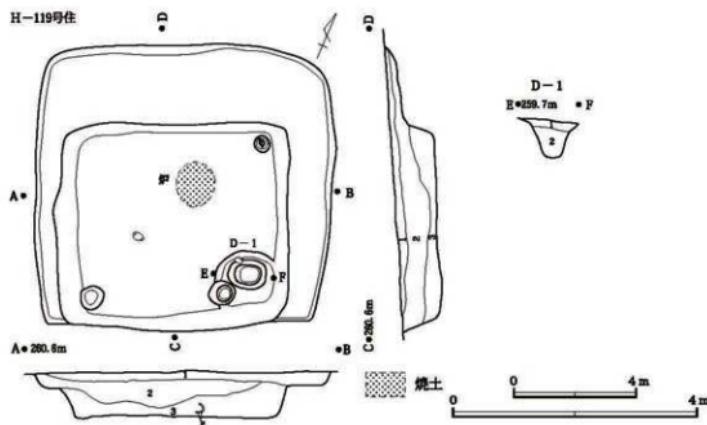
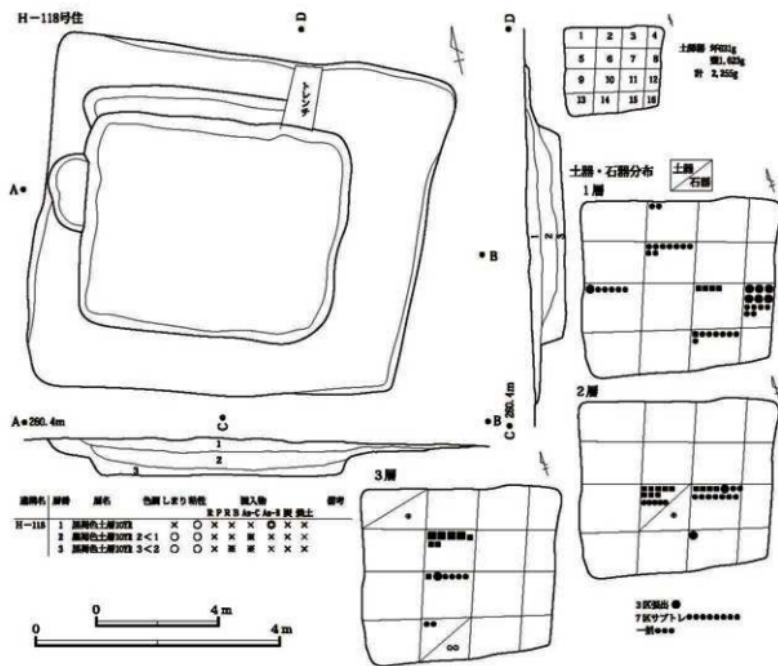
第61図 H-115号居住址実測図



第62図 H-116号住居址実測図



第63図 H-117号居址実測図



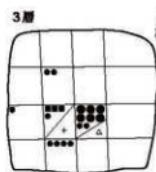
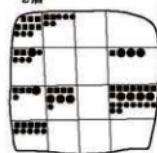
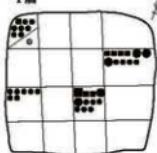
第64図 H-118号住居址・H-119号住居址(1)実測図

H-119号住

遺物名	層番	層名	色調	しまり	粒径	測入物	備考
H-119	1	黒褐色土層	○	○	X	△ X X	鉄土
	2	黒褐色土層	Z < 1	○	○	△ X X X X	
	3	黒褐色土層	3 > 2	○	○	△ X X X X X	
D-1	1	黒褐色土層	○	○	○	△ X X X X X X	白色粘土と砂質に水平に堆積
	2	黒褐色土層	Z < 1	○	○	△ X X X X X X	



土器・石器分布 1層

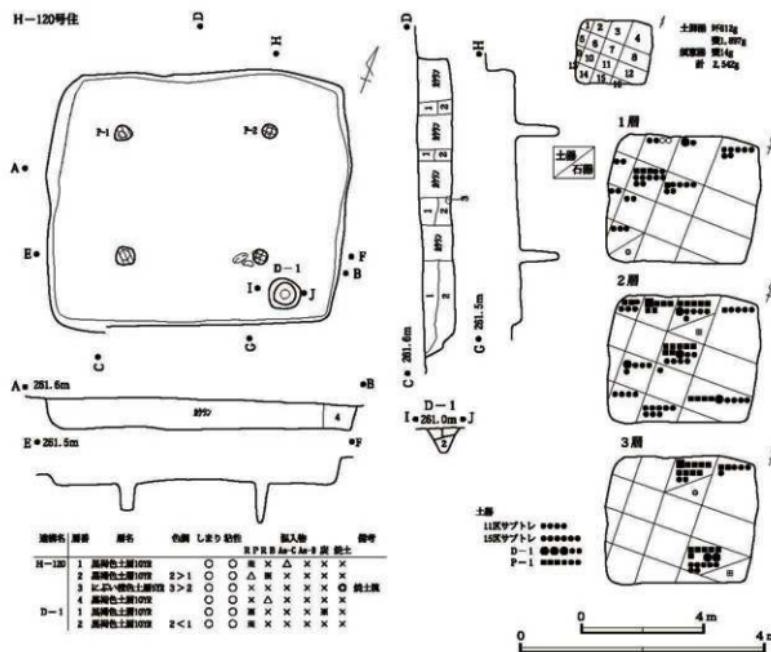


土器 3,087g
石器 3,087g
計 3,087g

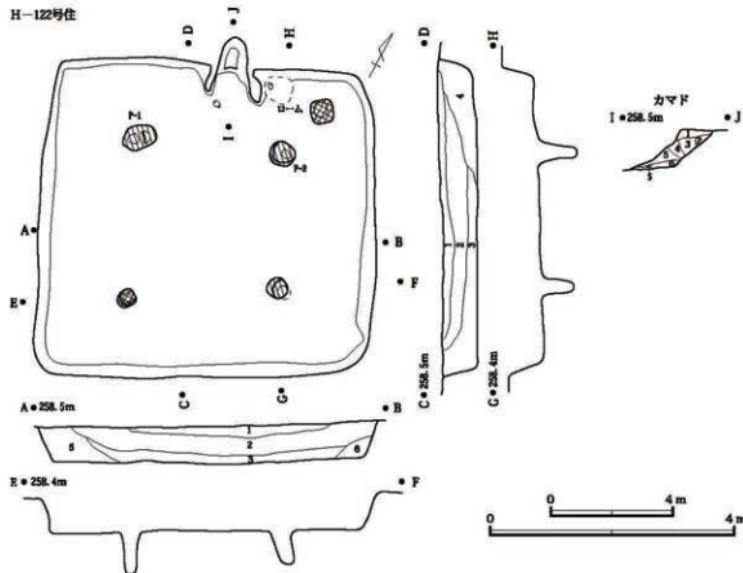
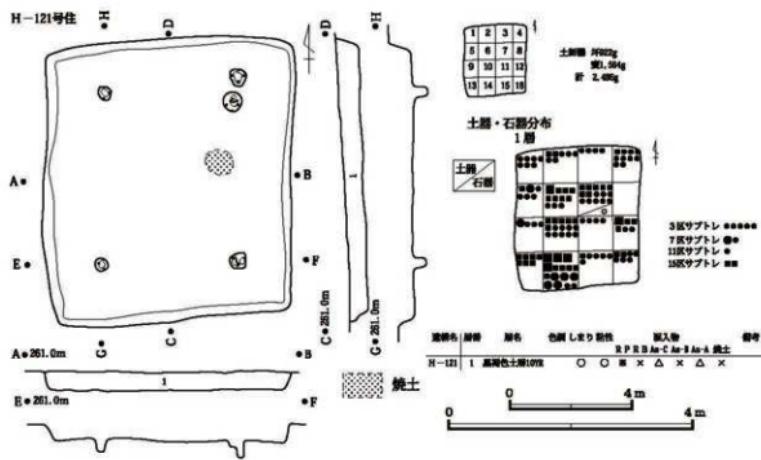
7区サブトレ *****
15区サブトレ *****
D-1 *****
P-1 ***

0 4m

H-120号住



第65図 H-119号住居址(2)・H-120号住居址実測図



第66図 H-121号住居址・H-122号住居址(1)実測図

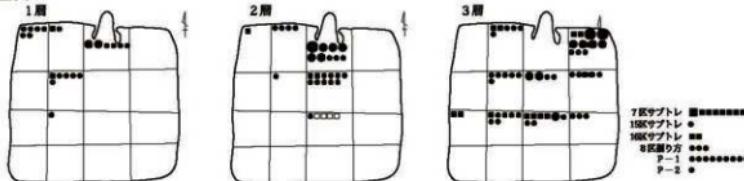
H-122号住

遺跡名	層番	層名	色調	しまり粒性	測入物	備考	遺跡名	層番	層名	色調	しまり粒性	測入物	備考
H-122	1	黒褐色土層	077	△	△ × × × ○	× × × × ×	1	黒褐色土層	077	○	○ × × × × ×	× × × × ×	
	2	黒褐色土層	077	2<1	○ ○ ■ ■ ■	× × × × ×	2	黒褐色土層	077	2<1	○ ○ ■ ■ ■	× × × × ×	天井樹根土
	3	黒褐色土層	077	3>2	○ ○ △ × ■	× × × × ×	3	黒褐色土層	077	3>1	○ ○ △ × ■	× × × × ×	天井樹根土上
	4	黒褐色土層	077	4>2	○ ○ △ ○ × ×	× × × × ×	4	中褐色土層	077	4>3	○ ○ △ ○ ×	× × × × ×	天井樹根土
	5	黒褐色土層	077	5>2	○ ○ ○ × × ×	× × × × ×	5	黒褐色土層	077	5>4	○ ○ ○ △ ×	× × × × ×	天井樹根土の範囲
	6	黒褐色土層	077	6>2	○ ○ △ △ × × ×	× × × × ×	6	黒褐色土層	077	6>5	○ ○ × × × ×	× × × × ×	天井樹根土の範囲

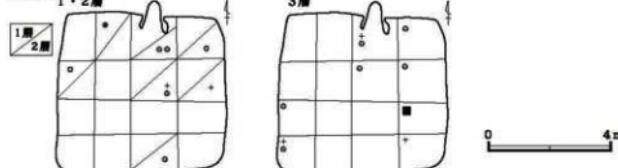


土壌部 3kg
石器部 3kg
付 5kg

土器分布

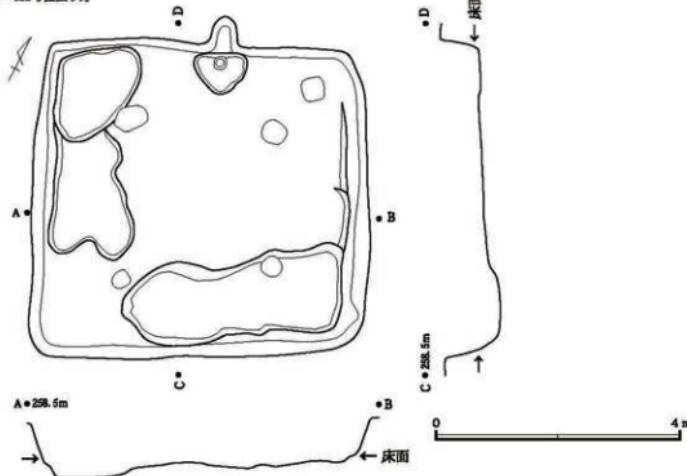


石器分布 1・2層

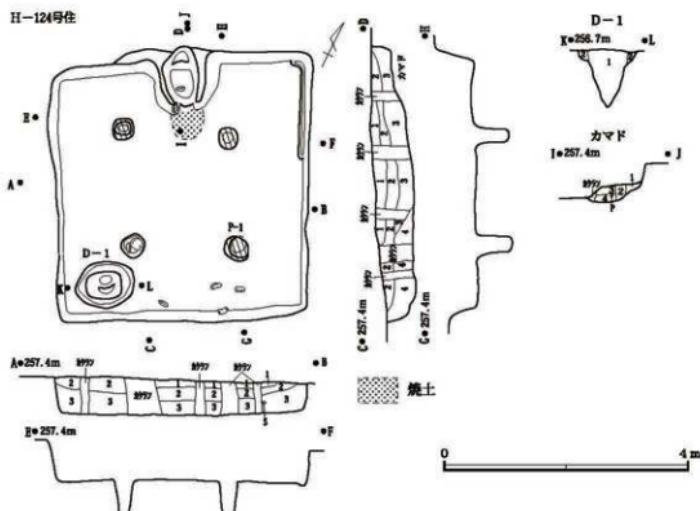
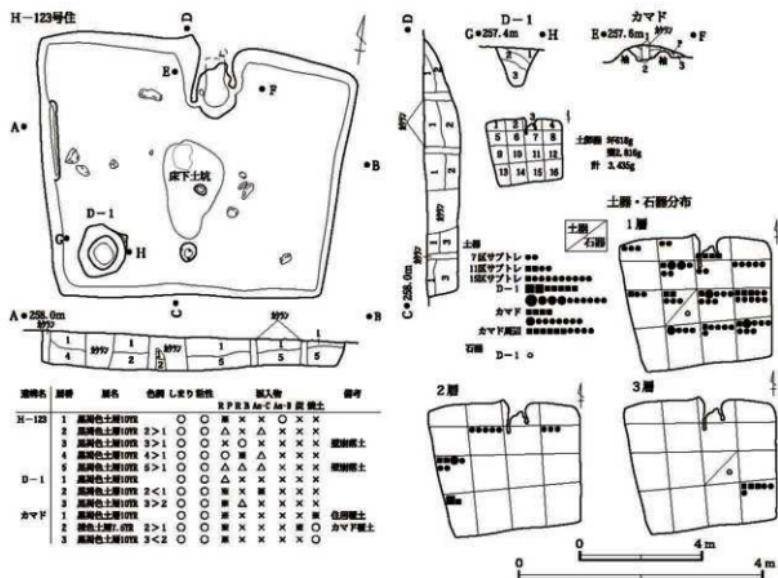


0 4m

H-122号住掘り方

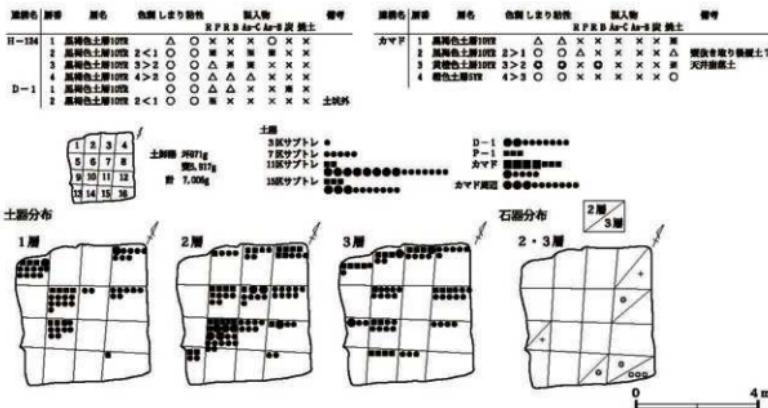


第67図 H-122号住居址(2)実測図

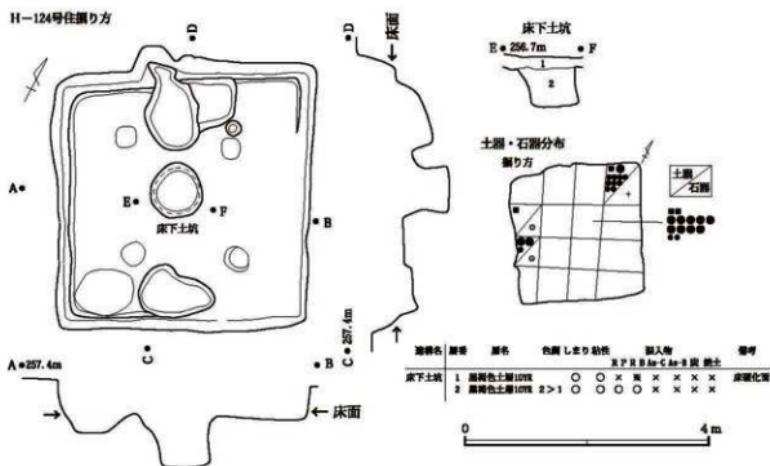


第68図 H-123号住居址・H-124号住居址(1)実測図

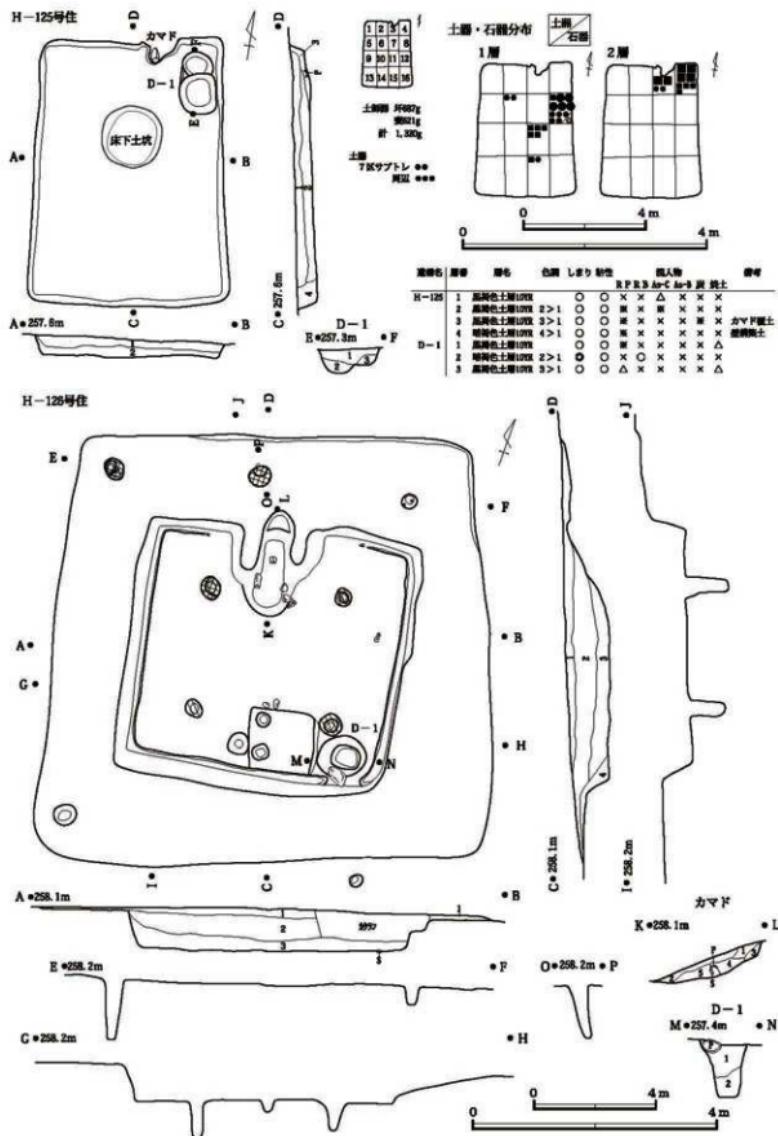
H-124号住



H-124号住掘り方

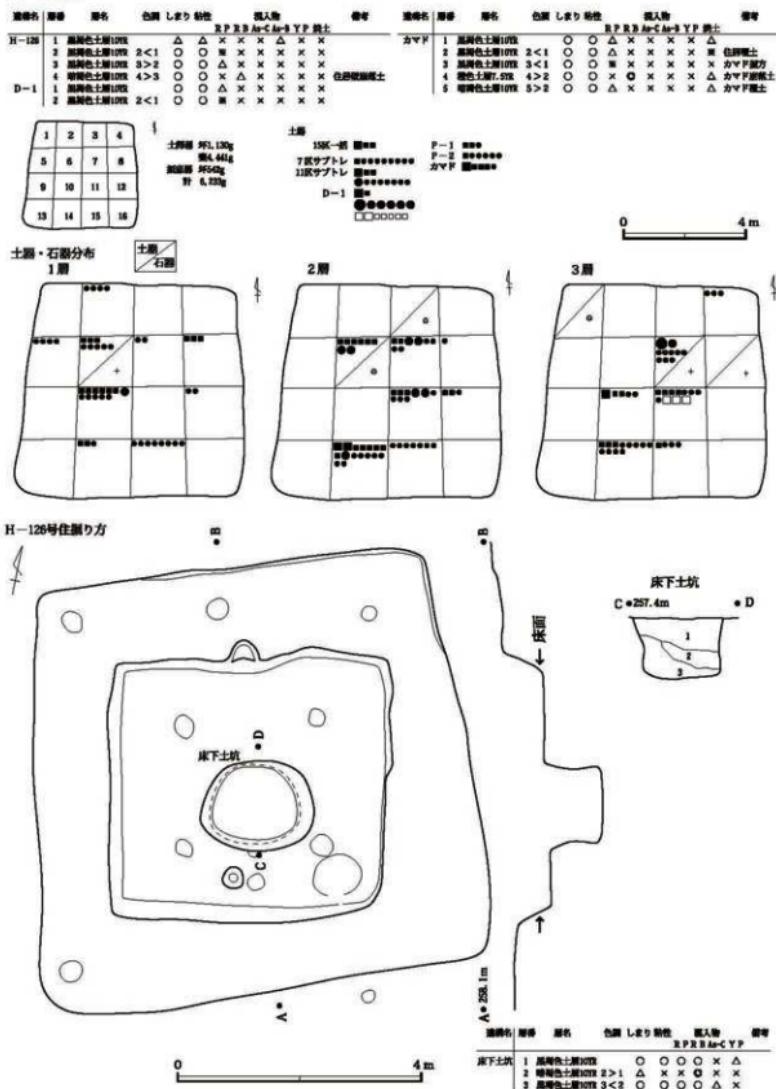


第69図 H-124号住居址(2)実測図

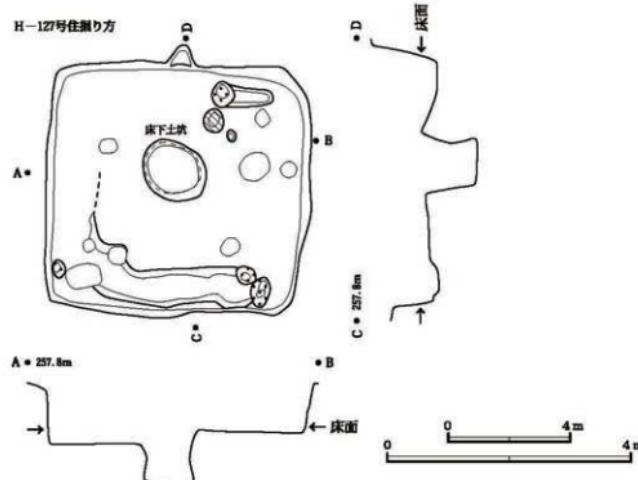
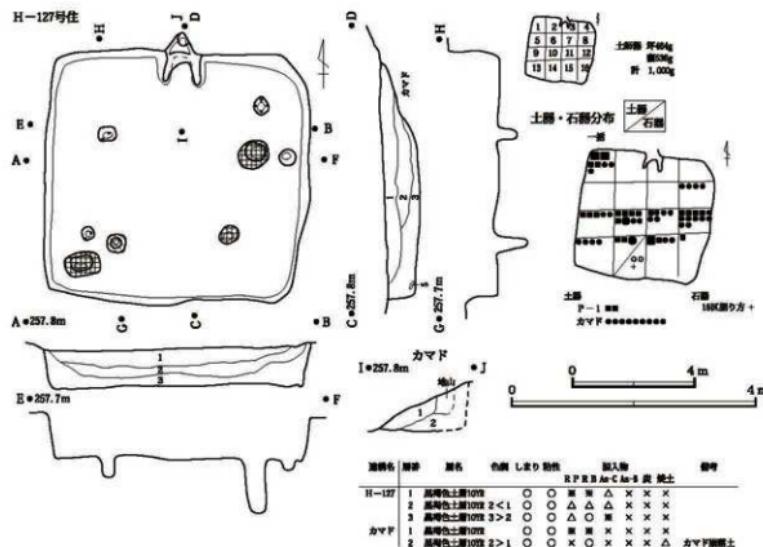


第70図 H-125号住居址・H-126号住居址(1)実測図

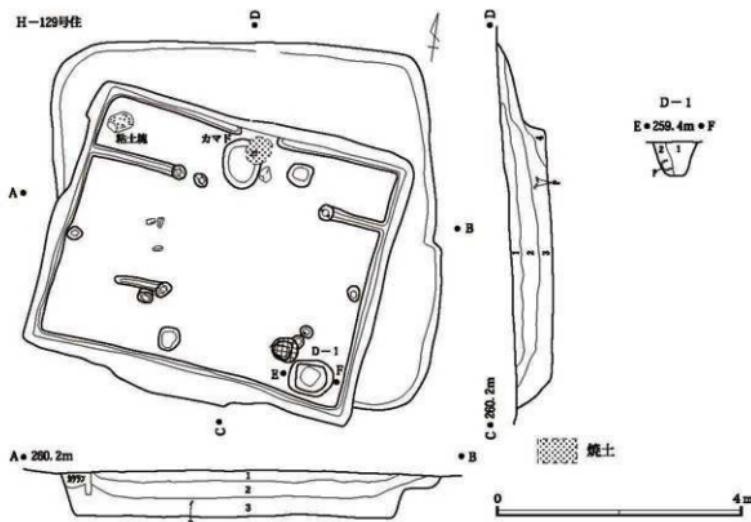
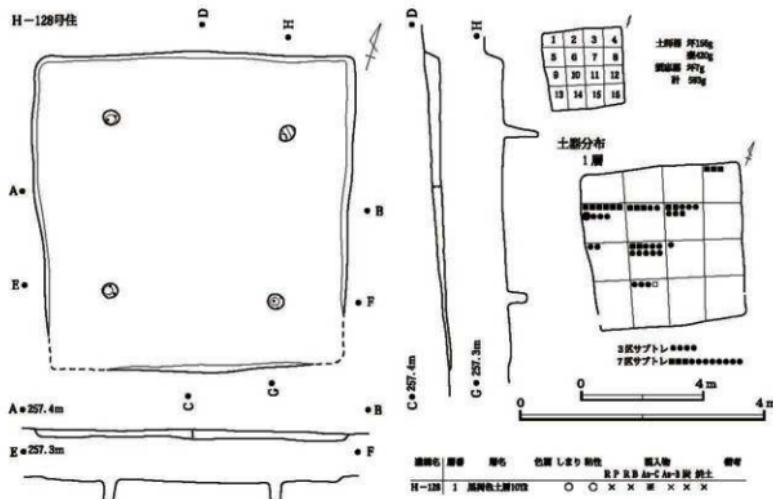
H-126号住



第71図 H-126号住居址(2)実測図

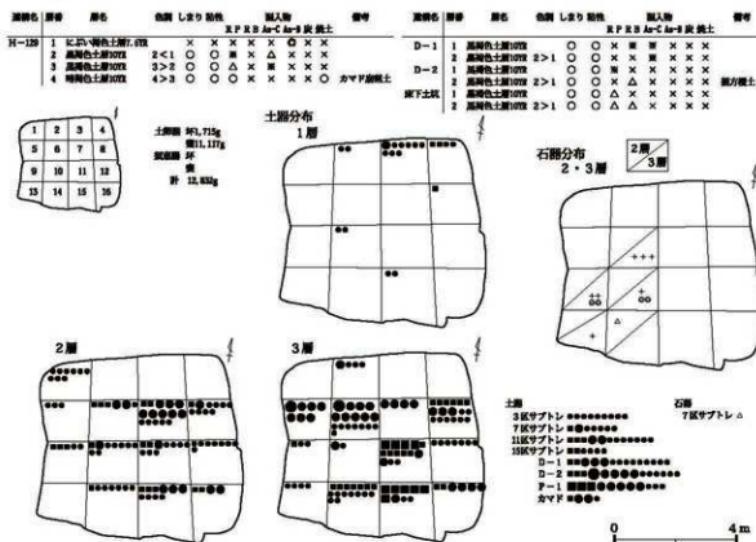


第72図 H-127号住居址実測図

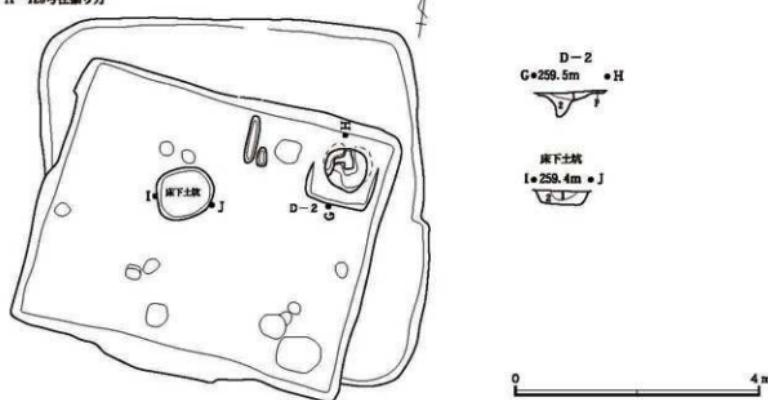


第73図 H-128号住居址・H-129号住居址(1)実測図

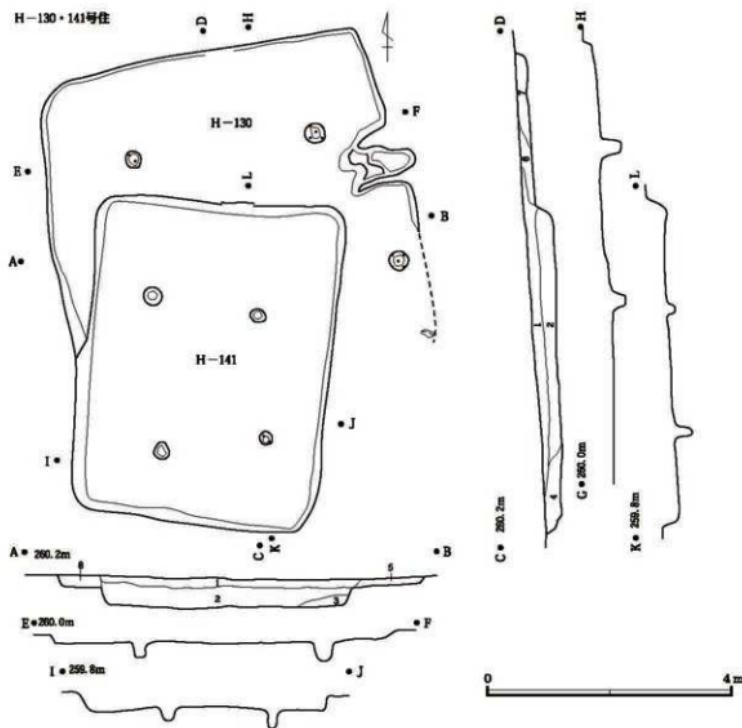
H-129号住



H-129号住掘り方



第74図 H-129号住居址(2)実測図



第75図 H-130・141号住居址(1)実測図

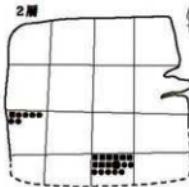
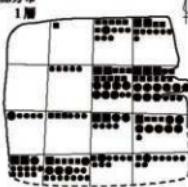
H-130・141号住

遺物名	番号	解説	色調	しまり粒性	測入物			備考
					E	P	R	
H-130	1	黒褐色土層10cm	△	■	×	×	△	×
H-141	2	黒褐色土層10cm 2>1	○	○	×	×	×	×
	3	黒褐色土層10cm 3>2	○	○	×	●	×	×
	4	黒褐色土層10cm 4>3	○	○	△	●	●	×
	5	黒褐色土層10cm 5>4	○	○	×	×	●	×
	6	黒褐色土層10cm 6>5	○	○	△	●	●	H-130
	7	黒褐色土層10cm 7>6	○	○	△	●	●	H-141
	8	黒褐色土層10cm 8>7	○	○	●	●	●	H-130
	9	黒褐色土層10cm 9>8	○	○	●	●	●	H-130
	10	黒褐色土層10cm 10>9	○	○	●	●	●	H-130

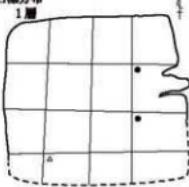
H-130号住



土器分布



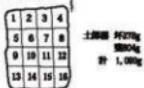
石器分布



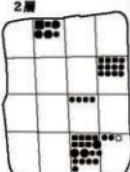
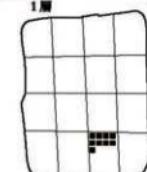
土器
3式サブトレ ***
7式サブトレ *****
11式サブトレ ****
13式サブトレ *****
カマド *****@*

石器 カマド +o

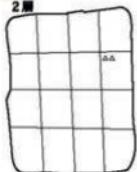
H-141号住



土器分布

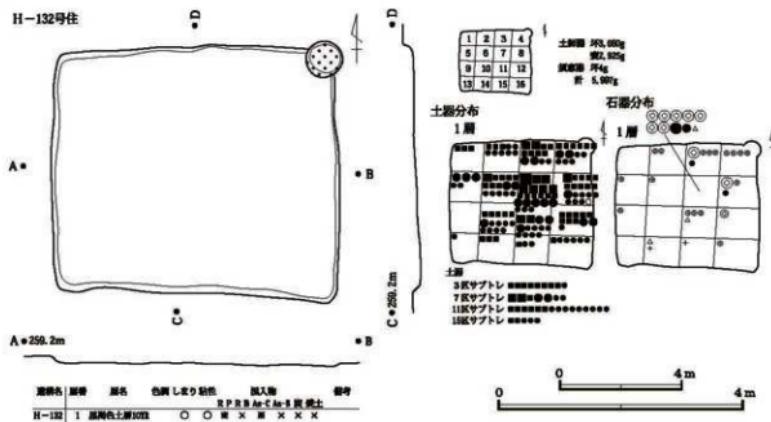
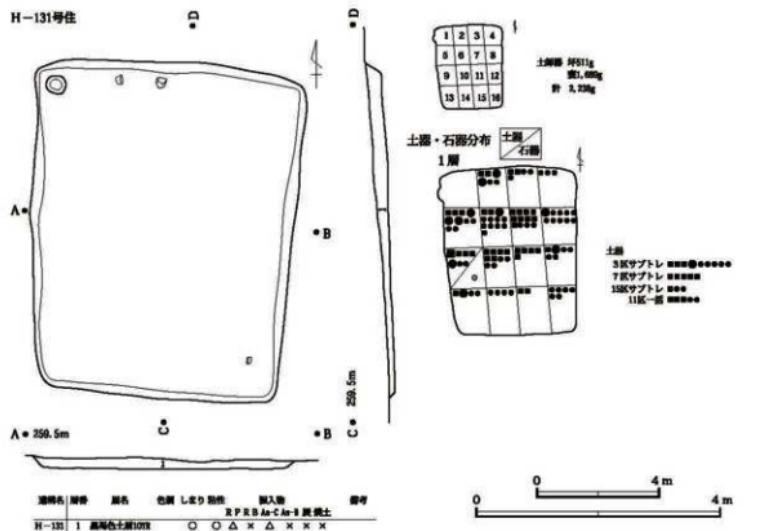


石器分布

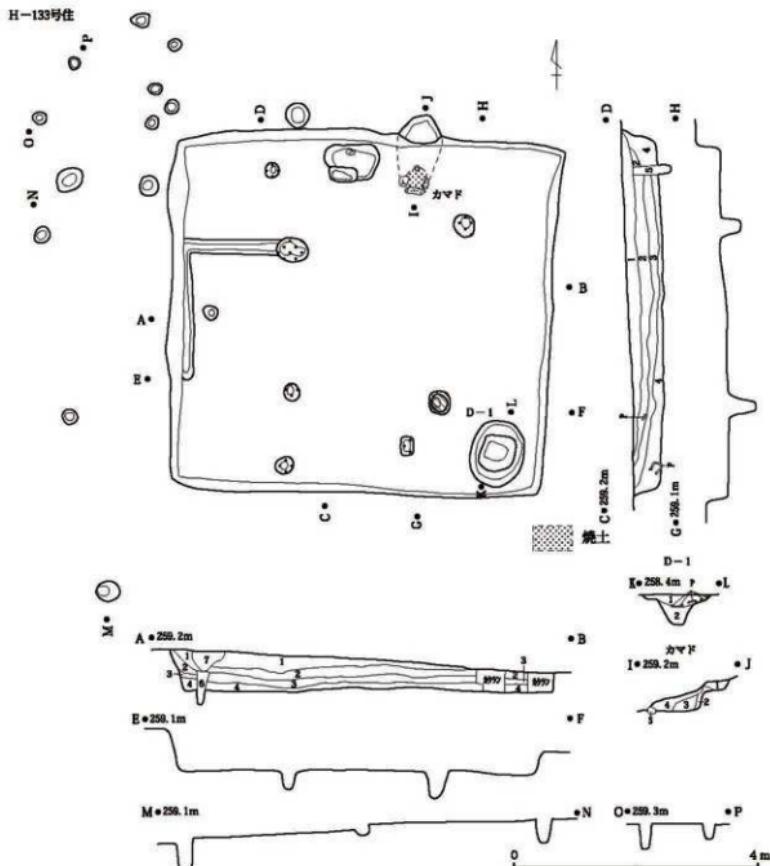


0 4m

第76図 H-130・141号住居址(2)実測図



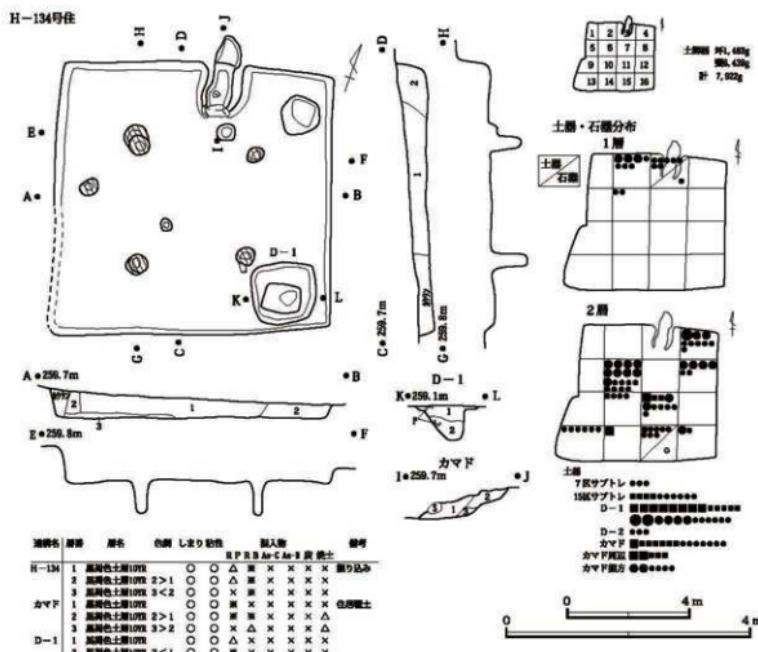
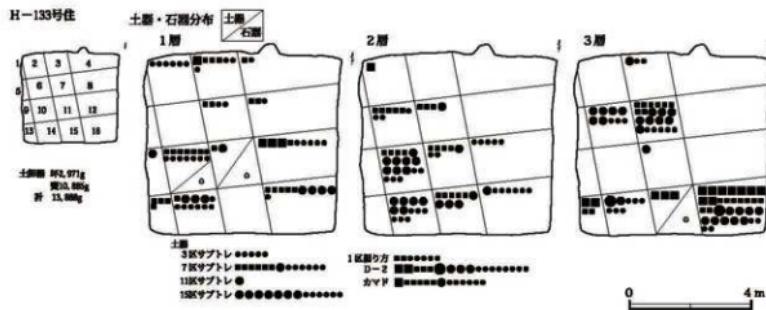
第77図 H-131号住居址・H-132号住居址実測図



遺跡名	解説	層名	色調	しまり	動性	測定人物	測定日	備考	番号
H-133									
1	黒褐色土層25.2m		△	×	×	△	×	△	25.2m
2	黒褐色土層25.2m	2>1	○	○	△	×	×	△	25.2m
3	黒褐色土層25.2m	3<2	○	○	△	×	×	△	25.2m
4	黒褐色土層25.2m	4>3	○	○	△	×	×	△	25.2m
5	黒褐色土層25.2m	5<2	○	○	△	×	×	△	25.2m
6	黒褐色土層25.2m	6<2	○	○	△	×	×	△	25.2m
7	にじいろ褐色土層7.5m	7>1	×	×	×	×	○	×	7.5m

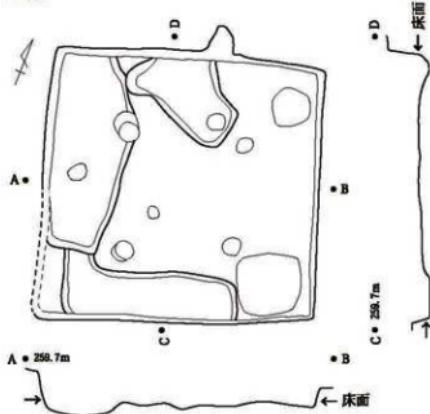
遺跡名	解説	層名	色調	しまり	動性	測定人物	測定日	備考	番号
D-1									
1	黒褐色土層10.5m		○	×	△	△	×	△	10.5m
2	黒褐色土層10.5m	2>1	○	○	△	△	×	△	10.5m
カマF									
1	黒褐色土層10.5m		○	●	△	△	×	△	10.5m
2	黒褐色土層10.5m	2>1	○	○	△	△	×	△	10.5m
3	にじいろ褐色土層7.5m	3>4	○	○	△	△	×	△	7.5m
4	黒褐色土層10.5m	4>1	○	○	△	△	×	△	10.5m

第78図 H-133号住居址(1)実測図

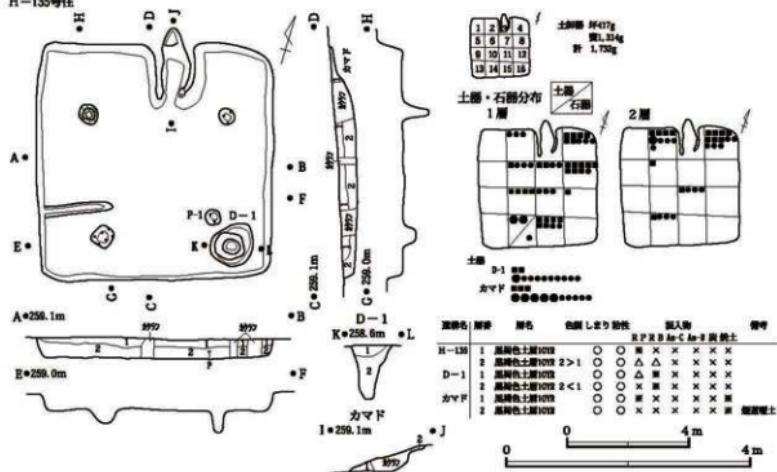


第79図 H-133号住居址(2)・H-134号住居址(1)実測図

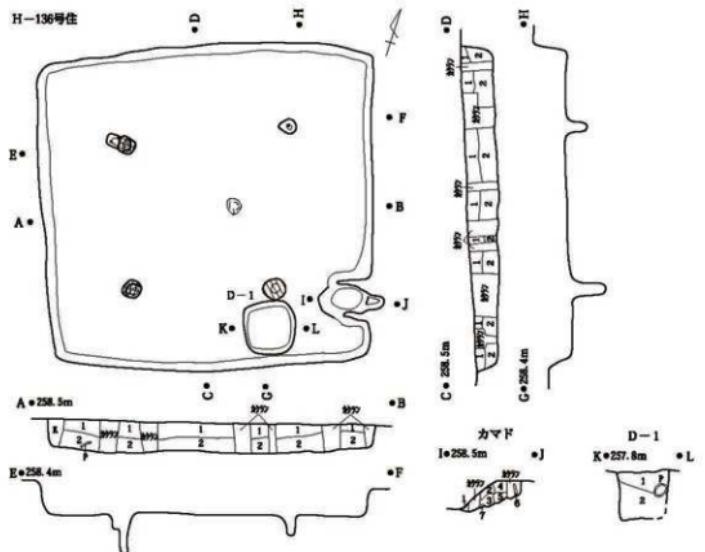
H-134号住



H-135号住



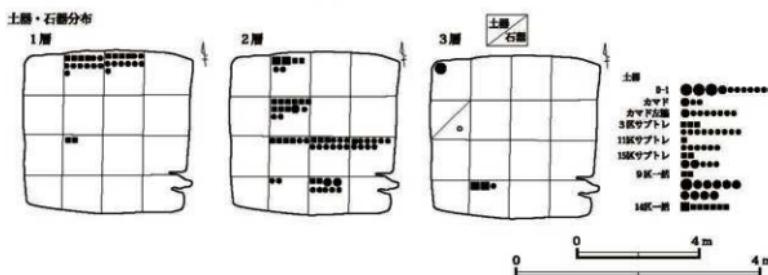
第 80 図 H-134 号住居址 (2)・H-135 号住居址実測図



番号	層名	色調	しまり性状	調査人物			備考
				上	中	下	
H-136	1 屋根地土層	○	○ △ × ■ × ×	上	中	下	上
	2 屋根地土層	2>1	○ ○ △ △ × × ×				
カマド	1 屋根地土層	○	○ ○ × × × × ×	住用壁土			
	2 屋根地土層	○	○ ○ ○ △ × × ×	住用壁土			
	3 屋根地土層	3>2	○ ○ ○ ○ △ × × ×	カマド壁土			
	4 にぬれ地土層	1, 3B	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	天井地壁土			
	5 にぬれ地土層	2, 3B	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	カマド壁土			
	6 にぬれ地土層	3C	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	火焚			
D-1	7 壁地土層	7>5	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	火焚			
	8 壁地土層	5, 5B	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	火焚			
	9 壁地土層	5B	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	火焚			
	10 壁地土層	2>1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	火焚			

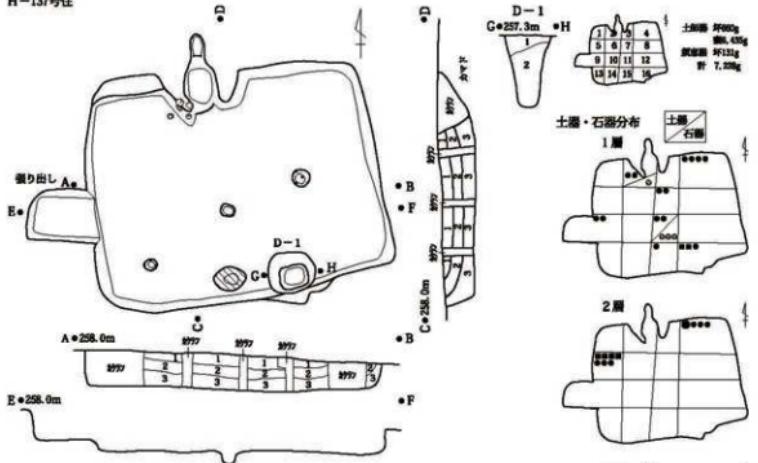
1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16

土壟跡 256kg
257.4kg
H 4.33kg

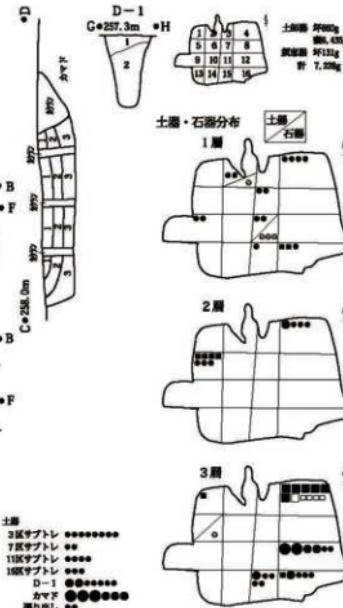


第81図 H-136号住址実測図

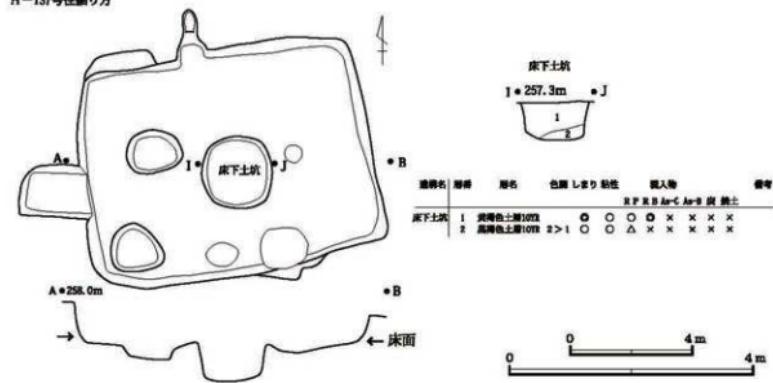
H-137号住



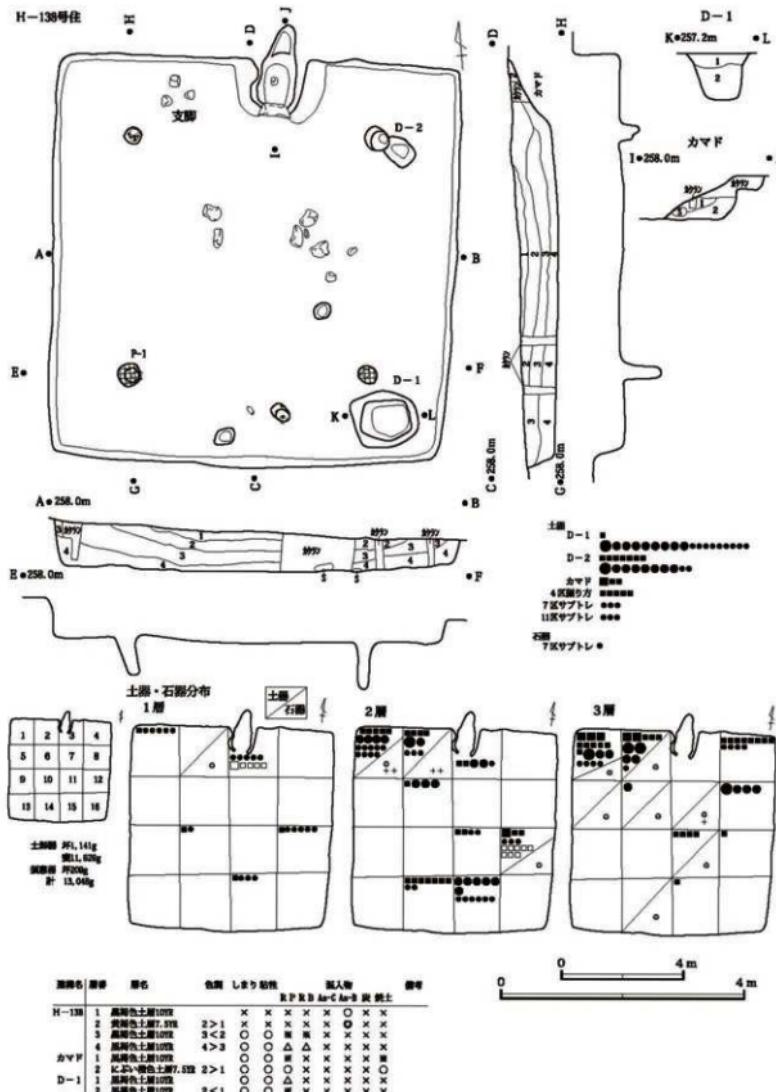
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	測入値	備考
H-137	1	黒褐色土層NOTE	○	○	×	△	△
	2	黒褐色土層NOTE 2>1	○	○	×	△	△
	3	黒褐色土層NOTE 3>2	○	○	△	△	△
張り出し	1	黒褐色土層NOTE	○	○	×	△	△



H-137号住張り方

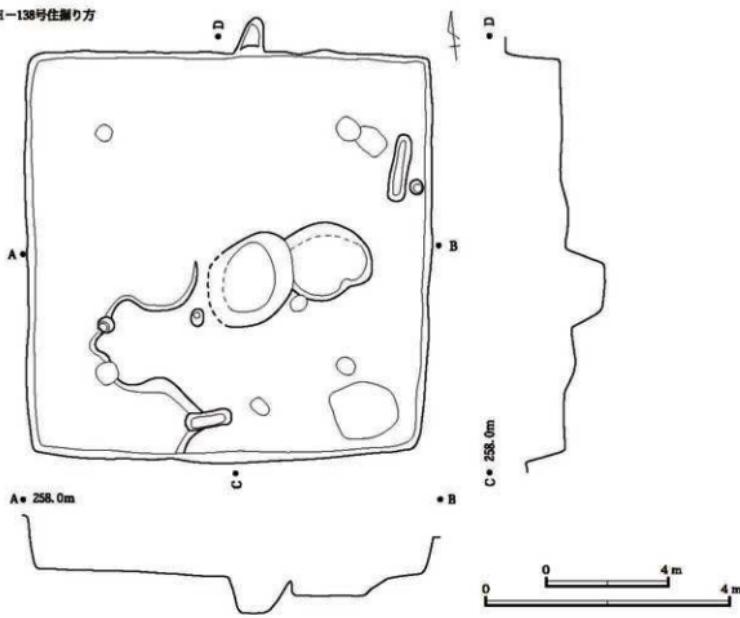


第82図 H-137号住居址実測図

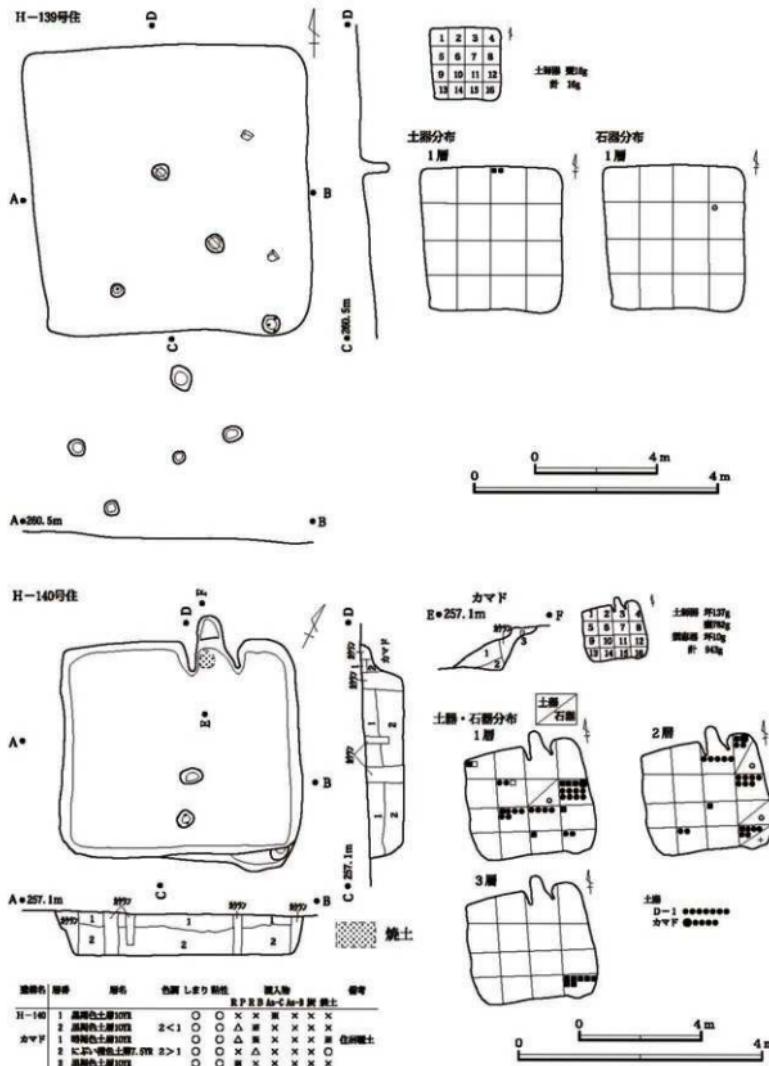


第83図 H-138号住居址(1)実測図

H-138号住居方

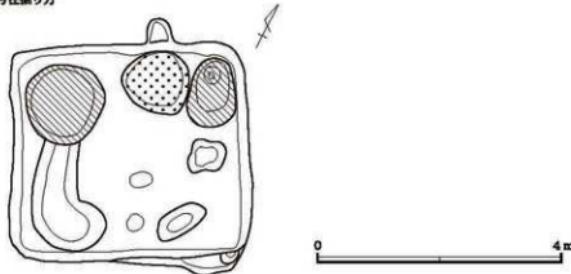


第84図 H-138号住居址(2)実測図

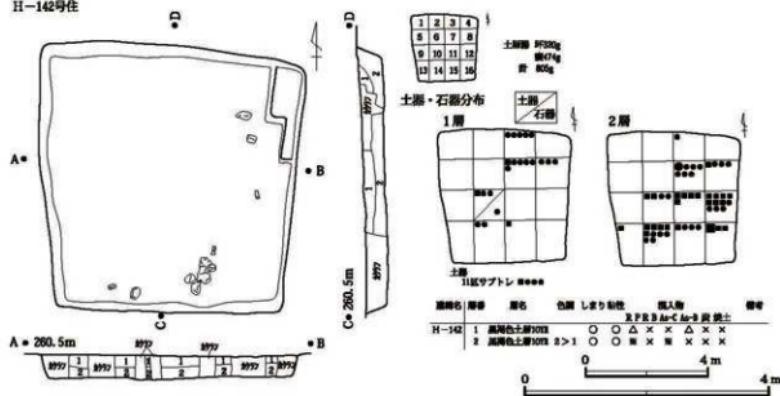


第85図 H-139号住居址・H-140号住居址(1)実測図

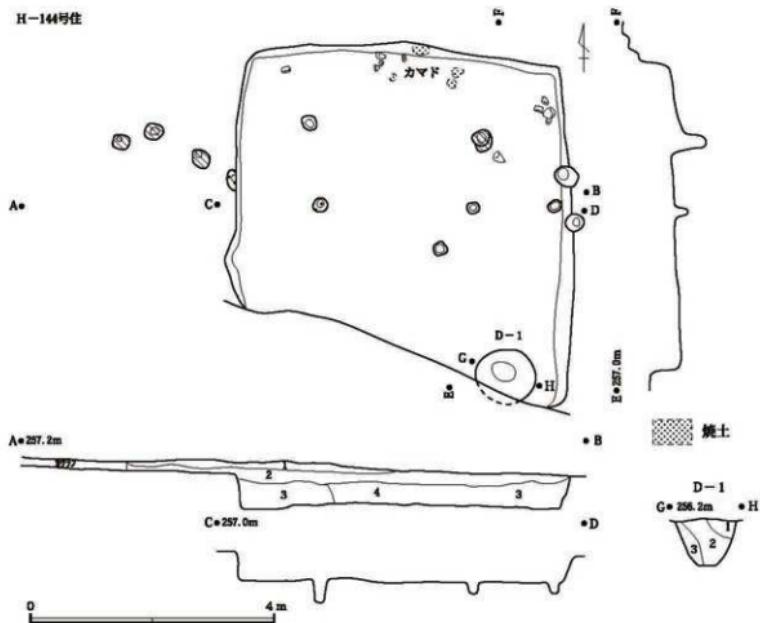
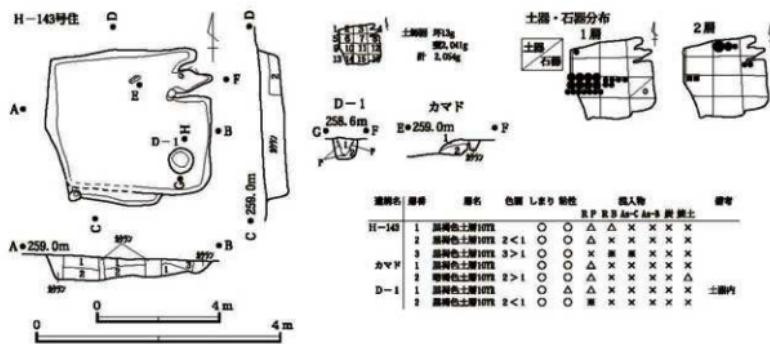
H-140号住居裏方



H-142号住



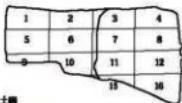
第86図 H-140号住居址(2)・H-142号住居址実測図



第87図 H-143号住居址・H-144号住居址(1)実測図

H-144号住(2)

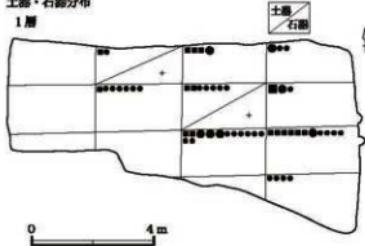
層級名	番号	層名	色調	しまり	粒性	測入物	備考
H-144	1	黒褐色土層10cm	○	○	○	X X X X	
	2	黒褐色土層10cm	2<1	○	○	X X X X	
	3	黒褐色土層10cm	3>2	○	○	X X X X	
D-1	4	黒褐色土層10cm	4<2	○	○	X X X X	土質を強調紙土
	5	黒褐色土層10cm	4>2	○	○	X X X X	
	6	黒褐色土層10cm	2>1	○	○	X X X X	強調
	7	黒褐色土層10cm	3<2	○	○	X X X X	



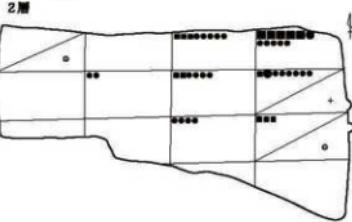
土量約 975kg
実積 607kg
B= 1.15g

土器・石器分布

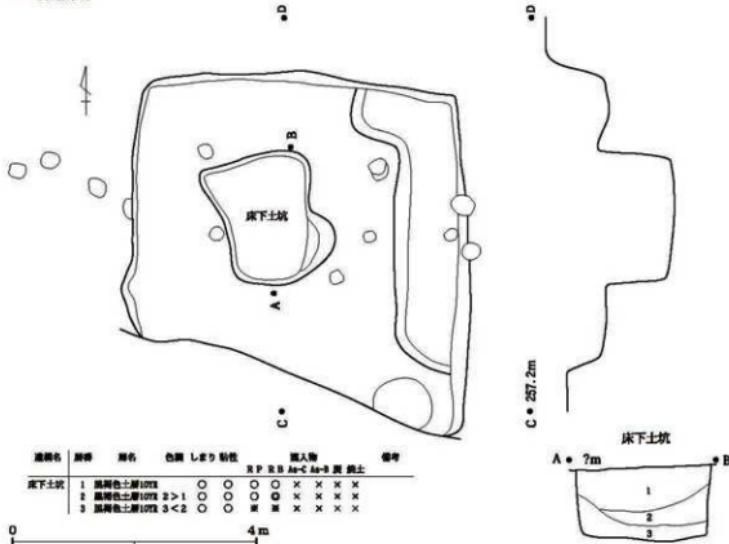
1層



2層

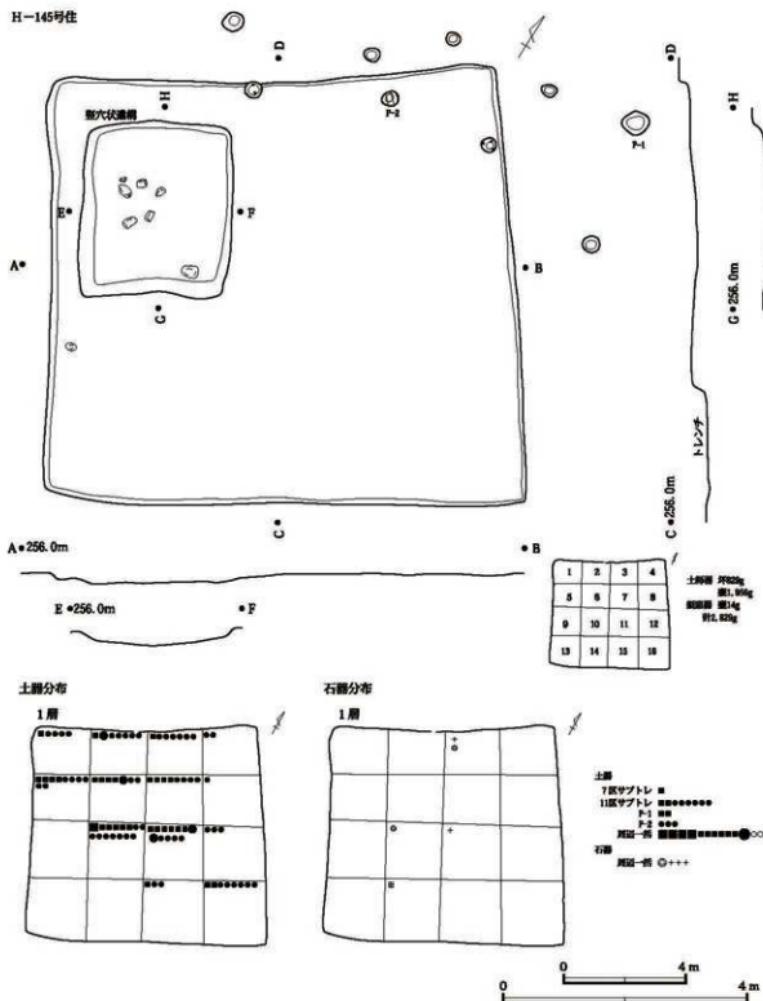


H-144号住掘り方

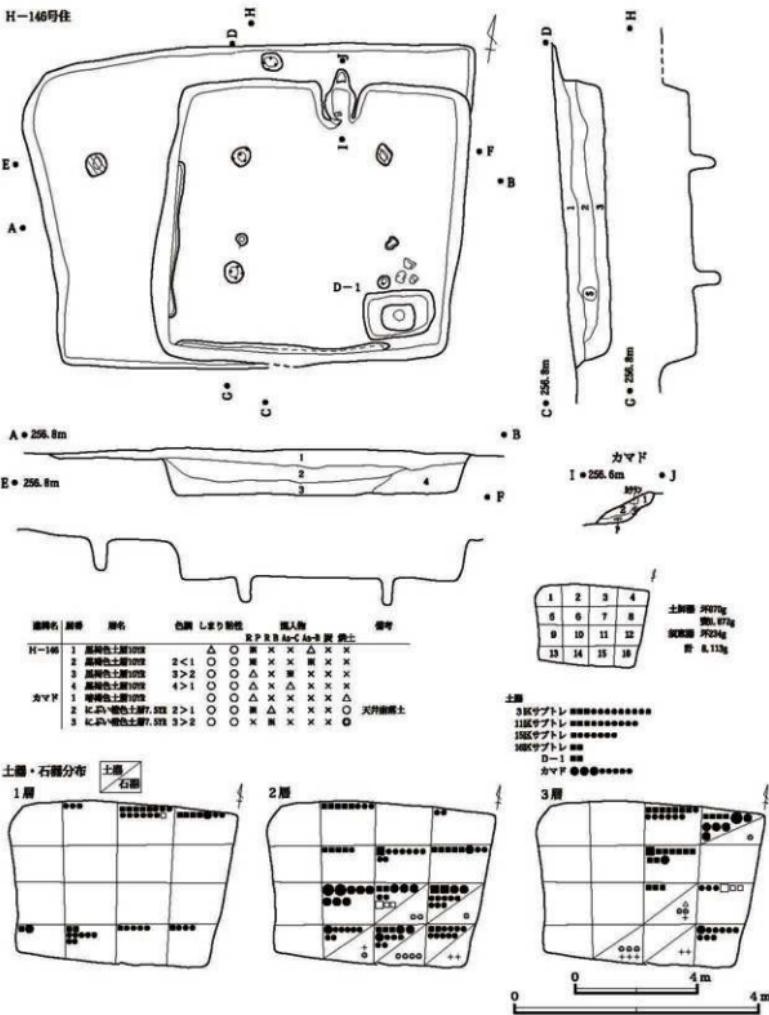


第88図 H-144号住居址(2)実測図

H-145号住

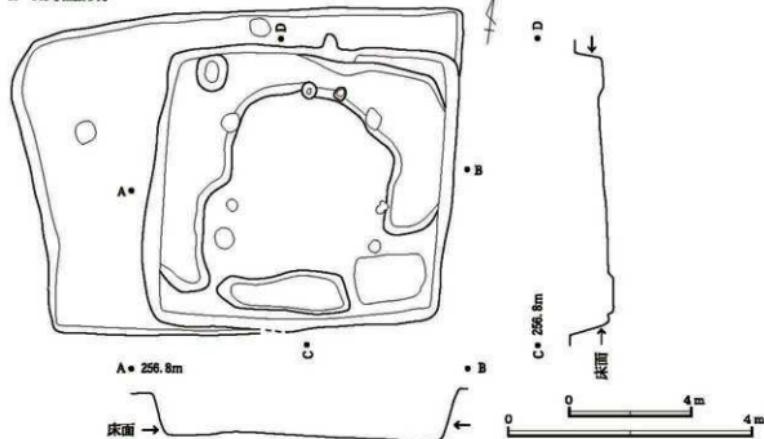


第89図 H-145号居址実測図

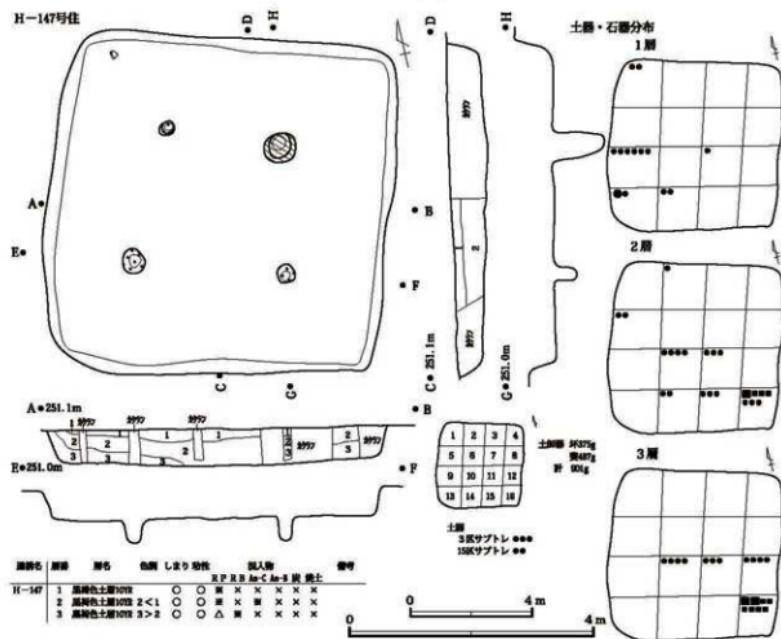


第90図 H-146号住居址(1)実測図

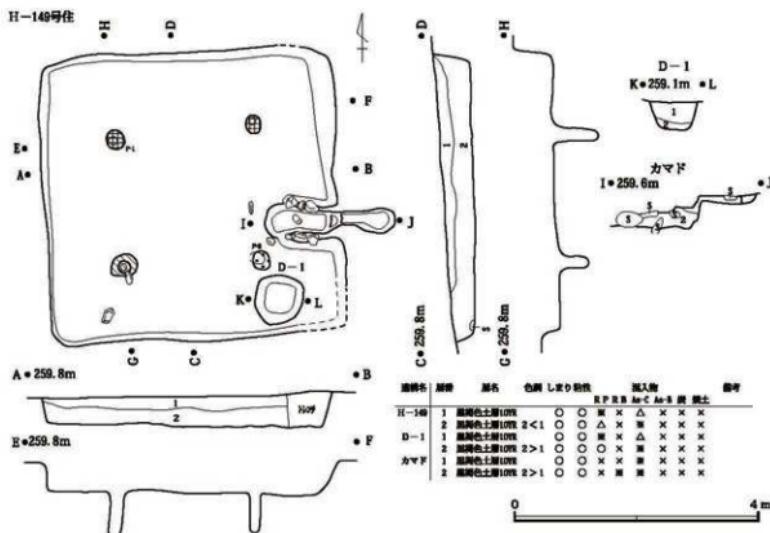
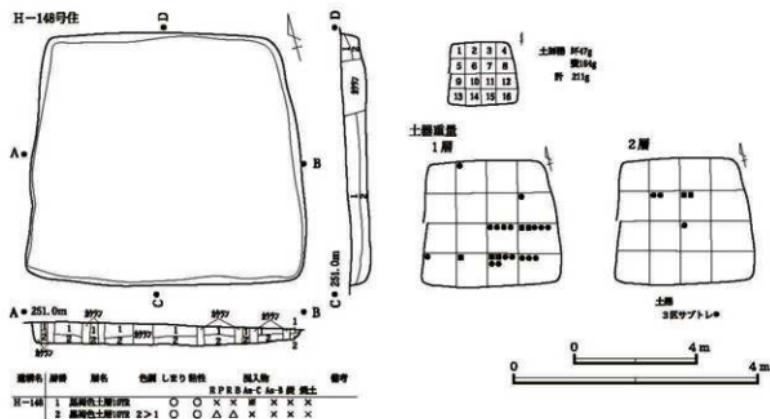
H-146号住掘り方



H-147号住



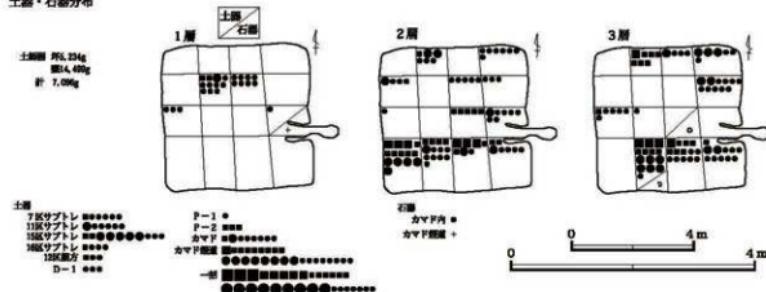
第91図 H-146号住居址(2)・H-147号住居址実測図



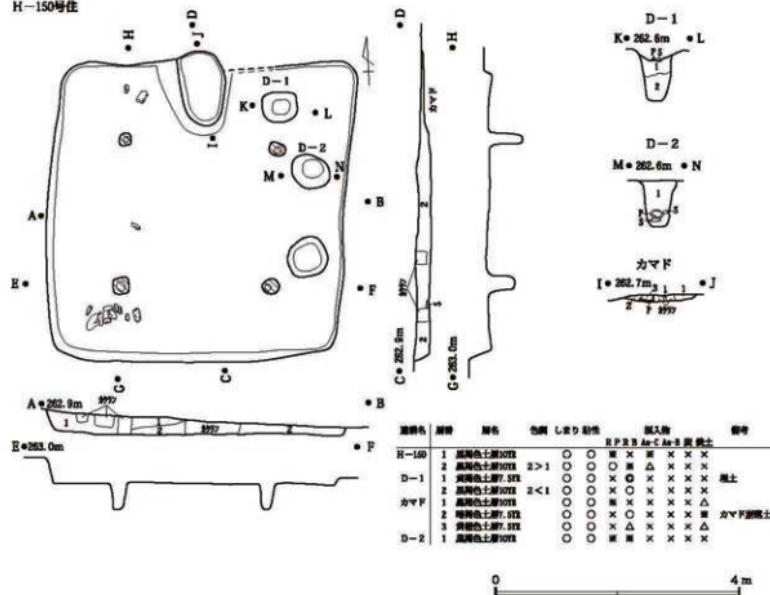
第92図 H-148号住居址・H-149号住居址(1)実測図

H-149号住

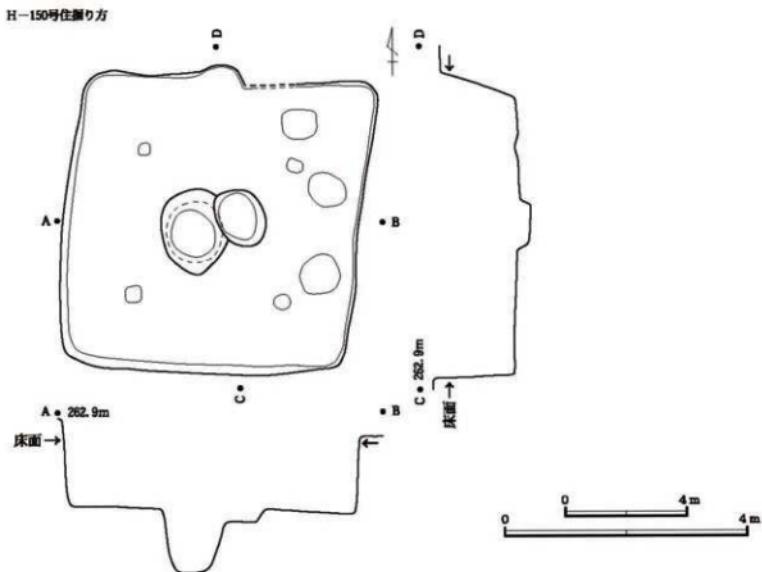
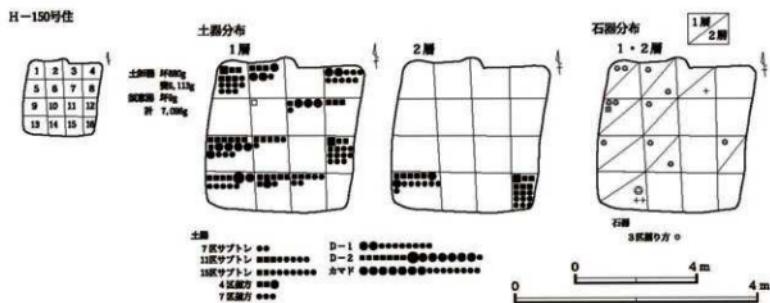
土器・石器分布



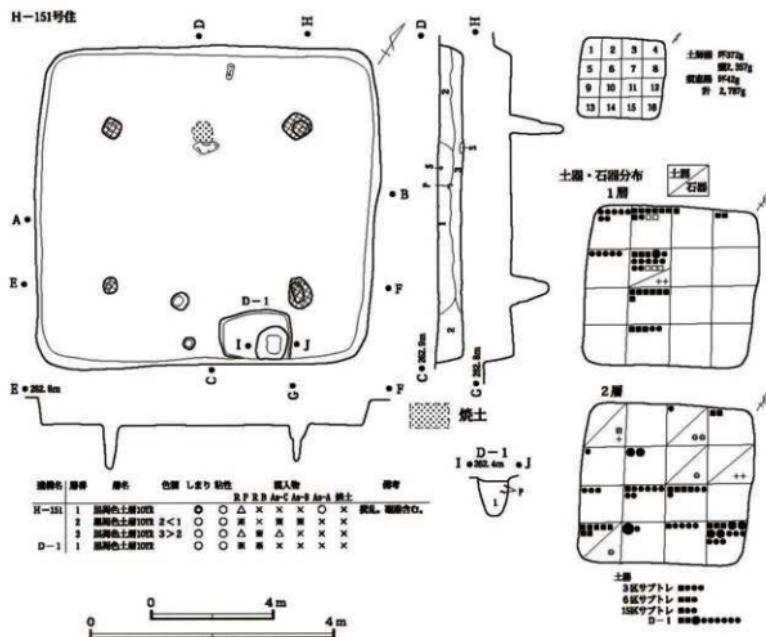
H-150号住



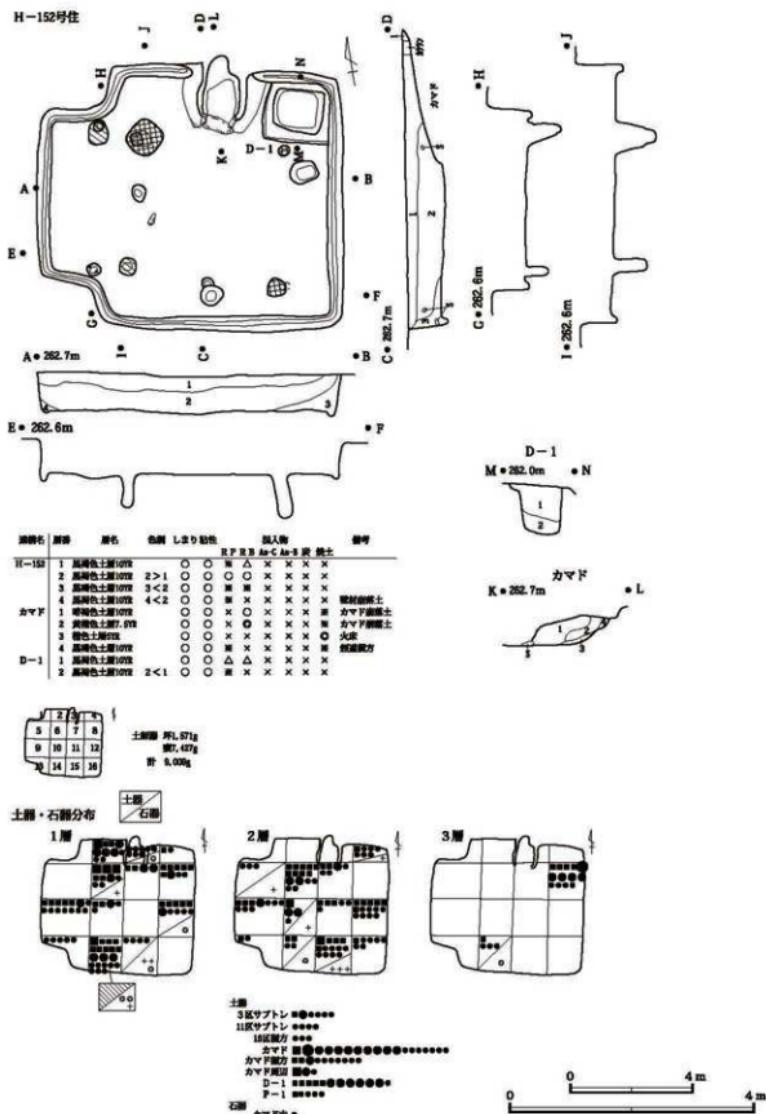
第93図 H-149号住居址(2)・H-150号住居址(1)実測図

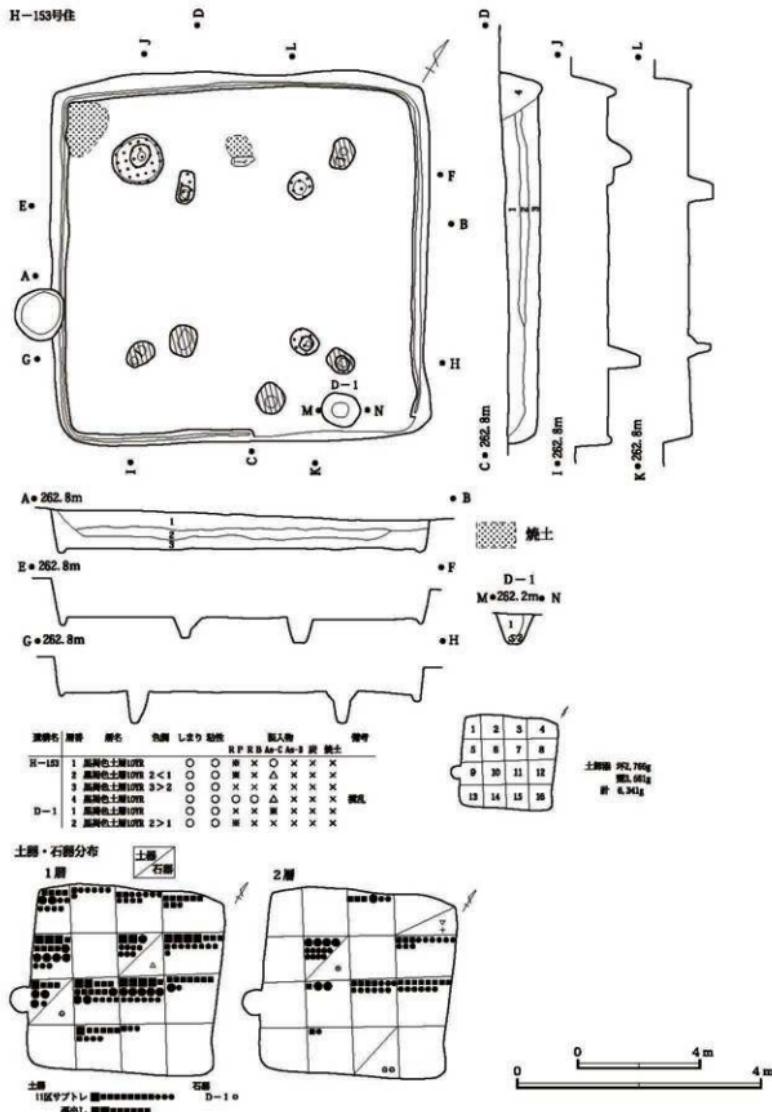


第94図 H-150号住居址(2)実測図

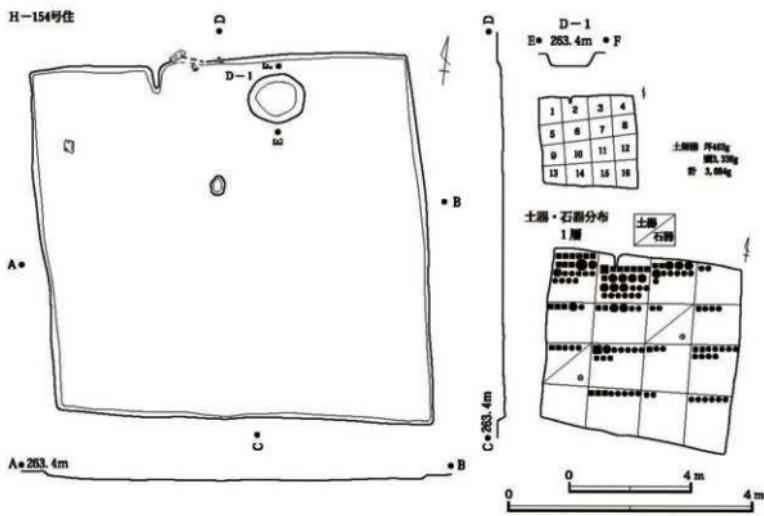


第95図 H-151号居址実測図



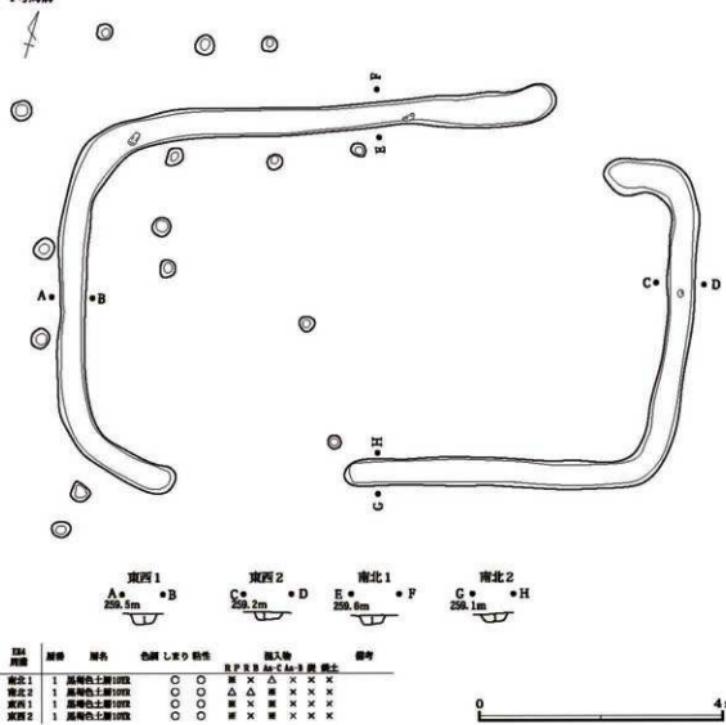


第97図 H-153号住居址実測図

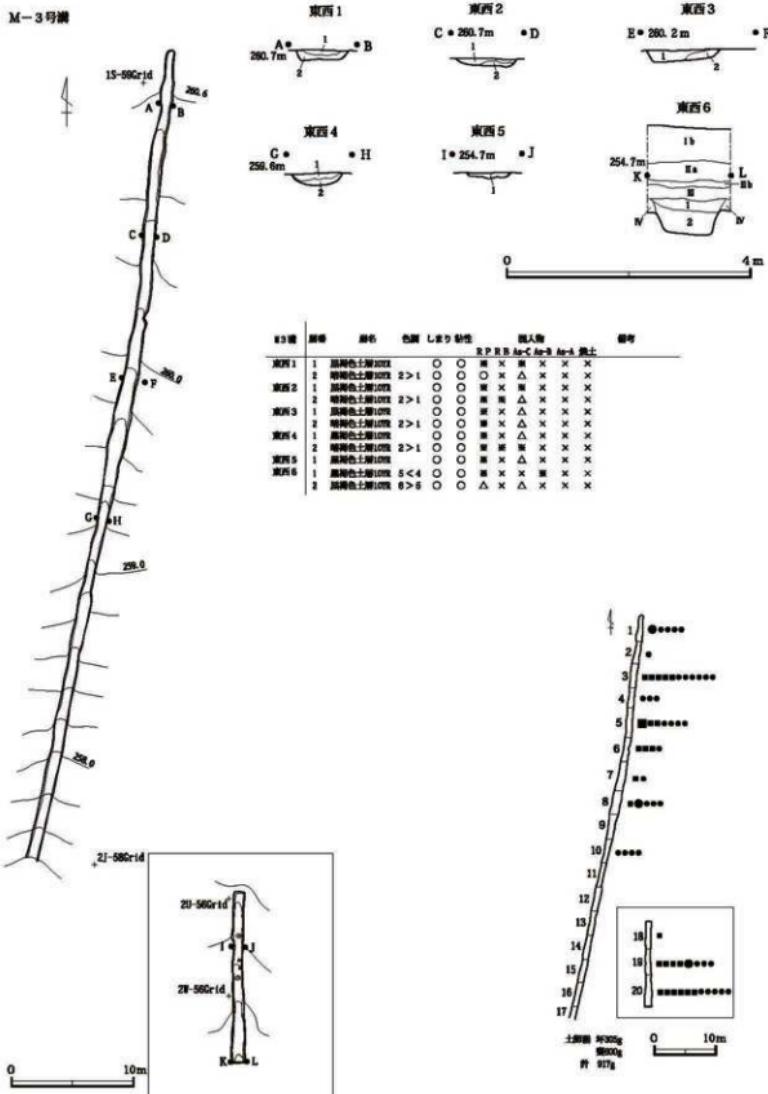


第98図 H-154号住址実測図

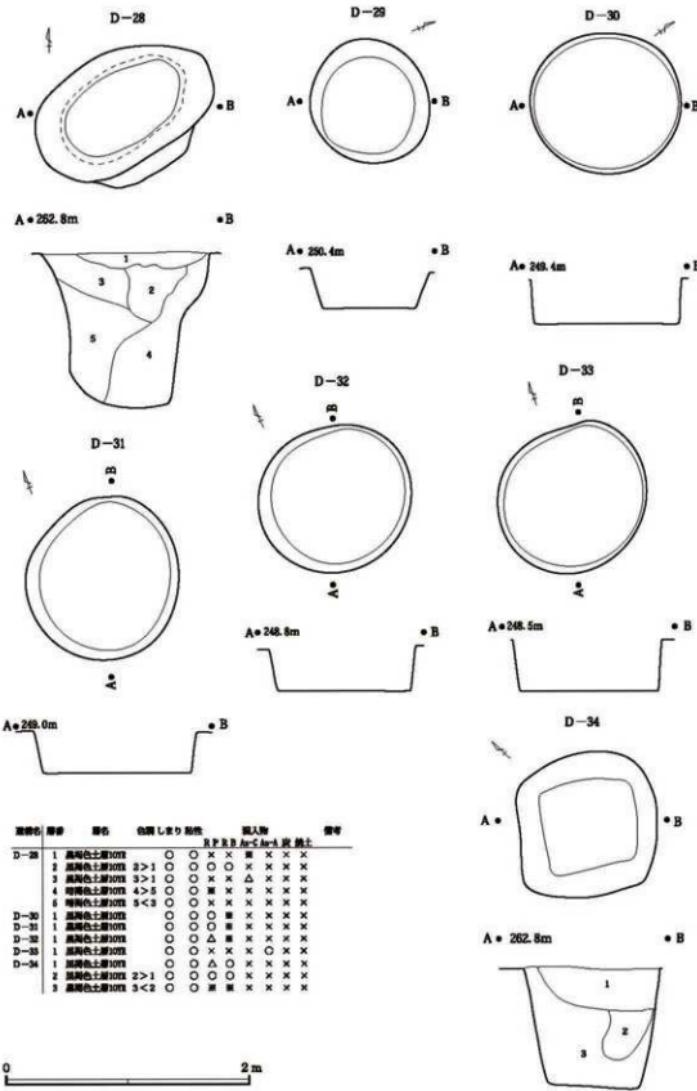
EM-4号周溝



第99図 EM-4号周溝実測図



第100図 M-3号溝実測図



第101図 土坑実測図

6 古墳時代の遺物

(1) 土師器・須恵器 (第 103 図～第 135 図)

概要

住居址からは多量の土器が出土している。土師器が多くを占めているが、須恵器も一部出土している。その他の遺構において出土した土器は少量である。出土した土器は古墳時代前期～古墳時代後期に至るまでのものである。以下、特記される土器および出土状況について列記していく。

H-52 号住では、多くの小形甌とともに土師器甌(8)が出土している。8 は、覆土上層(1 層)から出土している。小形甌が多く認められるが、その出土位置はまとまっておらず分散している。

H-56 号住では、把手付の甌(8)が出土している。把手は通常のものと異なり、下向きに付いている。H-56 号住は小規模な竪穴式遺構であるが、住居北隅を中心として多量の土器が出土している。

H-57 号住では、口縁～肩部にかけて縄文を施す台付甌(1)が出土している。吉ヶ谷式の系譜を引くものと考えられる。H-57 号住は、住居中央にロームブロックを主体とする堅密な土層が堆積しており、台付甌はその上から出土している。

H-59 号住は、5世紀第Ⅱ四半期に位置づけられるが、高环転用羽口(8～11)が出土している。台石が出土しているが、その位置はそれら高环とは離れている。

H-62 号住も、5世紀第Ⅱ四半期に位置づけられるが、高环転用羽口(6～10)が認められる。深度のある住居跡で貯蔵穴(D-1)を中心として床面に広くわたって土器が出土している。高环転用羽口はその他、H-70 号住でも出土している。

H-65 号住は、最大規模をなす住居址であるが、その出土土器量は目立って多くはない。甌・壺・环とともに土製甌(11)が出土している。

H-69 号住では、土師器甌(3)がカマド東脇で認められた。土師器環(2)は、カマド覆土中から出土している。カマドは焚口に天井石・袖石を据え、その他はローム土を用いるものである。

H-73 号住では、土師器甌(5)がカマドにかけられたと想定される状態で出土している。カマドは焚口に天井石・袖石を据え、その他はローム土を用いるものである。

H-76 号住の土師器高环(3)は、カマド内から伏せた状態で出土している。支脚としての使用は窺えなかった。

H-77 号住では、脚部に穿孔を施す古相の脚部屈折高环(3)が認められる。貯蔵穴(D-1)東脇南壁際から出土している。

H-88 号住では、古墳時代前期の土器群がまとめて出土している。土師器甌(6・7・8)は、貯蔵穴(D-1)東脇の東壁際から並んだ状態で出土した。

H-89 号住では、土師器甌(6)が出土している。共伴する土器群は 5 世紀第Ⅱ四半期に帰属する。

H-103 号住は、浅い竪穴住居であるが、多量の土器が住居全面にわたって出土している。出土土器は 5 世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる。

H-111 号住では、木器模倣とされる高环(9)が認められる。また口縁端部が肥厚する土師器甌(10)があり、貯蔵穴(D-1)脇、南壁際より出土している。

H-115 号住では 5 世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる多量の土器が出土している。とくに貯蔵穴(D-1)の脇および貯蔵穴内より出土している。貯蔵穴内からは貯蔵穴上、南側から落ち込んだような状

鐵で出土している。

H-126号住では、須恵器坏（4・5）が出土している。5の須恵器坏は土師器壺（6）とともに貯蔵穴（D-1）へ落ち込むような状態で出土している。

H-134号住では、貯蔵穴（D-1）覆土上層より、壺・壺・坏などの多くの土器が出土している。

H-137号住からは須恵器坏（1）が認められる。貯蔵穴（D-1）脇より出土している。またカマド東脇からは土師器壺（5）、カマド西脇からは土師器壺（4）の上に孔鉢（2）が乗せられた状態で検出された。

H-146号住では、須恵器坏（1）が住居東壁傍から出土している。カマド東脇では土師器壺（3）が認められる。編み物石・磨石が覆土堆積状況に合うように住居南壁から中央にかけて広がって出土している。

全体的な出土状況は、炉を有する住居址では住居全面に広がるが、カマドを設ける住居址ではカマド周辺もしくは貯蔵穴周辺に集中する傾向がある。細部をみると、貯蔵穴底から出土することはなく、貯蔵穴周辺に置かれたものが貯蔵穴に流れ込んだような状態で検出されている。その状況は、炉・カマドいずれの住居址でも見ることが出来る。またカマドを有する住居址では、カマド東脇から壺・壺が出土するものが多く認められた。カマドは壺一つ掛けが最も多かったが、H-107号住では、二つ掛けの状況が看取された。

土器の保有状況（第102図）

第102図は、住居址出土土器の重量比を表したものである。グラフは『加賀塚遺跡1』の成果も含んでいる。重量は全点計測を行っている。壺系としたものは、器種としては壺・壺類を含む。坏系としたものには、器種としては坏・鉢・高坏を含んでいる。

古墳時代前期については資料数が限られているため、十分な結果は得られてはいないが、総重量で7,000gに収まるものとそれを超えるものとに分けられる。顯著に土器が出土する住居址は認められない。

5世紀前半段階では、10,000g（壺系7,000g・坏系3,000g）に収まるものが最も多い。しかし、それを超えるものも少なくなく、相対的に大きく坏系の重量が多いものと壺系の重量が多いものとに分けられる。なお完成品としての重量は壺系と坏系とは異なるので、あくまでも相対的な括りとして坏系（横軸）に傾くかそれとも壺系（縦軸）に傾くかの判断である。

5世紀後半段階になると、全体的に縦軸（壺系）に分布が寄ってくるが、壺の長胴化によって壺自体の重量が増すためと考えられる。総重量が19,000g（壺系15,000g・坏系4,000g）に収まるものが最も多い。それを超えるものについては、相対的に大きく壺系が多いものと、坏系が多いものとに5世紀前半段階より明確に二分される。

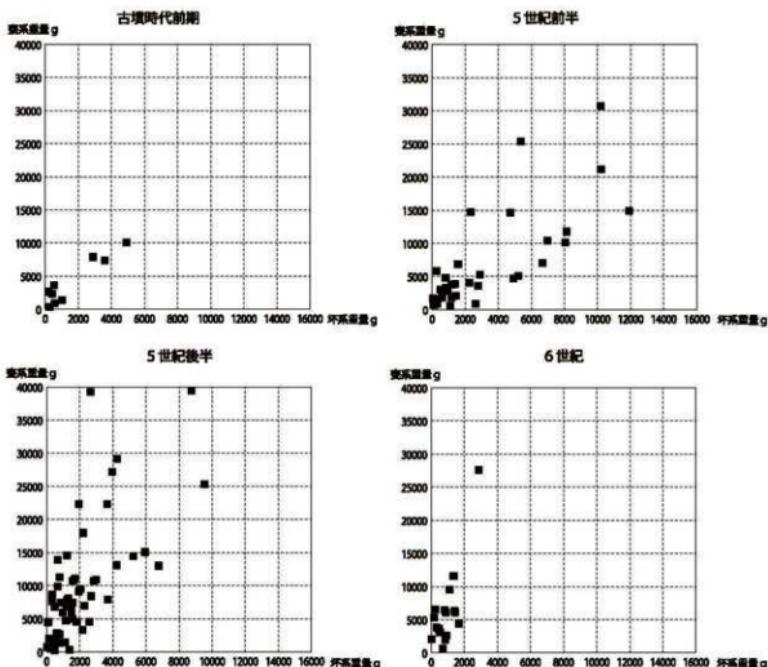
6世紀のものは資料数が少ないので、一括してプロットした。総重量が14,000gに収まるものが一般的で、それを超えるものは1棟だけ認められた。

このように5世紀段階になると、一般的な保有量を超えるものについて、壺系と坏系どちらか一方に偏重する傾向があることが導き出せる。おそらく一部には倉庫のような機能を有するものもあったと考えられ、保管・保有に際して壺系すなわち煮炊き・貯蔵用土器と坏系すなわち飲食器との区別が行われていたと想定される。

それ以前の古墳時代前期には、資料数は限られているものの、そのような状況は認められず、総重量によって二分されるのみである。このことからしても、5世紀段階における环系飲食器の導入がいかに大きなインパクトがあったかが推測される。

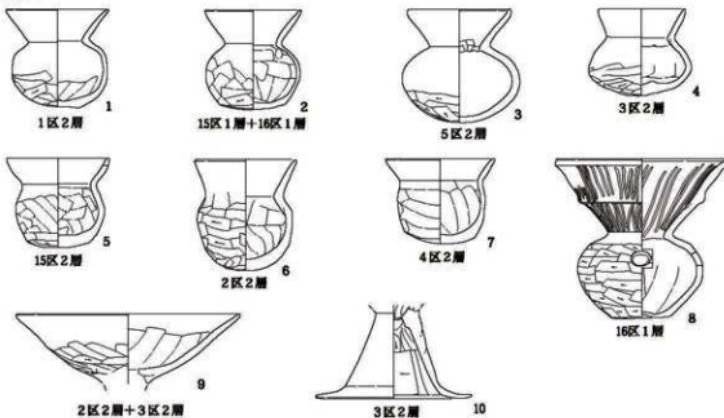
6世紀も資料数が限られているが、5世紀段階のような状況は認められていない。ただしこの段階の集落では、壺が多く出土する住居址と环が多く出土する住居址は比較的よく認められるため、この後継続しない加賀塚遺跡の歴史的事象と何らかの関係性があるのかもしれない。

(石丸敦史)

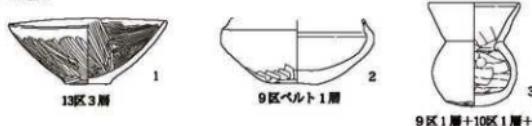


第102図 出土土器重量グラフ

H-52号住



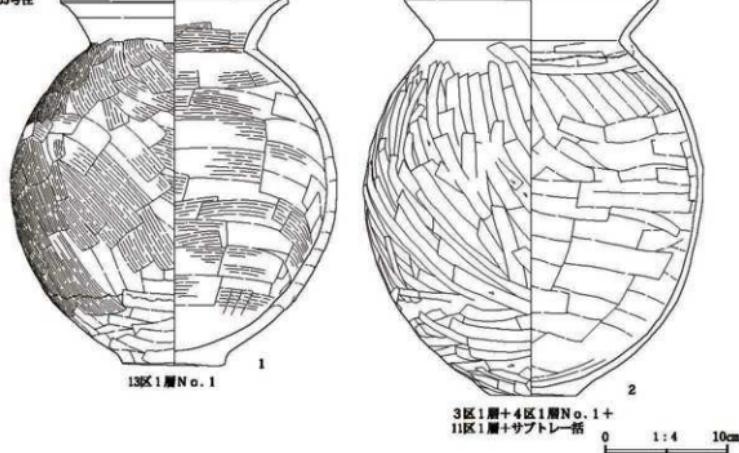
H-53号住



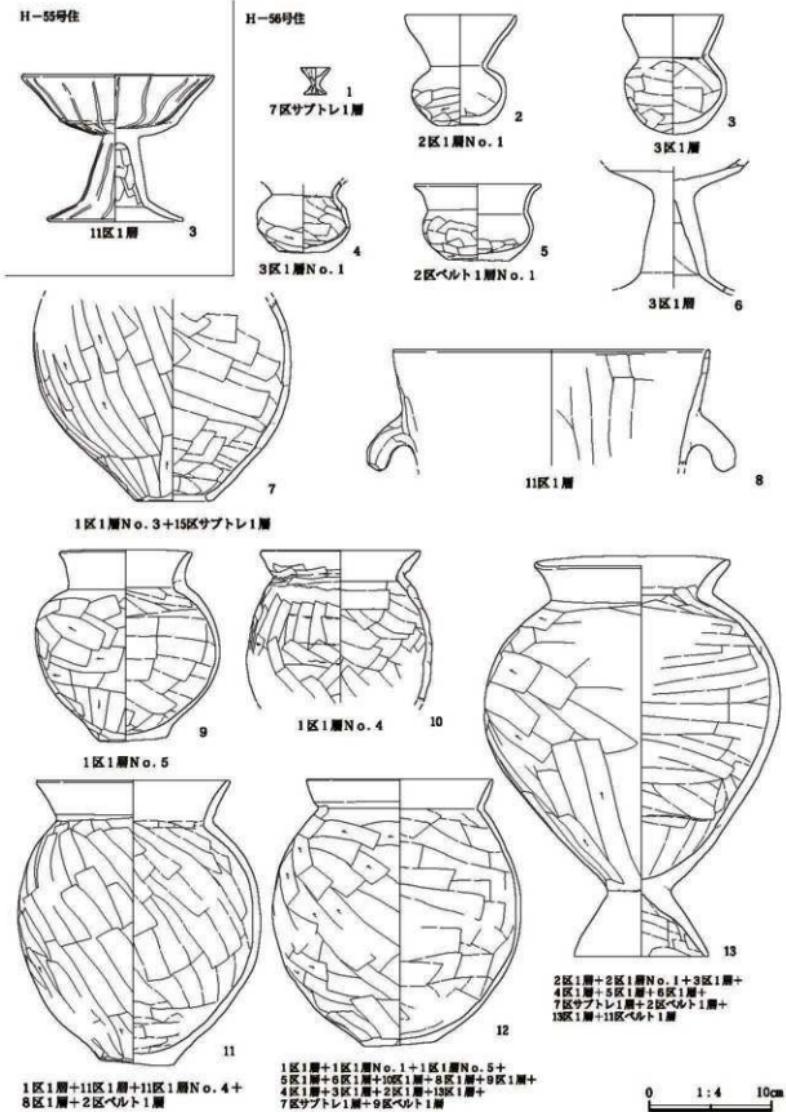
H-54号住



H-55号住

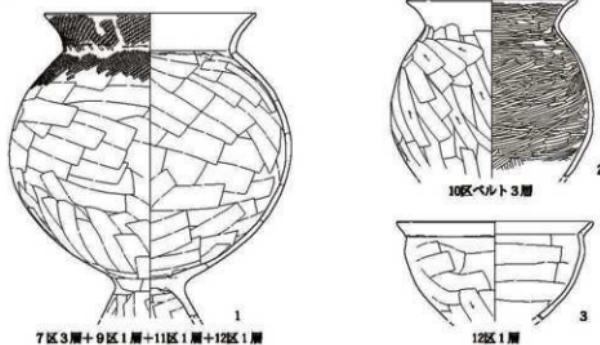


第103図 H-52号・H-53号・H-54号・H-55号(1)住居址出土土器実測図



第104図 H-55号(2)・H-56号住居址出土土器実測図

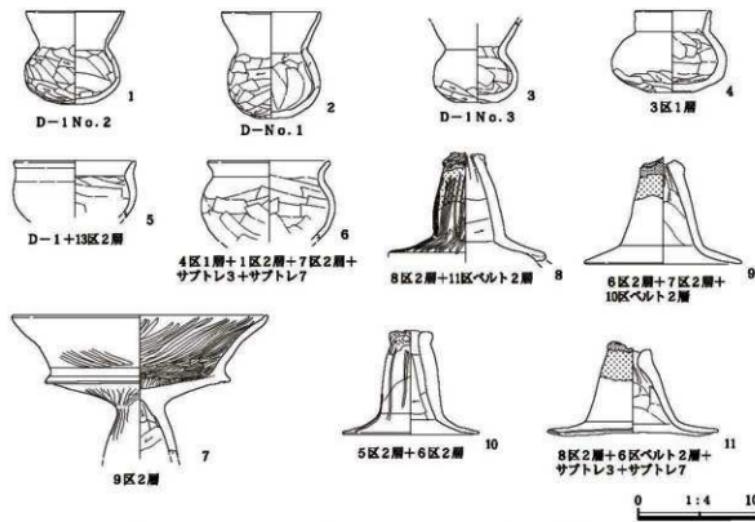
H-57号住



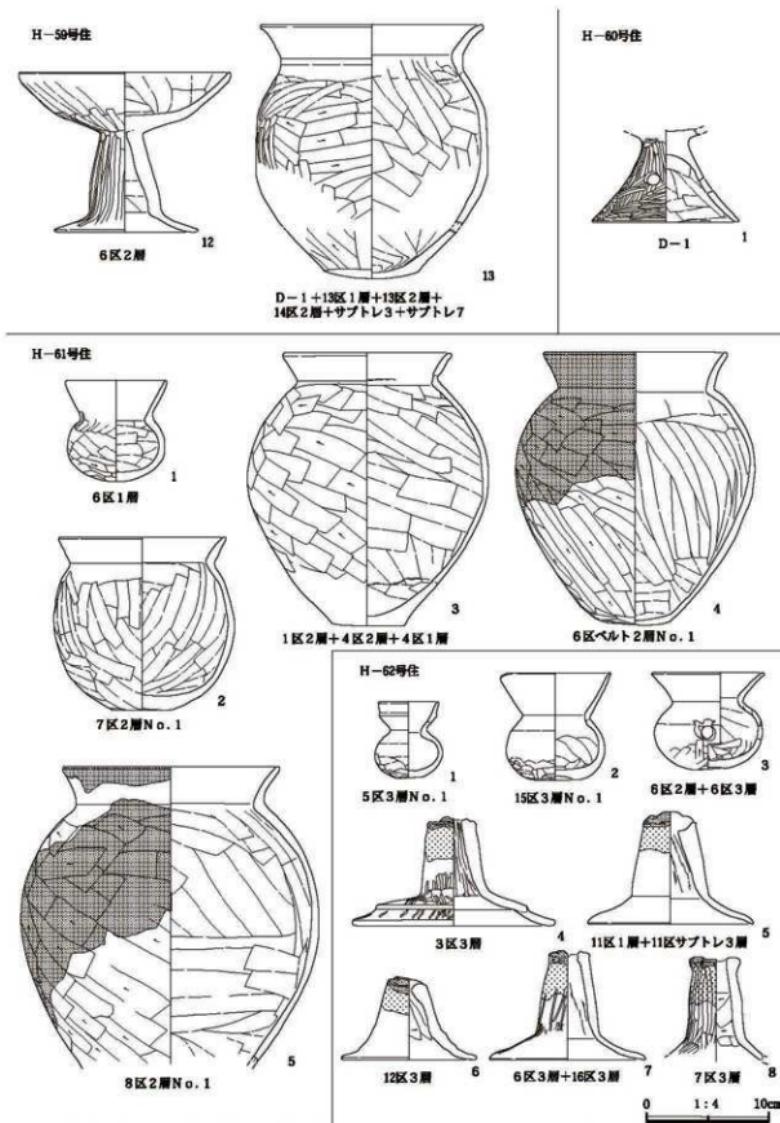
H-58号住



H-59号住

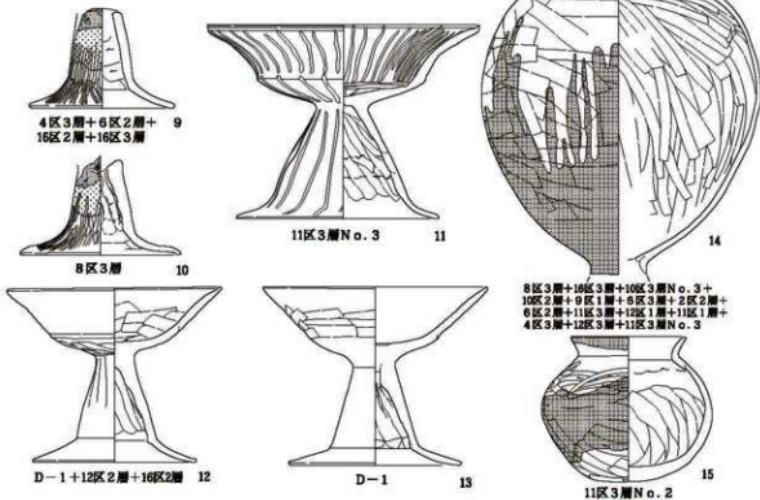


第105図 H-57号・H-58号・H-59号(1)住居址出土土器実測図

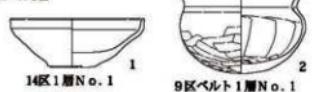


第106図 H-59号(2)・H-60号・H-61号・H-62号(1)住居址出土土器実測図

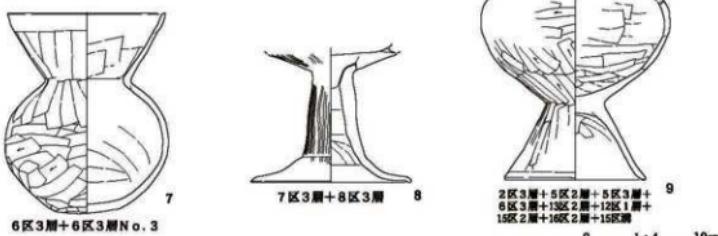
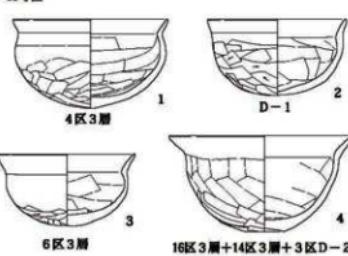
H-62号住



H-63号住

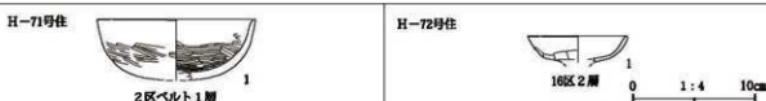
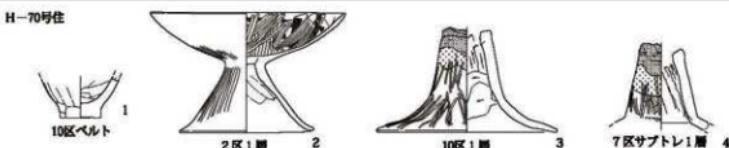
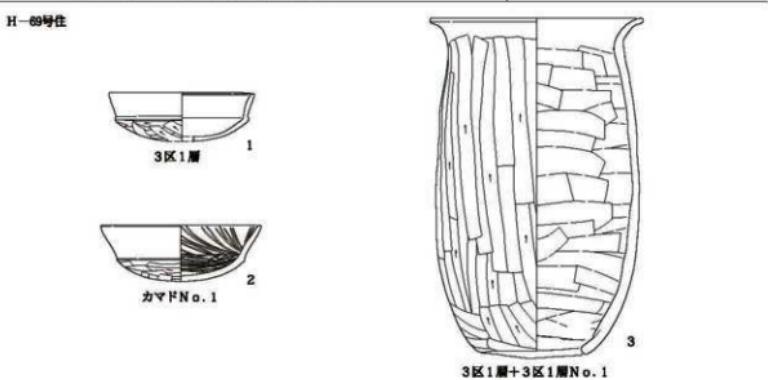
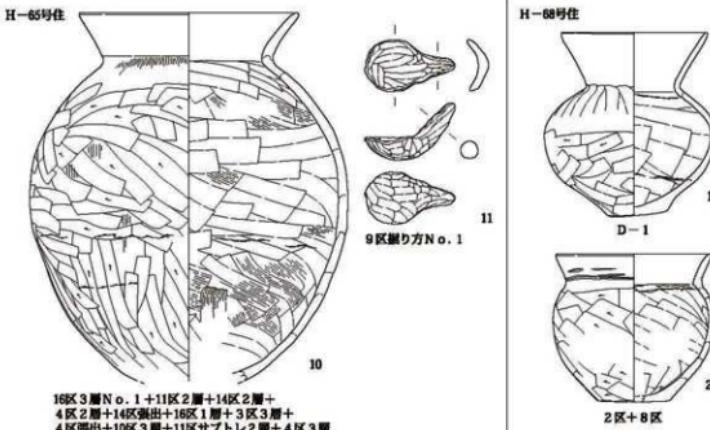


H-65号住



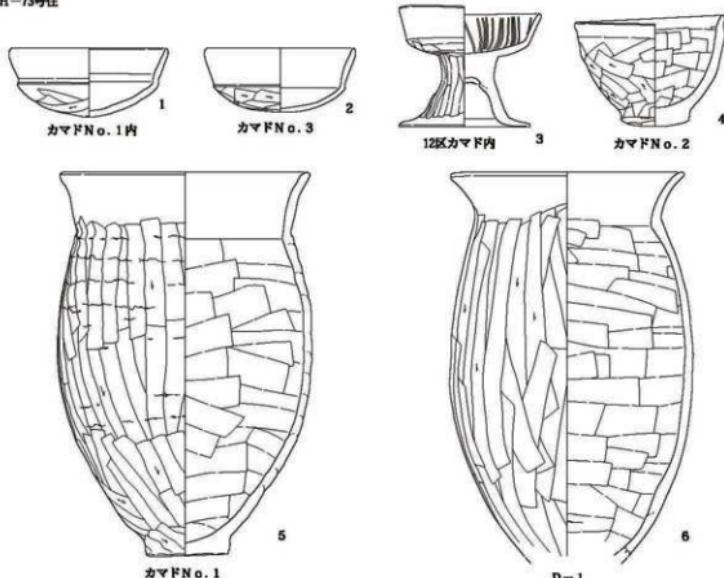
0 1:4 10cm

第107図 H-62号(2)・H-63号・H-65号(1)住居址出土土器実測図

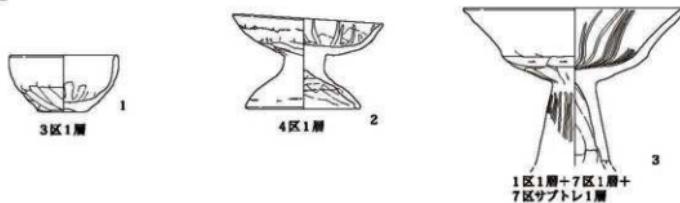


第108図 H-65号(2)・H-68号・H-69号・H-70号
・H-71号・H-72号住居址出土土器実測図

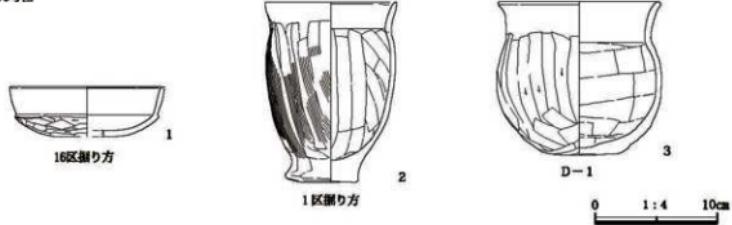
H-73号住



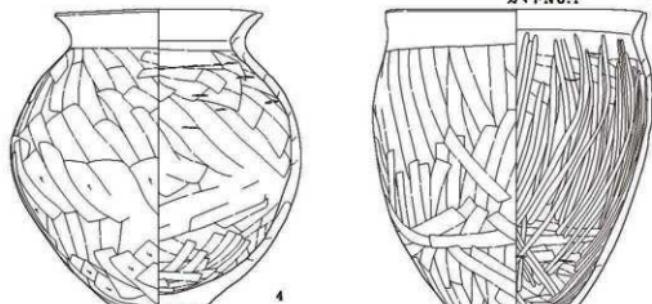
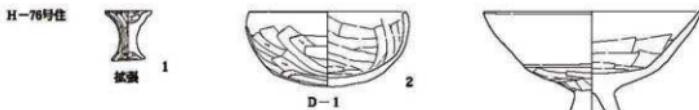
H-74号住



H-75号住

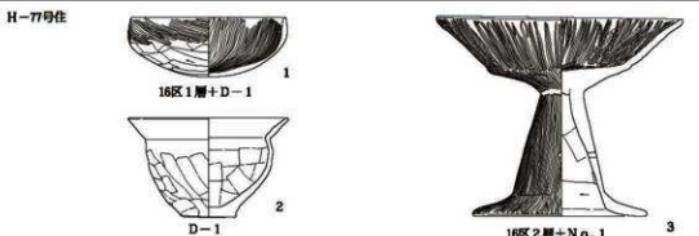


第109図 H-73号・H-74号・H-75号住居址出土器実測図



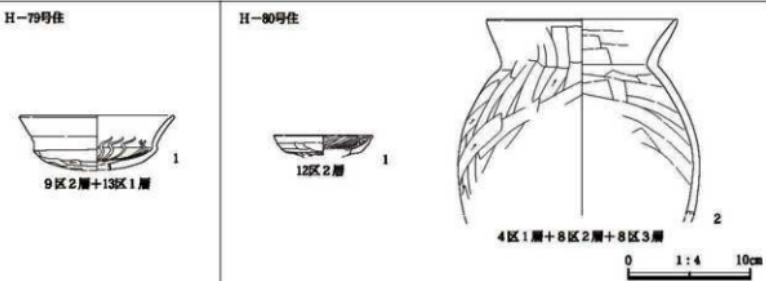
カマド内+3区サブトレ1層+
14区ペルト2層+D-1+
12ペルト2層No.1+3区1層+
カマド東+9区強張+2区1層

14ペルト2層+13区1層+
カマド振り方+14区1層

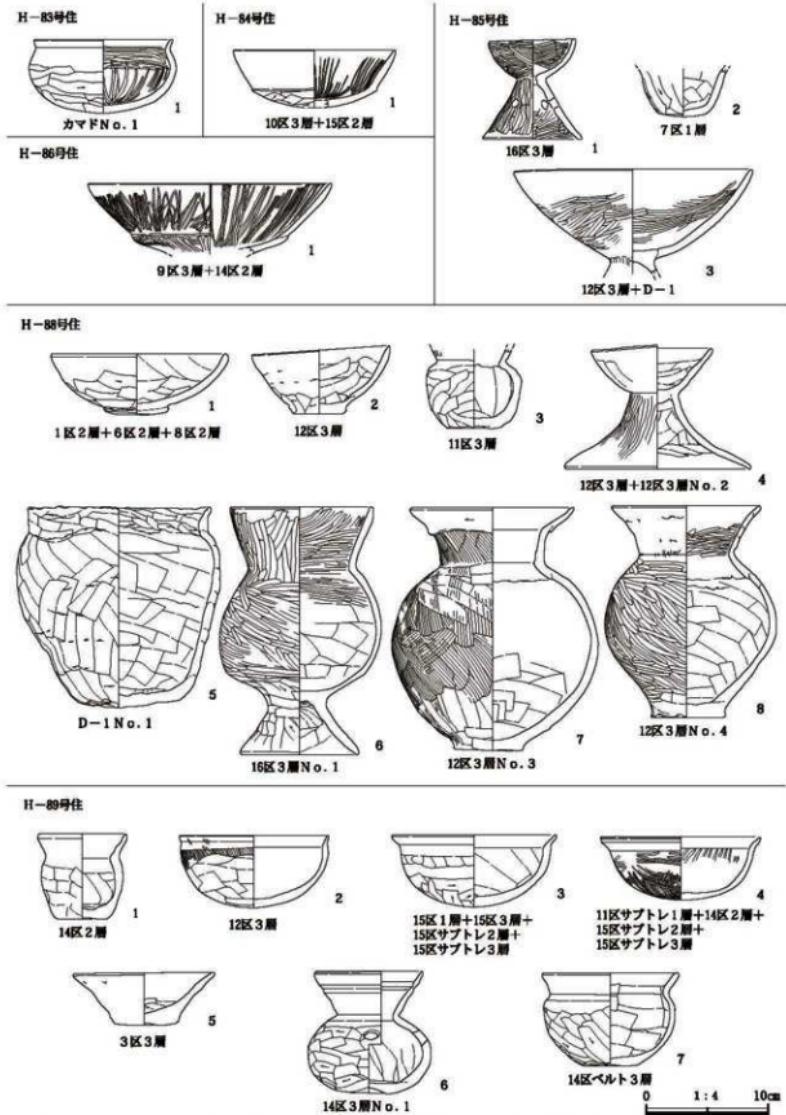


18区1層+D-1

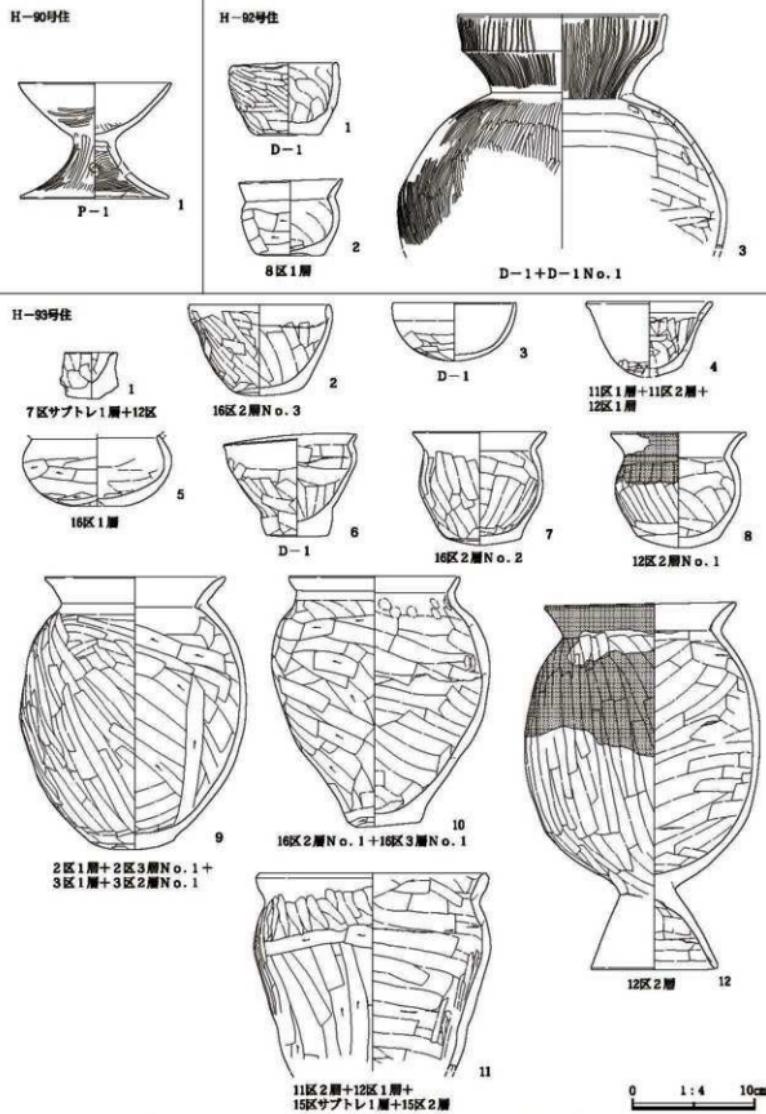
16区2層+N o. 1



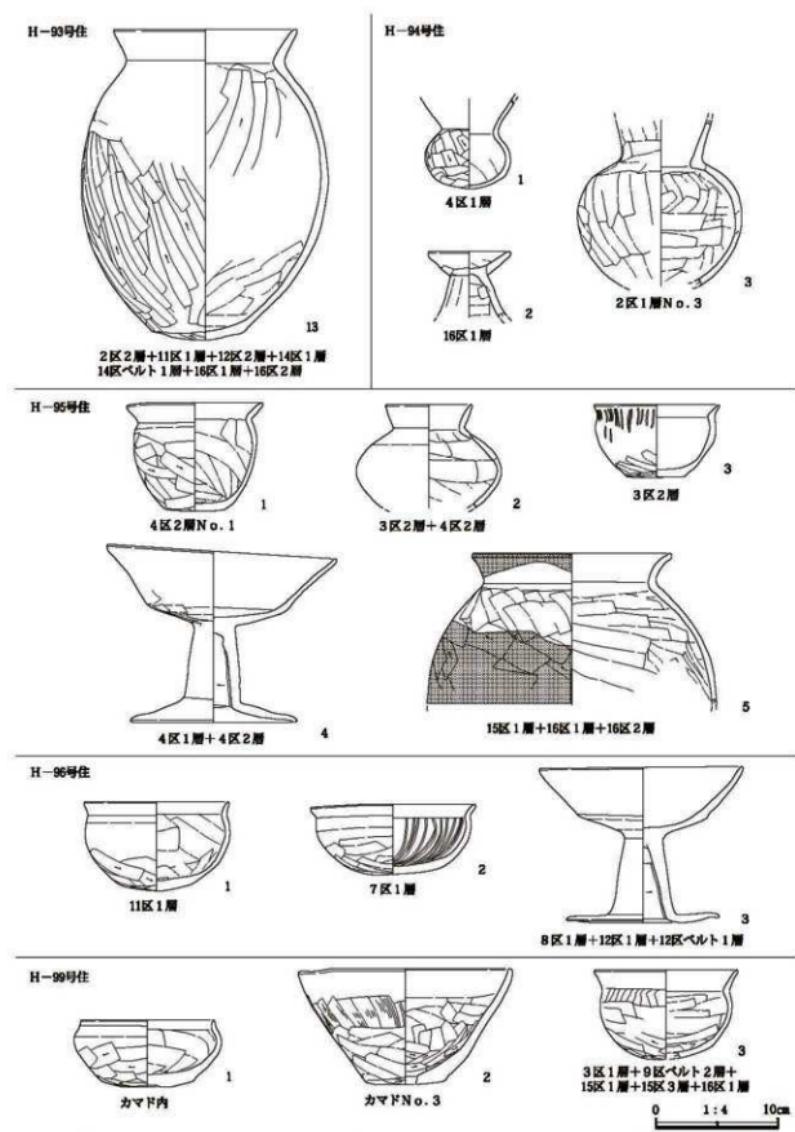
第110図 H-76号・H-77号・H-79号・H-80号住居址出土器実測図



第111図 H-83号・H-84号・H-85号・H-86号・H-88号・H-89号住居址出土土器実測図

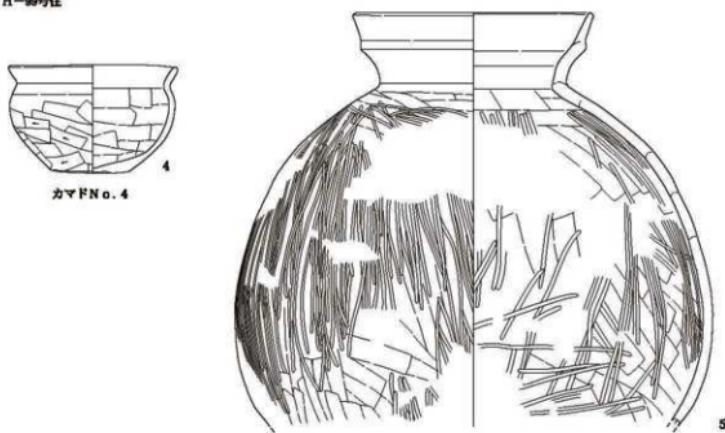


第112図 H-90号・H-92号・H-93号(1)住居址出土器実測図



第113図 H-93号(2)・H-94号・H-95号・H-96号・H-99(1)号住居址出土土器実測図

H-99号住

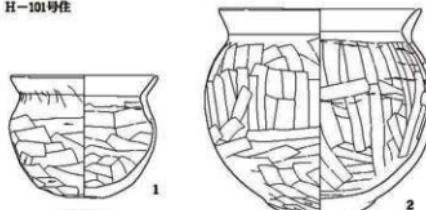


1区1層+2区1層+2区2層+2区サブトレ1層+3区1層+
3区サブトレ1層+4区2層+5区1層+6区3層+7区2層+
7区3層+10区1層+15区サブトレ1層+カマド+カマド内+カマド東

H-100号住

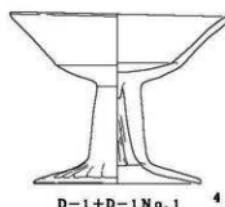
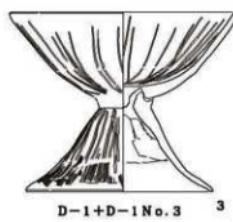
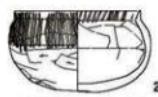
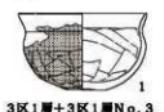


H-101号住



1区2層+2区1層+2区2層+
3区1層+3区2層+4区1層+4区2層

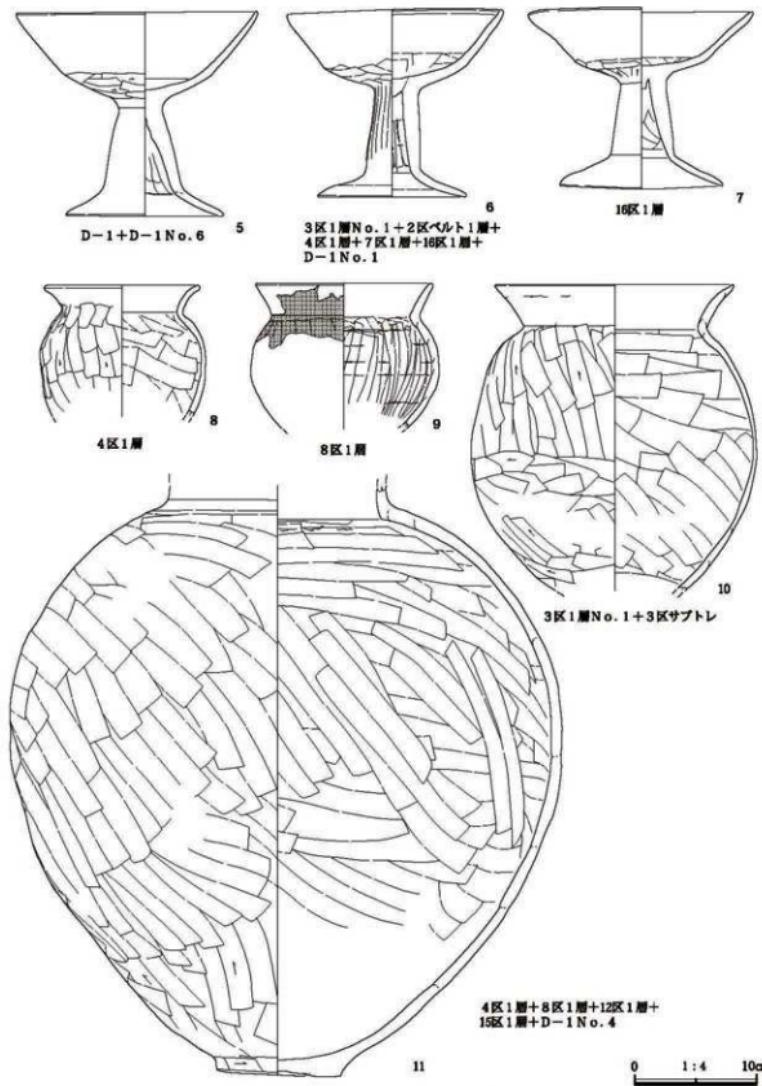
H-103号住



0 1:4 10cm

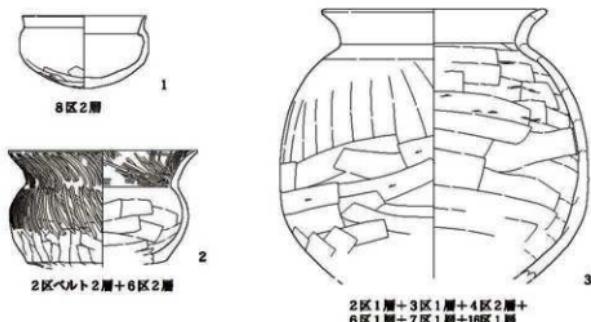
第114図 H-99号(2)・H-100号・H-101号・H-103号(1)号住居址出土器実測図

H-103号住

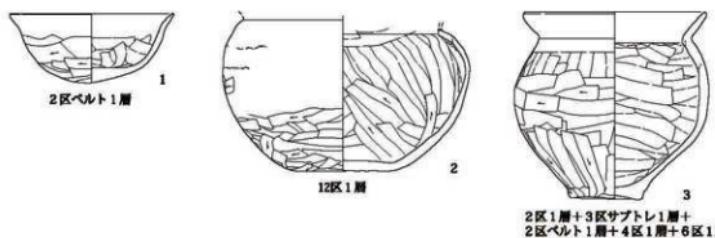


第115図 H-103号(2)住居址出土土器実測図

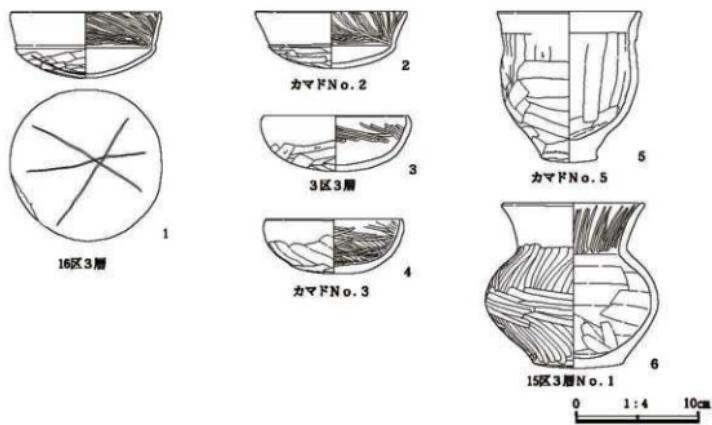
H-104号住



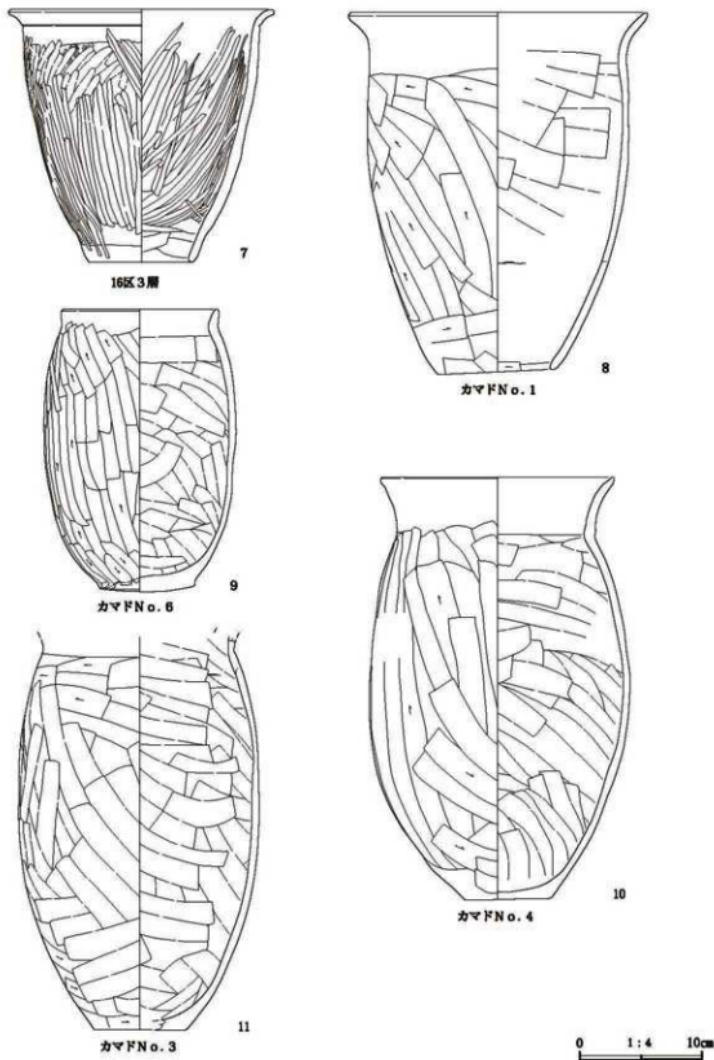
H-105号住



H-107号住

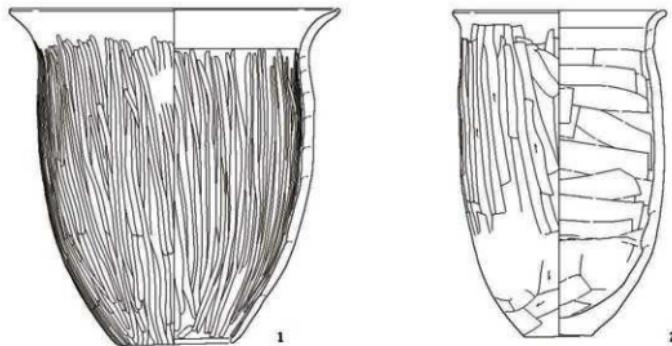


第116図 H-104号・H-105号・H-107号(1)号住居址出土器実測図



第 117 図 H-107 号 (2) 住居址出土土器実測図

H-109号住

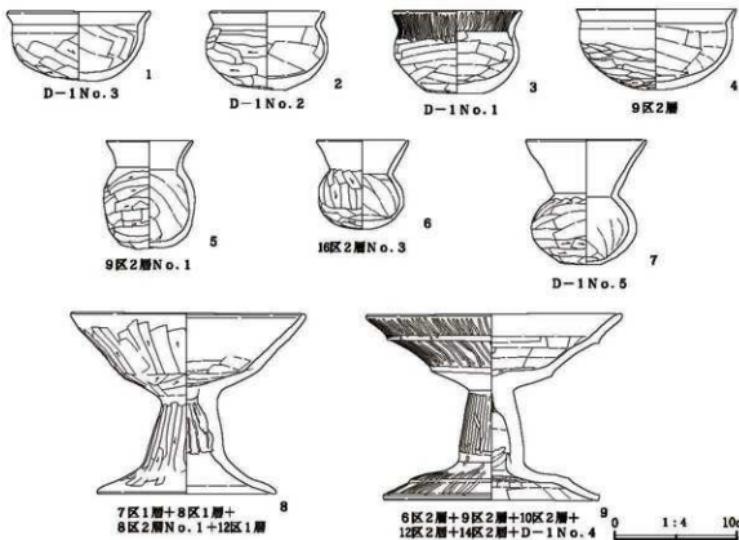


カマド

11区ペルト2層+11区3層+
12区3層+12区ペルト3層+カマド

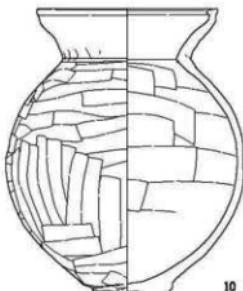


H-111号住

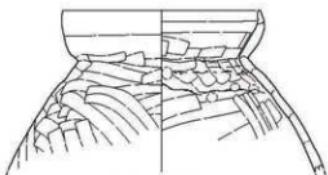


第118図 H-109号・H-111号(1)住居址出土土器実測図

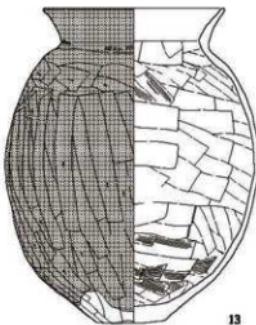
H-111号住



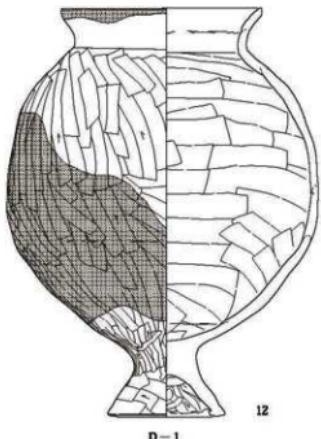
16区2層No. 1



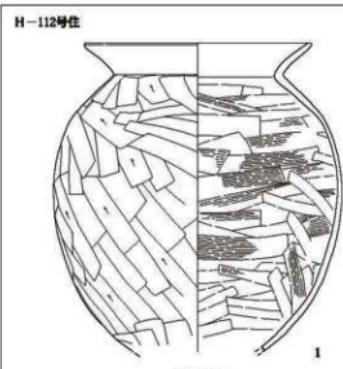
11



D-1 No. 4



D-1

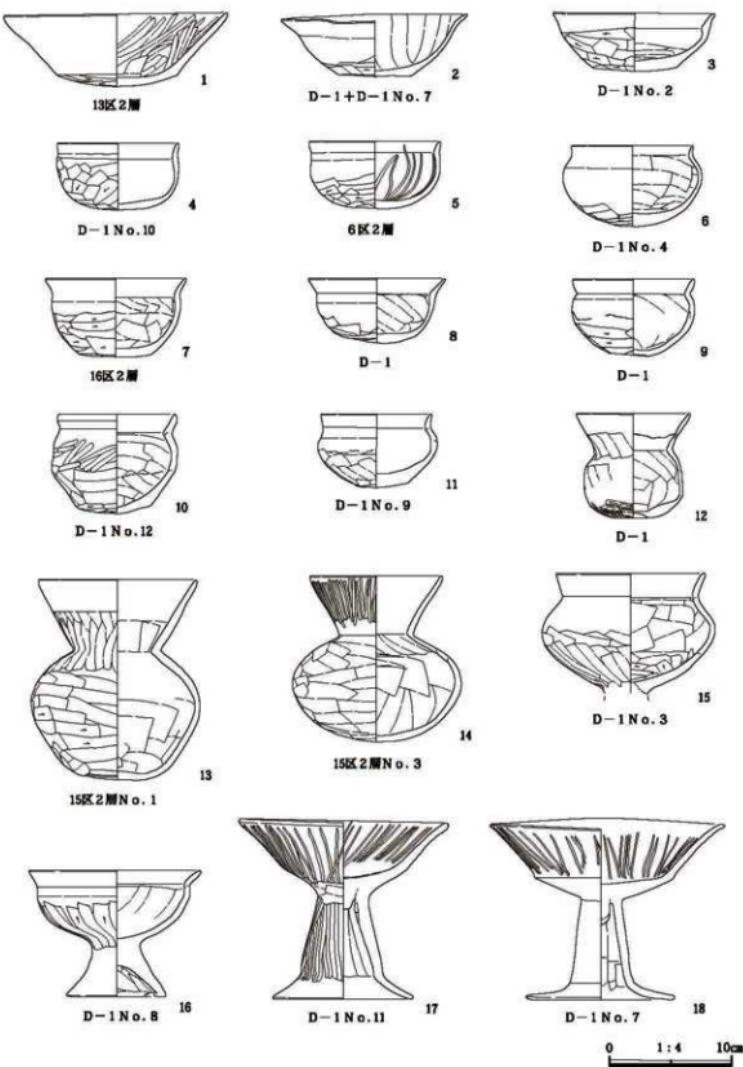


12区1層

0 1:4 10cm

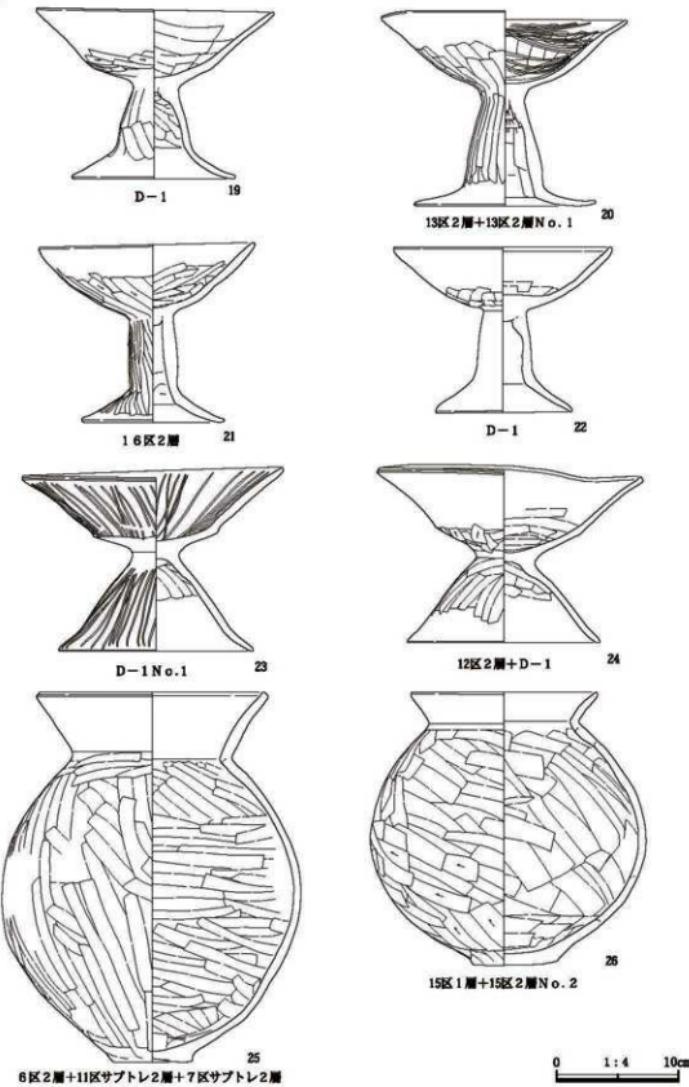
第119圖 H-111号(2)・H-112号住居址出土土器実測図

H-115号住



第120圖 H-115号(1)住居址出土土器実測図

H-115号住

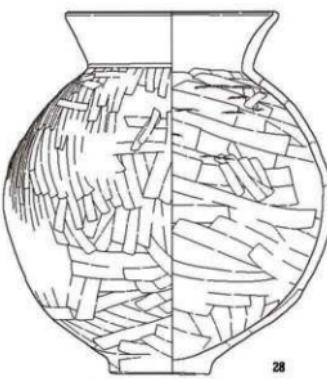


第121図 H-115号(2)住居址出土土器実測図



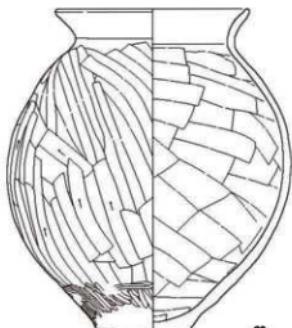
27

2区2層+1区1層+6区1層+6区2層+
7区1層+7区2層+7区サブトレ2層+
11区サブトレNo.2+11区2層+
11区サブトレ2層+12区2層+14区1層+
15区1層+16区2層+2区1層+5区1層



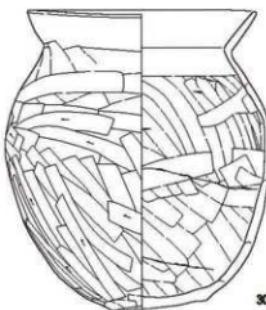
28

5区1層+6区1層+6区2層+
7区2層+14区1層+16区2層+
11区サブトレ3層



29

5区2層No.1



30

12区2層+15区1層+D-1

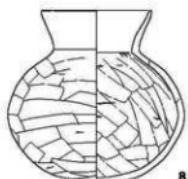
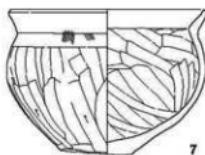
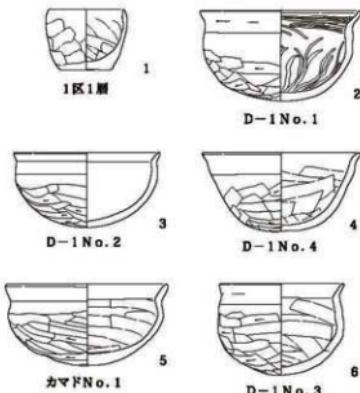
0 1:4 10cm

第122図 H-115号(3)住居址出土器実測図

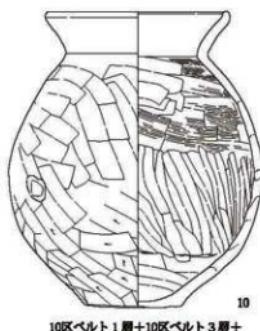
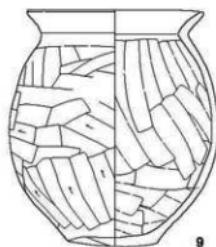
H-115号住



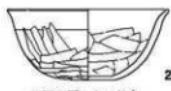
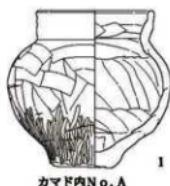
H-116号住



9区ベルト2層+10区2層+カマド+
カマドNo. 2+カマド内



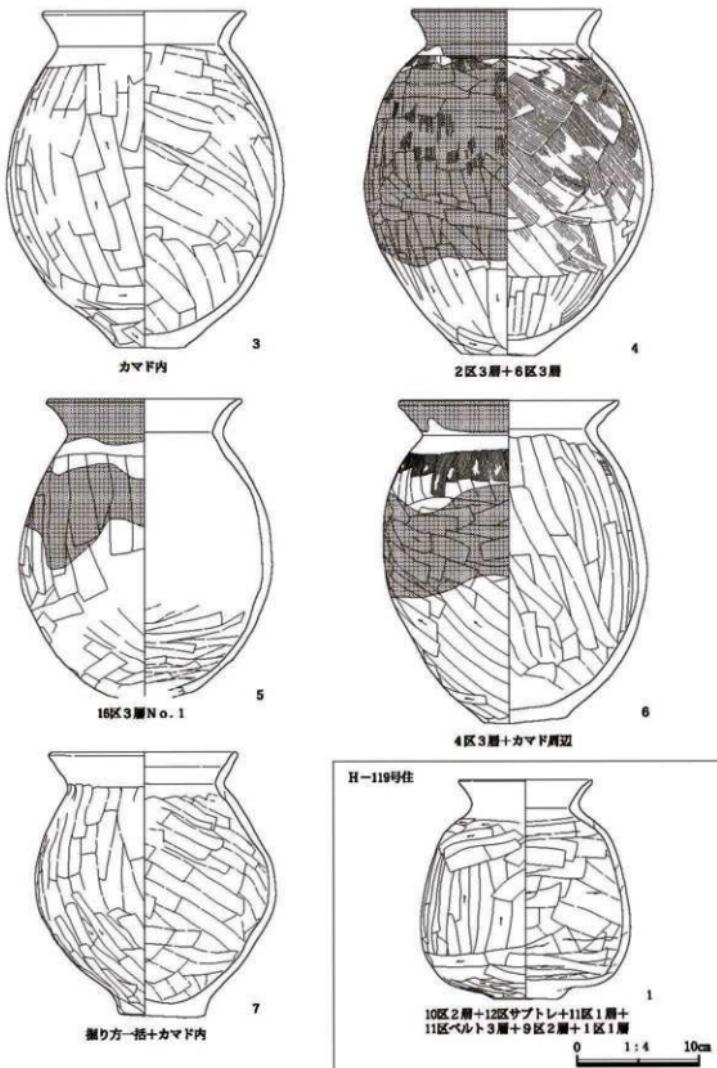
H-117号住



0 1:4 10cm

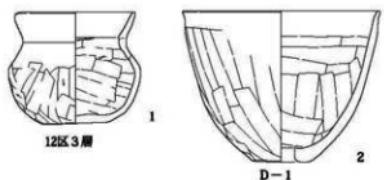
第123図 H-115号(4)・H-116号・H-117号(1)住居址出土器実測図

H-117号住

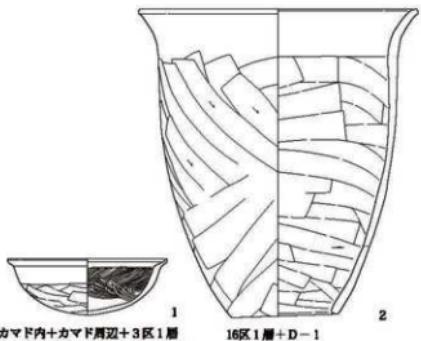


第124図 H-117号(2)・H-119号住居址出土土器実測図

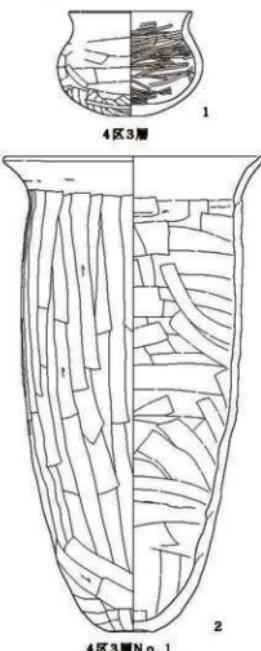
H-120号住



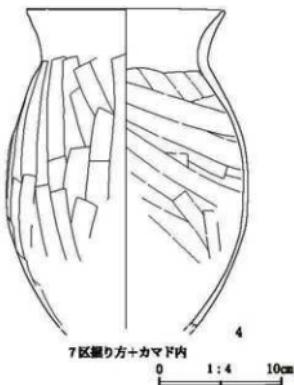
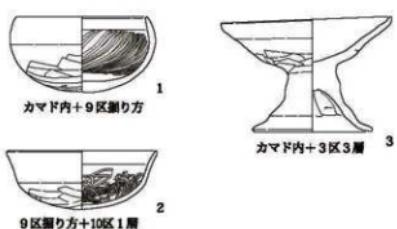
H-123号住



H-122号住

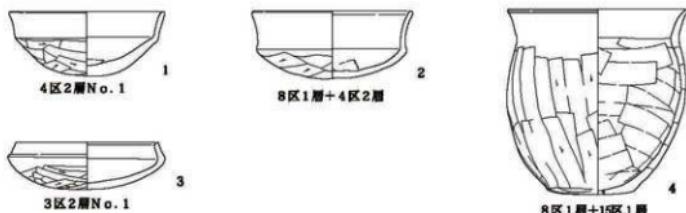


H-124号住

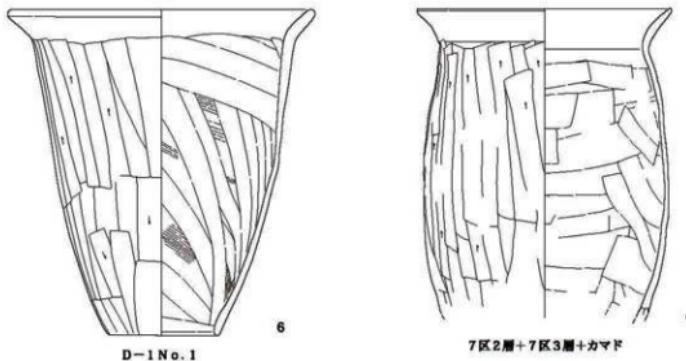
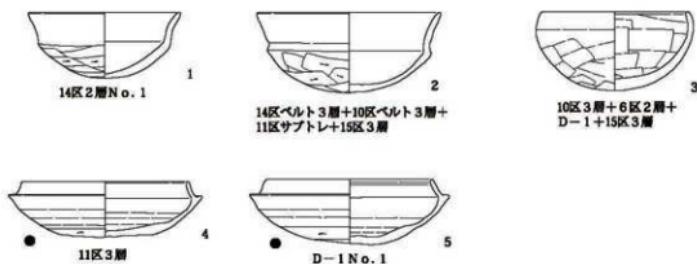


第125図 H-120号・H-122号・H-123号・H-124号住居址出土器実測図

H-125号住



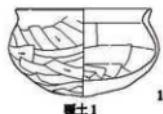
H-126号住



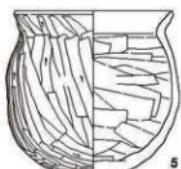
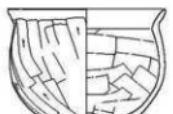
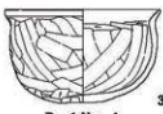
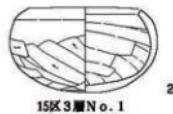
0 1:4 10cm

第126図 H-125号・H-126号住居址出土土器実測図

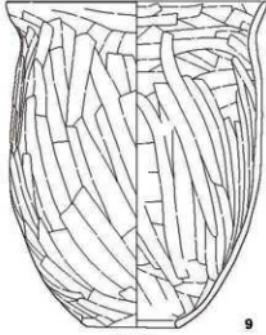
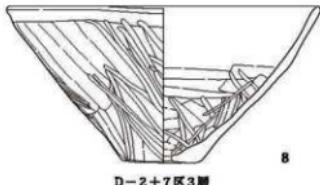
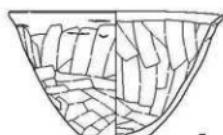
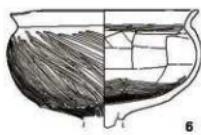
H-127号住



H-129号住



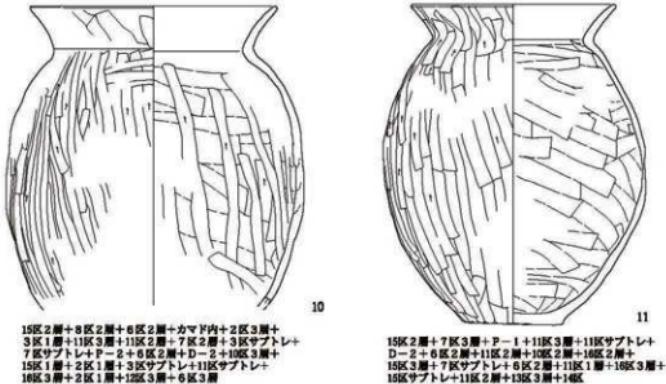
9区 2層 + 16区 3層 +
6区 3層 + 6区 ベルト 2層



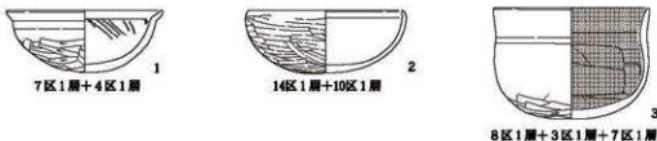
0 1:4 10cm

第127図 H-127号・H-129号(1)住居址出土土器実測図

H-129号住



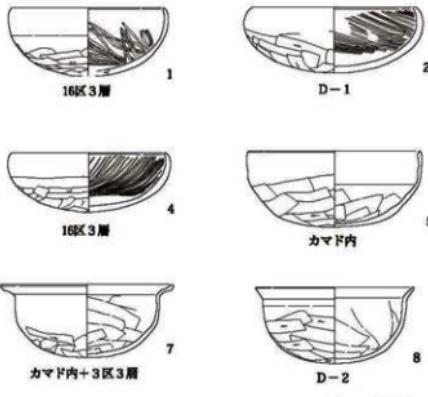
H-130号住



H-131号住



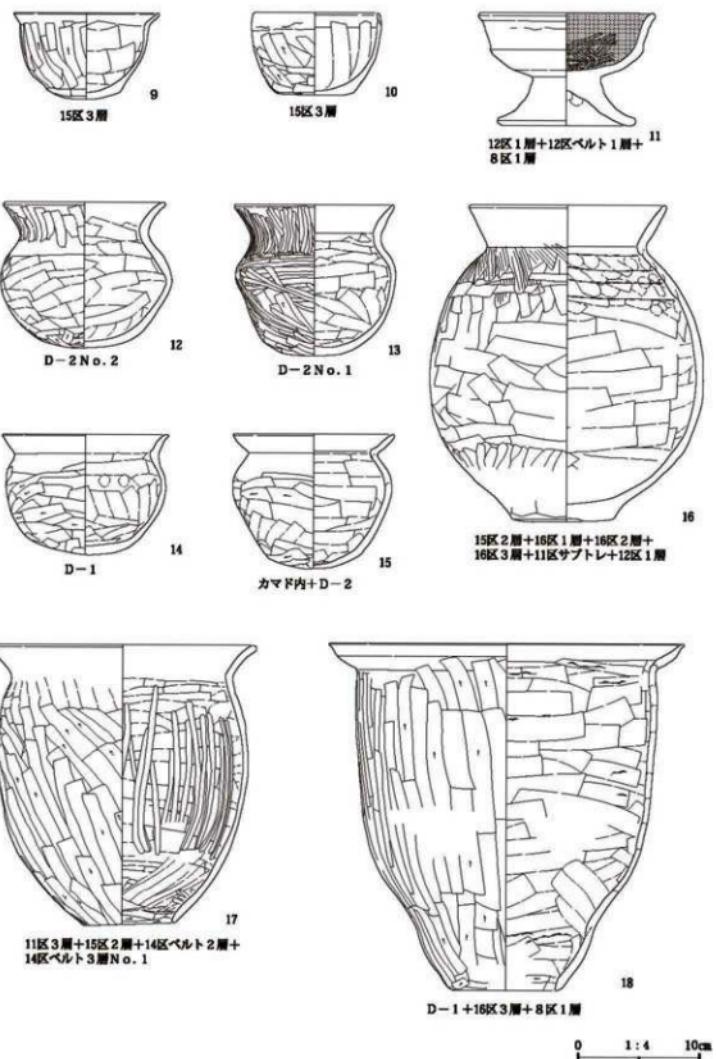
H-133号住



0 1:4 10cm

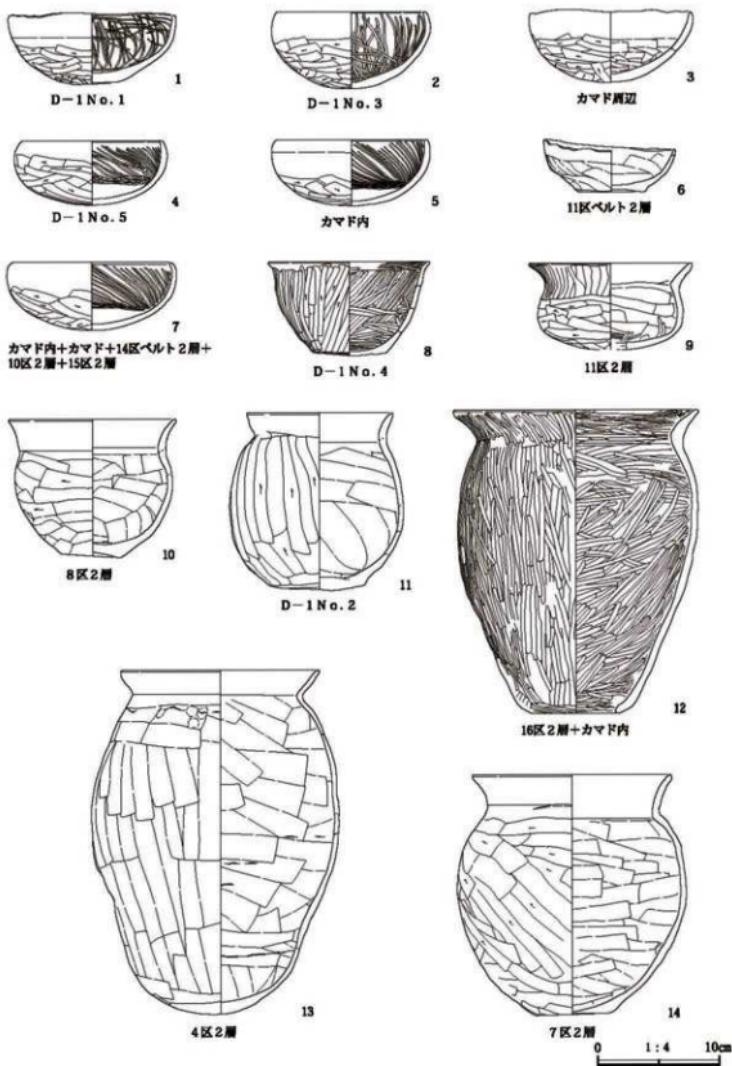
第128図 H-129号(2)・H-130号・H-131号・H-133号(1)住居址出土器実測図

H-133号住



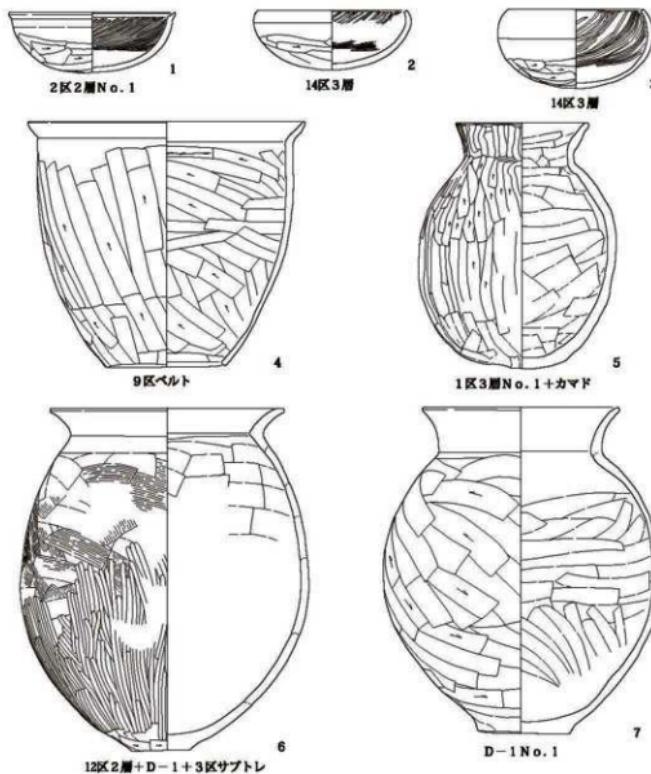
第129図 H-133号(2)住居址出土土器実測図

H-134号住

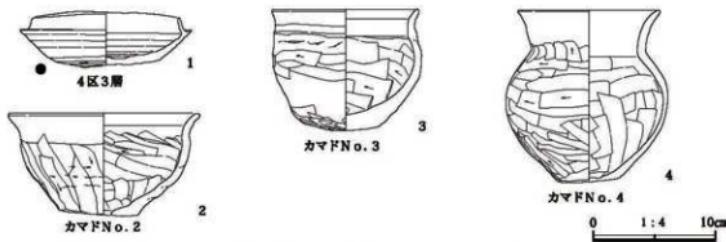


第130図 H-134号住居址出土土器実測図

H-136号住

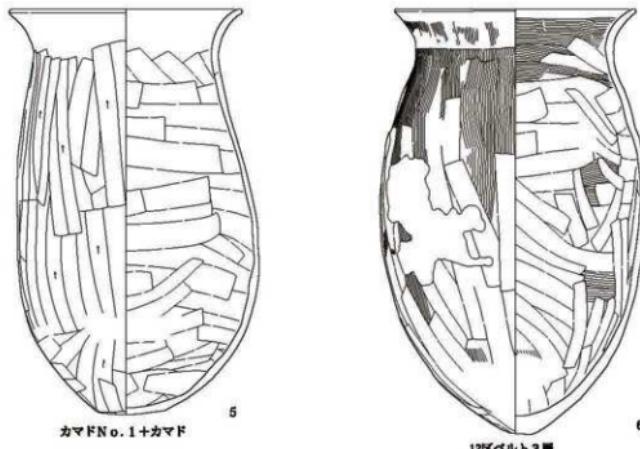


H-137号住



第131図 H-136号・H-137号(1)住居址出土土器実測図

H-137号住

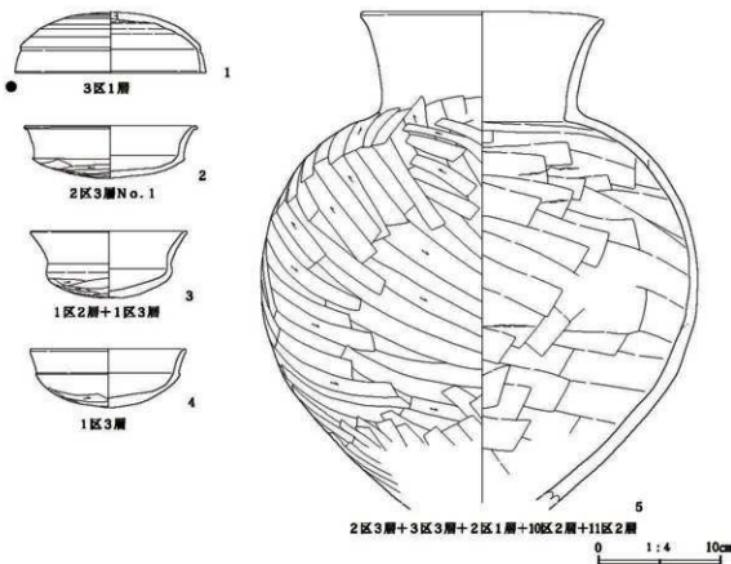


カマドNo.1+カマド

12区ベルト3層

6

H-138号住

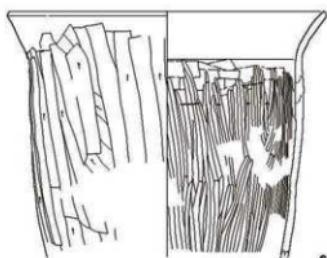


2区3層+3区3層+2区1層+10区2層+11区2層

0 1:4 10cm

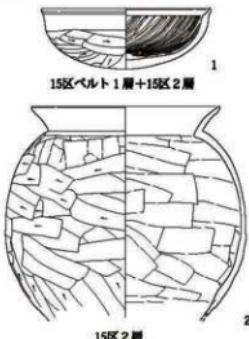
第132図 H-137号(2)・H-138号(1)住居址出土土器実測図

H-138号住



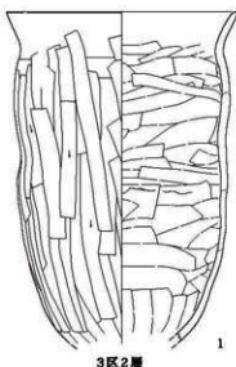
D-1+15区1層+12区2層+4区カマド+
11区サブトレ+8区3層+1区2層+2区2層+
3区2層+16区2層+6区3層+12区1層

H-141号住



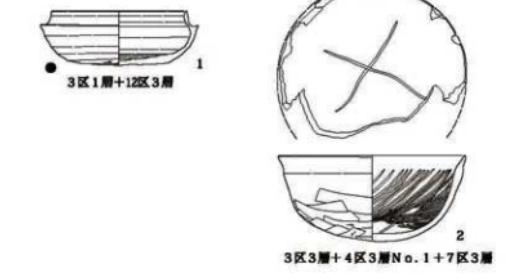
15区ベルト1層+15区2層

H-143号住



3区2層

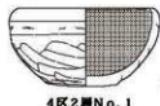
H-145号住



3区1層+12区3層

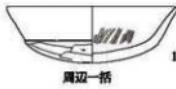
3区3層+4区3層No.1+7区3層

H-144号住

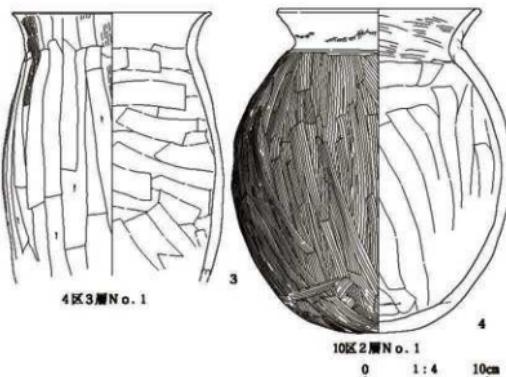


4区2層No.1

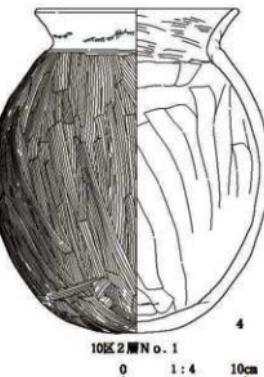
H-146号住



周辺一括



4区3層No.1

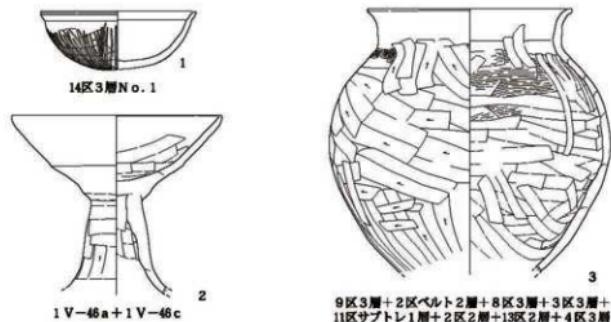


10区2層No.1

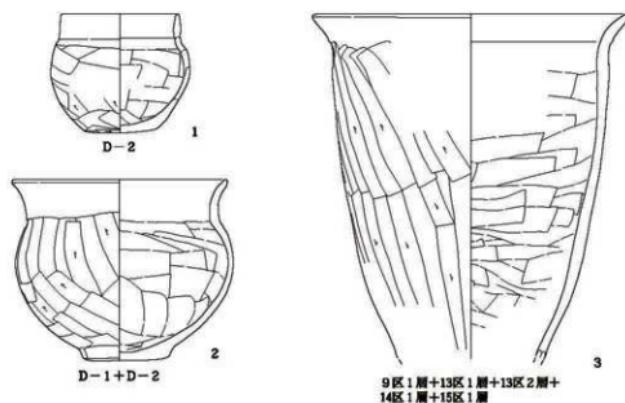
0 1:4 10cm

第133図 H-138号(2)・H-141号・H-143号・H-144号・H-145号・H-146号住居址出土土器実測図

H-149号住



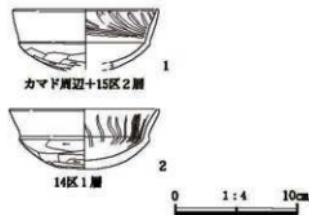
H-150号住



H-151号住

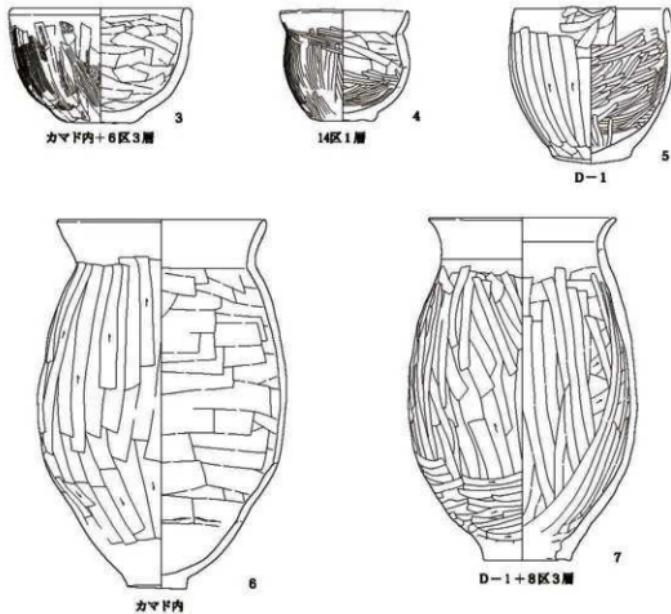


H-152号住

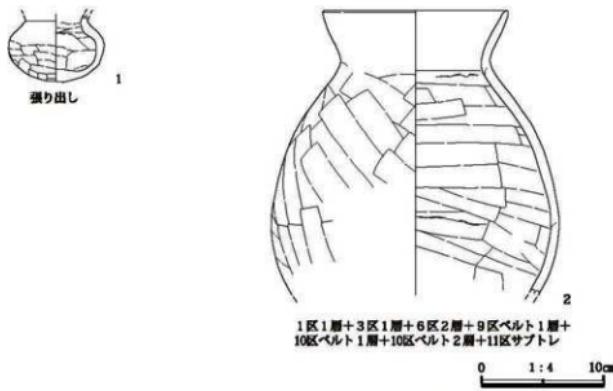


第134図 H-149号・H-150号・H-151号・H-152号(1)住居址出土土器実測図

H-152号住



H-153号住



第135図 H-152号(2)・H-153号住居址出土土器実測図

(2) 石製品・石製模造品・石器 (第136図～第156図、第2表～第4表)

今回の調査では、中期前半を中心とする石製品・石製模造品及び関連遺物（未成品、素材、石核・原石、剥片）が出土した。また、古墳時代住居址の一部では、縞物石、砥石、台石等が出土した。平成17年度の調査で出土した石製模造品が、中期後半以降を中心とする点で対照的である。

古墳時代の石器分類

- A類（石製品）・・・玉類（勾玉・管玉・小玉等、白玉は除く）、特殊遺物（実用品・呪術用）
原石・石核（工程品）
剥片類：未成品、素材剥片、調整剥片・碎片（工程品）
- B類（石製模造品）・・・（石製模造品）：勾玉形、剣形、白玉、有孔円板・方板等（非実用品・祭祀用）
原石・石核（工程品）
剥片類：未成品、素材剥片、調整剥片・碎片（工程品）
- C類（石製品=石器）・・・紡錘車（実用品）
原石・石核（工程品）
剥片類：未成品、素材剥片、調整剥片・碎片（工程品）
- D類・・・その他の石製品（石製模造品以外の石製品、用途不明）
- E類（石器）・・・砥石、台石、蔽石類及び磨石（1類：石製品・石製模造品製作工具、2類：それ以外の工具）
- F類（石器）・・・縞物石（実用品）

石器出土状況及び器種組成（第3・4表）

石製品・石製模造品は、住居址41軒で出土した。また、遺構外でも2カ所で白玉等の製品が集中する範囲が認められた。他時期の石製品・石製模造品が混入している可能性もあるが、遺構の時期及び共伴遺物との関係から、中期前半を主体とする。なお、住居址からは、製品あるいは原石・石核のみが、単独あるいは數点で床面直上から出土する例も多數みられた。また、一部の遺物では、中期後半以降も他時期の住居址覆土中への廻棄あるいは混入による出土がみられた。

住居址出土の器種組成をみると、製作段階で生じる剥片類（製作関連遺物）が極端に少なく、製品、未成品、素材の占める割合が高いといった特徴が認められた。また、製品では、剣形が最も多く、他に勾玉、管玉、白玉等の玉類、有孔円版・方板、紡錘車が少数ある程度で、特定の器種に偏る傾向がみられた。縞物石が最も多くの住居址でみられ、砥石、台石等は一部でしかみられなかった。これらの石器は、床面直上で出土することが多いことから、使用された状態で遺棄されたものと推定できる。

A類では、玉類（勾玉・管玉と未成品を含む）は、住居址で6点、遺構外で3点出土した。
B類では、剣形及び未成品（住居址16軒）、有孔円版・方板及び未成品（住居址8軒）、白玉、算盤玉（住居址2軒）と剣形を中心とした製作遺物（石核5軒、素材は16軒、未成品1軒）が出土した。剥片類は、15軒で出土した。白玉はH-132号住と遺物集中地点（ブロック1・ブロック2）で各100点以上出土した。

C類では、紡錘車は3軒で出土した。E類は、台石は、15軒の住居址、砥石は13軒で、蔽石と磨石は各1軒で出土した。石製品・石製模造品の製作に関連する1類は少なく、作業台あるいは鉄製品の研磨に使用された2類が多い。F類の縞物石は、74軒で出土した。3点以上出土したのは49軒みられ、

そのうち 10 点以上出土したのは、14 輪である。なお、1、2 点出土したのは、25 輪である。

住居址以外では、2 カ所で石製模造品の集中範囲がみられた。ブロック 1 では、1 R - 28 付近で、白玉 25 点が出土した。ブロック 2 では、1 U ~ 1 W - 51 ~ 54 付近で勾玉、管玉、白玉 84 点、剣形 14 点が出土した。集中外では、剥片を中心 19 点出土した。2 カ所のブロックは、石製模造品のみが集中的に出土していることから、集落内における野外祭祀の場であった可能性が考えられる。このような例は、中期後半以降、多く認められる。

器種組成では、前回調査でパターン化されたものと比較して、住居内では、大量に製作するための工房址的な場（パターン A）はもたず、それぞれ必要に応じて部分的な製作活動（素材獲得と加工中心）を行うパターン（B）が若干みられる程度で、ほとんどは、住居址覆土中から、完成品あるいは未成品のみが出土する使用廃棄（C）パターンと剥片類のみで廃棄時に混入した廃棄混入パターン（D）となることが判明した。この点は、工房址と工程を示す遺物が多数出土した前回調査とは異なるもので、製作の在り方の時期差を示している。

石材組成（第 2 表）

A 類～C 類（石製品・石製模造品）の石材は、緑色の滑石（蛇紋岩系）は、6,100 g、白色の滑石は 476.8 g で、滑石以外の石材は、ほとんど利用されていない。蛇紋岩系の滑石が多い点は、白色の滑石を多用した前回調査とは、対照的である。滑石と蛇紋岩は石質的には同一石材であり、細分によって区別された石材である。本報告では、緑色の滑石については、「蛇紋岩系」と呼称する。滑石と蛇紋岩は、藤岡・甘楽地域（群馬県南西部）に広がる「三波川帯」で産出が知られていることから、加賀塚遺跡の石材も肉眼観察による比較と産出地との地理的状況から同地域のものが利用されている可能性が高い。

E 類と F 類の石材は、在地の安山岩が主体的に利用されている。磁石は、流紋岩、頁岩が少數利用されている。流紋岩は、「砥沢石」と呼ばれる南牧村付近で産出する石材と類似する。

石器各説（第 143 図～第 156 図）

A 類（石製品：玉類）

勾玉（1～4）

勾玉は 4 点出土した。石材は全て青緑色の蛇紋岩系である。1 は、整形による角を丁寧な研磨により、滑らかにする断面橢円形となる形状である。2 と 3 は、削り痕が残る荒い研磨によって整形し、断面扁平である。勾玉の模造品に近い調整である。4 は、穿孔後の未成品である。大きさは、長さ 2 cm 前後である。中期後半の住居址、ブロック 1 から出土。

管玉（5～7）

管玉は、3 点出土した。石材は、全て青緑色の蛇紋岩系である。5 は、細型で片側から一直線に穿孔されている。6 は、縦に欠損したもので、太型である両側からの穿孔が認められる。7 は、管玉未成品で、縦方向の削り段階で、細長い多面形で穿孔はない。中期の遺構及びグリッドから出土。

B 類（石製模造品）

剣形（8～36）

剣形は、I 形態（背表面に Y 字状及び平行する稜をもつ形態）と II 形態（両面が平坦となる形態）に分類できる。I 形態は 8～15 である。それ以外は全て II 形態（16～36）である。両面、側面とも研

磨により整形され、断面が三角形（刃がつくもの）と四角形（刃が無いもの）に分けられる。穿孔は1カ所あるいは縦横に2カ所認められる。表面に穿孔痕が円形に残るものもある。石材は、緑色の蛇紋岩系である。中期の遺構（時期不明を含む）が、中心で、中期前半（IV期を中心）の遺構が最も多く、中期後半（V・VI期）も少數みられる。型式による時期差は、I形態が古く、II形態が新しくなる傾向がある。

剣形未成品（37～42）

無孔のものを未成品とした。剣形の製作は、「板状の横長剥片を素材押圧剥離等によって微調整→表面裏面の研磨による厚みを均一にする→側面研磨により平面剣形に調整する」工程が認められる。欠損しているものは、穿孔前に磨耗された遺物である。製品と同様、中期の遺構からが多い。

有孔円板（43～45）

周縁を削って裏表、側面を研磨によって円形に整形されている。形状は、円形ボタン状である。穿孔は、1あるいは2カ所ある。中期後半（V期）が多い点は、前回と同様である。

無孔未成品（46・47）

有孔円版の研磨工程を示す未成品である。

有孔方板（48～50）

素材の両端を折断、研磨によって方形に整形する。1あるいは2カ所の穿孔がある。剣形及び有孔円板の製作技術との共通性がみられる。5世紀前半の遺構からの出土がみられたが、後半の遺構を主体とする。

有孔石製品（51）

両面が研磨された板状の石製品である。穿孔部分の分割面には、分割後の擦り痕が観察される。石材は、滑石ではなく、青黒色の粘板岩系である。単独出土であるため時期は不明。滑石製でない点で、他の時期の可能性がある。

琴柱形石製品（52）

琴柱形石製品の欠損品がH-153号住居址覆土中位から出土した。推定される形態は、下部に半月状の穿孔が3カ所、側縁は浅く抉られる。中部は、横位の細い線刻が施され、欠損した上部には、細長い角窓状のものがあり、その上部に小孔をもつ装飾された横の枠があったものと推定される。石材は、在地ではみられない滑石である。欠損部の摩滅が著しいことから、二次的転用が考えられる。このような石製品は、「垂飾」としての用途が考えられている（亀井1972）。県内では、下佐野Ⅱ遺跡、熊野堂遺跡から、前期の製作工程品を含めたものが出土し、集落内から出土する傾向が指摘されている（女屋1986）。

算盤玉（53）

形態的には白玉と同じであるが、大きさで区別した。形状はやや算盤形となり、表面裏面、側面とも研磨し、穿孔されている。6世紀前半の遺構から出土。

白玉・白玉未成品（57～275）

白玉はH-132号住で111点、その他の遺構で1点、2カ所の白玉集中地点で109点（1R-28グリッド周辺25点及び1V-52グリッド周辺84点）、その他グリッド2点、合計223点出土した。

H-132号住居址の白玉は、大きさの平均は、径5mm、厚さ3mmである。単独で出土しているは、H-154号住居址のみである。住居址及びブロック2出土の白玉は同規格である。ブロック2（1R

— 28周辺) の白玉は、ブロック 1 と比較して大形である。石材では、ブロック 2 の白玉は、緑色系の滑石(蛇紋岩系)、住居址及びブロック 1 は、白色の滑石が多かったが、両石材が混在する。白玉は全て搬入で、製作工程は、認められなかった。未成品と欠損品の状態から、円形に形割りした素材に穿孔をし、その後、表裏及び側面に研磨を施すことで、形状を均一的に仕上げている。今回出土した白玉の形態から、中期後半以降と推定される。

C類(石製品=石器)

筋縫車(276 ~ 277)

筋縫車は住居址から 2 点出土した。大きさは 5 ~ 5.5cm、厚みは 1cm 前後、断面はレンズ状、扁平で浅い逆台形である。調整は、ノミ状工具で同心円状に削った後、研磨によって表面を滑らかに仕上げている。石材は、黒味の強い蛇紋岩系である。中期前半の遺構から出土。

石製品・石製模造品製作工程品(278 ~ 295)

石核(278 ~ 281、283、284)、原石(282)、大形素材(285 ~ 293)、素材剥片(296 ~ 308、317 ~ 321) その他の未成品(309 ~ 316、322 ~ 330)、剥片類に分類した。製作工程品は、5 世紀前半(IV 期)の遺構を中心に出土。中期後半以降は、単独出土が多い。

石製品・石製模造品を含む「玉作」の基本工程は、寺村光晴氏が示した「1 原石採取 - 2 荒削 - 3 形割 - 4 微調整(側面打裂) - 5 研磨 - 6 穿孔 - 7 仕上げ(修正) - 8 完成」といった工程が一般的である。(寺村 1980・1980・2004)。今回調査分では、原石及び素材と製品を主体としており、製作工程の段階を示す調整剥片、碎片は極端に少ない。このことから、原石から作出される素材版片は、素材となる大きさの剥片を獲得し、あまり手を加えずに素材の形状を生かした調整(直接研磨等)を施したものと推定される。

石核・原石・大形素材

石核は、重量が 1kg 程の大形標と棒状の標があり、表面には、金属器による削り痕と敲打痕が観察される。284 は、石核 2 点と剥片 3 点の接合資料で、金属器による削りが観察できる。また、敲打によって分割されている。7 世紀の H-122 号住から出土し、本来の組成時期とは異なる。原石は、重量が 1kg を超える台石状のもので、表裏には金属器による細い縦条痕と削り痕が観察される。

大形素材は、厚手の矩形剥片あるいは長形剥片で、剥離及び削り、一部研磨等も確認できる製作工程を示すもので、剣形の素材となるものである。294 は、勾玉の製作工程を示す物で、削りによって勾玉の形状(抉りをもつ)に荒く仕上げたものである。295 は、円形に荒削りされた筋縫車の製作工程品である。製作途中の欠損により廃棄されたと考えられる。石材は、緑色の蛇紋岩系である。

素材剥片・未成品

素材剥片は、石製品の形状に適した剥片に荒い調整(1 次調整)を施した剥片段階のもので、未成品は、研磨等の 2 次調整を施し、石製品の仕上げ段階のものとした。ただし、两者とも製作段階の違いで区別されるだけで、素材としては同じ工程品であるが、目的とした器種が特定しにくい。素材剥片は、縦長で先端が尖る菱形となるものが多く、剣形を意識して作出されたものと考えられる。また、矩形あるいは円形のものは、有孔円版・方板の素材と考えられる。未成品には、剣形(309・310、322 ~ 325)、有孔円版・方板(311 ~ 316)、剣形あるいは他の石製品(326 ~ 330)がある。

石製模造品とその工程品を検討した結果、剣形の製作を中心にしていたことが推定される。また、その製作工程で作出される素材を用いて、副次的に円版・方板等が製作されている。

H-111号住居址出土の製作工程品（331～335）

本住居址では、蛇紋岩の素材が5点出土した。素材の表面には、削り痕が観察され、縦長が多いことから、剣形の素材と考えられる。中期後半（V期）。

D類（石製品）

石製模造品以外の石製品の出土は、確認できなかつたが、用途不明の結晶片岩の嵌入礫が2点出土した（341・342）。中期の遺構から出土。

E類（石器）

砥石（336～340）

砥石は、17点出土した。流紋岩製のものは、平面橢円で断面扁平の形態（336、339）と角柱状で断面四角形となる形態（337、338、340）がある。裏表、側面の研ぎ面は、研磨により平滑である。中期前半（III・IV期）の住居址から出土。

台石（343～350）

台石は、21点出土した。出土状況には床面に置かれた状態と覆土へ廻棄された状態がみられ、比較的台石を組成する住居址が多い特徴が認められた。表面には、敲打痕あるいは平滑面が残ることから、作業台として石製模造品の製作以外にも使用されたと考えられる。石材は、安山岩の大形自然礫が多い。他に牛伏砂岩製のものもある。346は、3世紀後半の住居址、343は、5世紀後半（V期）、他は5世紀前半（III・IV期）の住居址から出土。

F類（石器）

編物石（第140図～第141図）

編物石は、511点出土した。編み物石は、長さの集計によって、概ね6～17cm、幅4～8cmに集中するものとした。それ以外の規格のものは、用途を特定しない嵌入礫とした。大きさの平均（カッコ内は前回調査分の数値）は、長さ12.8cm（13.0cm）、幅6.2cm（6.1cm）、厚さ4.4cm（4.4cm）、重量514.3g（548.6g）で、前回調査分と同様の規格をもつ結果となった。また、大きさによって大小2つのグループが存在し、小形（長さ6～9cm）では、橢円形、大形（9～170cm）では、長幅比が3：1に近い棒状となるものが多い傾向が認められた。重量度数は、400～500gが最も多く、その前後（300～700gの間）に集中する。時期別に編み物石を集計した結果、中期前半では、大きさに大小の2つのグループがみられる。中期後半では、大形のものが多く、大きさも均一となる。後期後半では、大形のものが多いが、大きさには幅がみられる。後期後半では、大形のものが多いが、中期後半のものに比べやや小振りとなる。同様な傾向は、前回調査分でも認められることから、時期による大きさの違いの存在が考えられる。編み物石の石材は、頁岩1点を除き、全て安山岩の自然礫である。前回調査分の編み物石と同様に、一部には、磨面、線条痕、敲打痕が認められた。本来の用途である「鍊」としての機能ではなく、異なる用途にも兼用した石器であったと考えられる。

嵌入礫（第141図）

住居址から出土する編み物石の規格から外れる自然礫で、長さ2cmの小礫から、20cmを超える大形礫が、住居址から多数出土した。一部編み物石の規格を満たす礫も含まれるが、大きさ、形状から判断される用途・機能は不明である。重量度数では、100g以下の小礫、大形礫は、1～1.5kgに集中する。

（井上慎也）

	滑石		蛇紋岩		その他		合計	その他の石材
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)		
H-5 3			1	2.2			1	2.2
H-5 4			1	94.5			1	94.5
H-5 5			1	1.5			1	1.5
H-5 6			2	22.3			2	22.3
H-5 8			1	3.3			1	3.3
H-5 9			2	125.9			2	125.9
H-6 1			1	6.9			1	6.9
H-6 2			2	4.7			2	4.7
H-6 5			6	64.4	2	42.2	8	106.6 片岩
H-7 7			1	1.2	1	0.4	2	1.6 片岩
H-8 9	1	15.1	6	847.2			7	862.3
H-9 3	1	11.3	2	33.7			3	45
H-9 5			4	2452.7			4	2452.7
H-9 7			2	1.5			2	1.5
H-9 8			1	14.4			1	14.4
H-9 9			3	27.3			3	27.3
H-1 0 0			4	16			4	16
H-1 0 3			5	380.8			5	380.8
H-1 0 4			2	80.4			2	80.4
H-1 0 5	3	60.2					3	60.2
H-1 0 7			1	1.4			1	1.4
H-1 1 1	1	2.1	11	918.5			12	920.6
H-1 1 2	2	114.3	2	640.2	1	15.5	5	770 片岩
H-1 1 3			3	7.7			3	7.7
H-1 1 6			1	39.3			1	39.3
H-1 1 7			2	47.4			2	47.4
H-1 1 8			2	8.9			2	8.9
H-1 1 9			1	5.8			1	5.8
H-1 2 2	5	243.4	1	2.8			6	246.2
H-1 2 9			2	4.4			2	4.4
H-1 3 0	1	0.9	2	14			3	14.9
H-1 3 2	13	29.5	121	93			134	122.5
H-1 3 5			1	8.4			1	8.4
H-1 4 1			2	6.6			2	6.6
H-1 4 2			1	1.8			1	1.8
H-1 4 4			1	0.5			1	0.5
H-1 4 6			1	2.3			1	2.3
H-1 4 9			2	109.5			2	109.5
H-1 5 2			1	3.2			1	3.2
H-1 5 3			2	3.2			2	3.2
H-1 5 4			1	0.4			1	0.4
小計	27	476.8	208	6100.2	4	58.1	239	6635.1
グリット	1	4.7	196	200.8	2	9.2	199	214.7 黏板岩
一括			2	1.2			2	1.2
小計	1	4.7	198	202	2	9.2	201	215.9
合計	28	481.5	406	6302.2	6	67.3	440	6851

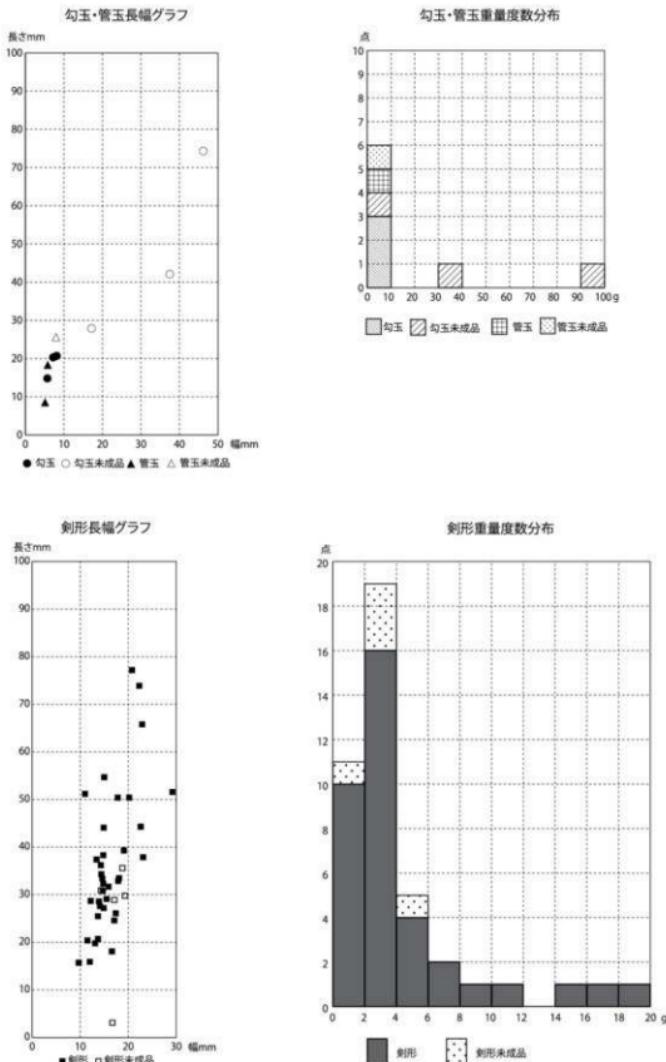
第2表 石製品・石製模造品石材組成表

	石器	石器片	刮削器	刮削器片	磨制器	磨制器片	石核	石核片	石块	石片	刮削器	刮削器片	石器
H-53			1										1
H-54													1
H-55	1												1
H-56		2											2
H-58		1											1
H-59									2				2
H-61									1				1
H-62										2			2
H-65		2			2		2				1	1	8
H-77											1	1	2
H-89				1			1	1	4				7
H-93				1			1	1					3
H-95								1	3				4
H-97										2			2
H-98		1											1
H-99		2		1									3
H-100		1						1		2			4
H-103	1	1						1	1			1	5
H-104									2				2
H-105									3				3
H-107							1						1
H-111	1		1	1				5	2	1			12
H-112		1						3	1				5
H-113		1								2			3
H-116								1					1
H-117	1										1		2
H-118		1		1									2
H-119		1											1
H-122					1			3	2				6
H-129		2											2
H-130		1						1		1			3
H-132	1	3					111			17	1	1	134
H-135											1		1
H-141			2										2
H-142											1		1
H-144											1		1
H-146		1											1
H-149	1							1					2
H-152										1			1
H-153		1					1						2
H-154								1					1
小計	2	3	1	0	23	3	1	2	3	3	1	1	112
ダリット	1	1	1	14	2		1	1		109	5	6	58
一括													199
小計	1	0	1	1	14	2	0	1	0	1	0	0	659
合計	3	3	2	1	37	5	1	3	3	4	1	1	222
										34	1	7	99
											2	2	1
											1	1	440

第3表 石器・石製品遺構別組成表(1)

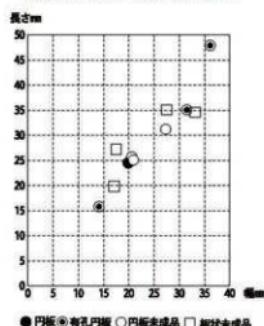
	石器	骨	角	蚌	貝	カマド内	カマド外	石器							
H-52	1							1							
H-55				1				1							
H-56	8							8							
H-57	2	1						3							
H-58	7							7							
H-59	22	2	1	1				26							
H-60	1	1						2							
H-61	3							3							
H-62	5							5							
H-65	6	1						9							
H-67	2							2							
H-68		1						1							
H-69	9							9							
H-70	1							1							
H-71	20		1					21							
H-72	2							2							
H-73	4							4							
H-75	9							9							
H-76	9							9							
H-77	9	1	2					12							
H-78	1							1							
H-79	18							18							
H-83	3		1					4							
H-84	1							1							
H-86	7							7							
H-87	2							2							
H-88	9	1	2					12							
H-89	20							20							
H-91	2							2							
H-92	9							9							
H-93	15	1	1					17							
H-94	2							2							
H-95	15	2	1					18							
H-96		2						2							
H-97	1							1							
H-98								0							
H-99	4							4							
H-100	1							1							
H-103	7	1	1					9							
H-104	5							5							
H-105	6							6							
H-106	1							1							
H-107	17							17							
H-108		1						1							
H-109	4	1						5							
H-111	18	3				1		22							
H-112	5		1					6							
H-113	3				1			4							
H-115	16	2						18							
H-116	9	1						10							
H-117	2							2							
H-118	2							2							

第4表 石器・石製品遺物別組成表(2)

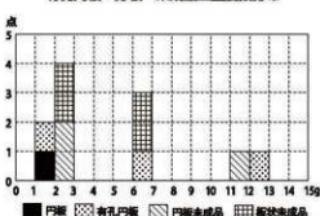


第136図 石製品・石製模造品計測グラフ（1）

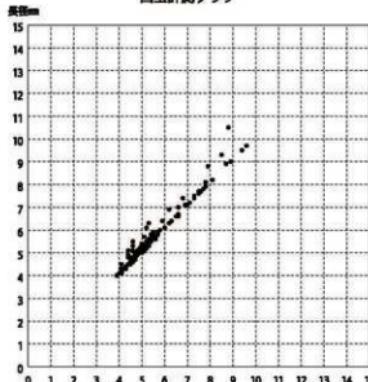
有孔円板・方板・未成品長幅グラフ



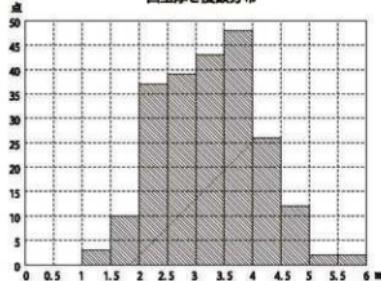
有孔円板・方板・未成品重量度数分布



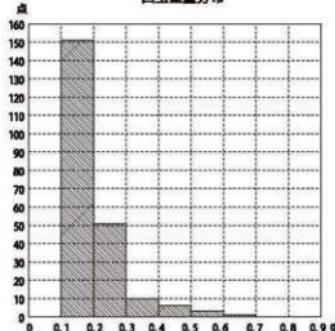
白玉計測グラフ



白玉厚さ度数分布

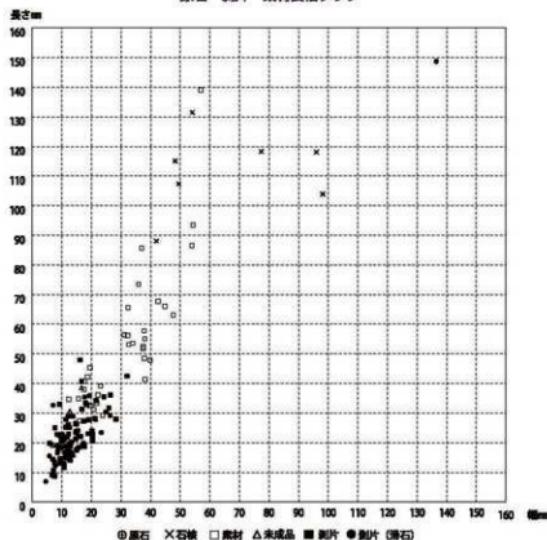


白玉重量分布

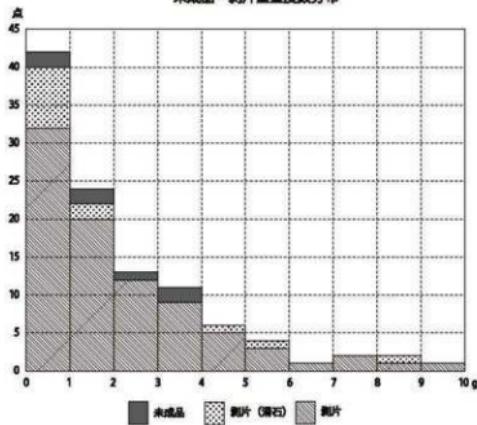


第 137 図 石製品・石製模造品計測グラフ (2)

原石・剥片・素材長幅グラフ

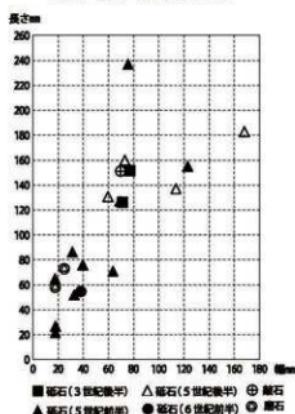


未成品・剥片重量度数分布

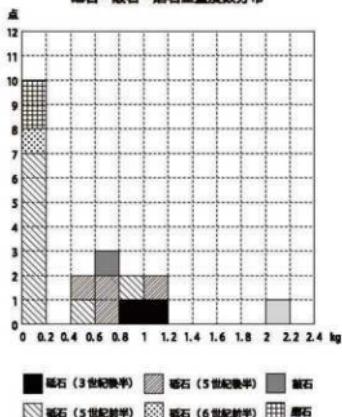


第138図 石製品・石製模造品計測グラフ(3)

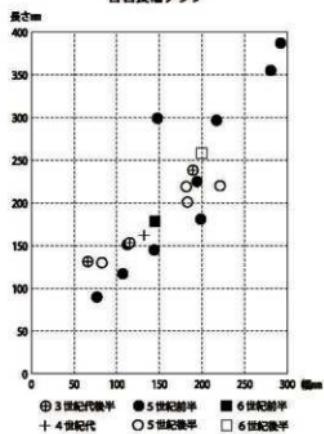
延石・敲石・磨石長幅グラフ



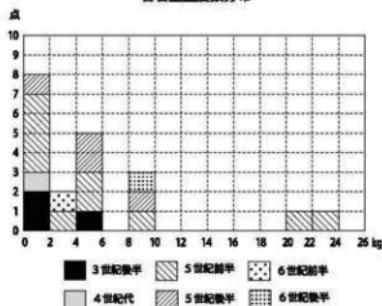
延石・敲石・磨石重量度数分布



台石長幅グラフ



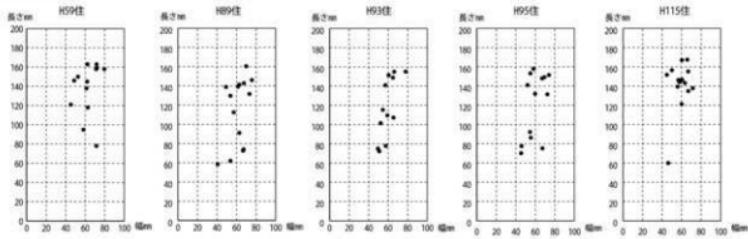
台石重量度数分布



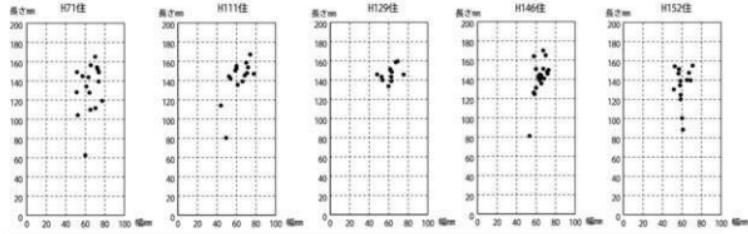
第139図 石器計測グラフ(1)

縞物石長幅グラフ

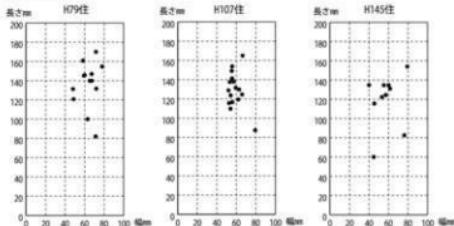
5世紀前半



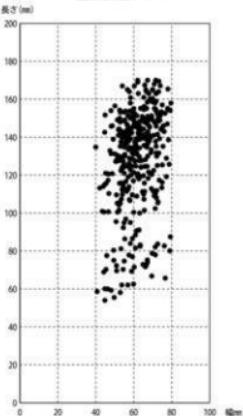
5世紀後半



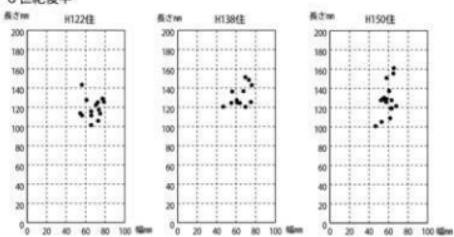
6世紀前半



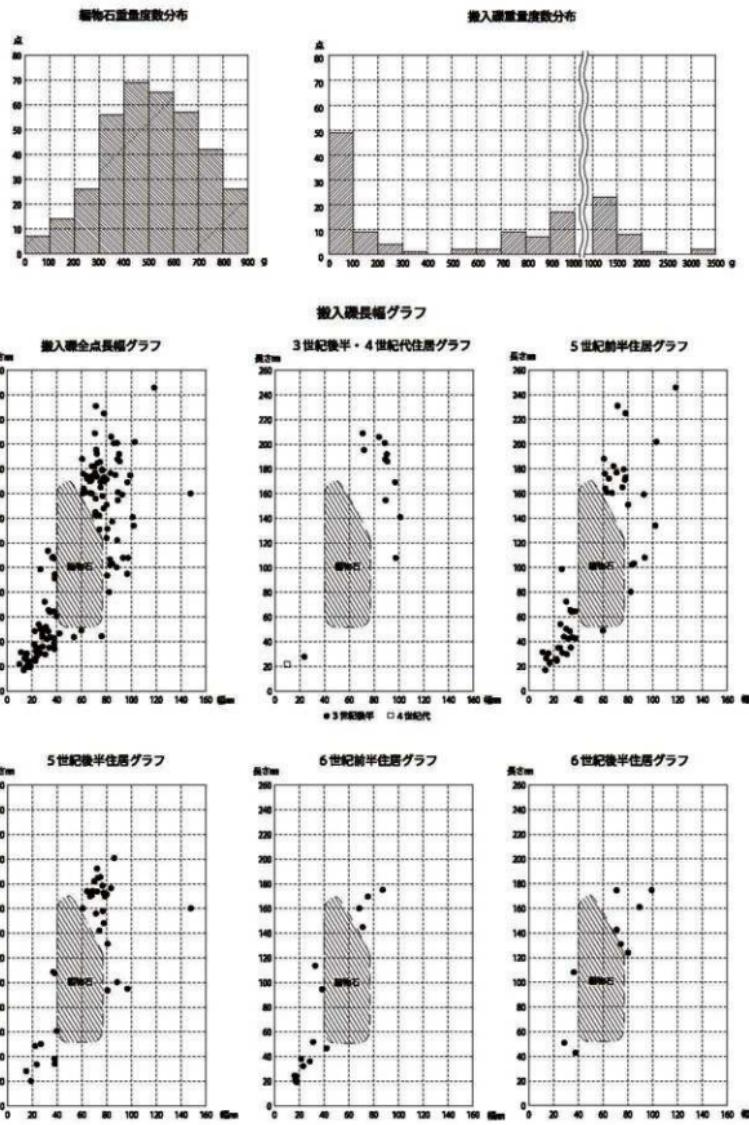
全点長幅グラフ



6世紀後半

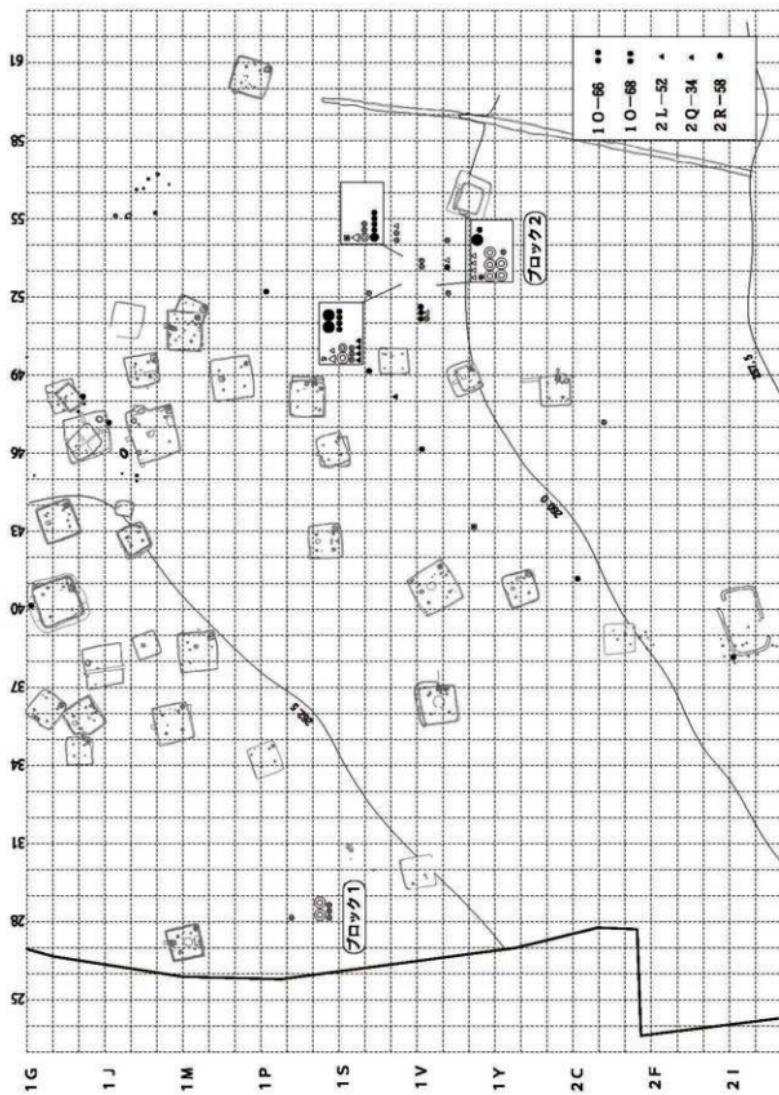


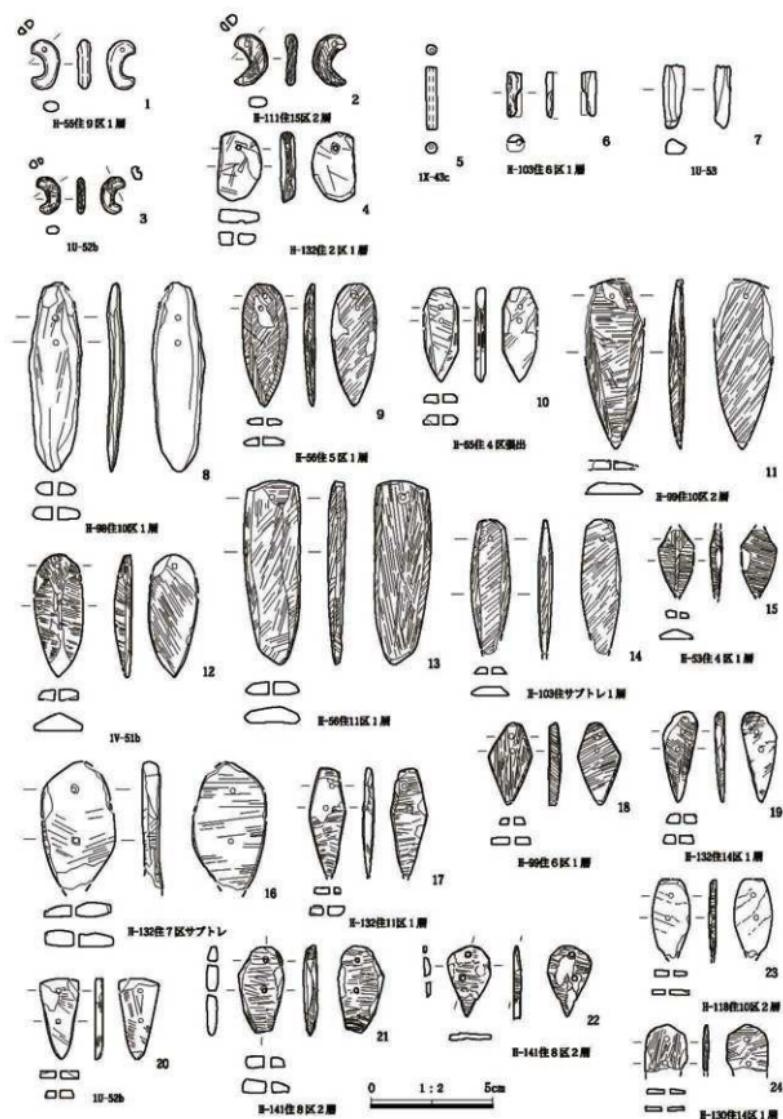
第140図 石器計測グラフ（2）



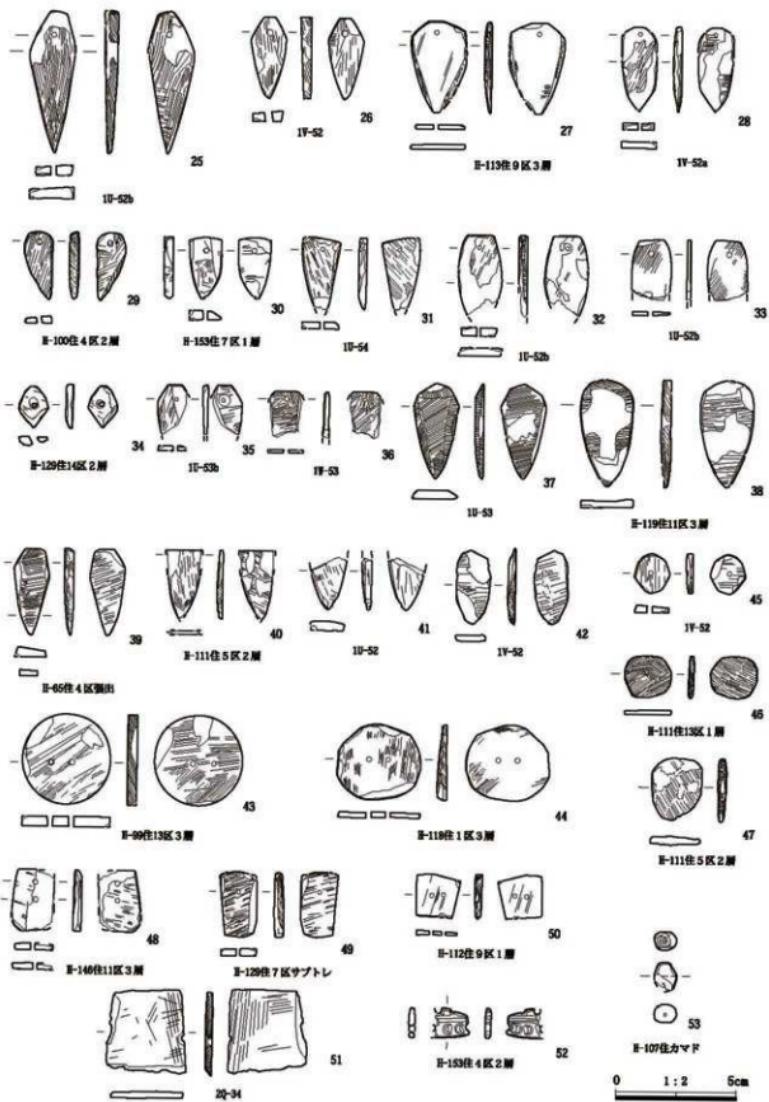
第141図 石器計測グラフ(3)

第142図 石製品・石器焼造品分布図



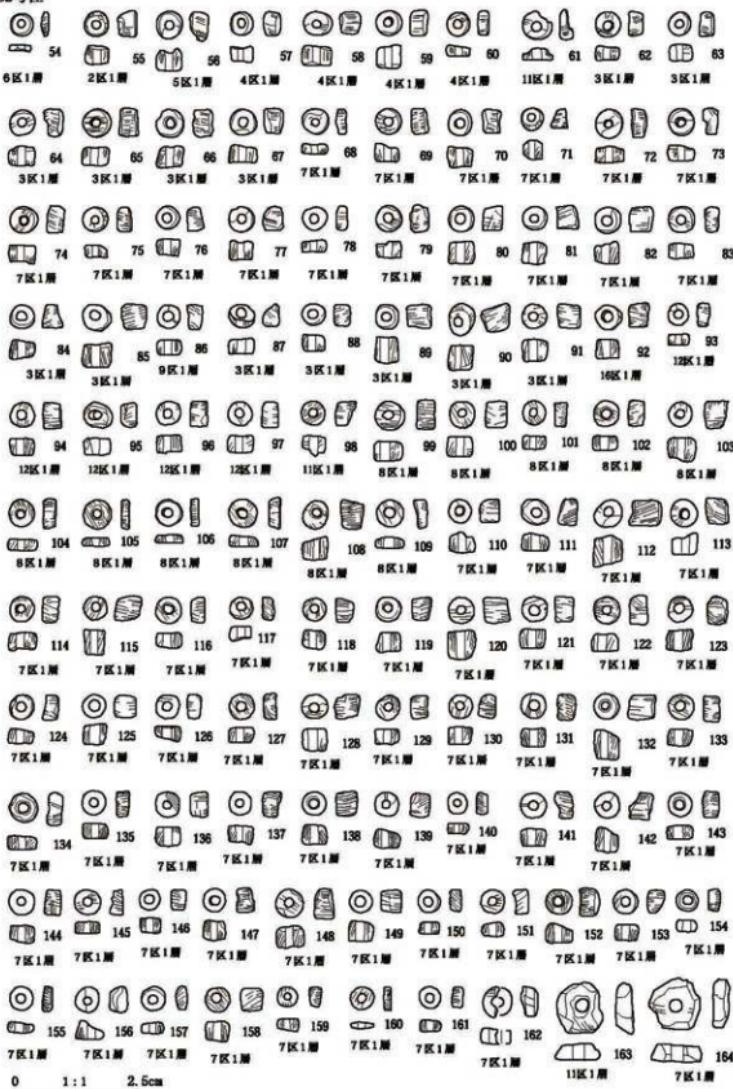


第143図 石製品・石製模造品実測図(1)

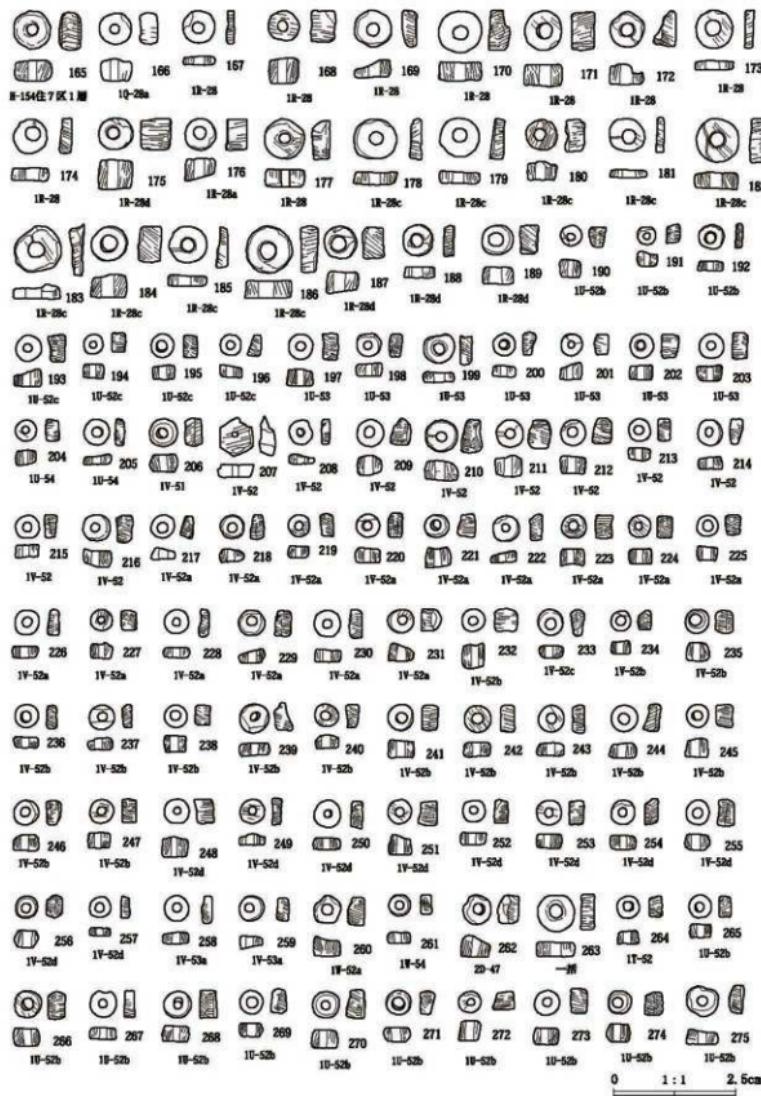


第144図 石製品・石製模造品尖端図(2)

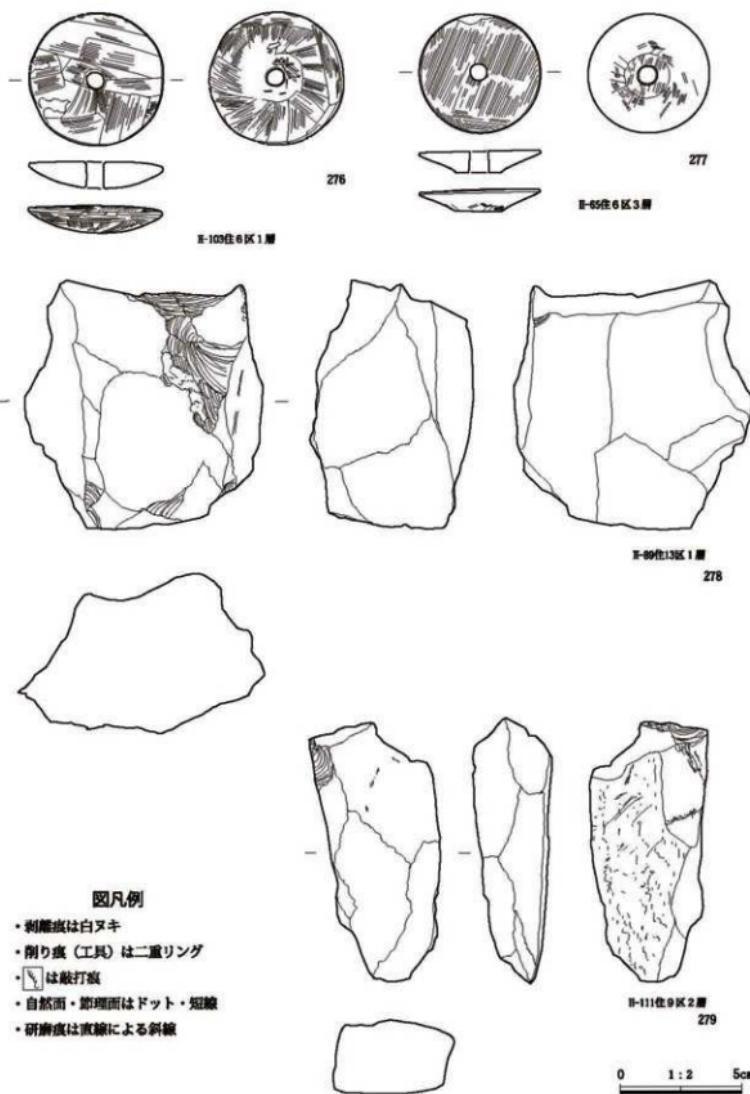
H-132号住



第145図 石製品・石製模造品実測図(3)



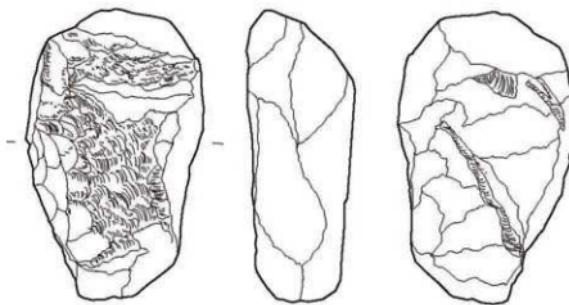
第146図 石製品・石製模造品実測図(4)



図凡例

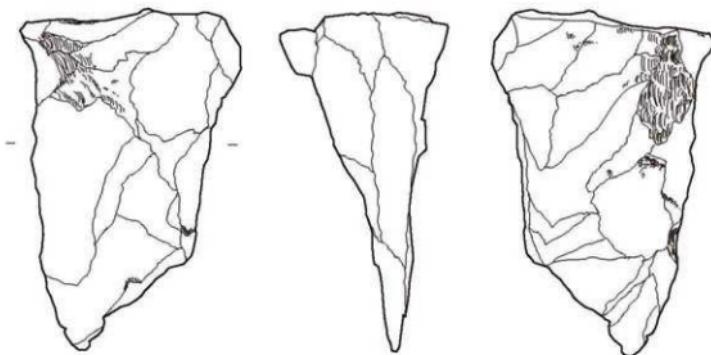
- ・利離度は白ヌキ
- ・削り痕（工具）は二重リング
- ・□は敲打痕
- ・自然面・節理面はドット・短線
- ・研磨度は直線による斜線

第 147 図 石製品・石製模造品実測図 (5)



H-112住 5区 1層

280



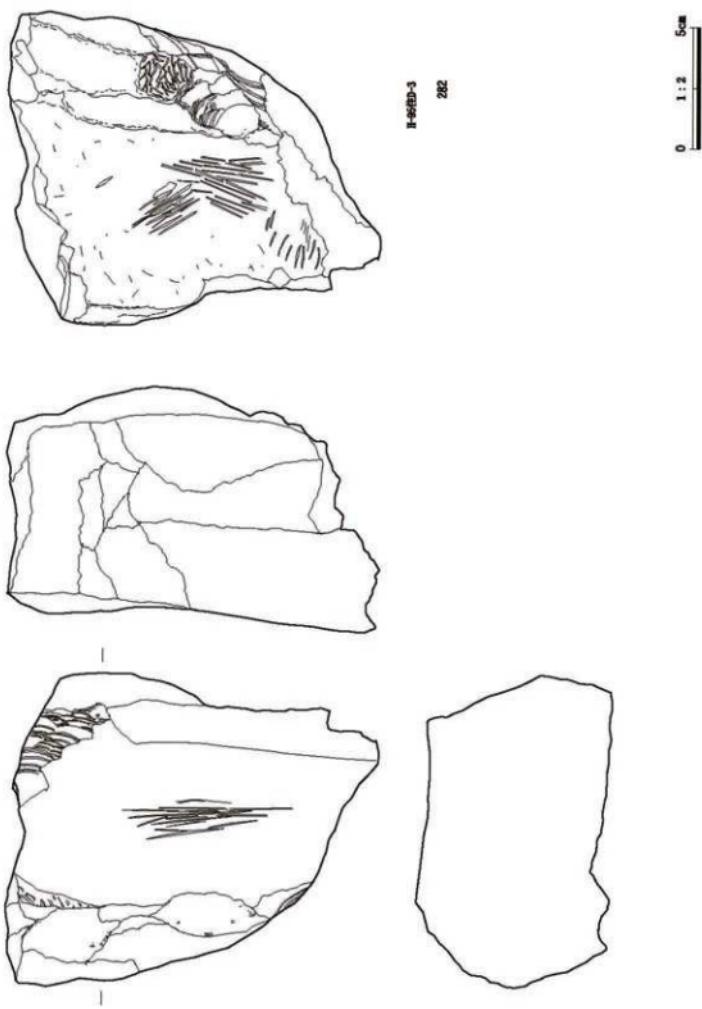
H-111住 9区 2層

281

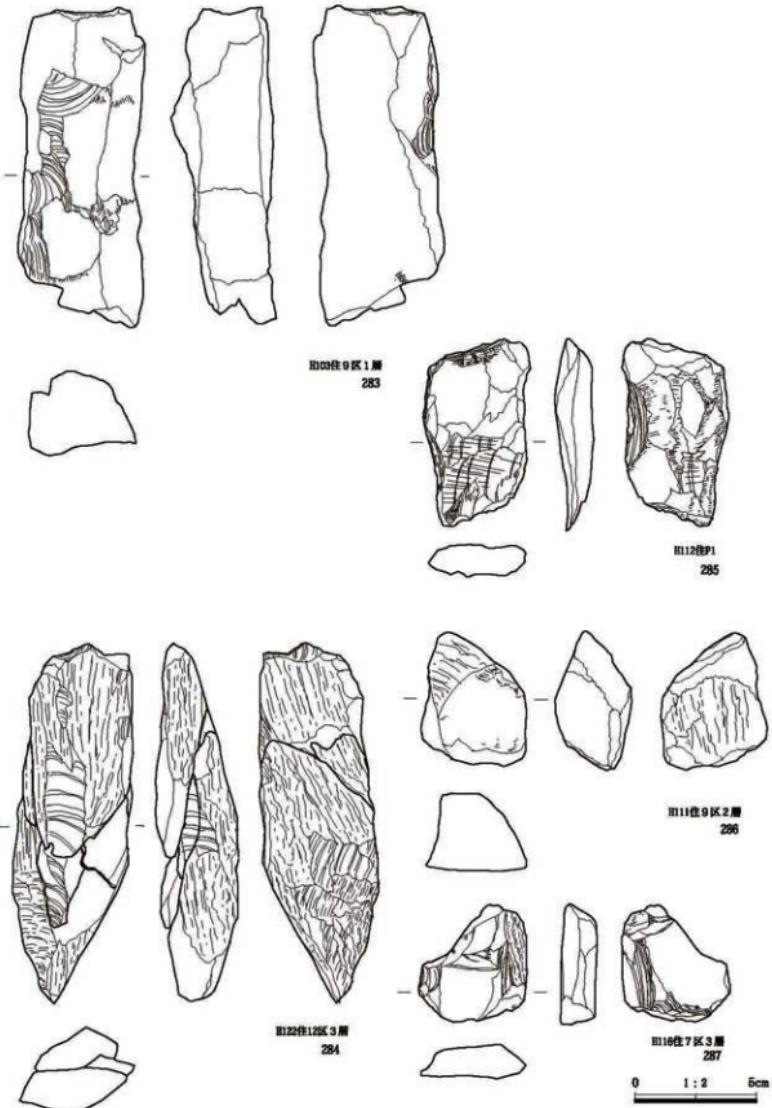


0 1 : 2 5cm

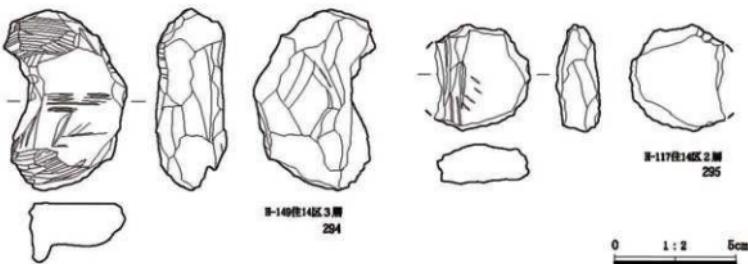
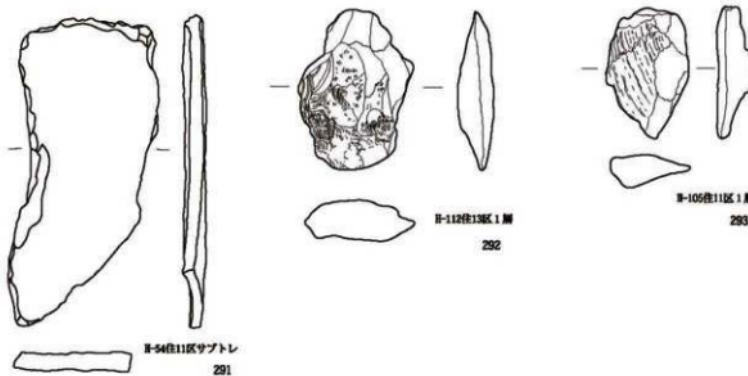
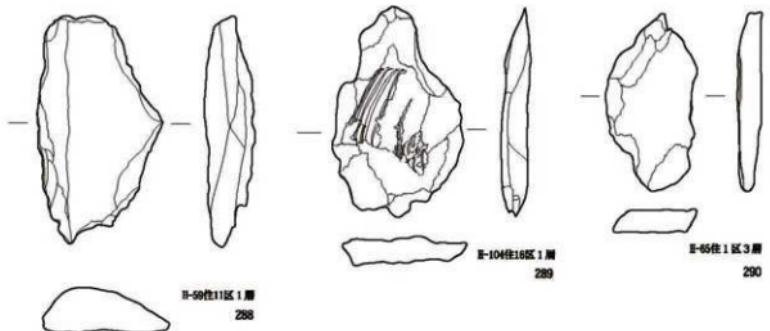
第148図 石製品・石製模造品実測図(6)



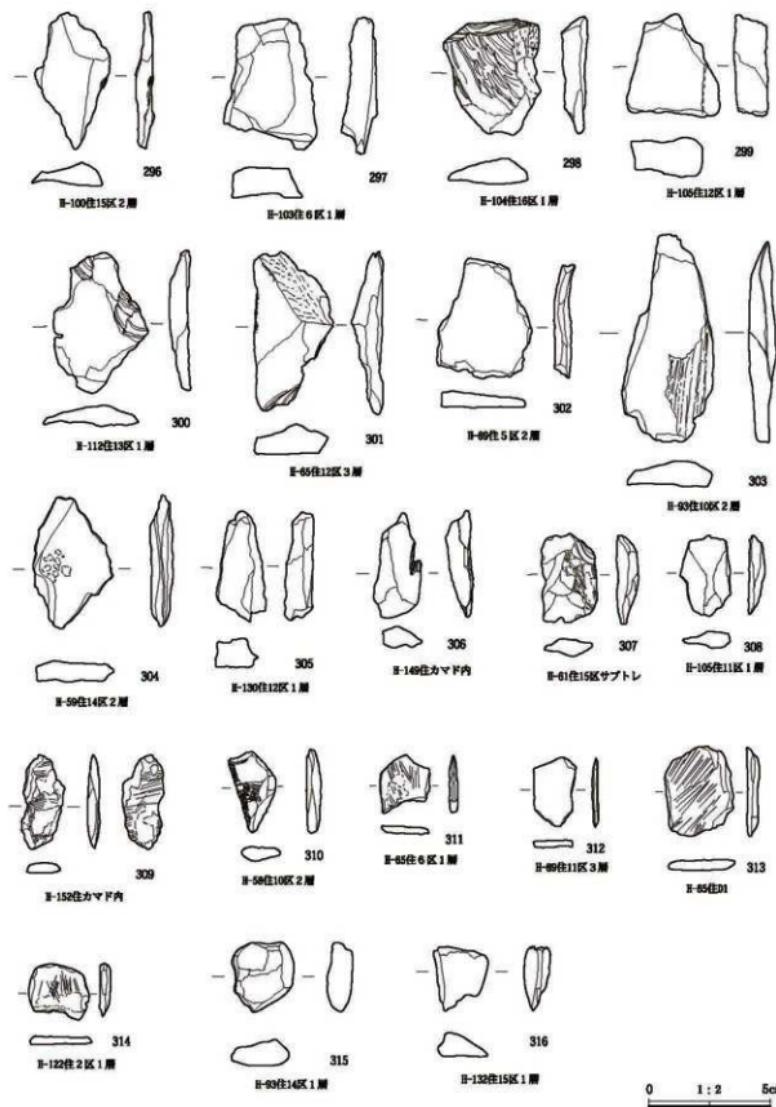
第 149 圖 石製品・石製模造品尖測圖 (7)



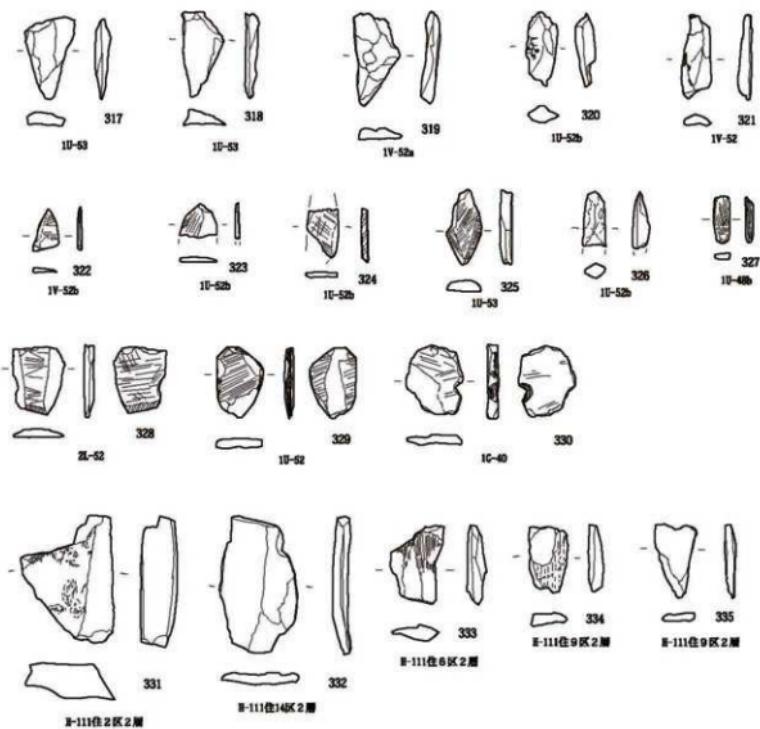
第150図 石製品・石製模造品尖削器(8)



第 151 図 石製品・石製模造品実測図 (9)

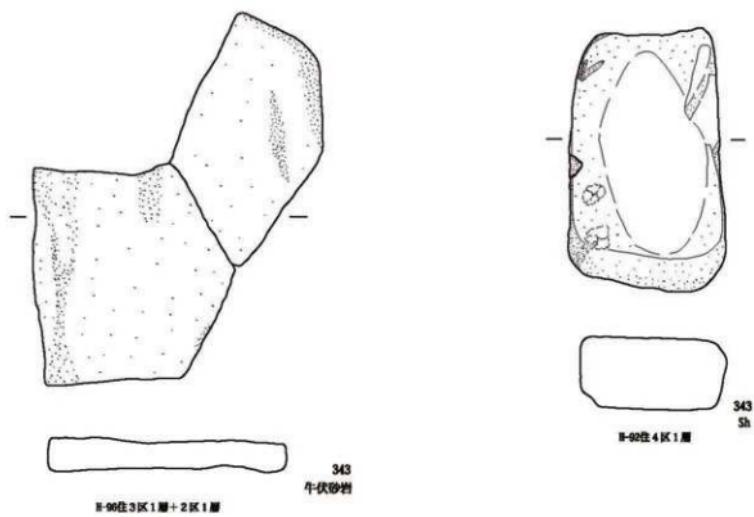
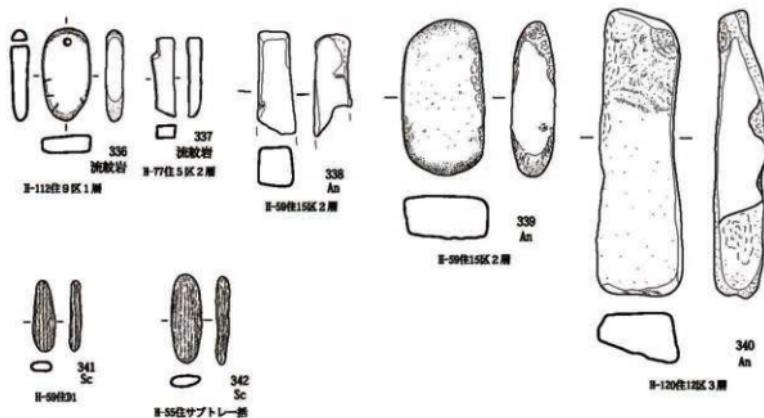


第152図 石製品・石製模造品実測図(10)

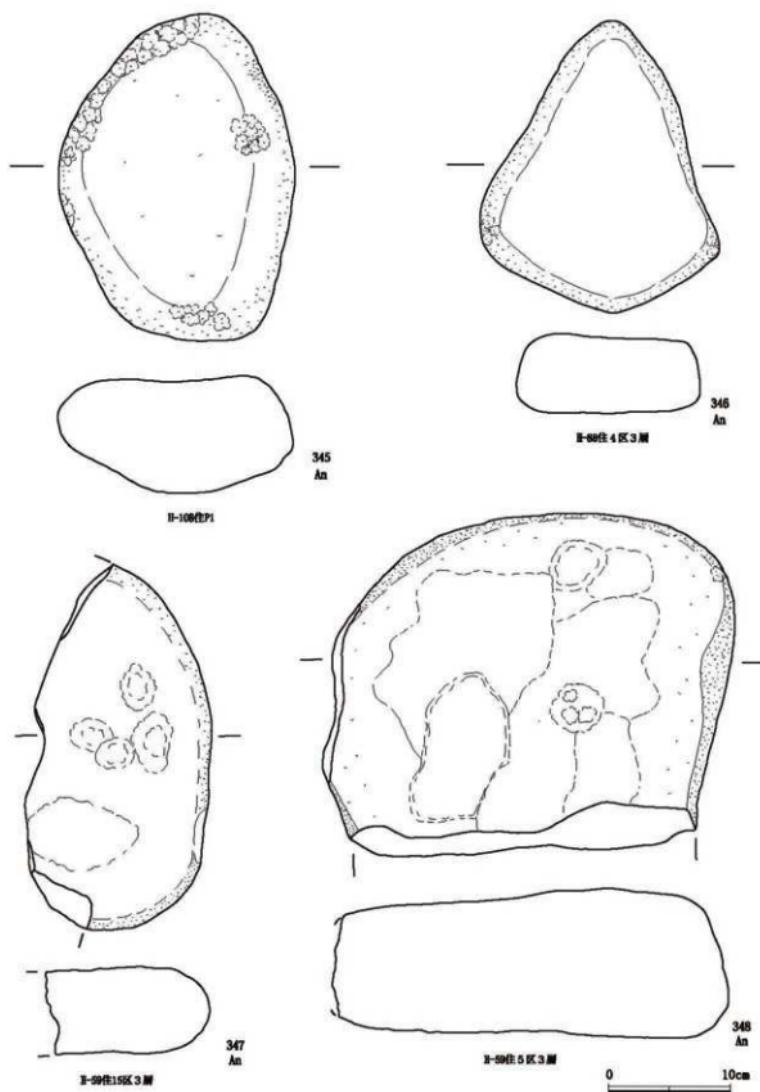


第153図 石製品・石製模造品実測図(11)

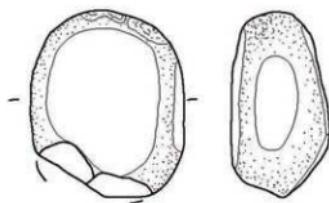
0 1:2 5cm



第154図 石器実測図(1)

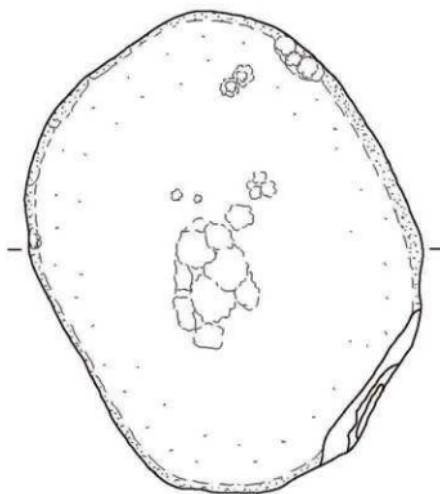


第 155 圖 石器実測図 (2)



349
An

H-95住31



350
An

H-77住15区1層

0 10cm

第 156 図 石器実測図 (3)

(3) 鉄製品 (第157図・第158図)

鉄器および鉄滓が出土している。また関連する遺物としては、高环転用羽口がある。

鉄器には鉄鎌・刀子・鎌先がある。その他器種が明確でないものもあり、棒状のもの(13)や石突状のもの(19)、ヤリガンナと想定されるもの(20)などがある。

方形鎌先は、H-96号住・H-99号住から出土している(14・15)。いずれの住居址も5世紀第Ⅲ四半期に位置づけられる。H-96号住は、浅い豊穴状を有する建物址で、その規模も非常に小さい。緩やかに立ち上がる壁際から出土しており、流入したものかどうかは判断できなかった。H-99号住は石組のカマドを有する住居址である。覆土最下層より出土している。

鎌は、H-55号住・H-93号住から出土している(5・12)。H-55号住は出土土器から5世紀第Ⅲ四半期に位置づけられるが、覆土最上層より出土している。左鎌と判断される。H-93号住は、出土土器から5世紀第Ⅱ四半期に位置づけられ、その覆土最下層より出土している。

(石丸教史)

(4) 土製品 (第158図)

土製品には紡錘車がある。その他、匙がH-65号住より出土しているが、第1項「土師器・須恵器」に掲載した。

土製紡錘車はH-73号住・H-93号住から出土した(1・2)。H-73号住は、出土土器から6世紀第Ⅰ四半期に位置づけられ、カマド内より出土している。H-93号住は、出土土器より5世紀第Ⅱ四半期に位置づけられ、その覆土最下層より出土している。

1は断面台形を呈し、2は断面方形を基調とし中膨らみとなる。

(石丸教史)

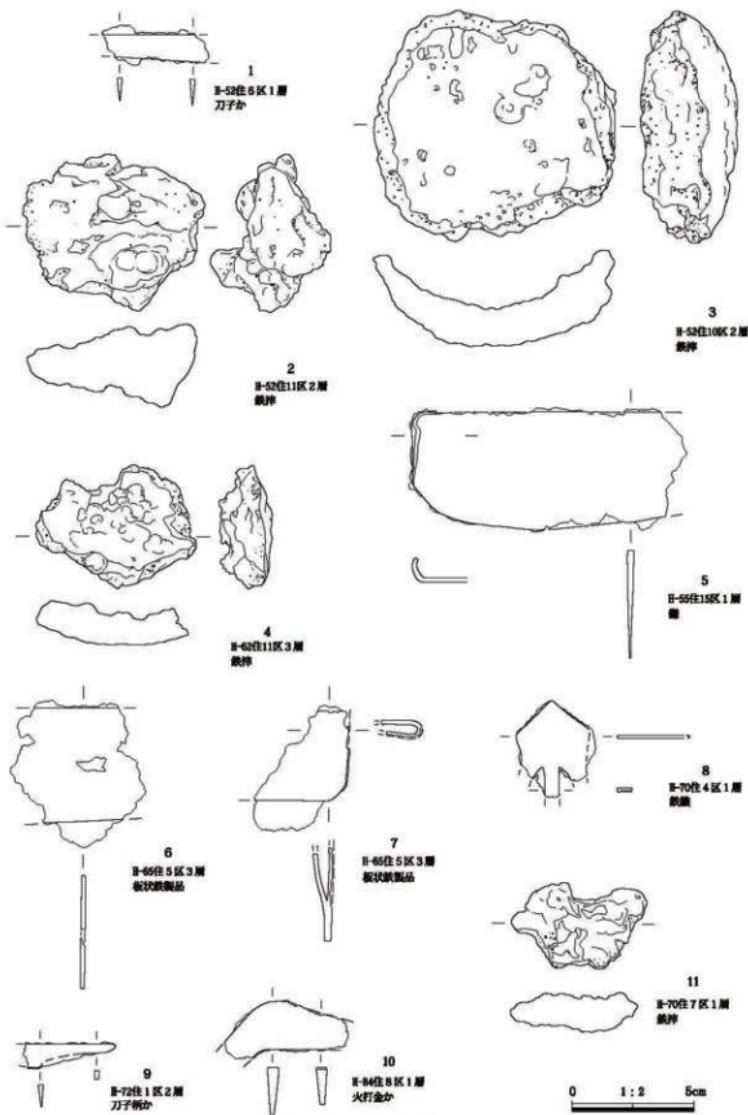
(5) 墓輪 (第158図)

H-90、92、121号住の覆土中から、円筒埴輪片が約30点出土している。ほとんどは92号住居出土であるが、いずれも小片で摩滅が激しく接合可能な物はないが、比較的現存が良好な4点を図示した。いずれも外面調整はタテハケ、内面は指ナデが施され、外面はやや還元焼成氣味なのが特徴である。突帯はほとんど欠落しているものの、断面は稜のある台形状を呈する。透孔は円形と思われる。

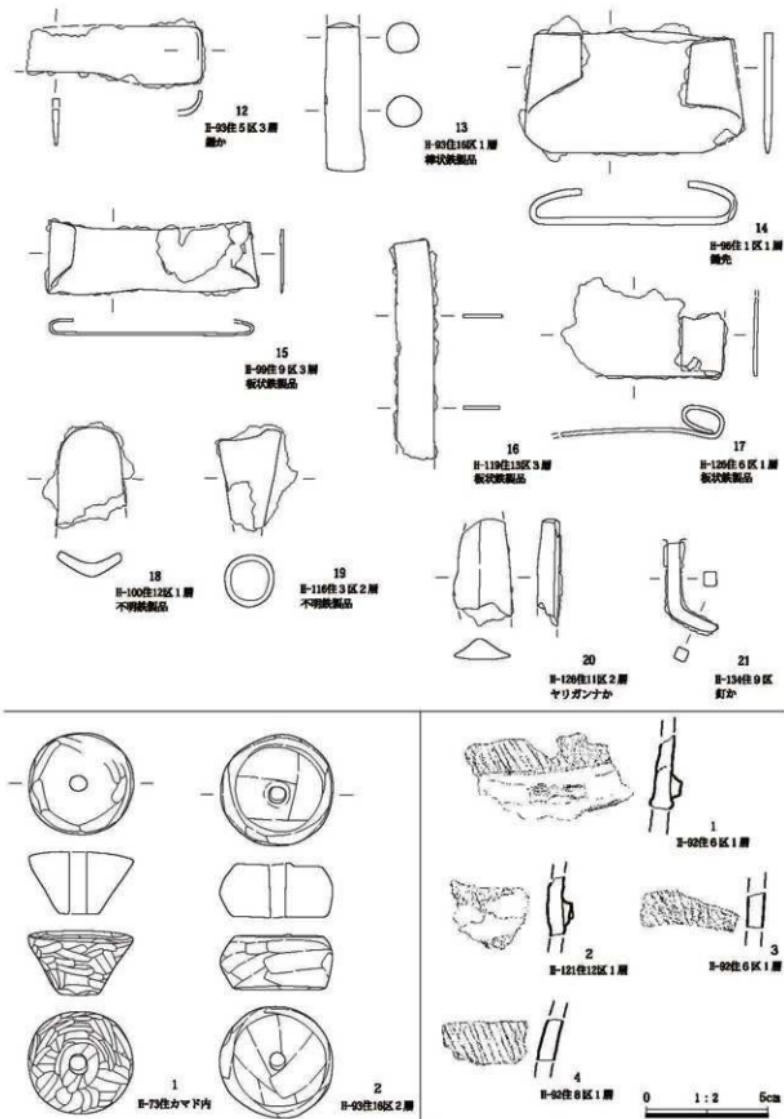
近隣に古墳を伴う古墳ではなく、製作工房の様な遺構も見つかっていない。住居内で使用した痕跡はなく外部からの意図的な搬入と思われるが、なぜ小片を運び利用する必要があったのかは不明である。

北に約1kmの碓氷川河岸段丘中位にある塙ノ久保K-1号墳で当該埴輪と同様、外面が還元焼成氣味の円筒埴輪が出土している。しかし、半円透孔をもち、胎土に黒色鉱物粒を含むなど、当該埴輪と異なる特徴を持っている。

(菅原龍彦)



第 157 圖 鐵製品夾測圖 (1)



第158図 鉄製品(2)・土製品・埴輪実測図

V 成果と問題点

1 古墳時代の土器編年

1はじめに

本遺跡では、古墳時代前期から後期にわたる竪穴住居が102軒検出されている。すでに南側に接する『加賀塚遺跡1』(A・B・C区の一部)では古墳時代中期から後期の竪穴住居が51軒検出されており、今回の調査と合わせて154軒の大きな継続する集落であることが判明した。特に大半が古墳時代中期に属し、これまで希薄であった当該期の資料を多く得ることができたのは、この地域の歴史解明に大きな役割を果たすことができるものと考える。そこで、集落の変遷を知るための基礎的作業として土器の分類と変遷を検討したい。

2 土器の分類

ここでの分類は前期に属する資料は少數のため扱わず、中期から後期の資料を対象とする。『加賀塚遺跡1』の分類を踏襲したいが、時期的に本遺跡の方が古い段階を含むため分類名称が変わらざるを得ないものあり、『加賀塚遺跡1』の分類名を()で表示した。

出土した土器には、土師器壺・鉢・壺・高壺・小形壺・小形甕・甕・甕・台付甕、量は極めて少ないが須恵器蓋・壺などの器種が見られる。分類に際しては、整形技法や胎土を含め形態の特徴によって分け名称を付けた。さらに、アルファベットの小文字を付したもののは細分であり、数字は型式組列を想定できるものとして付けたものである。

壺

基本的に『加賀塚遺跡1』の壺分類と同じであるが、今回はC類と形状は類似するが内面に放射状鋸磨きの施されるD類が新たに加わる。

A 1：丸底及びやや平底気味のものとがある。体部は丸みを持ち内湾する口縁部に至る。大きさや口径と器高のバランスは個体差があり、全体的にやや歪みのあるものが多く、口唇部の厚さなどは不均質である。内面に放射状鋸磨きを持つものは、中心部から口縁部に向かって施す傾向にある。色調も鈍い黄褐色や赤褐色など多様である。(A 1)

A 2：丸底、球形の体部から内湾する口縁部に至る。上面から見ると正円形で整った形のものが多い。色調は赤褐色を呈す。放射状の鋸磨きは底部の中心からよりも、2/3程の深さの所から斜めに口縁部に向かって施し、磨きの始点が横に線上に描うものが多い。(A 2)

B 1：平底の底部から体部は丸みを持ち、口縁部が外傾する。全体的にやや歪みのあるものが多く、口唇部の厚さなどは不均質である。外面は窓削りか窓瓶で、内面は窓瓶で、色調は鈍い黄褐色や赤褐色など多様である。(B 1)

B 2：丸底ないしは平底気味の底部から体部は緩やかな丸みを持ち、口縁部が外傾する。全体的にやや歪みのあるものが多く、口唇部の厚さなどは不均質である。しかし、口縁部の長さや外傾の度合い、器高も浅いものから深いものまで個体差があり、分類が難しいため上記の大枠の特徴によって一括して扱う。調整は、外面が窓削りか窓瓶で、内面は窓瓶で、内面に放射状鋸磨きを施すものは中心部から口縁部に向かって施すものが多い。これも色調は鈍い黄褐色や赤褐色など多様である。(B 2)

B 3 : 口径 12.4 ~ 14.4cm、器高 5.1 ~ 5.6cm とやや幅があるが、形態・胎土に非常に統一性が見られる。形態は底部から体部が弧状に緩やかな丸みを持ち、口縁部が外傾、稜線は明瞭で、口唇部を薄く上に揃みあげる。正円形で形が整い、器厚が薄手で均一である。色調はほぼ一様に赤褐色を呈す。放射状の箇磨きは底部の中心からよりも、2/3 程の深さの所から斜めに口縁部に向かって施し、磨きの始点が横に線上に描うものが多い。(B 3)

C a : 丸底、体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は直立する。(C 2)

C b : 丸底、体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は外反する。(C 3)

C c : 丸底、体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は内傾する。

C d : 丸底、体部に稜を持ち、一旦内傾気味に立ち上がり口縁部が外反する。

D a : 丸底、体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は外反し上位がやや内轉気味になる。口縁部に A 2・B 3 に類似する丁寧な放射状箇磨きが施される。

D b : 丸底、体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は外反もしくは、外反し上位がやや内轉気味になるものがある。底部から口縁部に箇磨きないし放射状箇磨きが施される。

培

加賀塚遺跡では小形と大形に分類したが、小形のもののみを培とし、大形は直口壺と改めた。

A : 器形は多様であり、底部の形態には丸底のものや、中央が小さな上げ底で周辺が平底気味のもの、平底などがある。脚部は丸みを持つが、球状のものや、下半部ないし上半部に最大幅があるものなど様々である。頸部は稜の明瞭なものと緩やかなものがある。口縁部の長さや傾きなどにも個体差が大きく、これらの要素の組み合わせが明瞭でないため細分は行わなかった。調整は口縁部は横撫で、脚部は箇磨でや箇削りである。(A 1)

直口壺

A : 丸底で脚部は球形を呈し、口縁部は逆ハの字状に開く。口縁部は横撫で、脚部は箇磨で下位は箇削りである。

B : 脚部は球形を呈し、下位がすばまり平底となる。口縁部は逆ハの字状に開く。調整は口縁部は横撫で、脚部が箇削りないし箇磨でである。

高坏

A a1 : 口縁部と体部の境に明瞭な稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部が下半部で屈折し裾部を作るもの。全体的に丁寧に磨かれている。

A a2 : 口縁部と体部の境に明瞭な稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部が下半部で屈折し裾部を作るもの。調整は基本的に口縁部や裾部は横撫で、体部・脚部は箇磨である。(A)

A b : 坏部の形状は同様だが、脚部があまり開かず細く、裾部が水平に近く開く。

B : 脚部は円錐状を呈し、脚部と裾部の境は明瞭ではなく、裾部がやや開く。

C : 坏部口縁部と脚裾部に段を持つ。調整は箇磨きが施される。(B)

D : 短脚の高坏。坏部は口縁部の外傾するタイプである。(加賀塚分類の D と同じであるが、本遺跡のものは内面に放射状箇磨きが施されずより古いタイプである。)

E : 短脚の高坏。坏部は口縁部と体部の境に稜を持つ須恵器模倣坏のタイプであるが、内面に放射状箇磨きが施され黒色処理されるものもある。

瓶

加賀塚遺跡では小形と大形に分類している。小形瓶は瓶として使用されたものか疑問があり、有孔鉢とも呼ばれているものであるが、一応瓶として分類しておく。さらに甕と類似する形態のものを加え三種類に分けるが、Cには中形が見られる。

- A：小形であり、形態は逆「ハ」の字状に開くものが多い。(A)
- B：頸部は括れで口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。底部は筒抜けとなるが、形状は同時期の甕と良く類似している。調整は外面が箝削り、内面は箝撫であるが、箝磨きするものもある。
- C：口縁部は外反する。頸部はあまりしまらず、胴部はやや丸みをもち、底部は筒抜けである。時期を下るに従って胴部が丸みを失い直線的になって行く変遷が見られる。調整は基本的に外面が箝削り、内面は箝撫であるが、内外面または内面を箝磨きするものもある。(B)

甕

甕の形態は多様であり、特に中期の甕は各期にそれぞれ多様な甕が見られるため分類が困難である。その中でもA及び台付甕Aは特徴的で他遺跡においても識別が容易と考えられる。またL・Mは後期を通して長周化していく甕の系譜にあると思われる。

- A：口縁部は「く」字状に外反ないし外傾し、頸部内側の稜がシャープである。胴部の最大幅が上位にあり、下位は台部に向かって直線的にすばり平底の底部となる。全体的に歪みが少なく整った形状である。調整は外面斜横位の箝削り、内面は横位ないし斜横位の箝撫である。(D)
- B：口縁部は外傾し、胴部は中位に丸みを持ち下位がやすぼり平底の底部となる。調整は外面が斜縱位の箝削り、内面は斜縱位の箝撫である。
- C：口縁部は外傾するが外側がやや膨らみを持つ。胴部は丸みを持ち、平底である。口縁部も含めて全体的に器肉が薄手である。
- D：口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。下半がやすぼり平底となる。頸部の括れの度合いや口縁部の長さなどに若干違いがあるものの、基本的にはこのタイプの甕が多く見られる。調整は外面は斜縱位の箝削り、内面は斜横位の箝撫である。色調は鈍い黄褐色から黒褐色を呈するものが多い。
- E：口縁部は外反し、胴部は丸みを持つがDよりは弱い。底部はやや丸底気味の緩い平底である。
- F：口縁部は大きく「く」の字に開き、内面の頸部の稜はシャープである。胴部も大きく丸みを持ち、平底と思われる。調整は外面斜横位の箝削り、内面は斜横位の箝撫である。このタイプも歪みがなく、比較的形の整ったものが多い。色調は黄褐色のものが多い。
- G：口縁部は外傾するが外側がやや膨らみを持つ。胴部は丸みを持ち、平底である。Cに似た薄手の作りであるが、形の歪みが顕著である。
- H：厚手で手捏ね土器のように指撫でや指頭痕の痕跡が顕著である。形態は一定せず歪みもあるが、胎土や調整の類似によって識別は可能であると考える。
- I：口縁部は外反し、胴部は大きく丸みを持つ。底部は平底で、器高の低いものである。
- J：口縁部は一旦直立気味に立ち上がってから外反する。胴部は丸みを持ち、下半がやすぼり平底となる。調整は外面斜横位の箝削り、内面は斜横位の箝撫である。色調は橙色である。
- K：口縁部はやや受け口状に開く。胴部は長くやや丸みを持ち、丸底である。器肉は口縁部まで全体的に薄手である。調整は外面は縱位箝削り、内面は斜横位箝撫である。
- L：口縁部は「く」の字状に開く。胴部は長くやや丸みを持ち、底部は平底である。調整は外面は縱位箝削り、内面は横位箝撫である。

M：口縁部は外反し、頸部の括れは緩やかである。胸部は長くやや丸みを持つ。底部は平底である。調整は外面は縦位箇削り、内面は縦位箇撫でである。

台付壺

A 1：口縁部は「く」字状に外反ないし外傾し、頸部内側の稜がシャープである。胸部の最大幅が上位にあり、下位は台部に向かって直線的にすぼまる形、台部は「ハ」の字状に開く。全体的に歪みが少なく整った形状である。

A 2：口縁部は外反し、頸部内側の稜が緩やかである。胸部は全体的に丸みを持つが細長い形状である。

B：口縁部は外反し、頸部内側の稜が緩やかである。胸部は全体的に丸みを持つ。

3 各期の様相

I期

I期はH-57・88号住が該当する。出土した資料は少ないが、土師器鉢・高坏・台付壺・台付壺・壺などの器種が見られる。

鉢は平底で体部は丸みを持って開く形状、箇削りか箇撫で調整されるが、輪横痕が残りやや雜である。高坏は東海系の小形高坏の系譜にあるものと思われる。壺は樽式系であるが、球膨化が進み文様は消失している。壺は形状に樽式系の要素はないが、内面を箇磨きすることに古い要素を残している。台付壺は大きく丸みを持つ球膨状を呈し、口縁部から胸部上位にかけて縄文が施される。台付壺は胸部が下膨れで弱い稜を持つ外來系のタイプである。

II期

II期はさらに資料が少なく、土師器台・高坏の他にミニチュア土器が僅かに出土するに過ぎない。資料が混在しているものもあるが、H-60・70・72・80・85・90・94・151号住が該当する。器台は受け部が丸みを持ち、やや深い傾向にあり箇磨き調整される。高坏は小形と大形が見られる。

III期

H-56・58・61・62・74・77・112号住が該当する。器種は、土師器壺・高坏・壺・壺・台付壺・ミニチュア土器などが見られる。

坏・椀類は資料が少なく検討できないが、この期には出現しているものと考えられる。鉢は一点出土しており、平底で体部は開き上位にやや丸みを持ち口縁部が大きく開く形態である。壺の形態は多様性に富んでおり、この期に最も多量に出土すると思われる。口縁部は全体的に長くなっている傾向が認められ、口縁部と胸部の長さがほぼ同程度のものも存在する。底部は、丸底や小さい上げ底気味のもの、平底のものと見られる。また、壺に穿孔した蓋も存在する。高坏は二種類が存在する。A a1は脚部が下半部で屈折し裾部を作るもので、全体的に丁寧に磨かれている。A a2はA a1の系譜にあるもので調整は撫が多く、器高もやや低くなっている。A a1はこの期の中でも古い方か前期に属する可能性が考えられる。Bは脚部が円錐状を呈し、脚部と裾部の境は明瞭ではなく、裾部がやや開くものである。出土量は少ないが次期にも統けて存在する。壺はBが見られ、この期の壺と同じく胸部の大きく丸みを持つものである。壺はA・B・Cが見られる。Aは台付壺の形態と類似するもので、この系譜と考えられる壺は次期にも加賀塚遺跡1に見られる。胸部上位の張りは弱まる形態となっているが、胎土は良く似ている。大きさに大小が見られる。台付壺はA 1が存在する。全体的に歪みが少なく整った形状である。

IV期（『加賀塚遺跡1』のI期相当）

H-52・53・54・55・59・63・65・68・86・89・93・95・100・101・103・104・105・115・120・153号住が該当する。

坏の出土量が増加し、A・B1・B2が存在する。B1は平底で口縁部が外傾するものを分類しているが、形態は定型化しておらず体部の開く程度や口縁部の形状など個体によって様々である。B2は加賀塚遺跡1では次期に配置しているが、この期から見られる。丸底の底部から体部は開き、次期よりも体部の丸みが少ない傾向にある。壇は前期より出土量はやや減少する傾向にあると思われる。形態はやはり様々であり変化が不明瞭だが、頸部のしまりが強くなる傾向が見受けられる。直口壺にはA・Bがあり、これにも平底・丸底の両方がある。やはり前期よりも頸部のしまりが強くなる傾向にあると思われる。高坏はA・B・Dが存在する。Aは脚部が開くタイプと開きの少ない柱状のものがある。BはIII期のものよりも坏部がやや浅くなっている。Dは短脚のものであり、坏部は坏Bの形態と同じである。壺もD・E・F・G・Hなど多様な形態が存在している。III期のA類は本遺跡では出土していないが、隣接する加賀塚遺跡1で分類したD類の壺がこの系譜にあるものと考えられる。Fは口縁部から頸部がAに類似する点もあるが脚部が大きく丸みを持つ器形である。台付壺はA2が見られ、下半部にも丸みを持ち、やや間延びした印象となる。

V期（『加賀塚遺跡1』のII期相当）

H-71・76・83・96・99・111・116・117・127・129・130・133・144・146・149号住が該当する。坏が主体的に存在するようになる。A1・B2が主であり、双方ともIV期のものより体部の丸みが強くなる傾向が窺われる。壺の出土量は激減する。直口壺Aは前期のものより脚部が横に大きく丸みが強くなり、口縁部が短かい。また、高坏も出土量は減っているが、種類はA・C・Eがある。Aは器高の低くなる傾向が見られる。Cは坏・脚部に段を持つもので、その出現期はIII・IV期に遡ると思われる。Eは短脚の高坏で、坏部の形態は坏C2と同じであるが、内面が黒色処理される。壺はA・B・Cが出土している。Aは逆「ハ」の字状に開く器形である。Cは若干頸部にしまりがあり、脚部にやや丸みを持つ。壺はD・Iが見られる。Dは前期よりもやや脚部の丸みが少なく、長脚化の傾向が窺われる。この期にも台付壺が存在する。しかし、台付壺も長脚化する傾向にあるが、H-111号住-486の台付壺は脚部が球状を呈しIII・IV期に見られるものとは異なるタイプと考えられる。

VI期（『加賀塚遺跡1』のIII期相当）

H-123・124・131・134・136・141・152号住が該当する。

坏は定型化したA3・B3が圧倒的に多く見られ、A2・D a・D bが少量存在する。C類も存在すると考えられるが本遺跡では良好な資料は出土していない。高坏はAの系統にあるものと考えられるが器高のかなり低くなったものが出土している。壺はB・Cが出土している。Bの壺は壺に類似する形態のものであるが、この時期にも見られる。H-134号住-693は全面的に籠焼きが施される特異な壺であるが、脚部の形状などは同じ住居の壺と類似している。Cは中型と大型が見られる。共に脚部の丸みが少なくなり、頸部はしまらずに口縁部が外反する。壺はJ・K・L・Mが存在する。K・L・Mは長脚化しており、L・Mのタイプは次期の長脚壺に繋がっていくものと考えられる。前期のD類などがこの壺の祖形となろうか。Kは出土量の少ない壺だが、器肉が薄手で脚部下位がやや括れる特異な形態であり、この壺と類似する壺がH-133住に出土している。

VII期

H-73・107号住が該当する。土師器坏・高坏・小形甕・甕・瓶などの器種が存在する。坏はA2・D a・C bが存在する。高坏Eは須恵器模倣坏の形態に短脚が付くものである。甕はCの中型・大型が見られ、胴部の丸みがさらに少なくなっている。甕はLの系譜にあるもので、さらに長胴化している。

V期（『加賀塚遺跡1』のIV期相当）

H-69・75・79・84・126・145・150号住居が該当する。

坏はC b・D b及び須恵器坏が見られる。甕にはAとBが確認できる。Aは甕と同形で底部を抜くものであるが、この期以前に出土している甕Aとは形状は異なり、同時期の甕と同じ長胴化して胴部にはほとんど丸みを持たないものである。Cは胴部の丸みはほとんどなく直線的な形状である。甕はLの系譜にあるもので、胴部の丸みがさらに少なくなっている。良好な資料がなく、下半部を欠くものであるが長胴化は進んでいるものと思われる。

IX期

H-109・125・137・138・143号住が該当する。

資料は少なく土師器坏・甕・甕・小形甕・須恵器蓋・坏が少量見られる程度である。坏はC b・C c・C dが存在する。C dは本遺跡では1点のみの出土であるが、富岡市の上丹生屋敷山遺跡に見られる坏Zに分類されているものと類似する。甕はCであり、胴部が直線的なものであるが下半部は欠く。甕はLの系譜にあるものと思われる。

X期

この期に該当するのはH-122号住の1軒のみであり、ほとんど資料がない。唯一出土した土師器甕は、器高39cmを測り最も長胴化している段階のものである。直線的な胴部で縁部に笠削りされ、口縁部は緩やかに外反する。

4 実年代について

本遺跡のI・II期は古墳時代前期に相当する。この時代の編年に関しては、樽式系土器の崩壊過程を中心に分析を行った若狭編年⁽¹⁾に準拠して位置付けを行いたい。I期は、甕や甕の形状や調整に樽式系の様相が残ることから、若狭編年の樽式系II段階に相当し、II期はそれに後続する。II期とIII期の間は断絶があると考えられ、出現期の屈折脚高坏やS字口縁台付甕の系統で胴部を笠削りする台付甕などの土器群が想定できよう。

III期からIX期は連続した土器様相が捉えられ古墳時代中期から後期に相当する。これらの時期については、土師器と共に須恵器の年代観から実年代を導き出した坂口編年⁽²⁾（古墳時代中期土器）によつて推定すれば、III期が坂口編年のI段階に相当すると考えられ、5世紀第1四半期に比定される。IV・V・VI期がそれぞれII・III・IV段階に相当し、VII・VIII・IX期は坂口編年（古墳時代後期土器）のIII・IV・V段階に相当すると考えられる。IX期とX期の間にも断絶があると思われ、X期は長胴化した甕の様相からVII段階に相当すると考えられる。

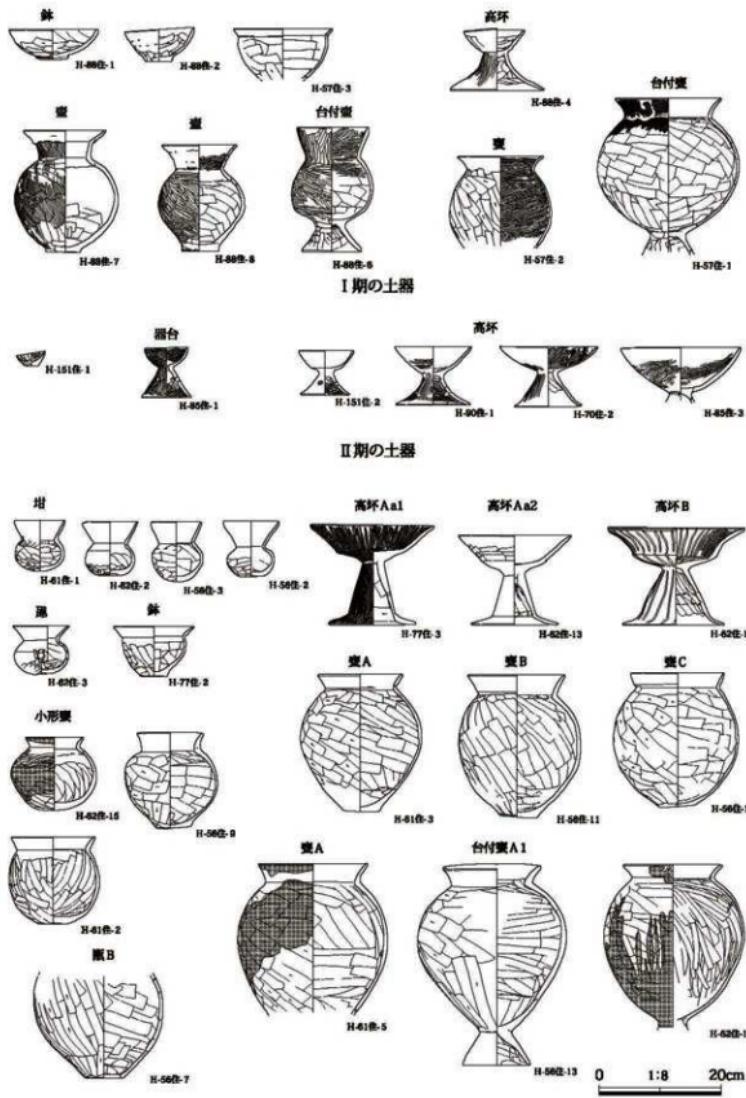
（三浦京子）

註

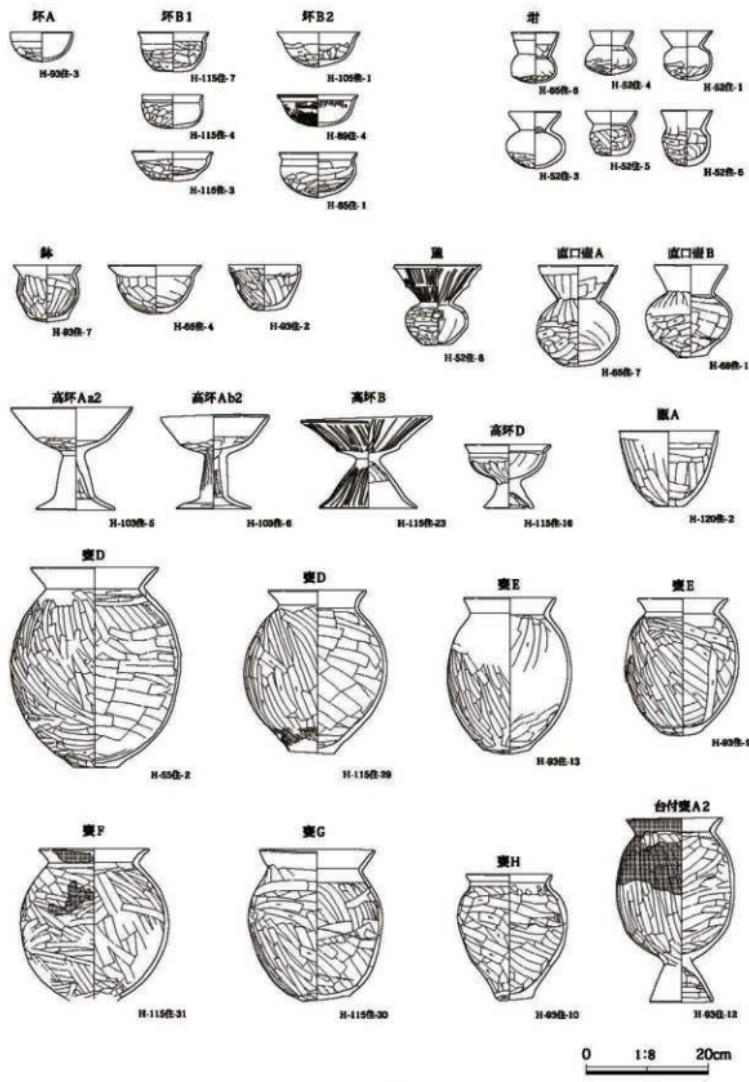
(1) 若狭 翁 1990「群馬県における先秦土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳1』

(2) 坂口 一 1986「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化』208号

1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要4』群馬県埋蔵文化財調査事業団

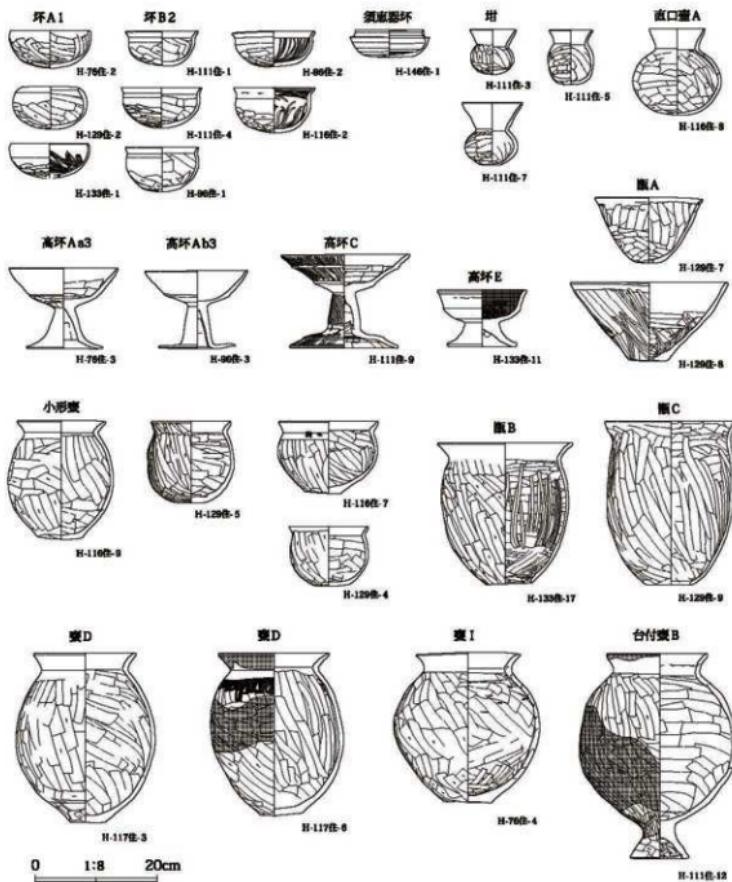


第159図 I期・II期・III期の土器



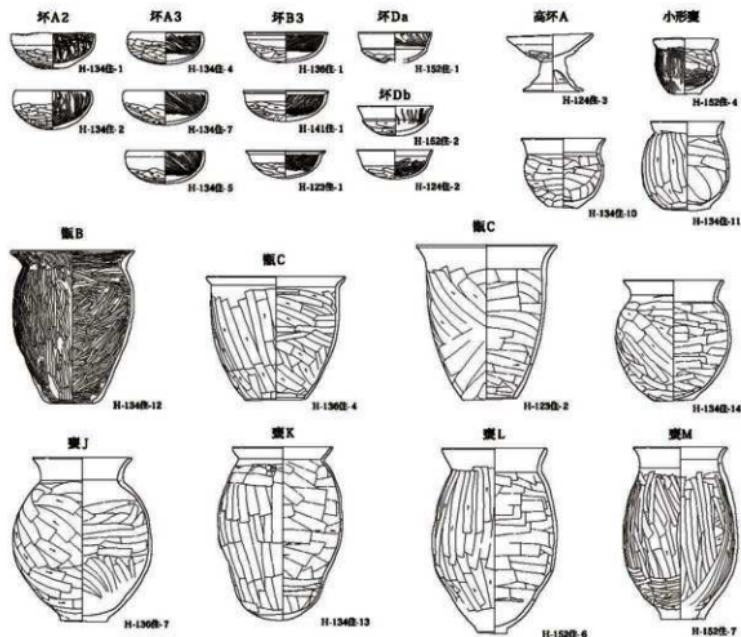
IV期の土器

第160図 IV期の土器

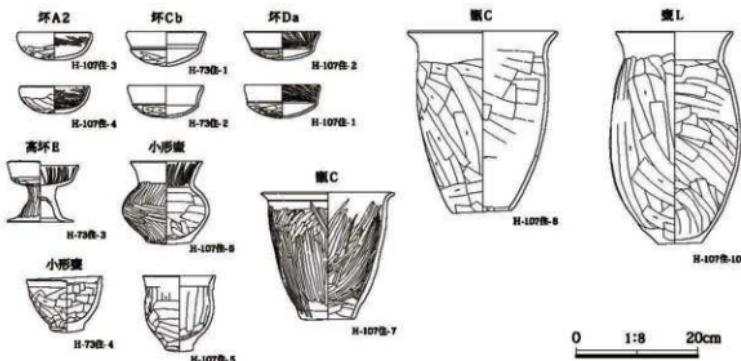


V期の土器

第 161 図 V期の土器

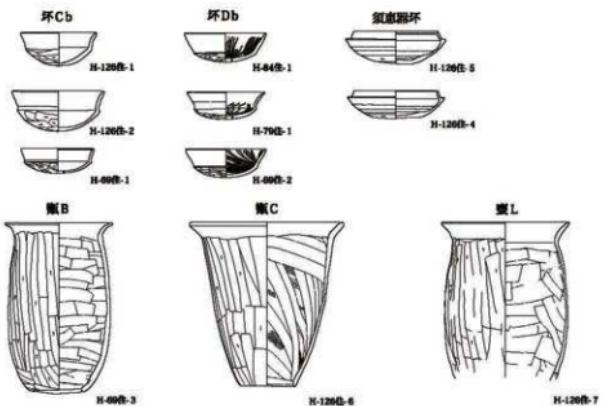


VI期の土器

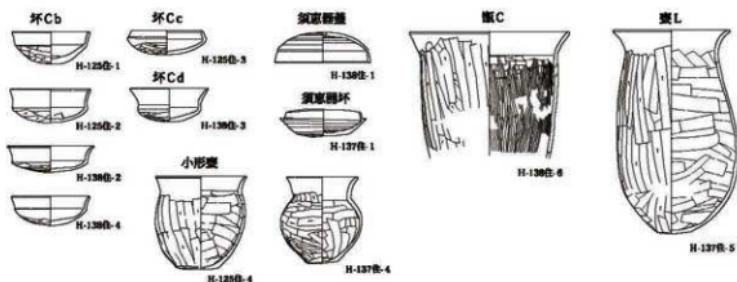


VII期の土器

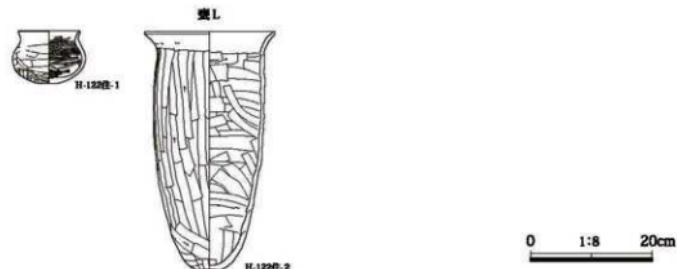
第162図 VI期・VII期の土器



VII期の土器



IX期の土器



0 1:8 20cm

X期の土器

第 163 図 VII期・IX期・X期の土器

2 石製品・石製模造品について

加賀塚遺跡では、古墳時代中期から後期にかけての石製品、石製模造品及びその製作資料が、住居址を中心には多数出土した。石製模造品の製作は、集落の時期を反映して、中期前半と中期後半の2時期に分けられ、製作のみでなく、集落内で使用されていた痕跡が認められた。特に中期後半から後期初頭にかけては、製作工房址が存在し、集落内で集中的に石製模造品の製作が行われ、古墳あるいは他地域への供給が行われていた可能性が明らかとなった。

ここでは、前回の調査を含め、加賀塚遺跡の石製品及び石製模造品について、時期ごとの特徴をまとめたい（第164図・第165図）。

石製品は、勾玉、管玉等の玉類が中期から後期にかけての遺構から少數出土した。ただし、玉類は、集落内で製作されたものではなく、使用石材の点から、未成品を含め全て搬入品である。また、時期による形態に差は小さい。勾玉は、断面橢円形で、平面がややコの字状となるのが多く、管玉は、大型と細型の両者が認められた。特殊例として、中期前半のH-153号住居址から、欠損と摩耗が著しい琴柱形石製品が出土した。この石製品は、県内では、下佐野II遺跡等で前期における製作例が確認されている。ただし、本遺跡の遺構とは時期差が存在することから、住居址との共伴については、混入の可能性もあり、注意が必要である。

石製模造品は、滑石を石材とするが、時期によって石質が異なり、石質によって製作技術に特徴が認められることが明らかとなった。中期前半では、硬質の緑色系の滑石（蛇紋岩系）を石材として、分割工程を中心に素材を獲得し、敲打と研磨によって製作・仕上げをする。一方、中期後半以降では、軟質の白色系滑石を石材とする傾向が認められ、打撃による剥離あるいは、分割・切断によって素材を獲得し、素材に対する調整を施し、研磨で製作する。中期前半では、大形の石核あるいは分割素材が多数認められ、剣形を中心に製作されている。素材に対する調整剥離が少ないため、調整剥片は極端に少ない。中期後半以降は、石材は小さくなるまで分割、剥離されるほど完全に消費される。調整による調整剥片等は多数存在し、小形の素材に至るまで、様々な大きさ、形状の素材が生産されている。白玉以外は、同じ製作工程で製作される器種である。主な器種は、白玉、剣形、勾玉形、円板・方板（有孔・無孔）に限定され、他の器種を摸した石製模造品器種は極端に少ない。

剣形は、断面五角形あるいは三角形となり、稜が明瞭となる「剣」を模倣したものから、扁平で粗雑な形態化したものへと変化する。穿孔は、1あるいは2カ所ある。勾玉形と円板・方板は、剣形と同じ素材、工程で製作されたもので、中期後半以降にみられる。白玉は、中期後半以降、製作工程が確認でき、径が7～10mmの大形から、5mm前後の小形となる。石材は、白色系滑石が選択される傾向となる。

紡錘車は、扁平で、研磨が荒いものから、中期後半以降、厚く台形状となる。石材は、黒色系の滑石で、石製模造品の石材とはやや異なる。

今後は、碓氷川流域を中心とした中期以降の石製品・石製模造品の生産流通システム、そして、供給先の可能性がある古墳あるいは周辺地域の集落との関係については、現在整理中である人見枝谷津・人見向原遺跡との比較、分析によって明らかにしていきたい。

（井上慎也）

時期	5世紀前半（III・IV期）				（II=III期、他はIV期）
石材	緑色滑石（蛇紋岩系）				
器種	完成品・未成品			工程品	
A類	勾玉・管玉				
	勾玉形	X			
	劍形				
	劍形未磨品（素丸）				
	有孔圓筒形	X			
	原石・石核・素材・未成品				
B類	白玉				
C類	新羅車				(S=1/4)

第164図 加賀塚遺跡出土の時期別石製品・石製模造品集成図（1）

時期		5世紀後半(V)	5世紀後半(VI)
石材		緑色滑石(蛇紋岩系)	白色滑石(軟質)
器種		完成品・未成品	工程品
A類	勾玉・管玉		(石核) <緑色滑石> (未完成品)
	勾玉形		(勾玉) (未完成品)
	劍形		(未完成品)
B類	劍形未完成品		(石核) <白色滑石>
	有孔円板		(石核)
	有孔方板		(石核)
	層石・石核・素材・未完成品		(石核)
	白玉		(動態草)
C類	紡錘車		(大型素材)

(S=1/4)

第165図 加賀塚遺跡出土の時期別石製品・石製模造品集成図(2)

3 古墳時代の集落

1 集落の概要

加賀塚遺跡における一連の調査では、広大な調査区が設定されたため、集落域のほぼ全域を調査することが出来た。調査区北東側が唯一調査区外にあたるが、東からの谷状地形が入り込んでいるため、集落の構成を大きく変えるような遺構群は期待できないだろう。

出土した土器によると、集落は3世紀後半から始まり6世紀に終焉を迎えるようである。検出された建物址はいわゆる竪穴式建物址（以下、住居址）が主体をなしており、掘立柱建物址は確認できなかつた。おそらくトレンチャーによる擾乱が調査区全域にわたっていたため、確認できなかつた可能性が高い。そのような問題点を残すものの、集落のあり方を考えるうえでは十分なデータを得ることが出来たと言えよう。そこで以下、住居址に焦点をあて、その動向を述べていきたい。

住居址の出土土器から判断すると、3世紀代のものが3棟、4世紀代のものが6棟、5世紀前半のものが28棟、5世紀後半のものが24棟、6世紀前半のものが10棟、6世紀後半のものが5棟ある。A・B区の調査成果（『加賀塚遺跡1』）と合わせると、5世紀に集落の最盛期を迎ることが分かる。

それら住居址群は、一ヶ所に集中していたのではなく、ある程度の広がりをもって展開している。地形的特徴によってみていくと、大きく1～5区の5区域に分けられる（第166図）。まず、1区は調査区北端部で、最も標高の高い位置にあたり、その北側には雄冰川の河岸段丘による急峻な崖がひかえている。また、東には東から伸びる小支谷があり込んでおり、そこへ向かって東斜面を形成している。2区は、その小支谷の落ち込み縁辺部稜線上にあたり、比較的平坦な地形をなしている。3区は2区を最高点として南へ大きく傾斜する一帯である。遺構の分布は希薄である。4・5区は、3区の下位にあたり、緩やかに南へ傾斜している。M-3号溝周辺は住居址がなく、また3区ではM-3号溝より東側へは集落が展開しないことから区画溝と判断される。そこでM-3号溝より西側を4区、東側を5区とした。

2 竪穴住居址の時期別分布

次に住居址の時期別の分布状況を見ていきたい。時期の比定は出土土器によって行っている。ただし、その構成によっては、四半世紀単位の詳細な時期がわかるもの、半世紀単位程度のおおよその時期がわかるもの、時期不明のものがある。そこでここでは集落動向の大きな流れを把握するため古墳時代前期・5世紀前半・5世紀後半・6世紀代以降にわけてその分布状況を示した。また出土土器によって時期不明となつたものは省いている。

まず古墳時代前期のものは、1・2区に分布する（第167図）。1区では分散した状況が見られるが、東側の調査区外に当たる部分を考慮すれば、住居構成が若干変わってくる可能性はある。2区ではH-88号住の大形住居址を中心とした一群が認められる。いずれにせよ密集した状況は看取されない。

5世紀前半では、1・2区に多くの住居址が認められる（第168図）。1区では大形住居址H-65号住を中心としたまとまりがある。2区はもっとも多く住居址が分布している。大形住居址H-95号住を中心として、広く分布し、3区にまで広がっている。また4・5区においてもわずかに散在している。

5世紀後半になると、分布の中心は4区になる（第169図）。比較的密集しており、一部では切り合う住居址も存在する。ただし、1・2・3区においても住居跡が分散している。

6世紀代になると、住居址数は激減する（第170図）。その分布に密集した状況は見られないが、2

区においてH-79号住を中心とした一群が認められる。

このように古墳時代前期には北側の標高の高い位置に展開し、5世紀代になると徐々に南の標高の低い方へ移動している。そして6世紀になると、住居址数は激減し、集落は終焉を迎える。ただし、古墳(K-1号古墳)が築造されていることから推測しても、まったくの無住の地となったわけではなく、集落域が比較的近い場所に移動したと考える方が妥当であろう。

また本調査では集落の境界を把握することができた。M-3号溝(M-2号溝も含む)は、集落の東側を南北に走り、溜井(US-1)に至る。それより東側では溜井のある5区周辺を除いては住居址はなくなることから区画溝と判断される。M-3溝西側の1U-52グリッド付近では、多量の石製模造品が出土する地点がある。またそのすぐ西にはH-118号住が存在するが、深度のある豊穴を有するものの柱穴はなく遺物もほとんど出土していない。この一帯が集落の境界とそれに伴う儀礼空間であった可能性が推測される。

3 豊穴住居址の形態変遷

確認された豊穴住居址は、方形の豊穴に4本主柱穴、炉・カマドの燃焼施設、貯蔵穴を伴うというのが最も多い。その一方で、浅い豊穴を有するものの、燃焼施設や主柱穴が伴わないものも多く存在した。それらについては、壁外柱穴など上屋構造が推測されるものの検出に努めたが、擾乱が著しいことでもあって十分な検出には至らなかった。そこで以下、前記の豊穴住居址と通称されるものについてその変遷を見ていく(第171図)。

まず古墳時代前期の住居址は、平面方形を基調とする。豊穴壁はまっすぐ走るが、豊穴四隅は角をもたずわずかに円弧を描くものが多い。4本主柱穴を基本としているが、主柱穴が明瞭でないものもある。燃焼施設には炉を用い、住居北側に設けられる。貯蔵穴は南壁際の南東隅部分に設置される。ただし貯蔵穴は東壁から離れた位置にあり、東壁との間に若干のスペースが設けられる。貯蔵穴の西脇、住居南壁前面に入口ピットを1基設けるものが多い。豊周溝は廻らせているが、間仕切り溝は確認されていない。大形住居址のH-88号住(680×640cm)では豊穴周囲にテラス状の浅い掘り込みが確認された。

5世紀前半の住居址は、平面方形を基調とする。豊穴壁はまっすぐ走り、豊穴四隅は角を持つものが多くなるが、H-53号住のように四隅が円弧を描くものもある。4本主柱穴を基本としているが、主柱穴が明瞭でないものもある。また4本主柱穴は、古墳時代前期よりも若干住居中央へ寄る傾向がある。燃焼施設には炉を用い、住居北側に設けられるものが多い。貯蔵穴は、南壁際の南東隅部分に設置される。古墳時代前期とは異なり、東壁際に寄っており、東壁との間にスペースは減少する。入口ピットは貯蔵穴の西脇、住居南壁前面に1基設けられるものが多い。豊周溝とともに間仕切り溝が出てくる。H-65号住のように大形住居址には豊穴周囲にテラス状の浅い掘り込みが認められるが、H-62号住のように中形の住居址にもみられる。

5世紀後半の住居址は、平面方形を基調とする。豊穴壁はまっすぐ走り、壁面が明瞭なものは、豊穴四隅が角をもち円弧を描かなくなる。4本主柱穴を基本としているが、主柱穴が明瞭でないものも存在する。燃焼施設にはカマドを採用し始める。カマドではなく炉を有するものには、H-111号住がある。その他、カマド・炉のいずれの燃焼施設も有さないものもあるが、それらは小形住居址に属する傾向がある。北カマドが主体をなすが、H-116・H-130・H-136・H-149号住では東カマドを採用している。東カマドは、東壁中央よりやや南側に寄った位置に設置されている。貯蔵穴は、住居南東隅

の他に、住居南西隅またはカマド右脇の住居北東隅に設けられるものがある。東カマドのものはいずれも貯蔵穴は南東隅にある。H-136号住をみると、東カマドの南脇にはスペースがなく、貯蔵穴は西に寄っている。おそらくカマドを構築したのちに貯蔵穴を掘削したものと推定される。東カマドにみられる南東隅の貯蔵穴が、前代からの伝統性によるものか、それともカマド右脇に貯蔵穴を設けるという新來の住居構造によるものかは検討の余地を残している。壁周溝を廻らすものは全周しているものが多く、部分的に設けるものは少ない。間仕切り溝も確認されている。また全く壁周溝が確認できなかったものも多い。入口ピットは存在しないもしくは不明瞭なものが多いため、いずれも南壁付近東寄りで確認されている。掘り方を有する住居址が多く出現し、竪穴中央には床下土坑が掘削されている。

6世紀前半の住居址は、平面方形を基調とするが、H-137号住のように横長長方形になるものがある。竪穴壁はまっすぐ走り、壁面が明瞭なものは竪穴四隅に角をもつ。4本主柱穴を基本としているが、主柱穴が明瞭でないものも認められる。燃焼施設にはカマドを用い、北カマドが主体をなすが、東カマドを有するものもある。貯蔵穴は5世紀後半のものと共通し、住居南東隅、カマド右脇北東隅、住居南西隅のいずれかに設置される。東カマドを有するH-73・H-84号住は、いずれも南東隅に貯蔵穴を設けており、カマド右脇にあることになる。壁周溝は無いものが多いが、全周するものも認められる。部分的に廻らせるものは少ない。間仕切り溝はほぼ確認されていない。入口ピットは少數であるが、南壁付近に設けられる。H-126号住では、南壁に接して入口施設と考えられる床面の高まりがあり、入口ピットはその西端から確認された。H-109号住では、竪穴の北側部分にテラス状の浅い掘り込みを設けている。多くの住居址で掘り方があり、住居中央からは床下土坑が確認される。

6世紀後半の住居址は、平面方形を基調とする。竪穴壁はまっすぐ走り、壁面が明瞭なものは竪穴四隅に角をもつ。4本主柱穴を基本としているが、主柱穴が明瞭でないものもある。主柱穴が明瞭でないものは、小形住居に属する傾向がある。燃焼施設にはカマドを用い、北カマドが主体をなす。東カマドを有するものもあり、H-143号住では東壁北寄りに設置する。貯蔵穴は、北カマド右脇北東隅、南東隅に設けられる。H-122号住やH-150号住のように小形の方形を呈する貯蔵穴も認められる。壁周溝は検出されない住居址が多い。入口ピットは少數であるが、南壁付近で検出される。壁周溝のあるものは、多くの住居址で掘り方があり、住居中央からは床下土坑が確認される。

これまで述べてきたように住居の平面形態は、古墳時代前期から方形を基調とするが、古墳時代前期では隅丸方形、5世紀以降では方形となる。柱穴は全時期を通じて4本主柱穴となるが、古墳時代前期から5世紀代になると、実寸でそれぞれ10~20cm程度住居中央寄りに配置されるようになる。貯蔵穴は、古墳時代前期には住居南東側に設置され、5世紀前半になると住居南東隅角部分に設けられる。そしてカマドの出現する5世紀後半以降では、住居南東隅角の他に、北カマド右脇北東隅、住居南西隅に設けられるものも出てくる。また明確な掘り方および床下土坑も5世紀後半から出現する。入口ピットは全時期を通じて、南壁付近にあり、入口施設と考えられる床面の高まりも南壁際で確認される。

このように住居形態においては、古墳時代前期から5世紀前半段階の間と、5世紀前半から5世紀後半段階にかけての間に画期を見出すことが出来る。とくに5世紀前半から後半にかけてはカマドの導入をはじめ住居構築方法から大きく変化している。しかし、その一方で、カマドを採用した段階においても依然として貯蔵穴を南東隅に設けるものがある点などは、古墳時代前期からの伝統性が窺える。

4 空穴住居施設における諸特徴

前項においては、加賀塚遺跡において多く認められる基本的な住居構造についてまとめてきた。そこで以下では、その他の特徴を有する住居構造について述べていきたい。

張り出し部 まず、住居壁面の一部に張り出しを設ける住居址が複数認められた。張り出し部を有する住居址にはH-65・H-95・H-137・H-152号住がある。H-65号住では、平面椿円形の土坑状を呈し、住居西壁中央に設けられる。張り出し部の覆土は住居覆土へと連続しており、また張り出し部と住居内との接合部分床面にはピットが2基ある。これらのことからも張り出し部は本住居址に付帯するものと言える。なお張り出し部中央にはピットは確認できなかった。H-95・H-152号住は住居壁面の半分以上にわたる平面方形の張り出し部分が認められる。H-95号住では、張り出し部分と住居内との接合部に部分的に周溝が入る。その一方でH-152号住では、壁周溝が住居内から張り出し部分にかけて連続する。H-137号住では、平面方形の土坑状の張り出し部が住居西壁面に付帯する。張り出し部分の覆土と住居覆土は連続するが、張り出し部分の床面は住居内床面より一段高くなる。

H-65・H-95号住は5世紀前半に、H-152号住は5世紀後半に、H-137号住は6世紀前半に位置づけられる。とくにH-65号住にみられる張り出し部は、5世紀後半以降に流布する張り出しピットとも通称されるものが想起される。H-65号住は最大規模の住居址で、張り出しピットを設ける住居址との共通性が見いだせる。ただし、H-65号住のものには、中央部にピットが検出されないことなどの相違点が指摘できる。また加賀塚遺跡においては、この型式学的連続性が覗える資料は認められなかった。

石組力マド 次にカマドは、ローム土を主材とするものが一般的であるが、石組のカマドが認められた。とくに顕著なものは、H-99号住である。北カマドで、人頭大もしくはそれ以上の大きさの礫を袖および天井に用いている。使用された礫はいずれも安山岩である。袖は住居内に長く伸び、煙道部分は地山を掘り込んで構築している。加賀塚遺跡で検出したカマドでは、5世紀段階では袖が長く伸び、煙道部分は比較的短く、6世紀になると徐々に煙道部分が長く伸びる。これらのことからもH-99号住の石組カマドは5世紀段階の特徴を示していると言える。ただしこの石組カマドは、火床もなく燃焼した形跡が認められず、恒常的に使用した痕はなかった。また型式学的に連続するような資料も認められなかった。おそらく特別な場面で使用されたか、新來の集団によって短期的に構築されたものと推測されるが、遺物からはその証左となるものは現状では確認できなかった。

テラス状遺構 住居空穴周囲にテラス状の浅い掘り込みを廻らせるものが確認された。確認された住居址には、H-62・H-65・H-88・H-109・H-113・H-118・H-119・H-126・H-129・H-144・H-146号住がある。H-62・H-65・H-88・H-119号住は5世紀前半、H-129・H-146号住は5世紀後半、H-109・H-126号住は6世紀前半に位置づけられている。主に空穴に深度のある住居址で確認されており、H-62・H-88・H-126号住ではテラスが全周しているが、その他では全周しない。H-65号住ではテラス部分から遺物が出土しており、樋状の施設となっていたものと考えられるが、正確には上屋部分もしくは周堤帯と空穴との間にあたるものと推測される。全周しないものについては、いずれも傾斜地において標高の高い方で検出されている。このことからも壁面の高さ調整の役割もあったものと考えられる。なおH-126号住では北側テラス内に柱穴が3基認められる。中央の柱穴がカマド煙道部分に近いことからも、この壁外柱穴とテラス、カマド、周堤帯がどのような関係にあったのか検討の余地を残している。

5 鋳冶関連遺構

加賀塚遺跡では鍛冶を行った遺構は確認できなかつたが、高环転用羽口と鉄滓が出土している。

まず高环転用羽口が出土した住居址には、H-59・H-62・H-70号住があり、前2者は5世紀第Ⅱ四半期に位置づけられている。H-70号住は、4世紀前半に位置づけられるが、高环転用羽口自体は混入であろうか。鉄滓の出土した住居址には、H-52・H-62・H-70号住がある。H-52号住・H-62号住は、5世紀第Ⅱ四半期に位置づけられている。つまり高环転用羽口と鉄滓が伴うものは、H-62号住とH-70号住となる。

H-62号住は、その平面規模が 6.15×4.90 mの長方形を呈し、深さは87cmと比較的深い住居址である。柱穴は、2本住居中央にあり、4本主柱穴を基本とする他の一般的な住居址とは異なっている。炉は2本の柱穴間北側で確認され、住居中央東側には台石が1点床面より出土している。また周囲には、竪穴状遺構（調査時には住居址と呼称）は存在するものの、住居址が集中する地点からは離れている。このように住居構造およびその分布からは他の住居址とは異なった点が指摘される。

富岡市上丹生屋敷山遺跡では、5世紀中頃に位置づけられている鉄瓶が出土している。また加賀塚遺跡における鍛冶関連遺構は、5世紀前半に集中している。5世紀前半段階においてこの一帯が鉄器生産において何らかの画期を有していた可能性が指摘されるだろう。

6 まとめ

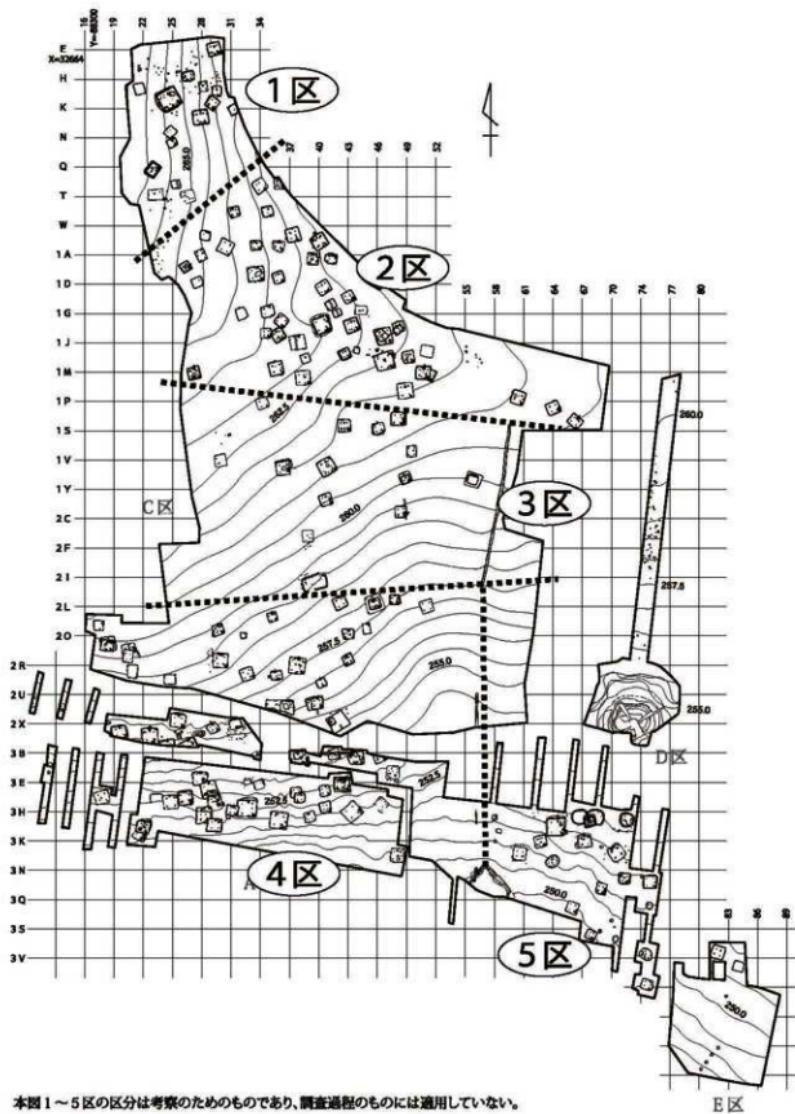
以上、加賀塚遺跡における住居址の特徴について概観してきた。今後はこの集落を営んだ集団が、どこから来たのか、そしてどこへ移動・拡散していったのか、挙げた諸特徴の系譜および分布によって追うことができるであろう。

近年この横野台地において5世紀の集落群（人見枝谷津・東向原遺跡、人見向原遺跡、人見西原遺跡）が多く確認されている。これがどのような要因によるものか、集落分析とともに周囲との関係性において考えなくてはならない。とくに大形古墳が存在しない当地において、その生産基盤がどこに存在したのか、どのような集落関係が構築されていったのか、今後の課題となる。とくに水源の乏しい横野台地においてこの時期に集中して集落を営んだ状況は、単に自然発生的なものとは言えない。その中で鉄器生産のあり方は重要な鍵となるであろう。

次に6世紀以降、加賀塚遺跡は縮小する。この時期から台地下に集落が増加するが、それらがスムーズに連続するものか考えていかなくてはならない。とくに初期横穴式石室を有する篠瀬二子塚古墳を構築した集団が、加賀塚遺跡など横野台地の集団を出自とするのか、それとも新たな外来集団によるものか今後の課題となる。

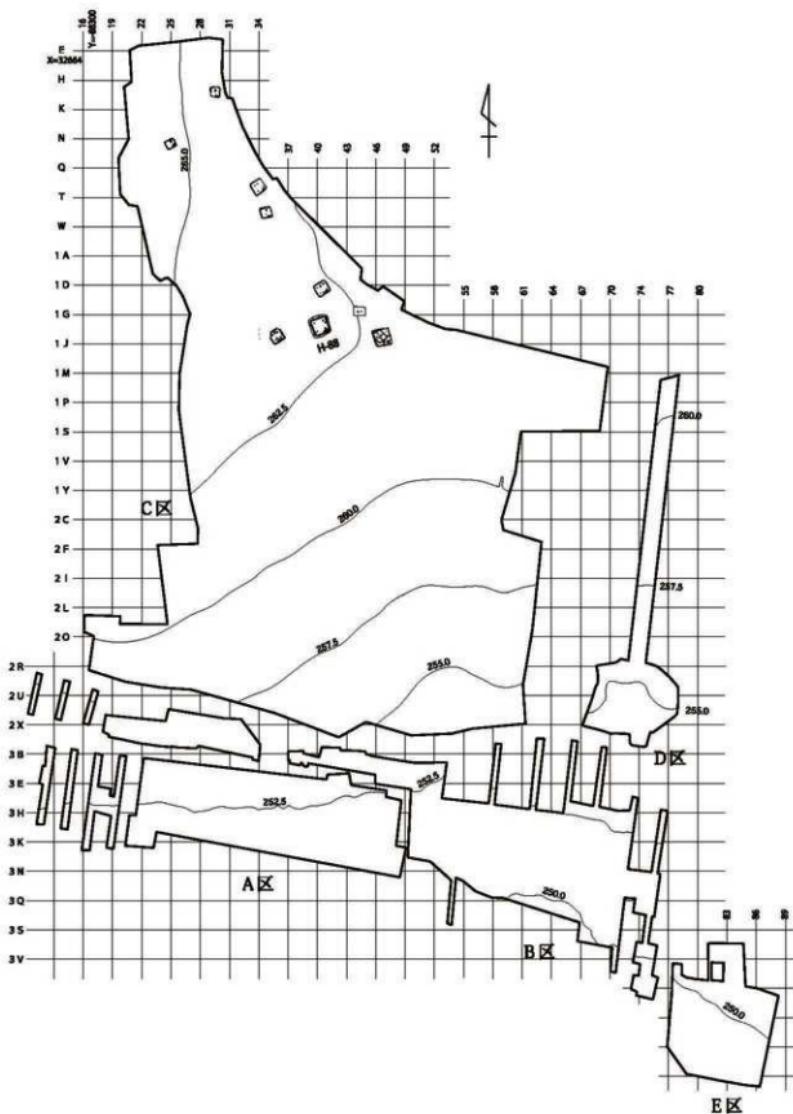
また古代以降、横野台地は牧闘連の遺構が確認され、文献に記載のない私牧と想定されている。その規模は非常に広大であり、この台地が生産域として大きく転換していったことがわかる。つまり集落の縮小は、単に集落域の移動といったものだけではなく、地域権力による再編成まで視野にいれておく必要が指摘されるのである。

（石丸敦史）

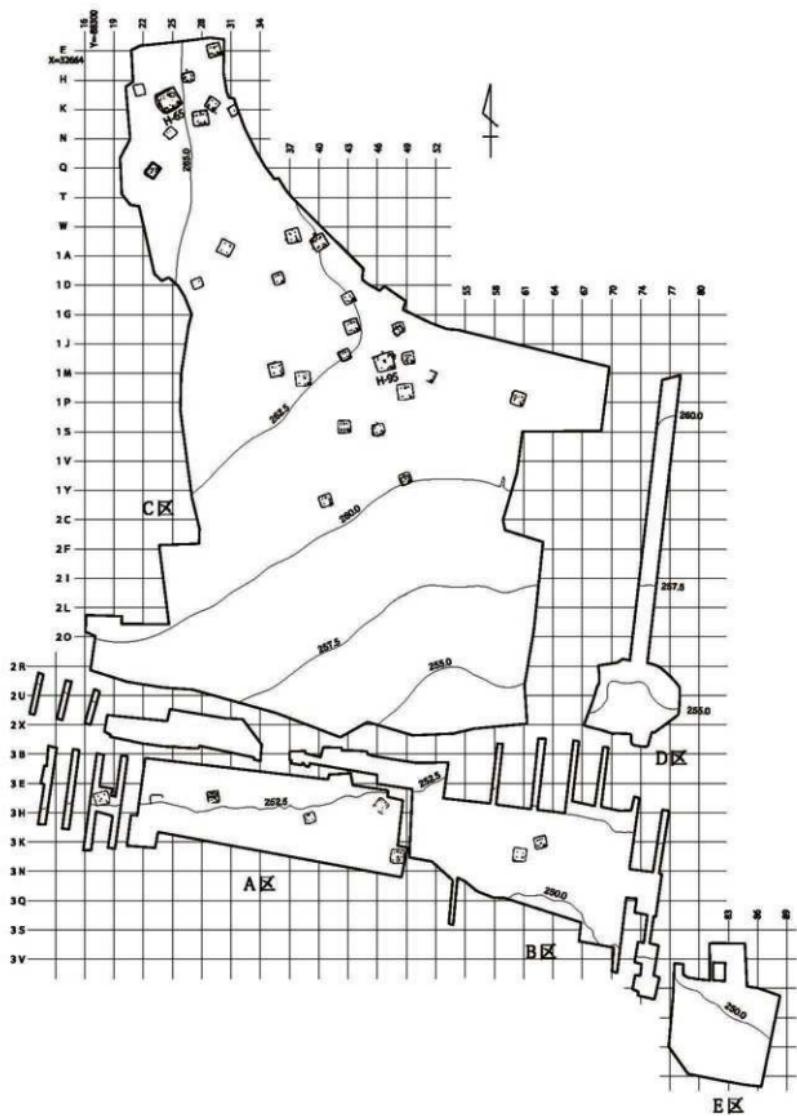


本図1～5区の区分は考察のためのものであり、調査過程のものには適用していない。

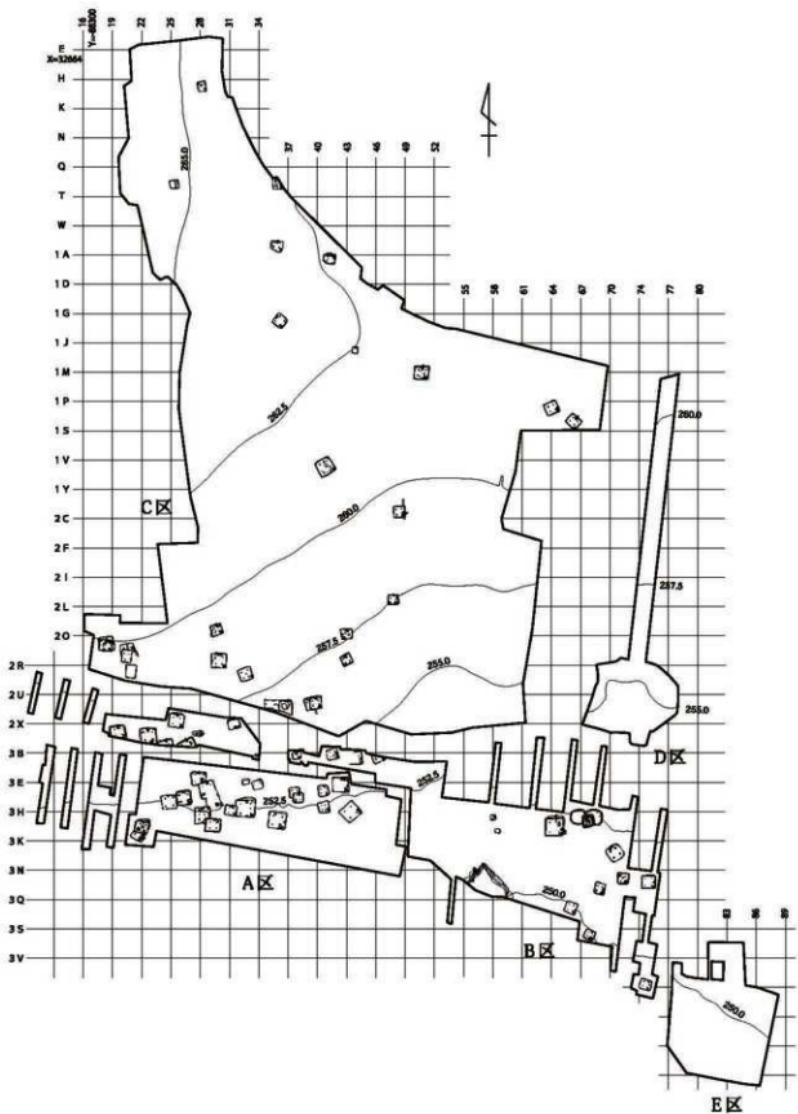
第166図 加賀塙遺跡遺構分布図



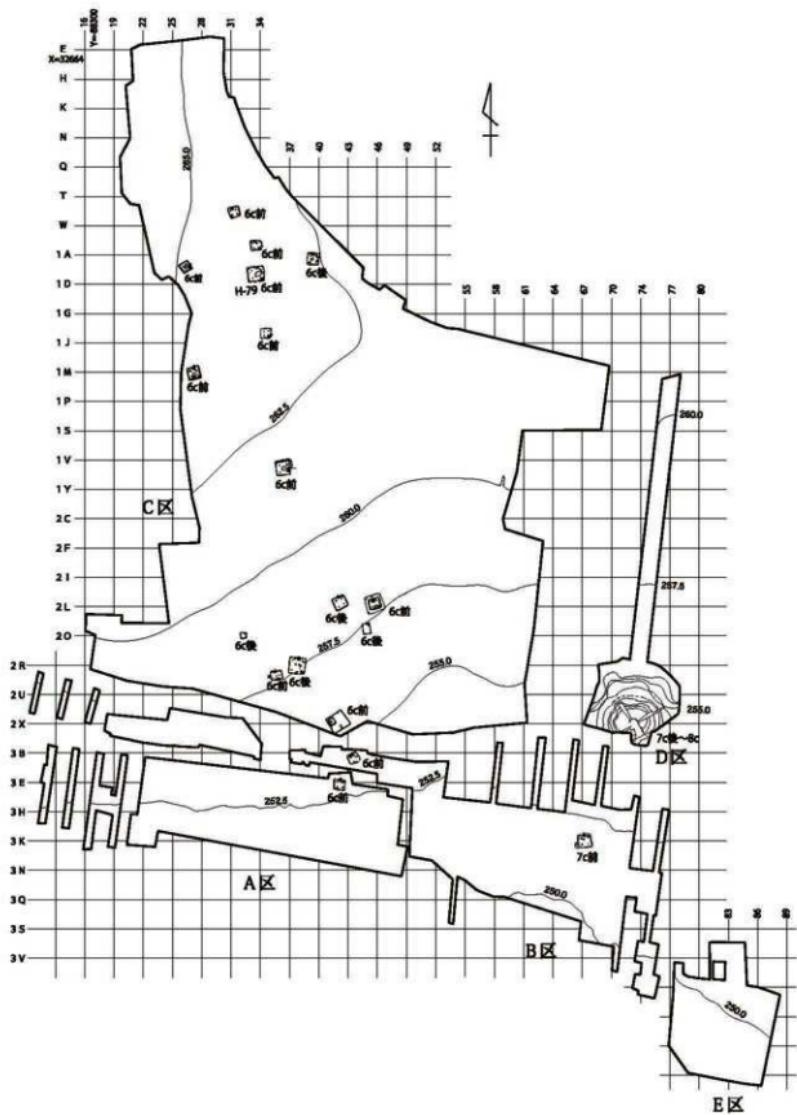
第 167 図 古墳時代前期遺構分布図



第168図 5世紀前半遺構分布図



第 169 図 5世紀後半追拂分布図

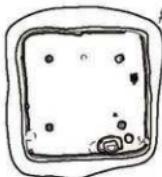


第170図 6世紀以降遺構分布図

古墳時代前期



H-57号住

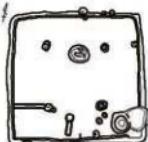


H-88号住

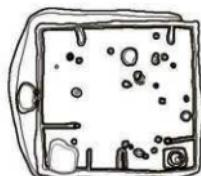
5世紀前半



H-53号住



H-52号住

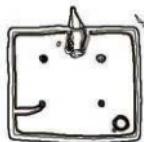


H-65号住

5世紀後半



H-99号住



H-117号住

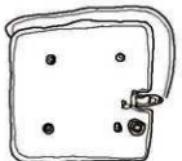


H-152号住

6世紀前半

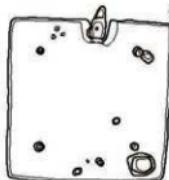


H-107号住

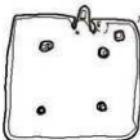


H-109号住

6世紀後半



H-138号住



H-122号住

H-65・88号住は3-1/250
その他のは5-1/200

第171図 加賀塚遺跡における住居址変遷図

古墳時代住居址觀察表

住居名	掘幅(cm) [テラス]				主施方位	住居内土坑		主柱穴 印	燃焼跡設 カマド	時期 (度紀)	備考 〔その他の歴史的段階〕
	長軸	短軸	深さ	床面分類		床底(OK)	床下(GD)				
H-52	565	545	59	III	N-12°-W	15		4	北	5 II	[開仕切り壁・入口ピット] 土葺き・板張り跡がある。
H-53	502	400	95	IV	N-6°-W	15		不明	東	5 II	[壁面構造・入口ピット] 床面にローム高まりあり。
H-54	478	435	25	IV	N-18°-W			0		5 III	鶴六式遺構。
H-55	418	338	38	V	N-9°-W			4		5 III	床面にローム高まりあり。
H-56	445	398	30	V	N-44°-E			2?		5 I	鶴六式遺構。
H-57	409	353	75	V	N-27°-W	15		不明	北東	3 前半	[入口ピット] 住居構造材残物あり。
H-58	655	625	108	II	N-7°-W	15		4		5 II	[壁外側構造から東にかけて テラスめぐるか] 入口(南)部分にローム高 まりあり。
H-59	497	477	54	IV	N-35°-E	15		4	○	5 II	[壁面構造] 住居前に被燃焼あり。
H-60	420	386	58	V	N-6°-E	15		0	北	4	[入口ピット]
H-61	420	(361)	58	V	N-26°-W	15		不明		5 I	財戸は非常に浅い。
H-62	815	490	87	IV	N-37°-E	4		2か	西	5 III	[外周テラス] 入口(北)部分にローム高 まりあり。
H-63	370	342	15	V	N-15°-W			0		5 III	鶴六式遺構。
H-64	620	441	11	V	東北			不明			基礎・廻縁不明確。鶴六式 遺構。
H-65	845 (863)	808 (869)	109	I	N-28°-W	15		4	北東	5 II	[壁面構造・壁仕切り壁・入口 ピット・外周テラス・張り 出し(西)] 最大規模住居。住居構造材 残物があり。
H-66	557	511	7	V	N-16°-W			不明			鶴六式遺構。
H-67	418	410	46	V	N-4°-E	4	1	不明	北		カマド位置に方形窓で、壁 面多く。カマドは後壁によ り大きく傾斜。
H-68	588	585	29	III	N-26°-E	15		4		5 II	残瓦多い。柱穴ブラン不明 確。
H-69	443	433	24	IV	N-21°-W	15	1	4	北	6 I II	柱石あり。柱穴跡にローム 高まりあり。カマドは油石・墨 色土・土吹・磨工・井石・油石 状のピットとり(洗土なし)。 直腰壁先。
H-70	548	525	42	III	N-32°-W			3?		4 前半	住居構造材残物あり。カ マドが北側に偏在。
H-71	451	(339)	15	V	N-4°-W	15	2	3(4か)	北	5 III	
H-72	460	445	63	IV	N-13°-W	15		不明	北東	4	[入口ピット] 床面(西側)に方形形窓。
H-73	425	407	61	V	N-59°-E	15	1	4	東	6 I	[開仕切り壁] カマドはローム+墨色土。 油石天井石・油石。
H-74	444	401	32	IV	N-21°-W	15		0	北東	5 II	[張り出し(西)・開仕切り 壁] カマドはローム+墨色土。 油石天井石。
H-75	471	413	43	V	N-9°-W	15	2	4	北	6 I II	[張り出し(西)・開仕切り 壁] カマドはローム+墨色土。 油石天井石。
H-76	500	440	35	IV	N-7°-E	15		4	北	5 III	東・廻縁不明確。 カマドは墨色土主体。油石 天井石・油石天井石。
H-77	588	576	45	III	N-16°-W	15		4	北	5 I	残瓦多い。床下土坑に燒土 多めのものあり。カマドは大 きく傾斜し、形態・構造 不明。
H-78	477	377	34	IV	N-85°-E		(4)	4		北東	[壁面構造] 残瓦多く、カマドは大きくな り傾斜。
H-79	690	615	55	II	N-5°-W	15	1	4	北	6 I II	残瓦多く、カマドは大きくな り傾斜。
H-80	495	473	61	IV	N-18°-W	15		4	北	5 II	[壁面構造・入口ピット] 残瓦多い。
H-81	549	480	37	IV	N-9°-W	15	1	3		北	残瓦多く、カマドは大きくな り傾斜。
H-82	485	438	27	IV	N-19°-W						鶴六式遺構。壁面不明確。

第5表 遺構観察表(1)

住居名	面積(cm) [テラス]				主軸方位	住居内土坑		主柱穴 軒 床下(G)	基礎施設		時期 (世紀)	備考 【その他の風致施設】
	長軸	短軸	深さ	面積分類		床底(G)	床下(G)		軒	カマド		
H-83	502	492	46	IV	N-54°-W	13		4	JCB	5戸	浅多く、カマドは破壊される。袖ドーム主食室。	
H-84	435	412	61	V	N-87°-E	16	1	4	東	6ⅠⅡ	H85住→H84住の切り合ひ。倒れ多く、カマドは大きくなり破壊される。袖ドーム主食室。	
H-85	541	537	76	IV	N-34°-W	15		4	北	4箇半	[壁面溝・廻仕切り溝・入口ピット]	
H-86	587	583	82	III	N-14°-W	16		4	北	5Ⅱ	H85住と連繋される軒土が北側の穴口で削出されたが、倒れ多く、跡が不明。	
H-87	408	387	22	V	N-28°-W		0				跡が不明。	
H-88	580 [870]	640 [776]	82	II	N-22°-W	15		4	北	3箇半	[外周テラス・入口ピット]	
H-89	502	577	72	III	N-19°-W	16		4	北	5Ⅱ	[入口ピット] 防衛穴の周囲に方形枠。	
H-90	487	363	7	V	N-1°-E		0	西		4	平面プラン不明確。	
H-91	377	373	25	V	N-19°-W		0				壁穴状造築。壁面黒色土。	
H-92	480	453	52	IV	N-30°-W	16		4	北	5ⅠⅡ	[入口ピット] 防衛穴の周囲にロームの方形枠。	
H-93	455 [855]	443	49	IV	N-31°-W	16		4	北	5Ⅱ	[外周テラス(西側)] 伊豆石近辺に焼成土。	
H-94	700 484	670 408	19 14	II	N-19°-W	16		不明			2箇限壁。裏面不明確。	
H-95	865	707	54	I	N-18°-W	16		4	中央	5Ⅱ	[張り出し・廻面溝・廻仕切り壁] 防衛穴の周囲に方形枠。幾度壁辺は墨書き化粧。	
H-96	277	244	15	V	N-8°-E		0			5戸	壁穴状造築。壁面墨書きに立て上がる。	
H-97	452	434	8	IV	N-18°-W		不明				壁穴状造築。H-97住→H-100住の切り合ひ。	
H-98	523	478	5	IV	N-10°-E		0				壁穴状造築。裏面不明確。	
H-99	623	558	59	II	N-3°-E	16		4	北	5戸	[壁面溝・廻仕切り溝・入口ピット] 石柱カマド。H-101住→H-99住の切り合ひ。防衛穴周囲に方形枠。	
H-100	410	292	59	V	N-40°-W		不明	北		5Ⅱ	[壁面溝] H-97住→H-100住の切り合ひ。がはり込みなし。	
H-101	477	—	84	V	N-25°-E		不明			5ⅠⅡ	[壁面溝] H-101住→H-99住の切り合ひ。防衛穴周囲に方形枠。	
H-102	363	319	16	V	N-22°-W		0				壁穴状造築。	
H-103	495	487	30	IV	N-10°-W	16		4	北	5Ⅱ	伊豆石近辺に燒成土。	
H-104	657	650	52	II	N-8°-W	16		4	北	5Ⅱ	伊豆石近辺に燒成土。	
H-105	613	600	26	III	N-9°-W	16		3か	東	5Ⅱ	[壁面溝] 壁面黒色土。貼床なし。	
H-106	477	447	14	V	N-22°-W	16		3か			壁穴状造築。壁面剥落。	
H-107	519	511	81	IV	N-10°-W	16	1	4	北	6Ⅰ	[壁面溝] カマド袖は地山削り出し。焼口立井石。入口部分にロームの高まり。	
H-108	—	—	—					不明			壁穴不明確。裏面は平面焼出時プラン。	
H-109	577 [646]	575 [623]	69	III	N-79°-E	16	1			東	6ⅠⅡ	[外周テラス] カマド袖。カマド袖はローム立井石。焼口立井石。

第6表 遺構観察表(2)

住居名	掘幅(cm) [テラス]				主軸方位	住居内土坑		主柱穴	遺跡施設		時期 (世紀)	備考 [その他施設]
	長軸	短軸	深さ	掘削分類		野戸(OK)	床下(GD)		卦	カマド		
H-111	685	677	63	II	N-28°-W	16		4	北	5 III		北側住穴間に伊の可能性がある鍬形が確認する跡り込みあり。磨石あり。
H-112	528	527	28	IV	N-2°-W	16		4	北	5 I II		カマド跡は石室。
H-113		560	62	III	S-89°-E	15	1	4		南東		[外周テラス・隣接路・開拓切り壁] カマド跡は石室。
H-114	490	473	2	V	N-9°-W				不明			蛇穴状通路、隣接路。
H-115	586	566	45	III	N-19°-E	16		4			5 II	[隣接路] ガラスなし。床面地山硬面化。
H-116	547	510	60	III	N-67°-E	16		4		南東	5 III	[野戸切り壁] 住居内土坑には、隣接路構造による補修が想定される。 カマド下部口天井石・油石のみ残る。
H-117	542	480	64	IV	N-40°-E	16		4		北	5 III	[隣接路・開拓切り壁] カマド跡は黒色土・鍬口天井石・油石は円錐。
H-118	424 [625]	357 [562]	64	V	N-19°-E			0				[外周テラス] 深度のある野穴状通路。
H-119	383 [464]	339 [468]	86	V	N-23°-W	16		0	北	5 I II	[外周テラス・人口ピット] ガラスは埋め込みなく、硬面化のみ。	
H-120	500	425	47	IV	N-23°-W	16		4	北	5 II	北側住穴にわざかに焼土が散在。	
H-121	468	406	40	IV	N-1°-W			4		東		東側住穴の深さは10cmではない。 床面に特徴性がない。床面には無理な硬面化はない。
H-122	553	508	67	IV	N-24°-W	4		4		北	6 IV	カマド跡は地山割り出し。 カマド跡はローム+黒色土の状況の高さあり。
H-123	468	425	60	IV	N-12°-W	13		0		北	5 IV	[隣接路] カマド跡は地山割り出し。 カマド跡はローム+黒色土の状況不明。
H-124	445	415	66	V	N-28°-W	13		4		北	5 V	[隣接路] カマド跡はローム主体。
H-125	431	309	29	V	N-5°-W	4	1	0		北	6 III	平面直角形の隣接住居跡。 狭い住土坑跡あり。カマドの跡跡が複数見られる跡あり。
H-126	445 [694]	451 [715]	83	IV	N-11°-W	16	1	4		北	6 II	[外周テラス・隣接路・隣接路] 入口部分(東)にローム高まりあり。カマド跡はローム+黒色土・鍬口天井石。
H-127	433	420	0	V	N-2°-E	13	1	4		北	5 III	カマド跡は地山ローム削り出し。 蛇穴状通路。
H-128	511	529	34	IV	N-19°-W			4				
H-129	555 [655]	471 [600]	89	IV	N-10°-E	16		3		北	5 III	[外周テラス・隣接路・隣接路] 住居内土坑跡が確認され。D-2は認める。カマド跡は油石・支脚跡のみ残存。
H-130	562	—	18	V	N-79°-E			(2)		東	5 III	H-130→H-141住の切り合いで開拓。カマド跡は黒色土。カマド跡と認定される跡が複数。
H-131	550	434	32	IV	N-1°-W			0			6 IV	蛇穴状通路。
H-132	472	407	17	IV	真北			0				蛇穴状通路。白玉多量出土。床下から不規則な配列のピットが露出されたが、本住跡との関係不明。
H-133	629	594	70	III	N-1°-E	16	4	4		北	5 III	[隣接路・開拓切り壁・入口ピット] 鍬土から柱跡が確認され。上層部は自然崩落した可能性あり。カマド跡は天井石・油石の残存。
H-134	452	449	58	IV	N-16°-W	16		4		北	5 IV	野戸の前面に方形特征。カマド跡はローム+黒色土・鍬口天井石。
H-135	388	387	41	V	N-18°-W	16		4		北		[隣接路] カマド跡はローム+黒色土。

第7表 遺構観察表(3)

住居名	面積(cm) 〔テラス〕			主軸方位	住居内土坑		主軸穴	施設施設		時期 (世紀)	備考 〔その他の風土施設〕	
	長軸	短軸	深さ		床底(BO)	床下(MO)		坪	カマド			
H-136	543	535	61	E	N-70°-E	15		4		5IV	窓カマド。カマド袖はローム+粘土+灰土。	
H-137	480	375	58	V	N-9°-W	15	1	4		6I II	【張り出し】カマド袖はローム+黒色土。	
H-138	677	663	76	II	N-6°-E	16	1	4		6III	【人口ピット】カマド袖はローム+黒色土。焼口立井石。伊豆國に文献石があり、窓を復元。	
H-139	472	453	0	V	N-6°-W			不明			【窓穴造築】	
H-140	401	355	84	V	N-27°-W			0		北東	カマド袖はローム主。	
H-141	528	413	38	IV	N-7°-E			4		5IV	【窓穴造築】H-130住→H-141住の切り合いで複数。	
H-142	437	420	50	IV	N-3°-W			不明			窓孔多い。住居北西側に複数のローム高まりあり。	
H-143	271	234	38	V	N-45°-E	16		0		北東	小形住居。東カマド。カマド袖はローム+粘土。	
H-144	-	425	90	II	N-3°-E	16		4		北	土器等廻縁の跡跡あり。カマド袖には一部窓を復元する。	
H-145	760	691	14	V	N-30°-W			0		6I II	【窓穴造築】切り合う(先頭部破損不詳)・プラン不規則。焼口袖には一部窓を使用か。	
H-146	691	539	88	IV	N-5°-W	16		4		北	5IV	【外壁脚柱・廻縁】カマド袖はローム+粘土。
H-147	555	553	58	II	N-20°-E			4			窓孔多い。	
H-148	428	415	35	IV	N-23°-E			0			【窓穴造築】	
H-149	480	477	80	IV	N-48°-E	16		4		東	5IV	東カマド。石組みカマド。カマド袖は大きく損失。袖はローム主。
H-150	495	487	28	IV	N-5°-E		1	4		北	6IV	【入口ピット】住居を廻縁で囲む形態。
H-151	563	528	43	II	N-31°-W	15		4		3後半	【張り出し】・廻縁・人口ピット	
H-152	500	436	87	IV	N-12°-E	4		4		北	5IV	カマド袖はローム+粘土。
H-153	619	605	82	II	N-33°-W	15		4+4		5II	【廻縁構・人口ピット】4本柱及び外2廻縁めらかれる。外部の方が張り方が大きいため、外側を包む取り扱い側へ替えて替えたか。	
H-154	636	593	5	II	N-11°-W			0		北	窓の跡・玄関跡。カマド袖は黒色土。	

規模分類（住居下端での計画概による床面積） I : 49m²以上 II : 36m²以上 49m²未満 III : 25m²以上 36m²未満 IV : 16m²以上 25m²未満 V : 16m²未満

周辺状況調査表

遺構名	面積(m)			時期	所見	
	長軸	短軸	深さ		所見	
RM-4	10.44	6.32	0.20	不明	周辺プランは明瞭に検出された。北東面・南西面は階級状に削落が追切れる。	

溝渠系表

遺構名	面積(m:最大幅)			時期	所見	
	長さ	幅	深さ		所見	
M-3	[250]	1.4	0.6	古墳時代以降 M-2号墳(『加賀坂道跡1』)に連続し、US-1号 sondageに接続すると想定される。		

土坑調査表

遺構名	上堆削積(cm)		下地削積(cm)		深さ	平面形態	断面形態	時期	所見
	長軸	短軸	長軸	短軸					
D-28	156	107	116	66	126	楕円形	フランコ状	縄文時代	窓穴。
D-29	102	98	80	82	32	円形	逆台形	古代以降	
D-30	124	116	117	108	36	円形	方形	古代以降	
D-31	136	126	121	107	36	円形	方形	古代以降	
D-32	129	119	112	105	38	円形	方形	古代以降	
D-33	129	117	119	107	42	円形	方形	古代以降	
D-34	118	114	78	73	98	方形	逆台形	古代以降	

第8表 遺構観察表(4)

遺物名	番号	種類	基盤	法螺			成・葉形法螺の特徴					備考	重識(g)
				口径	底径	高さ	①純成	②色調	③鉛土	我存	外面	内面	
H-52	1	土師器	培	8.3	—	8.1	普通	純い黄褐色 黒褐色	白色鉛 黒褐色鉛	一部鉛 無	口縁部側面で、胴部上 位側面で、下位～底部 削り	口縁部側面で、胴部～ 底部側面で、底部削面	164
H-52	2	土師器	培	(7.0)	5.3	8.2	普通	純い黄褐色	白色鉛 黒褐色鉛	1/2	口縁部側面で、胴部上 位側面で、中位側面で、 下位～底部削面	口縁部側面で、胴部～ 底部側面で	94
H-52	3	土師器	培	8.2	—	9.3	普通	明赤褐色	白色鉛 右美・錫	完形	口縁部側面で、胴部上 位側面で、下位～底部削 面	口縁部側面で、胴部～ 底部側面で	246
H-52	4	土師器	培	(7.0)	—	7.1	普通	純い黄褐色 明赤褐色	白色鉛 右美・錫	ほぼ完 形	口縁部側面で、胴部上 位側面で、下位～底部削 面	口縁部側面で、胴部～ 底部側面で	146
H-52	5	土師器	培	(8.2)	5.1	7.3	普通	褐色	白色鉛 黒褐色	2/3	口縁部側面～胴部上位側面 で、胴部中位～下位削 面で、底部削面	口縁部側面で、胴部～ 底部側面で	123
H-52	6	土師器	培	8.1	—	9.1	普通	純い黄褐色 純褐色	白色鉛 黒褐色	ほぼ完 形	口縁部側面で、胴部上 位側面で、中位～底部 削面	口縁部側面で、胴部～ 底部側面で	229
H-52	7	土師器	培	8.8	5.8	7.0	普通	純い黄褐色 黒褐色	白色鉛 黒褐色	3/4	口縁部側面～胴部上位側面 で、胴部中位～下位削 面で、底部削面	口縁部側面で、胴部～ 底部側面で	133
H-52	8	土師器	尾	13.0	4.8	13.1	普通	橙色～明赤 褐色	白色鉛 右美・錫	完形	口縁部側面で後抜討状 剥離面、胴部上位側面 で、中位～底部削面	口縁部側面で後抜討状 剥離面、胴部～底部側 面	506
H-52	9	土師器	高环	18.2	—	—	普通	純い黄褐色 黒褐色	白色鉛 黒褐色	坏形4/5	口縁部側面で、体部左 側面削り	口縁部側面で、体部～ 底部側面で	254
H-52	10	土師器	高环	—	12.8	—	普通	浅青色～ 純褐色	白色鉛 黒褐色	剥離	剥離面、胴部側面で 剥離面	剥離面削り、剥離痕 面	193
H-53	1	土師器	鉢	12.8	3.7	5.4	普通	純い黄褐色 黒褐色	白色鉛 黒褐色	7/8	口縁部側面で、体部～ 底部削面	口縁部～底部削面	179
H-53	2	土師器	坪	—	4.2	—	普通	純い黄褐色	白色鉛 右美・錫	3/4、口 縁部側面 削面	口縁部側面で、体部側 面、下位～底部削面	口縁部側面で、体部～ 底部削面	187
H-53	3	土師器	培	7.3	—	8.5	普通	褐色	白色鉛 黒褐色	3/5	口縁部側面で、胴部側 面、底部削面	口縁部側面で、胴部～ 底部削面	113
H-54	1	土師器	培	—	—	—	普通	褐色～純灰 褐色	白色鉛 黒褐色	剥離	剥離面で、胴部～底部 削面	剥離～底部削面	89
H-55	1	土師器	甕	18.4	8.4	30.2	普通	褐色～純い 褐色	白色鉛 右美・錫	口縁部側面で、胴部上 位側面	口縁部上位側面で、下 位～底部削面	口縁部上位側面で、下 位～底部削面	2,350
H-55	2	土師器	甕	20.5	6.9	32.6	普通	褐色～純灰 褐色	白色鉛 右美・錫	7/8	口縁部側面で、胴部左 側面削り、底部面	口縁部側面で、胴部～ 底部削面	2,840
H-55	3	土師器	高环	15.0	10.7	12.1	普通	褐色～純い 褐色	白色鉛 黒褐色	7/8	口縁部側面で、体部側 面、胴部側面で、底部削 面で後、全体に剥離面 と底面削面	口縁部側面で、体部側 面後剥離面と底面削 面	414
H-56	1	土師器	丸	(2.2)	1.6	2.2	修復	褐色～明赤 褐色	白色鉛 右美・錫	2/3	口縁部～胴部側面で	口縁部～底部側面で	3
H-56	2	土師器	培	8.9	3.8	9.1	普通	褐色～黒褐 色	白色鉛 黒褐色	ほぼ完 形	口縁部側面で、胴部上 位側面で、下位削面	口縁部側面で、胴部～ 底部側面	193
H-56	3	土師器	培	8.1	—	9.8	普通	純い赤褐色 黒褐色	白色鉛 黒褐色	4/5	口縁部側面で、胴部～ 底部削面	口縁部側面で、胴部～ 底部削面	176
H-56	4	土師器	培	—	4.0	—	普通	純い赤褐色	白色鉛 黒褐色	口縁部 底面1/2	口縁部側面で、胴部上 位側面で、下位～底部削 面	口縁部側面で、胴部～ 底部削面	64
H-56	5	土師器	培	10.2	5.1	6.3	普通	暗褐色～黑 褐色	白色鉛 黒褐色	7/8	口縁部側面で、胴部上 位側面で、下位～底部 削面	口縁部側面で、胴部～ 底部削面	144
H-56	6	土師器	高环	—	—	—	普通	褐色	白色鉛 黒褐色	底面 削面1/3	底部削面不明、剥 離面、剥離面	底部削面で、剥 離面	260

第9表 出土土器觀察表(1)

遺物名	番号	種類	断面	特徴		成・発達段階の特徴					備考	重量(g)		
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③微土	残存	外観	内面		
H-56	7	土師器	瓶	-	5.7	-	普通	黄い黄褐色	白色鉄・ 角閃石・ 黑鉄 等3/4	断面中 位～底 部	断面削り	断面鏡面		780
H-56	8	土師器	瓶	-	-	-	普通	黄い黄褐色	白色鉄・ 角閃石	口縁部 ～断面 中位	口縁部模様で、断面鏡 面	断面鏡面で、断面鏡 面		116
H-56	9	土師器	小形瓶	10.6	5.5	15.8	普通	黄い橙色	白色鉄・ 黒鉄	7/8	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面		834
H-56	10	土師器	小形瓶	12.9	-	-	普通	明赤褐色～ 黄い赤褐色	白色鉄・ 黒鉄	口縁部 ～断面 下位2/3	口縁部模様で、底部～ 断面鏡面	口縁部模様で、断面鏡 面		488
H-56	11	土師器	甕	15.5	6.1	23.4	普通	明赤褐色	白色鉄・ 黒鉄	3/4	口縁部模様で、断面鏡 面	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面		1,260
H-56	12	土師器	甕	15.0	5.8	21.9	普通	暗色～暗灰 褐色	白色鉄・ 黒鉄	7/8	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面		1,169
H-56	13	土師器	台付甕	15.7	10.9	32.8	普通	黄い橙色～ 黒褐色	白色鉄・ 黒鉄	4/5	口縁部模様で、断面鏡 面	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面		3,935
H-57	1	土師器	台付甕	(17.2)	-	-	普通	黄い褐色	白色鉄・ 黒鉄	口縁部 ～台脚 上位2/5	口縁部模様で、底部～ 断面鏡面	口縁部模様で、底部～ 断面鏡面		790
H-57	2	土師器	甕	(13.6)	-	-	普通	浅黄褐色	白色鉄・ 角閃石・ 黑鉄	口縁部 ～断面 下位1/3	口縁部模様で、断面鏡 面	口縁部～斜部鏡面		187
H-57	3	土師器	甕	(16.0)	-	-	普通	明黄褐色～ 黄褐色	白色鉄・ 黒鉄	口縁部 ～台脚 下位1/6	口縁部模様で、体部上 位鏡面	口縁部模様で、体部鏡 面		63
H-58	1	土師器	甕	-	3.4	-	普通	灰黃褐色～ 黒褐色	白色鉄・ 黒鉄	底部～ 底部7/8	底部～ 底部鏡面	底部～底部鏡面		175
H-58	2	土師器	甕	(6.2)	-	-	普通	暗色	白色鉄・ 黒鉄	口縁部 ～底部 下位3/5	口縁部模様で、断面上 位鏡面	口縁部模様で、断面上 位鏡面		74
H-58	3	土師器	高环	21.2	-	-	普通	明赤褐色～ 黒褐色	白色鉄・ 黒鉄	底部7/8	口縁部模様で、後二段の 体部模様で、体部鏡 面	口縁部模様で後鏡面		588
H-59	1	土師器	甕	7.9	-	7.7	普通	黄い黄褐色	白色鉄・ 黒鉄	完形	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面		146
H-59	2	土師器	甕	(7.9)	-	8.8	普通	黄い黄褐色～ 灰黄褐色	白色鉄・ 黒鉄	2/3	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面		153
H-59	3	土師器	甕	-	3.2	-	普通	黄い橙色	白色鉄・ 黒鉄	口縁部 ～底部	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面		119
H-59	4	土師器	小形甕	(6.0)	-	6.7	普通	黄い黄褐色	白色鉄・ 黒鉄	1/2	口縁部模様で、断面上 位鏡面	口縁部模様で、断面～ 底部鏡面		111
H-59	5	土師器	环	9.8	-	-	普通	黄い黄褐色	白色鉄・ 黒鉄	口縁部 ～体部 下位3/4	口縁部模様で、体部鏡 面	口縁部模様で、体部鏡 面		116
H-59	6	土師器	小形甕	(9.8)	-	-	普通	灰褐色	白色鉄・ 黒鉄	口縁部 ～底部 下位2/3	口縁部模様で、断面鏡 面	口縁部模様で、断面鏡 面		119
H-59	7	土師器	高环	20.8	-	-	普通	明赤褐色	白色鉄・ 黒鉄	底部残 存、底部 欠け 角閃石	底部残 存、底部 欠け 角閃石	底部～断面鏡面を、 底部削り		626
H-59	8	土師器	高环	-	-	-	普通	明赤褐色	白色鉄・ 黒鉄	底部残 存、底部 欠け 角閃石	底部残 存、底部 欠け 角閃石	底部上位鏡面を、 底部削り		218
H-59	9	土師器	高环	-	-	-	普通	黄い橙色～ 黄褐色	白色鉄・ 角閃石	底部3/4	底部模 様で、若部模 様	底部上位鏡面		177
H-59	10	土師器	高环	-	(11.0)	-	普通	黄い赤褐色	白色鉄・ 黒鉄	底部1/3	底部～新体部で後 部欠け、 底部模様	底部模 様		77
H-59	11	土師器	高环	-	(13.7)	-	普通	明赤褐色	白色鉄・ 角閃石・ 黑鉄	底部2/5	底部模 様で、若部模 様	底部上位鏡面		169

第10表 出土土器觀察表(2)

遺物名	番号	種類	基盤	法線			成・整形技術の特徴					備考	重さ(g)	
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③胎土	④残存	外面	内面		
H-59	12	土師器	高环	17.1	(11.5)	13.1	普通	無い黄褐色	白色胎・ 黑色胎	4/5	口縁部～底部削除で、 脚部底面を	口縁部～底部削除で、 脚部底面で		550
H-59	13	土師器	実	(16.0)	7.8	20.8	普通	無い褐色	白色胎・ 黑色胎	2/5	口縁部削除で、脚部底 部削除で、脚部上位削除で、 中位～底部削除	口縁部削除で、脚部上 位削除で、中位削除で、 下位～底部削除		543
H-60	1	土師器	高环	—	12.0	—	普通	無い黄褐色 一褐色	白色胎・ 黑色胎	1/3	口縁部削除で、脚部上 位削除で、中位削除	脚部底面削除、円孔3箇 所	底部底面削除、脚部底 面	216
H-61	1	土師器	培	(8.1)	—	8.3	普通	褐色	白色胎・ 黑色胎	3/4	口縁部削除で、脚部上 位削除で、下位～底部 削除	口縁部削除で、脚部～ 底部削除で		76
H-61	2	土師器	小形瓶	(13.4)	5.0	14.2	普通	褐色～青 色	白色胎・ 黑色胎	7/8	口縁部削除で、脚部底 部削除で、底部底面を	口縁部削除で、脚部～ 底部底面で		551
H-61	3	土師器	実	13.5	6.0	22.4	普通	暗黄褐色～ 暗褐色	白色胎・ 黑色胎	1/2	口縁部削除で、脚部上 位～中位削除り、下位 削除で、底部底面を	口縁部削除で、脚部～ 底部底面で		960
H-61	4	土師器	実	14.6	6.3	22.3	普通	褐色～棕 褐色	白色胎・ 黑色胎・ 黄色胎	1/2	口縁部削除で、底部底 部削除り、脚部中 位削除	口縁部削除で、脚部～ 底部底面で		1,145
H-61	5	土師器	実	17.4	—	—	普通	褐色～黑 褐色	白色胎・ 黑色胎・ 黄色胎	1/2	口縁部削除で、底部底 部削除り、上位～中 位削除	口縁部削除で、脚部底 面		1,680
H-62	1	土師器	にわび	4.8	2.2	6.3	普通	無い褐色	白色胎・ 角閃石	はげ變 形	口縁部削除で、底部底 部削除り、中位削 除で、下位削 除で、底部底面を	口縁部削除で、脚部底 面		74
H-62	2	土師器	培	8.9	3.1	8.8	普通	明赤褐色	白色胎・ 角閃石	はげ變 形	口縁部～脚部上位削 除で、中位削 除で、下位削 除で、底部底面を	口縁部削除で、脚部～ 底部底面で		192
H-62	3	土師器	黒	(9.0)	2.5	8.0	普通	明赤褐色～ 無い赤褐色	白色胎・ 角閃石	2/3	口縁部～脚部上位削 除で、中位削 除で、下位削 除で、底部底面を	口縁部削除で、脚部～ 底部底面で		129
H-62	4	土師器	高环	—	16.5	—	普通	褐色	白色胎・ 黑色胎・ 黑色胎・ 黄色胎	脚部2/3	脚部上位削 除で、下位削 除で後縫合で、脚部底 部を後縫合	脚部しづり目、脚部横 縫合	軸用羽口	261
H-62	5	土師器	高环	—	13.4	—	普通	褐色	白色胎・ 黑色胎・ 黄色胎	脚部7/8	脚部削除で、脚部横 縫合	脚部しづり目、脚部横 縫合	軸用羽口	251
H-62	6	土師器	高环	—	10.8	—	普通	褐色	白色胎・ 黑色胎・ 黑色胎・ 黄色胎	脚部5/6	脚部削除で、脚部横 縫合	脚部しづり目、脚部横 縫合	軸用羽口	148
H-62	7	土師器	高环	—	(12.6)	—	普通	浅黄褐色	白色胎・ 角閃石	脚部2/5	脚部削除で、脚部横 縫合後縫合	脚部しづり目、脚部横 縫合	軸用羽口	127
H-62	8	土師器	高环	—	—	—	普通	無い黄褐色	白色胎・ 角閃石	脚部1/2	脚部～脚部底面を	脚部しづり目、脚部横 縫合	軸用羽口	102
H-62	9	土師器	高环	—	(11.4)	—	普通	明赤褐色	白色胎・ 角閃石	脚部3/5	脚部～脚部底面を	脚部しづり目、脚部横 縫合	軸用羽口	137
H-62	10	土師器	高环	—	(13.0)	—	普通	明赤褐色	白色胎・ 黑色胎	脚部1/2	脚部～脚部底面を	脚部しづり目、脚部横 縫合	軸用羽口	151
H-62	11	土師器	高环	22.2	16.4	15.9	普通	無い黄褐色 一褐色	白色胎・ 黑色胎・ 黑色胎	3/4	口縁部削除で、体部～ 脚部底面で、脚部横 縫合で脚部～脚部底 部削除	口縁部削除で後縫合 を、底部底面で後縫合、 脚部底面で、脚部横 縫合		880
H-62	12	土師器	高环	17.4	13.2	14.3	普通	明赤褐色	白色胎・ 黑色胎	7/8	口縁部削除で、体部～ 脚部底面で、脚部横 縫合	口縁部削除で、脚部底 面で、脚部横 縫合		548

第11表 出土土器網表(3)

遺物名	番号	種類	器形	法數			成・鑑定技法の特徴					備考	重量(g)	
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③胎土	残存	外観	内面		
H-62	13	土師器	高环	18.3	13.8	14.5	普通	褐色	白色胎・ 角閃石・ 石英	9/10	口縁部焼成で、体部 下位まで、脚部焼成で、 胎土焼成で	口縁部焼成で、体部 下位まで、脚部焼成で、 胎土焼成で		627
H-62	14	土師器	台付甕	16.0	—	—	普通	純い黄褐色	白色胎・ 黑色胎	口縁部焼成で、底付部 ~底面まで、胎土焼成で、 残存	口縁部焼成で、底付部 ~底面まで、胎土焼成で、 残存		1210	
H-62	15	土師器	小形甕	(9.3)	—	11.9	普通	純い褐色	白色胎・ 褐色胎・ 角閃石・ 石英	7/8	口縁部焼成で、底付部 ~脚部焼成で、脚部 中位まで保たれ	口縁部焼成で、脚部 中位まで保たれ		457
H-63	1	土師器	坏	10.9	3.9	4.0	普通	褐色	浅褐色	口縁部焼成で、体部 下位まで、脚部 中位まで保たれ	口縁部焼成で、体部 下位まで、脚部 中位まで保たれ		117	
H-63	2	土師器	小形甕	9.9	—	8.9	普通	褐色	白色胎・ 角閃石・ 石英・胎	口縁部焼成で、脚部 上位まで、下位まで、 底部窯割りで、底部 窯割り	口縁部焼成で、脚部 上位まで、中位~底部窯 割り		155	
H-65	1	土師器	坏	12.6	—	7.3	普通	褐色	白色胎・ 角閃石・ 石英	4/5	口縁部焼成で、脚部 上位まで、中位~底部窯 割り	口縁部焼成で、体部~ 底部窯割り		244
H-65	2	土師器	坏	11.3	—	6.2	普通	純い黄褐色	白色胎・ 角閃石・ 石英	7/8	口縁部焼成で、体部窯 割り	口縁部焼成で、体部~ 底部窯割り		156
H-65	3	土師器	坏	11.1	—	5.9	普通	褐色	白色胎・ 褐色胎・ 黑色胎・ 石英	口縁部焼成で、底部 窯割り	口縁部焼成で、体部~ 底部窯割り		141	
H-65	4	土師器	坏	15.0	3.2	7.9	普通	純い黄褐色	白色胎・ 石英	口縁部焼成で、体部 下位まで、脚部 窯割り	口縁部焼成で、体部~ 底部窯割り		273	
H-65	5	土師器	壺	7.1	—	8.1	普通	褐色	白色胎・ 角閃石・ 石英	9/10	口縁部焼成で、脚部 窯割り、脚部窯 割り	口縁部焼成で、脚部~ 底部窯割り		185
H-65	6	土師器	壺	(7.5)	—	8.3	普通	純い黄褐色	白色胎・ 角閃石・ 石英	9/10	口縁部上位焼成で、中 位~脚部窯割り、底部 窯割り	口縁部上位焼成で、下 位~底部窯割り		167
H-65	7	土師器	直口壺	12.8	5.2	16.4	普通	明赤褐色~ 純い赤褐色	白色胎・ 角閃石・ 石英	7/8	口縁部上位焼成で、中 位~脚部窯割り、中位 まで、下位~底部 窯割り	口縁部上位焼成で、下 位~底部窯割り		560
H-65	8	土師器	高环	—	13.0	—	普通	褐色~純い 褐色	白色胎・ 黑色胎	体部~ 脚部焼成で、 胎土焼成	体部~ 脚部焼成で、 胎土焼成		233	
H-65	9	土師器	台付甕	—	(11.4)	—	普通	明赤褐色	白色胎・ 角閃石・ 石英	脚部上 位~台 脚	脚部窯 割り、台 脚窯 割り、 脚部 燒成	脚部~底 部窯 割り、台 脚部 燒成で、 脚部 燒成		454
H-65	10	土師器	甕	17.7	—	—	普通	純い黃褐色	白色胎・ 黑色胎	2/3	口縁部焼成で、脚部 窯割り、中位 窯割り、下位~底 部窯割り	口縁部焼成で、脚部 窯割り		1650
H-65	11	土師器	壺	長さ7.4	幅4.25	柄1.45	普通	純い黃褐色	白色胎	先端	脚部	脚部		36
H-66	1	土師器	直口壺	(11.8)	4.9	15.1	普通	褐色	白色胎・ 黑色胎・ 褐色胎	3/4	口縁部焼成で、脚部 上位焼成で、中位 窯割り、下位~底 部窯割り	口縁部焼成で、脚部~ 底部窯割り		434
H-66	2	土師器	小形甕	(12.5)	6.0	12.1	普通	純い褐色	白色胎・ 褐色胎・ 骨灰	2/5	口縁部焼成で、脚部 上位焼成で、脚部 窯割り	口縁部焼成で、脚部~ 底部窯割り		206
H-69	1	土師器	坏	11.9	—	4.0	普通	明赤褐色~ 深褐色	白色胎・ 黑色胎	5/6	口縁部焼成で、体部~ 底部窯割り	口縁部焼成で、体部 窯割り		128
H-69	2	土師器	坏	(13.0)	—	4.6	普通	明黄褐色~ 深褐色	白色胎	2/3	口縁部焼成で、体部~ 底部窯割り	口縁部~体部焼成で後 窯割き		109

第12表 出土土器觀察表(4)

遺物名	番号	種類	器種	法規			成・鑑定法の特徴					備考	量調(④)	
				口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	残存	外面	内面		
H-69	3	土師器	壺	(17.3)	8.6	27.9	普通	黄赤褐色～黒褐色	白色粘・黑色粘	7/8	口縁部模様で、脚部底削り	口縁部模様で、脚部底削り		1,592
H-70	1	土師器	壺	—	—	3.2	普通	純い黄褐色	白色粘・黑色粘	脚部上位部1/3	脚部底削りで、底部足跡	脚部～底部底削り		39
H-70	2	土師器	高环	15.9	10.9	9.9	普通	純い黄褐色	白色粘・黑色粘	7/8	口縁部模様不規則、体形～脚部底削り	口縁部～底部底削りで後放底部、脚部上位底削りで、脚部底削り		236
H-70	3	土師器	高环	—	(14.6)	—	普通	褐色	白色粘・角閃石	脚部2/5	脚部底削り後底削り、脚部底削り	脚部上位底削り、下位底削り	転用羽口	100
H-70	4	土師器	高环	—	—	—	普通	明赤褐色	白色粘・黑色粘・角閃石	脚部～脚部上位部1/2	脚部底削り後底削り	脚部底削り日、脚部横削り	転用羽口	73
H-71	1	土師器	壺	(12.8)	—	5.0	普通	純い黄褐色	白色粘・黑色粘・角閃石	1/4	口縁部模様で、体部底削り、底部足跡	口縁部模様で、体部～底部底削り		65
H-72	1	土師器	高环？	8.1	—	—	普通	純い褐色	白色粘・黑色粘	外径1/2	口縁部模様で、体部底削り	口縁部～底部底削り		23
H-73	1	土師器	壺	12.8	—	5.6	普通	明赤褐色	白色粘・黑色粘・角閃石	—	口縁部模様で、体部上位部、中位～底部底削り	口縁部～体部模様で、底部底削り		187
H-73	2	土師器	壺	12.0	—	5.2	普通	明赤褐色	白色粘・黑色粘・角閃石	—	口縁部模様で、体部～脚部底削り	口縁部～体部模様で、底部底削り		180
H-73	3	土師器	高环	11.4	10.6	10.0	普通	純い褐色	白色粘・黑色粘	7/8	口縁部模様で、体部～脚部底削り	口縁部～底部底削り		318
H-73	4	土師器	壺	12.1	5.6	9.1	普通	純い褐色	白色粘・黑色粘	7/8	口縁部模様で、体部～底部底削り	口縁部～底部底削り		359
H-73	5	土師器	壺	20.0	6.7	31.5	普通	褐灰色～純い褐色	白色粘・黑色粘	充堀	口縁部模様で、脚部底削り、底部底削り	口縁部模様で、脚部～底部底削り		2,300
H-74	1	土師器	壺	(8.5)	4.1	4.7	普通	灰褐色～褐色	白色粘・褐色粘	1/2	口縁部模様で、体部底削り、底部底削り	口縁部模様で、体部～底部底削り		66
H-74	2	土師器	高环	12.0	9.3	7.7	普通	明褐色～褐色	白色粘・褐色粘	7/8	口縁部模様で、体部底削り	口縁部～底部底削りで後放底部、脚部底削り		237
H-74	3	土師器	高环	(16.0)	—	—	普通	明赤褐色～黒褐色	白色粘・黑色粘・角閃石	1/3	口縁部模様で、脚部底削り	口縁部～底部底削りで後放底部、脚部底削り		200
H-74	6	土師器	壺	19.0	—	—	普通	明赤褐色～黒褐色	白色粘・黑色粘	下位2/3	口縁部模様で、脚部底削り	口縁部模様で、脚部底削り		2,200
H-75	1	土師器	壺	(12.6)	—	4.1	普通	外一明褐色 内一明赤褐色	白色粘・黑色粘	1/3	口縁部模様で、体部～底部底削り	口縁部模様で、体部～底部底削り		75
H-75	2	土師器	小形壺	(10.7)	5.9	14.8	普通	褐色～純い褐色	白色粘・角閃石	3/4	口縁部模様で、脚部底削りで後放毛目、底部底削り	口縁部模様で、脚部～底部底削り		362
H-75	3	土師器	小形壺	12.9	6.4	12.6	普通	純い黄褐色～純灰色	白色粘・褐色粘	4/5	口縁部模様で、脚部～底部底削り	口縁部模様で、脚部～底部底削り		469
H-76	1	土師器	壺	3.6	2.5	4.1	普通	純い黄褐色	白色粘・褐色粘	7/8	口縁部～脚部底削り	口縁部模様で、脚部底削り		17
H-76	2	土師器	壺	12.6	—	6.2	普通	浅黄褐色～純い褐色	白色粘・黑色粘・角閃石	7/8	口縁部模様で、体部～底部底削り	口縁部模様で、体部～底部底削り		227
H-76	3	土師器	高环	17.5	12.4	13.2	普通	浅黄褐色	白色粘・黑色粘・角閃石	7/8	口縁部模様で、体部底削り、脚部底削り	口縁部模様で、体部～底部底削り		580
H-76	4	土師器	壺	16.7	7.6	24.5	普通	純い黄褐色	白色粘・角閃石	2/3	口縁部模様で、脚部底削り、中位底削り、一回底削り	口縁部模様で、脚部～底部底削り		2,120

第13表 出土土器觀察表(5)

遺物名	番号	種類	器種	法線			成・集形技術の特徴						備考	重量(g)	
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③地土	残存	外観	内面			
H-76	5	土師器	壺	21.2	6.4	27.3	普通	純い黄褐色	白色粘土 黒色粘土	3/4	口縁部裏面で、胴部裏面 底部裏面で、底部突起	口縁部裏面で、胴部裏面 底部突起			1.281
H-77	1	土師器	壺	12.6	—	4.9	普通	明赤褐色	白色粘土 黒色粘土	3/4	口縁部裏面で、体部～ 底部突起	口縁部～底部裏面			153
H-77	2	土師器	小形壺	13.0	4.4	8.2	普通	純い褐色	白色粘土 黒色粘土 褐色粘土	3/5	口縁部裏面で、胴部～ 底部裏面	口縁部裏面で、胴部～ 底部裏面			197
H-77	3	土師器	高壺	19.9	14.0	16.5	普通	暗色～純い 褐色	白色粘土 黒色粘土	先形	口縁部～底部裏面を、 脚部上位に斜め成形成 孔。1箇所。径0.45cm	口縁部～底部裏面を、 脚部上位に斜め成形成 孔。1箇所。径0.45cm			810
H-79	1	土師器	壺	12.5	—	4.5	普通	褐色	白色粘土 黒色粘土 褐色粘土	2/3	口縁部裏面で、体部～ 底部突起	口縁部～体部裏面で後 成形状態を			120
H-80	1	土師器	高壺?	(8.0)	—	—	普通	灰黃褐色	白色粘土 黒色粘土	口縁部	口縁部裏面で、体部裏 面附着	口縁部～体部裏面を			9
H-80	2	土師器	壺	(15.4)	—	—	普通	黒褐色	白色粘土 黒色粘土	下位1/4	口縁部裏面で、脚部上位～ 脚部中位	口縁部裏面で、脚部上位～ 脚部中位			553
H-83	1	土師器	壺	11.2	—	6.1	普通	赤褐色～褐 色	白色粘土 黒色粘土	1/2	口縁部裏面で、体部～ 底部突起	口縁部裏面で、体部～ 底部突起			140
H-84	1	土師器	壺	(13.2)	—	4.7	普通	明褐色	白色粘土 黒色粘土	1/4	口縁部裏面で、体部～ 底部突起	口縁部～底部裏面で後 成形状態を			67
H-85	1	土師器	擂台	7.0	8.0	8.2	普通	純い黄褐色	白色粘土 黒色粘土 褐色粘土	7/8	口縁部～脚部裏面を、 円孔5箇所	口縁部～脚部裏面を、 脚部裏面			110
H-85	2	土師器	手捏土器	—	4.0	—	普通	純い黄褐色	白色粘土 黒色粘土	体部～ 底部3/4	口縁部～底部裏面	体部～底部裏面			67
H-85	3	土師器	高壺	19.4	—	—	普通	純い黄褐色	白色粘土 黒色粘土 角閃石	下部7/8	口縁部裏面で、体部～ 脚部裏面	口縁部裏面で、体部～ 脚部裏面			415
H-86	1	土師器	高壺	(19.8)	—	—	普通	明赤褐色	白色粘土 黒色粘土 角閃石	口縁部 2/5	口縁部裏面で後成形 孔。1箇所。直径0.45cm を、体部裏面で後成形	口縁部～体部裏面で後 成形状態を			117
H-88	1	土師器	壺	14.1	5.0	5.0	普通	純い黄褐色 ～純い黄褐色 石英	白色粘土 黒色粘土 石英	2/3	口縁部裏面で、体部裏面 及び、底部裏面	口縁部～底部裏面			167
H-88	2	土師器	鉢	11.2	4.1	5.6	普通	純い黄色	白色粘土 黒色粘土	3/4	口縁部～体部上位部 及び、体部下位～底部裏 面	口縁部～底部裏面			128
H-88	3	土師器	壺	—	4.5	—	普通	純い黄褐色 ～灰黃褐色	白色粘土 黒色粘土 灰黃	口縁部	口縁部～底部裏面で、 下位1/2～脚部裏面を、 脚部～底部裏面で	口縁部～底部裏面で、 脚部～底部裏面			163
H-88	4	土師器	高壺	9.7	15.0	10.2	普通	純い黄褐色	白色粘土 黒色粘土	7/8	口縁部裏面で、体部裏 面で、脚部裏面と、新 成形表面で	口縁部～体部裏面で、 脚部裏面で、新成形表面 で、基部裏面で			322
H-88	5	土師器	壺	14.5	7.9	16.5	普通	灰黃褐色～ 純い黄褐色	白色粘土 黒色粘土	先形	口縁部～脚部裏面で、 底部突起	口縁部～底部裏面			902
H-88	6	土師器	台付壺	11.4	9.4	20.3	普通	暗紅色～純 い黄褐色	白色粘土 黒色粘土	底盤先	口縁部～脚部上位部 及び、下位底盤で、台部 裏面	口縁部～脚部上位部 及び、下位底盤で、台部 裏面			549
H-88	7	土師器	壺	13.2	5.6	19.9	普通	純い褐色～ 純い黄褐色	白色粘土 黒色粘土	先形	黄色口縫。口縁部下位 底盤5箇所。脚部上位部毛 口縫5箇所で、中位底盤毛 口縫5箇所で、下位底盤 底盤突起	口縁部上位部底盤 で、下位底盤で、 脚部裏面			956
H-88	8	土師器	壺	11.9	5.9	17.3	普通	淡黄褐色～ 褐色	白色粘土 黒色粘土	底盤先	口縁部裏面で、脚部裏 面、下位底盤で、底 部突起	口縁部裏面で、脚部裏 面、下位底盤で、底 部突起			517
H-89	1	土師器	小形壺	7.1	4.0	7.0	普通	灰黃褐色	白色粘土 黒色粘土	3/5	口縁部裏面で、胴部～ 底部裏面	口縁部裏面で、胴部～ 底部裏面			96
H-89	2	土師器	壺	12.1	—	5.9	普通	褐色～灰褐 色	白色粘土 黒色粘土	底盤先	口縁部裏面で、体部上 位部毛口縫。中位～底 部裏面	口縁部裏面で、体部～ 底部裏面			230

第14表 出土土器觀察表(6)

遺物名	番号	種類	器種	法器			成・整形技術の特徴					備考	直観(④)	
				口径	底径	器高	①焼成	②色調	③胎土	残存	外面	内面		
H-89	3	土師器	环	13.3	—	5.9	普通	純い水褐色	白色胎 黑色胎 褐色胎 角閃石	7/8	口輪部模倣で、体部上位窓割り、下位～底部窓割り	口輪部模倣で、体部～底部窓割り		231
H-89	4	土師器	环	(13.0)	—	5.2	普通	明赤褐色	白色胎 黑色胎 褐色胎	4/5	口輪部模倣で、体部～底部窓割り	口輪部模倣で、体部～底部窓割り		137
H-89	5	土師器	环	11.5	4.9	4.3	普通	明赤褐色	白色胎 黑色胎 褐色胎 角閃石	7/8	口輪部模倣で、体部上位窓割り、下位～底部窓割り	口輪部模倣で、体部～底部窓割り		152
H-89	6	土師器	直	8.7	3.0	10.1	普通	純い褐色	白色胎 黑色胎 褐色胎	光沢	口輪部～窓割り模倣で、底部窓割り、底部窓	口輪部模倣で、脚部～底部窓		288
H-89	7	土師器	小形直	11.0	4.6	7.7	普通	純い褐色～ 純い褐色	白色胎 黑色胎 褐色胎 石英	光沢	口輪部～窓割り模倣で、脚部～底部窓	口輪部～窓割り模倣で、脚部～底部窓		223
H-90	1	土師器	高环	(12.0)	(11.8)	9.5	普通	純い黄褐色	白色胎 角閃石	1/3	口輪部～脚部窓	口輪部～底部窓割り、脚部窓		143
H-92	1	土師器	手捏土器	8.5	5.0	5.9	普通	純い褐色～ 純い褐色	白色胎 黑色胎 褐色胎	ほぼ完 形	口輪部～底部窓	口輪部～底部窓		179
H-92	1	土師器	手捏土器	(4.2)	(4.3)	3.8	普通	純い褐色	白色胎 角閃石	4/5	口輪部～底部窓	口輪部～底部窓		54
H-92	2	土師器	培	8.3	5.4	6.3	普通	純い黄褐色	白色胎 角閃石	2/3	口輪部模倣で、体部上位窓、中位～底部窓割り、底部中位窓	口輪部模倣で、体部～底部窓		106
H-92	3	土師器	直	(17.0)	—	—	普通	純い明赤褐色	白色胎 角閃石	1/2	口輪部～底部窓	口輪部模倣で、底部窓、脚部窓		774
H-93	2	土師器	环	11.4	—	7.5	普通	墨褐色	白色胎 黑色胎	光沢	口輪部～底部窓	口輪部模倣で、体部～底部窓		210
H-93	3	土師器	环	9.9	—	4.8	普通	外・純い黄褐色 内・灰褐色	白色胎 黑色胎 角閃石	光沢	口輪部模倣で、体部上位窓、下位～底部窓	口輪部模倣で、体部～底部窓		116
H-93	4	土師器	环	10.2	—	6.2	普通	純い黄褐色	白色胎 角閃石	3/4	口輪部～体部窓、底部窓	口輪部模倣で、体部～底部窓		101
H-93	5	土師器	环	—	—	—	普通	墨色	白色胎 黑色胎 角閃石	窓割一 底座3/5	窓割一 体部上位窓 体部中位窓 下位窓、底部窓	口輪部模倣で、体部～底部窓		169
H-93	6	土師器	环	10.8	5.0	8.4	普通	純い黄褐色	白色胎 黑色胎	口輪部 窓割	口輪部～底部窓	口輪部模倣で、体部～底部窓		231
H-93	7	土師器	小形直	10.8	6.0	9.3	普通	墨褐色	白色胎 黑色胎 角閃石 石英	口輪部 窓割	口輪部模倣で、脚部～底部窓	口輪部模倣で、脚部～底部窓		290
H-93	8	土師器	小形直	10.9	5.6	9.5	普通	褐色～墨褐色	白色胎 黑色胎 角閃石	ほぼ完 形	口輪部～窓割り模倣で、脚部～底部窓、脚部上位窓付着	口輪部模倣で、脚部～底部窓		310
H-93	9	土師器	直	14.5	8.8	22.4	普通	純い褐色	白色胎 角閃石	9/10	口輪部模倣で、底部窓 底部窓、底部窓割り	口輪部模倣で、脚部窓 底部窓、底部窓割り		1,190
H-93	10	土師器	直	(13.8)	5.2	20.6	普通	暗褐色～ 純い褐色	白色胎 黑色胎	3/4	口輪部模倣で、底部窓 底部窓、底部窓割り、下位～底部窓	口輪部模倣で、脚部～底部窓		1,080
H-93	11	土師器	直	18.4	—	—	普通	灰褐色～ 純い褐色	白色胎 黑色胎	口輪部 窓割	口輪部模倣で、脚部～ 脚部下位窓	口輪部模倣で、脚部～ 脚部下位窓		630
H-93	12	土師器	台付直	15.5	10.2	30.1	普通	墨褐色～純 い黄褐色	白色胎 黑色胎	7/8	口輪部模倣で、脚部直 脚部直、台脚直 脚部中位窓付着	口輪部模倣で、脚部直 脚部直、台脚直 脚部中位窓		1,530

第15表 出土土器觀察表(7)

遺物名	番号	類別	器種	法則			成・整形技法の特徴					備考	重量(g)	
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③胎土	残存	外観	内面		
H-03	13	土師器	甕	(14.8)	7.6	25.5	普通	無い褐色	白色胎・角閃石・ 錫	2/3	口縁部焼成で、胴部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り	口縁部焼成で、胴部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り		1,020
H-04	1	土師器	壺	—	—	—	普通	無い黄褐色 ～黒褐色	白色胎・ 黒褐色	口縁部	口縁部焼成で、胴部一 部焼成割り	口縁部焼成で、胴部一 部焼成割り		106
H-04	2	土師器	廣口壺	—	—	—	普通	浅黄色	白色胎・ 海色胎	口縁部	口縁部下位～胴部後腹 で	口縁部下位～胴部後腹 で		250
H-04	3	土師器	高杯	6.6	—	—	普通	無い黄褐色 ～黒褐色	白色胎・ 黒褐色	口縁部	口縁部焼成で、体部～ 脚部焼成割り	口縁部焼成で、体部～ 脚部焼成割り		80
H-05	1	土師器	小平壺	11.0	4.8	8.9	普通	無い黄褐色 ～黒褐色	白色胎・ 黒褐色	口縁部	口縁部焼成で、胴部一 部焼成割り	口縁部焼成で、胴部一 部焼成割り		245
H-05	2	土師器	壺	(8.9)	—	—	普通	無い黄褐色	白色胎・ 角閃石	口縁部	口縁部～胴部上位焼成 で、胴部中～下位焼 成で	口縁部焼成で、胴部中～ 下位焼成で		137
H-05	3	土師器	壺	10.2	4.8	5.9	普通	明赤褐色	白色胎・ 錫	3/4	口縁部～体部上位焼成 で体部割り、体部中位 焼成で、下位焼成で、 脚部焼成	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位焼成で、 脚部焼成		127
H-05	4	土師器	高杯	18.5	13.6	14.4	普通	褐色	白色胎・ 海色胎	3/4	口縁部焼成で、体部中 位焼成で、脚部焼成	口縁部焼成で、体部中 位焼成で、脚部焼成		400
H-05	5	土師器	甕	16.0	—	—	普通	黒褐色～褐色	白色胎・ 黒褐色	口縁部	口縁部焼成で、足付等、 脚部上位焼成で、中位 焼成割り、焼け跡	口縁部焼成で、脚部 焼成で、脚部焼成		762
H-06	1	土師器	壺	(11.8)	—	7.3	普通	無い黄褐色	白色胎・ 角閃石	2/3	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り		154
H-06	2	土師器	壺	13.4	—	5.8	普通	褐色	白色胎・ 黒褐色	口縁部	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り		221
H-06	3	土師器	高杯	16.6	12.4	12.8	普通	明赤褐色	白色胎・ 錫	9/10	口縁部焼成で、体部中 位焼成で、脚部一部焼成 で	口縁部焼成で、底部 焼成で、脚部焼成		158
H-09	1	土師器	壺	10.8	4.0	5.5	普通	無い緑色～ 褐灰色	白色胎・ 角閃石	7/8	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、中位～底部 焼成割り	口縁部焼成で、体部一 部焼成		211
H-09	2	土師器	有孔鉢	17.1	6.5	9.5	普通	無い赤褐色	白色胎・ 角閃石・ 錫	9/10	口縁部焼成で、胴部中 位焼成で、底部焼成 割り、孔径 2.2cm	口縁部焼成で、胴部中 位焼成で後退割り		466
H-09	3	土師器	壺	11.5	—	7.4	普通	無い赤褐色 ～褐色	白色胎・ 黒褐色	3/4	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、中位～底部 焼成割り	口縁部焼成で、体部一 部焼成		129
H-09	4	土師器	小平壺	13.6	6.4	8.9	普通	無い黄褐色 ～黒褐色	白色胎・ 黒褐色	口縁部	口縁部焼成で、胴部一 部焼成	口縁部焼成で、胴部一 部焼成		342
H-09	5	土師器	甕	(19.2)	—	—	普通	無い黄褐色 ～黒褐色	白色胎・ 黒褐色	口縁部	口縁部焼成で、胴部中 位焼成	口縁部焼成で、脚部高 度で後退割り		2,460
H-100	1	土師器	にわび	—	2.8	—	普通	褐色	白色胎・ 黒褐色	体部下 位焼成で、底部焼 成	体部下 位焼成で、底部焼 成	体部～底部焼成で	31	
H-100	2	土師器	壺	12.4	—	5.2	普通	暗褐色～浅褐 褐色	白色胎・ 海色胎	口縁部	口縁部焼成で、胴部一 部焼成	口縁部焼成で、胴部一 部焼成		158
H-101	1	土師器	小平壺	11.8	2.9	10.1	普通	無い赤褐色 ～明赤褐色	白色胎・ 黒褐色	7/8	口縁部焼成で、胴部中 位焼成で、脚部一 部焼成	口縁部焼成で、脚部中 位焼成で、脚部一 部焼成		322
H-101	2	土師器	甕	16.4	(9.0)	17.0	普通	褐色	白色胎・ 角閃石	2/5	口縁部焼成で、胴部上 位焼成で、中位焼成 割り、下位焼成で、底部 焼成	口縁部焼成で、胴部一 部焼成		620
H-103	1	土師器	壺	10.4	3.1	6.3	普通	無い黄褐色 ～黒褐色	白色胎・ 黒褐色	口縁部	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り、体部底付	口縁部焼成で、体部一 部焼成		163

第16表 出土土器觀察表(8)

遺物名	番号	種類	基盤	法線			成・葉形法線の特徴						備考	重版(④)
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③地土	保存	外観	内面		
H-103	2	土師器	环	10.2	—	6.7	普通	薄い赤褐色 →灰褐色	白色鉄 褐色鉄 角閃石 石英	3/5	口縁部～体部上位焼成 で焼成跡、中位～底 部焼成割り	口縁部～体部焼成で後 放成で焼成跡、底部 焼成割り		148
H-103	3	土師器	高环	18.3	15.2	14.7	普通	灰褐色～棕 色	白色鉄 褐色鉄 菱母	ほぼ完 形	口縁部～体部焼成で後 放成で焼成跡、底部 焼成毛目焼成割り	口縁部～体部焼成で後 放成で焼成跡、底部 焼成割り		617
H-103	4	土師器	高环	17.7	13.6	14.1	普通	褐色	白色鉄 角閃石	9/10	口縁部焼成で、体部 焼成で、底部不規則、厚 焼成で、底部更正で、 底部焼成で	口縁部～体部焼成で、 底部更正で、厚焼成 し日目焼成で		560
H-103	5	土師器	高环	19.5	12.9	16.7	普通	褐色	白色鉄 褐色鉄 菱母	7/8	口縁部焼成で、体部 焼成割り、詳細焼成で、 底部焼成で	口縁部～体部焼成で、 底部更正で、底部 焼成で		720
H-103	6	土師器	高环	17.5	12.0	15.5	普通	褐色	白色鉄 褐色鉄	4/5	口縁部焼成で、体部～ 底部焼成で、底部燒 成で	口縁部焼成で、体部～ 底部焼成で、底部燒 成で		549
H-103	7	土師器	高环	18.2	13.3	14.9	普通	褐色	白色鉄 角閃石	9/10	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位焼成 で、底部焼成で、底部燒 成で	口縁部～体部焼成で、 底部更正で、厚焼成 し日目焼成割り、底部 焼成で		540
H-103	8	土師器	小形環	12.4	—	—	普通	褐色～浅 青色	白色鉄 褐色鉄	口縁部 ～底部 中位焼 成	口縁部 ～底部 中位燒 成割り	口縁部燒成で、底部 燒成で		298
H-103	9	土師器	小形環	14.2	—	—	普通	薄い褐色～ 褐色	白色鉄 褐色鉄 菱母	下位 1/2	口縁部焼成で、底部上 位焼成で、中位～下位 焼成が厚焼成し表面不 規則、口縫部～底部上 位焼成	口縁部燒成で、底部 燒成で		427
H-103	10	土師器	环	19.4	—	—	普通	灰褐色～浅 い赤褐色	白色鉄 黑色鉄 角閃石	下位 2/3	口縁部焼成で、底部上 位焼成で、下位～中位 焼成割り	口縁部燒成で、底部 燒成で		1,100
H-103	11	土師器	环	—	10.1	—	普通	薄い黄褐色	白色鉄 角閃石	底部 成形 9/10	口縁部焼成で、底部 焼成で、下位焼成 で、底部更正り、底 部焼成で	底部燒成で、底部 燒成で		9,640
H-104	1	土師器	环	(10.0)	—	6.0	普通	明赤褐色	白色鉄 黑色鉄 褐色鉄	2/3	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成	口縁部燒成で、体部～ 底部焼成で		137
H-104	2	土師器	脚付底	15.3	11.4	—	普通	薄い赤褐色	白色鉄 褐色鉄 角閃石	1/3	口縁部～底部上位焼 成で、下位焼成で	口縁部更正と、底部 焼成で		279
H-104	3	土師器	环	(18.0)	—	—	普通	褐色～灰褐 色	白色鉄 角閃石 角閃石	下位 1/3	口縁部焼成で、底部上 位焼成で、下位焼成 で	口縁部燒成で、底部 燒成で		966
H-105	1	土師器	环	13.4	—	5.7	普通	薄い赤褐色	白色鉄 黑色鉄 褐色鉄 角閃石	2/3	口縁部焼成で、体部～ 底部焼成	口縁部燒成で、体部～ 底部燒成		154
H-105	2	土師器	环	—	8.2	—	普通	薄い赤褐色	白色鉄 黑色鉄 褐色鉄 角閃石	底部 成形 3/4	底部上位焼成で、下位～ 底部焼成	底部上位燒成で、下位～ 底部焼成		756
H-105	3	土師器	环	14.8	5.6	15.4	普通	薄い赤褐色	白色鉄 黑色鉄 褐色鉄	2/3	口縁部焼成で、底部上 位焼成で、中位～底部 焼成割り	口縁部燒成で、底部～ 底部燒成で		740
H-107	1	土師器	环	12.1	—	5.4	普通	明赤褐色	白色鉄 褐色鉄 菱母	7/8	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り、底部に焼成前の 焼成跡あり	口縁部～体部焼成で、 底部更正と、底部 焼成で		166
H-107	2	土師器	环	12.2	—	4.7	普通	明赤褐色	白色鉄 黑色鉄 菱母	0/7	口縁部焼成で、体部～ 底部焼成	口縁部～体部焼成で、 底部更正と、底部 焼成で		139
H-107	3	土師器	环	11.7	—	4.6	普通	明赤褐色	白色鉄 黑色鉄 菱母	5/6	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成割り	口縁部～体部焼成で後 放成で、口縫部更正と、底 部焼成で		164
H-107	4	土師器	环	(11.0)	—	4.5	普通	明赤褐色～ 褐色	白色鉄 黑色鉄 菱母	3/4	口縁部焼成で、体部上 位焼成で、下位～底部 焼成	口縁部～体部焼成、 底部焼成で		117

第17表 出土土器觀察表(9)

遺物名	番号	種類	形態	法面		成・発達技法の特徴						備考	重量(g)	
				口沿	底性	高さ	①焼成	②色調	③地土	残存	外層	内面		
H-107	5	土師器	小形壺	(11.5)	4.4	12.4	普通	灰褐色～褐色	白色粒・褐色粒	7/8	口縁部焼成で、側面裏剥り、底部剥離	口縁部焼成で、側面～底部剥離		432
H-107	6	土師器	小形壺	11.2	7.3	13.6	普通	黄褐色～褐色	白色粒・黑色粒	7/8	口縁部焼成で、側面裏剥き、底部剥離	口縁部焼成で後退剥き、底部～底部剥離		564
H-107	7	土師器	瓶	(21.2)	8.5	20.7	普通	灰褐色～褐色	白色粒・褐色粒	2/5	口縁部～側面焼成で、側面裏剥り上位剥離あり、底部中央～下位剥離あり、底部剥離	口縁部焼成で、底部剥離あり、下位剥離		1,000
H-107	8	土師器	瓶	24.2	(9.6)	29.7	普通	褐色～灰褐色	白色粒・黑色粒・黑	7/8	口縁部焼成で、底部剥離	口縁部焼成で、底部剥離		1,830
H-107	9	土師器	甕	12.4	7.8	23.2	普通	褐色～灰褐色	白色粒・黑色粒	4/5	口縁部焼成で、側面～底部剥離	口縁部焼成で、側面～底部剥離		1,198
H-107	10	土師器	甕	19.0	7.0	34.7	普通	灰褐色～黄色	白色粒・黑色粒	7/8	口縁部焼成で、底部剥離	口縁部焼成で、側面～底部剥離		1,970
H-107	11	土師器	甕	—	7.5	—	普通	黄褐色～灰褐色	白色粒・黑色粒	底部～底部2/3剥離あり	底部～底部2/3剥離あり	底部～底部剥離		1,460
H-109	1	土師器	瓶	26.8	9.2	27.6	普通	褐色	白色粒・黑	口縁部	口縁部焼成で、底部剥離1/2欠損	口縁部焼成で、底部剥離		2,420
H-109	2	土師器	甕	17.0	5.4	26.8	普通	黄褐色	白色粒・角閃石・黑	7/8	口縁部焼成で、側面裏剥り、底部剥離	口縁部焼成で、側面～底部剥離		1,440
H-111	1	土師器	甕	11.5	—	5.7	普通	褐色～明褐色	白色粒・黑	底盤光	口縁部焼成で、体部～底部剥離	口縁部焼成で、体部～底部剥離		155
H-111	2	土師器	甕	9.2	4.3	6.5	普通	褐色～明褐色	白色粒・黑	壳形	口縁部焼成で、体部～底部剥離	口縁部焼成で、体部～底部剥離		190
H-111	3	土師器	甕	10.3	4.7	6.8	普通	外・灰褐色 内・灰褐色	白色粒・黑	底盤光	口縁部焼成で後退剥き、底部剥離で、底部剥離	口縁部焼成で後退剥き、底部～底部剥離		219
H-111	4	土師器	甕	(12.9)	—	6.6	普通	褐色～灰褐色	白色粒・黑	4/5	口縁部焼成で、体部上位焼成あり、下位～底部剥離	口縁部焼成で、体部～底部剥離		215
H-111	5	土師器	甕	(7.5)	—	8.9	普通	灰褐色～褐色	白色粒・黑	5/6	口縁部焼成で、側面上位焼成あり、中位～底部剥離	口縁部焼成で、側面～底部剥離		190
H-111	6	土師器	甕	7.4	—	7.3	普通	黄褐色	白色粒・黑	底盤光	口縁部焼成で、側面～底部剥離	口縁部焼成で、側面～底部剥離		130
H-111	7	土師器	甕	9.7	3.1	10.2	普通	黄褐色	白色粒・黑	底盤光	口縁部焼成で、底部上位剥離で、下位～底部剥離	口縁部焼成で、側面～底部剥離		252
H-111	8	土師器	高甕	19.0	14.5	14.9	普通	黄褐色	白色粒・角閃石・黑	3/4	口縁部上位焼成で、下位～体部焼成あり、側面裏剥り、底部剥離	口縁部焼成で、体部～底部剥離あり、側面しづり日、底部剥離		823
H-111	9	土師器	高甕	20.7	17.4	15.4	普通	褐色	褐色粒・雷電	7/8	口縁部焼成で後退剥離あり、底部剥離で、底部剥離	口縁部焼成で、下位～底部剥離		821
H-111	10	土師器	甕	14.6	6.0	23.4	普通	灰褐色	白色粒・黑	壳形	口縁部焼成で、側面上位焼成あり、下位～底部剥離	口縁部焼成で、側面～底部剥離		1,840
H-111	11	土師器	甕	15.9	—	—	普通	黄褐色	白色粒・角閃石・黑	口縁部	口縁部上位焼成で、下位位置で、底部剥離	口縁部上位焼成で、下位位置で、底部剥離		560

第18表 出土土器觀察表(10)

遺物名	番号	種類	器形	法線			成・鑿法技術の特徴					備考	算出(②)	
				口径	底径	高	①焼成	②色調	③地土	残存	外面	内面		
H-111	12	土師器	台付甕	16.3	(9.3)	33.4	普通	褐~灰褐色~黒褐色	白色粒、黒色粒	ほぼ完 形	口縁部模様で、側付甕、 底部上位~中位削り、下位削り、 底部中心~下位削り	口縁部模様で、底部~ 底部模様で、台付甕		2,680
H-111	13	土師器	甕	14.6	5.6	25.8	普通	褐~灰褐色~ 黒褐色	白色粒、 黒色粒	7/8	口縁部模様で、側付甕、 底部~中位削り、 底部~下位削り	口縁部模様で、底部~ 底部模様で		1,440
H-112	1	土師器	甕	(18.4)	—	—	普通	純~黄褐色	白色粒、 黒色粒	口縁部 ~底部 下位1/3	口縁部模様で、底部~ 底部削り	口縁部模様で、底部寬 度で		687
H-115	1	土師器	壺	18.2	9.8	6.0	普通	褐色	白色粒、 黑色粒、 角閃石	7/8	口縁部~底部模様で、 底部削り	口縁部~底部模様で、後 底部削り		310
H-115	2	土師器	壺	15.2	6.0	5.1	普通	明褐色	白色粒、 黒色粒	口縁部 ~底部 一側欠 損	口縁部模様で、体部上 位削り、下位~底部削 り	口縁部~底部模様で		181
H-115	3	土師器	壺	13.1	6.8	4.8	普通	褐~黄褐色	白色粒、 黒色粒	ほぼ完 形	口縁部模様で、体部~ 底部欠損	口縁部模様で、体部~ 底部模様で		213
H-115	4	土師器	壺	9.8	—	5.5	普通	純~黃褐色	白色粒、 黒色粒	7/8	口縁部模様で、体部~ 底部模様	口縁部模様で、体部~ 底部模様		154
H-115	5	土師器	壺	10.6	—	5.5	普通	赤褐色	白色粒、 黒色粒	ほぼ完 形	口縁部模様で、体部上 位削り、下位~底部削 り	口縁部~底部模様で、後 底部欠損		159
H-115	6	土師器	壺	9.8	—	6.6	普通	褐色~灰褐 色	白色粒、 黑色粒	口縁部 ~底部 一側欠 損	口縁部模様で、体部上 位削り、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部模様		167
H-115	7	土師器	壺	12.7	6.7	6.5	普通	明褐色~褐 色	白色粒、 黒色粒	5/6	口縁部模様で、体部上 位削り、中位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部模様		219
H-115	8	土師器	壺	11.0	—	5.3	普通	明褐色	白色粒、 黒色粒	7/8	口縁部模様で、体部上 位削り、中位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部模様		125
H-115	9	土師器	壺	(9.0)	3.2	6.3	普通	赤褐色~明 赤褐色	白色粒、 黑色粒	7/8	口縁部模様で、体部上 位削り、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部模様		144
H-115	10	土師器	小形甕	9.4	6.1	8.2	普通	褐色	白色粒、 角閃石	ほぼ完 形	口縁部模様で、底部上 位削り、下位~底部削 り	口縁部模様で、底部~ 底部模様		259
H-115	11	土師器	小形甕	9.0	4.4	6.0	普通	純~黃褐色	白色粒、 角閃石	1/3欠損	口縁部~細孔形模様で、 底部上位削り、下位削 り、底部中心~下位削 り	口縁部模様で、底部~ 底部模様で用い難い模 様		178
H-115	12	土師器	壺	9.1	2.7	8.6	普通	褐色~純~ 黃褐色	白色粒、 黒色粒	7/8	口縁部~底部模様で、 底部上位削り、中位~下位削 り、底部中心~下位削 り	口縁部模様で、底部~ 底部模様		157
H-115	13	土師器	直口甕	12.8	5.7	16.4	普通	褐~灰褐色	白色粒、 黑色粒	口縁部 ~底部 一側欠 損	口縁部上位削りで、 底部上位削り、中位~下位削 り	口縁部上位削りで、下 位~底部模様		615
H-115	14	土師器	直口甕	10.7	—	13.6	普通	灰褐色	白色粒、 黒色粒	口縁部 ~底部 一側欠 損	口縁部模様で底部削 り、底部~底部模様	口縁部模様で、底部~ 底部模様		518
H-115	15	土師器	台付甕	11.9	—	—	普通	明赤褐色	白色粒、 角閃石、 鐵	台部欠 損	口縁部~底部上位削 り、下位削り	口縁部模様で、底部上 位削りで、下位~底部削 り		376
H-115	16	土師器	高壺	13.9	8.0	10.4	普通	橙~黃褐色	白色粒、 黑色粒	ほぼ完 形	口縁部~底部模様で、 底部上位削り、下位削 り、底部模様	口縁部模様で、底部~ 底部模様		352
H-115	17	土師器	高壺	16.9	11.4	14.8	経	純~黃褐色	白色粒、 黒色粒	脚部 ~底部 一側欠 損	口縁部模様で後放射状 足跡有り、脚部削り、 脚部模様	口縁部~体部模様で後 放射状足跡有り、脚 部削り		630
H-115	18	土師器	高壺	19.0	12.2	14.9	普通	褐色	白色粒、 角閃石、 黑色粒	1/4~基 部 1/4欠 損	口縁部模様で後放射状 足跡有り、脚部削り、 脚部模様	口縁部~体部模様で後 放射状足跡有り、脚 部削り		550
H-115	19	土師器	高壺	19.3	13.2	14.0	普通	褐色	白色粒、 角閃石	ほぼ完 形	口縁部模様で、体部削 り、底部寬度で、基 部模様	口縁部~上位削りで、 底部寬度で、基 部模様		505

第19表 出土土器綱索表(11)

遺物名	番号	種類	断面	法値		成・発形技法の特徴						備考	重量(g)	
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③断土	残存	外観	内面		
H-115 20	土師器	高杯	19.9	14.9	16.0	普通	褐色	白色鉢・角閃石・黒	はぼ光形	口縁部焼成で、体部～底部底面で、底部鋸歯で、	口縁部焼成で後底磨き、体部～底部底面で、底部鋸歯で、	口縁部焼成で後底磨き、体部～底部底面で、底部鋸歯で、底部鋸歯で、		761
H-115 21	土師器	高杯	17.5	11.7	14.8	普通	褐色	白色鉢・角閃石・黒	はぼ光形	口縁部焼成で、体部～底部底面で、底部鋸歯で、	口縁部焼成で、体部～底部底面で、底部鋸歯で、	口縁部焼成で、体部～底部底面で、底部鋸歯で、		584
H-115 22	土師器	高杯	17.5	11.0	13.6	普通	赤褐色	白色鉢・角閃石・黒	7/8	口縁部焼成で、体部底面で、底部底面で、底部鋸歯で、	口縁部焼成で、体部～底部底面で、底部鋸歯で、	口縁部焼成で、体部～底部底面で、底部鋸歯で、		536
H-115 23	土師器	高杯	21.5	15.8	15.1	普通	明赤褐色～暗赤褐色	白色鉢・黒色鉢	焼成3/4欠損	口縁部焼成で後底斜状窓を、体部底面で、底部鋸歯で後底磨きで	口縁部焼成で後底斜状窓を、体部底面で、底部鋸歯で後底磨きで	口縁部焼成で後底斜状窓を、体部底面で、底部鋸歯で後底磨きで		816
H-115 24	土師器	高杯	21.4	15.8	14.6	普通	明赤褐色～暗赤褐色	白色鉢・黒色鉢	7/8	口縁部焼成で、体部底面で、底部底面で、底部鋸歯で	口縁部焼成で、体部～底部底面で、底部鋸歯で、	口縁部焼成で、体部～底部底面で、底部鋸歯で、		757
H-115 25	土師器	甕	18.4	6.5	30.3	普通	黄褐色	白色鉢・角閃石・黒	2/3	口縁部焼成で、底部底面で、底部鋸歯で、底部中央部で	口縁部焼成で、底部～底部底面で、	口縁部焼成で、底部～底部底面で、		1,810
H-115 26	土師器	甕	15.1	6.9	22.4	普通	灰黄褐色	白色鉢・黒	1/4・肩	口縁部・1/4・肩	口縁部焼成で、底部上位底面で、下位底面で、底部底面で、	口縁部焼成で、底部～底部底面で、底部底面で、		1,560
H-115 27	土師器	甕	18.7	8.3	32.4	普通	黄褐色	白色鉢・海褐色・角閃石	3/5	口縁部焼成で後底磨き、中位～袋を均す、底部底面で、下位底面で、底部底面で、底部底面で、	口縁部焼成で後底磨き、底部～底部底面で、底部底面で、	口縁部焼成で後底磨き、底部～底部底面で、底部底面で、		2,119
H-115 28	土師器	甕	16.9	8.0	29.7	普通	黄褐色	白色鉢・黒色鉢	3/4	口縁部焼成で、底部～底部底面で	口縁部焼成で、底部～底部底面で	口縁部焼成で、底部～底部底面で		2,010
H-115 29	土師器	甕	15.7	7.4	26.7	普通	黄褐色	白色鉢・角閃石・黒	口縁部・底部底面	口縁部焼成で、底部上位底面で、中位～袋を均す、下位底面で、底部底面で、	口縁部焼成で、底部～底部底面で、底部底面で、	口縁部焼成で、底部～底部底面で、底部底面で、		1,920
H-115 30	土師器	甕	18.5	7.8	24.7	普通	褐色～暗褐色	白色鉢・黒色鉢	7/8	口縁部焼成で、底部上位底面で、中位～袋を均す、下位底面で、底部底面で、	口縁部～底部底面で、底部～底部底面で、	口縁部～底部底面で、底部～底部底面で、		1,590
H-115 31	土師器	甕	17.5	—	—	普通	褐色～暗褐色	白色鉢・黒色鉢	口縁部・～底部下位3/4付着	口縁部焼成で、袋付柱・底部底面で、底部中位	口縁部焼成で、底部底面で、	口縁部焼成で、底部底面で、		1,595
H-116 1	土師器	手配土器	8.1	4.2	4.9	普通	浅い黄褐色～灰褐色	白色鉢・黒色鉢・角閃石	はぼ光形	はぼ光形	口縁部～底部底面で	口縁部～底部底面で		67
H-116 2	土師器	杯	13.1	—	7.4	普通	褐色～明褐色	白色鉢・黒色鉢	はぼ光形	口縁部焼成で、体部上位底面で、下位～底部底面	口縁部～底部底面で	口縁部～底部底面で		276
H-116 3	土師器	杯	11.8	—	6.2	普通	浅い黄褐色	白色鉢・海褐色	7/8	口縁部焼成で、体部上位底面で、下位～底部底面	口縁部～底部底面で、底部底面で	口縁部～底部底面で、底部底面で		179
H-116 4	土師器	杯	12.7	—	6.5	普通	浅い黄褐色	白色鉢・海褐色	7/8	口縁部焼成で、体部上位底面で、下位～底部底面	口縁部～底部底面で、底部底面で	口縁部～底部底面で、底部底面で		209
H-116 5	土師器	杯	13.1	—	6.7	普通	浅い黄褐色～浅い黄褐色	白色鉢・黒色鉢・海褐色・角閃石	兜形	口縁部～体部上位底面で、中位～底部底面	口縁部～体部上位底面で、体部～底部底面	口縁部～体部上位底面で、体部～底部底面		267
H-116 6	土師器	杯	10.0	—	7.5	普通	浅い黄褐色～浅い黄褐色	白色鉢・黑色鉢・角閃石	はぼ光形	口縁部～体部上位底面で、下位～底部底面	口縁部～体部上位底面で、体部～底部底面	口縁部～体部上位底面で、体部～底部底面		241
H-116 7	土師器	小形容	15.8	5.9	11.9	普通	浅い黄褐色～浅い黄褐色	白色鉢・黒色鉢・海褐色・角閃石	3/4	口縁部焼成で、瓶底毛白後継続で、底部上位底面で、下位～底部底面	口縁部焼成で、底部～底部底面で、底部底面	口縁部焼成で、底部～底部底面で、底部底面		511
H-116 8	土師器	甕	8.9	—	14.1	普通	明褐色	白色鉢・黒色鉢	2/3	口縁部焼成で、底部上位底面で、下位～底部底面	口縁部焼成で、底部～底部底面で、底部底面	口縁部焼成で、底部～底部底面で、底部底面		303
H-116 9	土師器	甕	14.2	7.4	19.4	普通	明褐色～浅い黄褐色	白色鉢・黒色鉢	4/5	口縁部焼成で、底部～底部底面で	口縁部焼成で、底部～底部底面で	口縁部焼成で、底部～底部底面で		234

第20表 出土土器觀察表(12)

遺物名	番号	種類	基盤	法螺			成・葉形法螺の特徴					備考	重鑄(g)	
				口径	底径	高さ	①施成	②色調	③地土	残存	外面	内面		
H-116	10	土師器	甕	14.7	7.4	24.2	普通	黄い褐色～ 黄い赤褐色	白色粒 黑色粒 褐色粒	1/2	口縁部剥離で、胴部上 位剥離で、下位～底部 剥離	口縁部剥離で、胴部～ 底部剥離で、底部剥離で		1,310
H-117	1	土師器	小形甕	9.2	4.8	12.9	普通	褐色～黄い 褐色	白色粒 黑色粒 石斑	完形	口縁部剥離で、胴部上 位剥離で、下位剥離で、 底付着	口縁部剥離で、底部 剥離で		543
H-117	2	土師器	甕	12.9	—	5.8	普通	黄い褐色～ 褐色	白色粒 黑色粒	2/3	口縁部剥離で、体形～ 底部剥離	口縁部剥離で、底部 剥離		162
H-117	3	土師器	甕	16.2	5.6	27.7	普通	黄い褐色～ 黒褐色	白色粒 黑色粒 角閃石	9/7	口縁部剥離で、胴部上 位剥離で、下位～底部 剥離	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で		1,640
H-117	4	土師器	甕	15.4	6.0	28.5	普通	黄い褐色～ 黒色	白色粒 黑色粒	7/8	口縁部剥離で、底付着、 胴部上位剥離で、下位～ 底部剥離	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で、底部剥離		2,020
H-117	5	土師器	甕	15.5	—	—	普通	黄い褐色～ 黒褐色	白色粒 黑色粒	7/8	口縁部～颈部剥離で、 煙管状、底部剥離で、 底付着	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で、底部剥離	欠きこ ぼれの 痕跡あり	1,410
H-117	6	土師器	甕	17.8	6.7	26.5	普通	黄い褐色～ 灰褐色	白色粒 黑色粒 褐色粒	7/8	口縁部剥離で、底付着、 中位剥離で、中位 剥離	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で、底部剥離		1,770
H-117	7	土師器	甕	15.0	7.0	21.8	普通	褐色～黑褐色	白色粒 黑色粒 褐色粒	2/3	口縁部剥離で、胴部上 位剥離で、下位～底部 剥離	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で		1,160
H-119	1	土師器	甕	(10.8)	5.2	18.0	普通	褐色～灰 黄褐色	白色粒 黑色粒	2/5	口縁部剥離で、胴部～ 底部剥離	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で		750
H-120	1	土師器	小形甕	9.6	(5.3)	9.2	普通	明赤褐色	白色粒 黑色粒	3/4	口縁部～胴部上位剥離 で、下位剥離で、底付 着	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で		225
H-120	2	土師器	有孔鉢	(16.0)	4.8	12.4	普通	赤赤褐色～ 黄褐色	白色粒 黑色粒 角閃石	1/4	口縁部剥離で、胴部～ 底部剥離で、底部 丸孔 1.6cm	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で		287
H-122	1	土師器	小形甕	(10.0)	—	8.6	普通	褐褐色	白色粒 黑色粒	1/2	口縁部～颈部剥離で、 胴部～底部剥離で	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で		228
H-122	2	土師器	甕	20.9	3.6	39.0	普通	明赤褐色～ 黄褐色	白色粒 黑色粒 角閃石	2/3	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で		2,190
H-123	1	土師器	甕	(13.0)	—	4.6	普通	褐色	白色粒 黑色粒	2/3	口縁部～体部上位剥離 で、下位～底部剥離で	口縁部剥離で、体部 剥離		94
H-123	2	土師器	甕	(22.7)	8.7	25.3	普通	黄い黄褐色	白色粒 黑色粒	3/4	口縁部剥離で、底部 剥離	口縁部剥離で、底部 剥離		943
H-124	1	土師器	甕	10.6	—	6.2	普通	明赤褐色	白色粒 黑色粒	2/3	口縁部剥離で、体部上 位剥離で、下位～底部 剥離	口縁部剥離で、体部 剥離		162
H-124	2	土師器	甕	(12.2)	—	4.8	普通	赤褐色	白色粒 黑色粒	1/2	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離		76
H-124	3	土師器	高甕	13.8	9.5	9.4	普通	赤赤褐色～ 灰褐色	白色粒 黑色粒	7/8	口縁部剥離で、体部上 位剥離で、下位剥離で、 底部剥離で、底部剥離	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離で、底部剥 離		334
H-124	4	土師器	甕	16.0	—	—	普通	褐色～褐色	白色粒 黑色粒	4/5	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離	口縁部剥離で、底部～ 底部剥離で		225
H-125	1	土師器	甕	12.5	—	5.3	普通	褐褐色	白色粒 黑色粒 褐色	7/8	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離で		203
H-125	2	土師器	甕	12.9	—	5.6	普通	黄い黄褐色 一色	白色粒 黑色粒	7/8	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離で		197
H-125	3	土師器	甕	11.6	—	3.9	普通	褐褐色	白色粒 黑色粒	形	口縁部剥離で、体部上 位剥離で、下位～底部 剥離	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離で		459
H-126	1	土師器	小形甕	14.6	7.1	15.2	普通	灰褐色～褐 灰色	白色粒 黑色粒	3/4	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離で		209
H-126	1	土師器	甕	12.3	—	5.4	普通	黄い黄褐色	白色粒 黑色粒	1/2	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離	口縁部剥離で、体部～ 底部剥離で		209

第21表 出土土器網目表(13)

遺物名	番号	種類	断面	特徴		成・発形特徴					備考	重量(g)	
				口径	底径	①焼成	②色調	③断土	残存	外側	内面		
H-126	2	土師器	坏	14.9	-	6.6	普通	褐色	黑色粒・褐色粒	7/8	口縁部焼成で、底部～底部近削り	口縁部～体部焼成で、底部近削り	196
H-126	3	土師器	坏	12.0	-	6.5	普通	黄い黄褐色～灰黄褐色	白色粒・黑色粒	3/4	口縁部焼成で、体部上位部で、下位～底部近削り	口縁部～底部近削り	241
H-126	4	土師器	坏	13.5	-	4.6	透光	外一灰褐色 内一灰褐色	白色粒・黑色粒	口縁部～底部近削り	田字状焼成で、底部左端～右端欠け	口縁部～底部近削り	292
H-126	5	土師器	坏	13.5	-	5.4	透光	灰褐色	白色粒・黑色粒	3/4	円柱形焼成で、底部右端～右端欠け	円柱形焼成で	249
H-126	6	土師器	瓶	24.6	8.9	26.8	普通	黄い黄褐色	白色粒・黑色粒	7/8	口縁部焼成で、底部近削り、底部近削け	口縁部焼成で、底部近削け	1,439
H-126	7	土師器	壺	20.5	-	-	普通	黄い黄褐色	白色粒・黑色粒	口縁部～底部中位焼成	口縁部焼成で、底部近削り	口縁部焼成で、底部近削り	1,299
H-127	1	土師器	坏	(10.8)	-	7.2	普通	弱褐色	白色粒・黑色粒・褐色粒・角閃石	2/3	口縁部焼成で、体部～底部近削り	口縁部焼成で、体部～底部近削り	212
H-129	1	土師器	坏	13.1	-	4.9	普通	褐色	白色粒・黑色粒	7/8	口縁部焼成で、体部弱化部多岐に現れ、底部近削り	口縁部焼成で、体部弱化部多岐に現れ	171
H-129	2	土師器	坏	9.2	-	7.0	普通	黑褐色	白色粒・黑色粒	ほぼ完	口縁部焼成で、体部上形	口縁部焼成で、体部～底部近削り	267
H-129	3	土師器	坏	12.6	-	7.7	普通	弱褐色～褐色	白色粒・黑色粒	7/8	口縁部焼成で、体部近削り、底部近削り	口縁部焼成で、底部近削り	287
H-129	4	土師器	小形壺	12.8	5.9	9.8	普通	黄い黄褐色～灰褐色	白色粒・黑色粒	4/5	口縁部焼成で、底部～底部近削り	口縁部焼成で、底部～底部近削り	315
H-129	5	土師器	小形壺	12.8	-	13.3	普通	弱い赤褐色～灰褐色	白色粒・黑色粒	3/4	口縁部焼成で後一部削り、斜部～底部近削り	口縁部焼成で、斜部～底部近削り	612
H-129	6	土師器	斜付壺	15.2	-	-	普通	褐色	白色粒・角閃石	口縁部～底部	口縁部焼成で、底部近削り、斜部～底部近削り、底部近削り	口縁部焼成で、底部近削り	445
H-129	7	土師器	有孔鉢	17.4	4.0	10.7	普通	弱い黄褐色～明赤褐色	白色粒・黑色粒	7/8	口縁部焼成で、底部～底部近削り、孔径1.5mm	口縁部焼成で、底部～底部近削り	446
H-129	8	土師器	有孔鉢	25.4	6.4	12.9	普通	弱い黄褐色	白色粒・黑色粒	7/8	口縁部焼成で、底部近削り、底部近削り、底部近削り、孔径1.5mm	口縁部焼成で、底部～底部近削り	922
H-129	9	土師器	瓶	21.2	7.4	26.8	普通	弱い黄褐色～黑褐色	白色粒・黑色粒	9/10	口縁部焼成で、底部近削り	口縁部～底部近削り	1,570
H-129	10	土師器	壺	19.8	-	-	普通	弱い橙色	白色粒・黑色粒・鐵	口縁部～底部	口縁部焼成で、口縁部下位～斜部近削り	口縁部焼成で、底部近削り	1,538
H-129	11	土師器	壺	(16.4)	8.0	26.3	普通	弱い黄褐色～黑褐色	白色粒・黑色粒	3/4	口縁部焼成で、斜部～底部近削り	口縁部焼成で、斜部～底部近削り	1,444
H-130	1	土師器	坏	12.7	-	5.1	普通	褐色	白色粒・角閃石・鐵	4/5	口縁部焼成で、体部上位部で、下位～底部近削り	口縁部焼成で、体部近削り	159
H-130	2	土師器	坏	(12.6)	-	5.2	普通	明赤褐色	白色粒・角閃石・鐵	2/3	口縁部焼成で、体部上位部で、下位～底部近削り	口縁部焼成で、体部～底部近削り	122
H-130	3	土師器	坏	(12.5)	-	9.1	普通	外一綠色 内一黑褐色	黑色粒・褐色粒	3/4	口縁部焼成で、体部上位部で、底部近削り	口縁部焼成で、体部～底部近削り	273
H-131	1	土師器	坏	(11.9)	-	4.8	普通	弱色～弱褐色	白色粒・黑色粒	1/5	口縁部焼成で、体部～底部近削り	口縁部～体部近削りで後底部近削り	86
H-133	1	土師器	坏	12.4	-	-	普通	弱い白褐色	白色粒・黑色粒	7/8	口縁部焼成で、体部上位部で、下位～底部近削り	口縁部～体部近削りで後底部近削り	184
H-133	2	土師器	坏	13.3	-	5.4	普通	弱い赤褐色～明赤褐色	白色粒・黑色粒	3/4	口縁部焼成で、体部～底部近削り	口縁部～体部近削りで後底部近削り	226
H-133	3	土師器	坏	12.9	-	5.7	普通	灰褐色～赤褐色	白色粒・黑色粒	ほぼ完	口縁部焼成で、体部上位部で、下位～底部近削り	口縁部～体部近削りで後底部近削り	211

第22表 出土土器觀察表(14)

遺物名	番号	種類	標本	法螺			成・蓋形法螺の特徴						備考	重さ(g)
				口径	底径	高さ	①純成	②色調	③胎土	残存	外面	内面		
H-133	4	土師器	环	12.5	—	4.9	普通	灰褐色~明 赤褐色	白色粘 褐色粘	7/8	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部~体部模様で後 削れ状況を、底部削 り		183
H-133	5	土師器	环	(14.0)	—	6.2	普通	浅い黄褐色~ 褐色	白色粘 黑色粘	1/3	口縁部模様で、体部~ 底部削り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		87
H-133	6	土師器	环	13.8	—	8.1	普通	尾褐色~棕 褐色	白色粘 黑色粘	先形	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		341
H-133	7	土師器	环	(14.0)	—	6.0	普通	浅い黄褐色	白色粘 黑色粘	3/4	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		120
H-133	8	土師器	环	(12.8)	—	6.2	普通	橙色	白色粘 黑色粘	1/2	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		107
H-133	9	土師器	环	(11.8)	6.1	7.1	普通	浅い黄褐色	白色粘 黑色粘	3/5	口縁部模様で、体部~ 底部削り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		129
H-133	10	土師器	环	(10.2)	6.4	6.8	普通	浅い黄褐色	白色粘 黑色粘	4/5	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		162
H-133	11	土師器	高环	(14.1)	10.4	9.3	普通	另一種色 内~尾褐色	白色粘 黑色粘	3/5	口縁部模様で、体部側 面で、脚部模様で	口縁部模様で、体部~ 底部削り、口縁部~ 底部黒褐色處理、脚部上 位面で、下位削り		343
H-133	12	土師器	小形環	13.0	—	12.1	普通	浅い黄褐色~ 褐色	白色粘 褐色粘	ほぼ完	口縁部~類似模様で後 削れで、肩部削り、 脚部削り	口縁部模様で、類似~ 底部削り		573
H-133	13	土師器	小形環	12.9	4.7	12.5	普通	尾褐色~棕 褐色	白色粘 褐色粘	先形	口縁部模様で後削 れ、脚部上位削り、 下位~底部削り	口縁部模様で、脚部~ 底部削り		496
H-133	14	土師器	小形環	13.2	—	10.0	普通	橙色~尾褐 色	白色粘 褐色粘	7/8	口縁部模様で、脚部上 位面で、中位~底部削 り	口縁部模様で、脚部~ 底部削り		384
H-133	15	土師器	小形環	13.2	—	11.1	普通	橙色	白色粘 黑色粘	4/5	口縁部模様で、脚部上 位面で、中位削り、 下位削り、底部削り	口縁部模様で、脚部~ 底部削り		406
H-133	16	土師器	環	15.9	8.3	26.2	普通	浅い黄褐色~ 灰白色	白色粘 黑色粘	4/5	口縁部模様で、脚部~ 底部削り	口縁部模様で、脚部~ 底部削り		1,834
H-133	17	土師器	環	21.4	7.5	23.2	普通	黄褐色~黑 褐色	白色粘 黑色粘 黄色粘	ほぼ完	口縁部模様で、脚部底 面で、脚部削り	口縁部模様で、脚部底 面で、脚部削り		1,466
H-133	18	土師器	環	29.2	8.2	28.6	普通	橙色~浅 黄色	白色粘 褐色粘	1/2	口縁部模様で、脚部底 面で、底部削り	口縁部模様で、脚部底 面で、底部削り		928
H-134	1	土師器	环	13.5	—	5.9	普通	浅い褐色	白色粘 褐色粘 黑色粘 角閃石 青玉、碧	ほぼ完	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		226
H-134	2	土師器	环	12.1	—	6.3	普通	浅い褐色	白色粘 褐色粘 黑色粘 角閃石 青玉	ほぼ完	口縁部模様で、体部~ 底部削り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		227
H-134	3	土師器	环	13.1	—	6.0	普通	明赤褐色	白色粘 褐色粘 黑色粘 角閃石 青玉	先形	口縁部模様で、体部~ 底部削り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		226
H-134	4	土師器	环	11.3	—	5.3	普通	暗赤褐色~ 褐色~赤褐色	白色粘 褐色粘	口縁部 1/8欠損	口縁部模様で、体部~ 底部削り	口縁部模様で後削れ状 況を、底部削り		197
H-134	5	土師器	环	12.3	—	5.4	普通	浅い赤褐色	白色粘 褐色粘	1/4欠損	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部模様で後削れ状 況を、底部削り		187
H-134	6	土師器	环	10.7	5.4	4.3	普通	浅い黄褐色	白色粘 褐色粘	口縁部 1/6欠損	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		103
H-134	7	土師器	环	(13.0)	—	5.6	普通	赤褐色	白色粘 褐色粘	3/5	口縁部模様で、体部上 位面で、下位~底部削 り	口縁部模様で、体部~ 底部削り		159

第23表 出土土器觀察表(15)

遺物名	番号	種類	形態	性質			成・整形技術の特徴					備考	重量(g)	
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③地土	残存	外観	内面		
H-134 8	土師器	杯	13.1	6.1	7.7	普通	高い黄褐色	白色鉄・ 褐色鉄・ 角閃石	口縁部 1/8欠損	口縁部破壊で、底部一 周底面削り	口縁部～底部底面で後 剥離			246
H-134 9	土師器	壺	13.0	—	—	普通	高い黄褐色	白色鉄・ 褐色鉄	3/5	口縁部～底部底面で、 脚部～底部底面削り	口縁部破壊で、脚部底 面削り、底部底面			188
H-134 10	土師器	小形壺	13.6	4.8	11.4	普通	高い赤褐色	白色鉄・ 角閃石・ 褐	ぼぼ光 形	口縁部破壊で、底部底 面で、底部上位削り、 下位～底部底面で	口縁部破壊で、脚部～ 底部底面			415
H-134 11	土師器	小形壺	11.9	7.8	14.6	普通	高い褐色～ 高い褐色	白色鉄・ 褐色鉄・ 褐	口縁部 ～底部 1/8欠損	口縁部破壊で、底部一 周底面削り	口縁部破壊で、脚部～ 底部底面			664
H-134 12	土師器	壺	19.5	7.2	24.9	普通	高い黄褐色	白色鉄・ 褐色鉄	3/4	口縁部～脚部底面を、 底部削り抜け	口縁部～脚部底面			1,344
H-134 13	土師器	壺	16.2	—	28.3	普通	褐色～高い 褐色	白色鉄・ 黒色鉄	7/8	口縁部～颈部底面で、 脚部～底部底面	口縁部破壊で、脚部～ 底部底面			1,238
H-134 14	土師器	壺	16.1	6.0	19.8	普通	高い褐色～ 高い褐色	白色鉄・ 褐色鉄・ 褐	3/4	口縁部破壊で、底部～ 底部底面削り	口縁部破壊で、脚部～ 底部底面			914
H-136 1	土師器	杯	13.6	—	5.0	普通	褐色～高い 褐色	白色鉄・ 角閃石	口縁部 1/4欠損	口縁部破壊で、底部上 位削り、下位～底部底 面削り	口縁部破壊で、体部破 壊で、下位～底部底 面削り			208
H-136 2	土師器	杯	12.2	—	4.9	普通	褐色～高い 褐色	白色鉄・ 褐色鉄・ 角閃石・ 褐	口縁部 1/8欠損	口縁部破壊で、底部底 面削り	口縁部～体部破壊で後 剥離～底部底面、底部底 面			196
H-136 3	土師器	杯	(10.9)	—	6.5	普通	高い赤褐色～ 高い灰褐色	白色鉄・ 褐色鉄	1/2	口縁部破壊で、底部上 位削り、下位～底部底 面削り	口縁部～体部破壊で後 剥離～底部底面、底部底 面			144
H-136 4	土師器	壺	22.5	9.7	20.2	普通	褐色	白色鉄・ 褐色鉄	口縁部 1/8欠損	口縁部～颈部底面で、 脚部底面削り、底部底 面	口縁部破壊で、脚部底 面削り			1,083
H-136 5	土師器	壺	10.5	—	20.2	普通	灰褐色	白色鉄・ 褐色鉄	4/5	口縁部～底部中位削 り、下位～底部底面	口縁部上位削りで、下 位～底部底面			1,002
H-136 6	土師器	壺	18.9	4.7	28.1	普通	褐色～高い 褐色	白色鉄・ 褐色鉄・ 褐	2/3	口縁部破壊で、底部上 位削り、下位～底部底 面削り	口縁部破壊で、脚部底 面で、下位～底部底面 削り			1,316
H-136 7	土師器	壺	16.0	7.5	26.7	普通	褐色	白色鉄・ 角閃石・ 褐	口縁部 1/2欠損	口縁部破壊で、脚部底 面削り、下位～底部底 面削り	口縁部破壊で、脚部上 位削り、中位～下位削 り			1,800
H-137 1	鍍鉄器	杯	11.9	—	4.6	還元	灰褐色	白色鉄・ 黑色鉄	ぼぼ光 形	鍍鉄機理で、底部左側 底面削り	回転機理で			231
H-137 2	土師器	有孔鉢	15.4	6.5	8.4	普通	褐色～高い 褐色	白色鉄・ 黒色鉄・ 褐色鉄・ 石炭	7/8	口縁部破壊で、脚部一 周底面削り、底部に嵌 合底円孔径2.2mm	口縁部破壊で、脚部上 位削り、下位～底部底 面			395
H-137 3	土師器	小形壺	11.8	6.5	9.9	普通	高い黄褐色～ 高い黄褐色	白色鉄・ 黒色鉄	底延充 形	口縁部破壊で、底部上 位削り、中位削り、下 位削り、底部底面削 り	口縁部破壊で、脚部上 位削り、下位～底部底 面			487
H-137 4	土師器	小形壺	11.5	5.0	14.1	普通	高い黄褐色	白色鉄・ 黒色鉄・ 褐色鉄・ 角閃石 石炭	底延充 形	口縁部破壊で、脚部一 周底面削り	口縁部破壊で、脚部～ 底部底面			542
H-137 5	土師器	壺	18.8	5.6	33.2	普通	高い黄褐色～ 高い黄褐色	白色鉄・ 黑色鉄	7/8	口縁部破壊で、脚部～ 底部底面削り	口縁部破壊で、脚部～ 底部底面			1,755
H-137 6	土師器	壺	(19.5)	1.9	34.9	普通	高い黄褐色	白色鉄・ 角閃石	2/3	口縁部剥離～底部底 面削り、底部上位削 り、粘土付着、底部底 面	口縁部上位削りで、中 位～底部底面後剥離			1,936
H-138 1	鍍鉄器	壺	(15.4)	—	—	還元	灰褐色	白色鉄・ 褐色鉄	1/2	回転機理で、天井部分 回転削り	回転機理で			133
H-138 2	土師器	杯	13.9	—	4.3	普通	褐色	白色鉄・ 黒色鉄・ 褐色鉄	底延充 形	口縁部破壊で、体部一 周底面削り	口縁部破壊で、体部底 面			184

第24表 出土土器觀察表(16)

遺物名	番号	種類	形態	法面		成・整形技術の特徴					備考	直鑑(?)		
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③焼土	残存	外面	内面		
H-138	3	土師器	环	12.6	—	5.5	普通	褐色	白色粒 褐色粒 角閃石	3/5	口縁部模様で、体部上位面で、下位～底部迄削り	口縁部～体部模様で、底部まで		137
H-138	4	土師器	环	12.6	—	4.8	普通	純い黄褐色	白色粒 褐色粒 角閃石	3/4	口縁部模様で、体部上位面で、下位～底部迄削り	口縁部～底部表面黒れ 質感不明瞭		150
H-138	5	土師器	壺	(19.6)	—	—	普通	褐褐色～明褐色	白色粒 褐色粒 角閃石	—	口縁部模様で、側部底削り	口縁部模様で、側部底削り		3,264
H-138	6	土師器	壺	25.7	—	—	普通	褐色～褐灰色	白色粒 褐色粒 角閃石	—	口縁部模様で、下位～底部迄削り	口縁部模様で、側部底削り		1,937
H-141	1	土師器	环	13.7	—	5.0	普通	褐色	白色粒 角閃石 鐵	3/5	口縁部模様で、体部～底部底削り	口縁部模様で、体部放射状底削り、底部底削り		151
H-141	2	土師器	壺	(15.2)	—	—	普通	純い黄褐色	白色粒 褐色粒	1/5	口縁部模様で、側部上位面で、中位～下位削り	口縁部模様で、側部底削り		328
H-143	1	土師器	壺	(18.7)	—	—	普通	純い褐色	白色粒 褐色	—	口縁部模様で、側部上位面削り	口縁部模様で、側部底削り		1,106
H-144	1	土師器	环	10.9	5.4	6.4	普通	純い黄褐色～純い黄褐色	白色粒 褐色粒 石英	—	口縁部模様で、体部上位面で、下位～底部底削り	口縁部模様で、体部～底部底削り		314
H-145	1	土師器	环	(13.9)	—	4.6	普通	褐色	白色粒 褐色粒 鐵	3/4	口縁部模様で、体部～底部底削り	底部黒れ質感不明瞭、一側底削き		169
H-146	1	土師器	环	(11.0)	—	4.5	透窓	灰色	白色粒 褐色粒	1/2	口縁部模様で、底部左側面削り	口縁部模様で		122
H-146	2	土師器	环	(15.2)	—	7.0	普通	褐色～純い褐色	白色粒 褐色粒 石英	2/3	口縁部模様で、体部上位面で、下位～底部底削り	口縁部模様で、体部～底部底削り		224
H-146	3	土師器	壺	15.9	—	—	普通	純い水褐色～淡い黄褐色	白色粒 褐色粒 鐵	—	口縁部模様で、側部中位面削り	口縁部模様で、側部底削り		1,150
H-146	4	土師器	壺	16.3	—	26.6	普通	純い黄褐色～純い黃褐色	白色粒 褐色粒	はげ完	口縁部模様で、側部～底部底削り	口縁部模様で、側部～底部底削り		2,600
H-149	1	土師器	环	12.6	—	4.8	普通	褐色	白色粒 黑色粒 褐色粒 角閃石	—	口縁部模様で、体部上位面で、下位～底部底削り	口縁部～体部模様で、底部表面黒れ質感不明瞭		187
H-149	2	土師器	高环	(17.0)	—	—	普通	純い褐色	白色粒 角閃石 石英	—	口縁部模様で、体部～底部底削り	口縁部模様で、底部～底部底削り		380
H-149	3	土師器	壺	(16.6)	—	—	普通	純い黄褐色	白色粒 角閃石 石英	下位1/3	口縁部模様で、側部上位面で、下位削り、底部底削り	口縁部模様で、側部底削り		1,038
H-150	1	土師器	小形壺	9.4	5.9	9.8	普通	灰褐色	白色粒 褐色粒 角閃石	1/2	口縁部模様で、側部～底部底削り	口縁部模様で、側部～底部底削り		171
H-150	2	土師器	小形壺	17.2	6.8	14.9	普通	浅黄褐色～灰褐色	白色粒 褐色粒 鐵	4/5	口縁部模様で、側部底削り、底部底削り	口縁部模様で、側部～底部底削り		689
H-150	3	土師器	壺	(25.6)	—	—	普通	浅黄褐色～灰褐色	白色粒 褐色粒	下位1/3	口縁部模様で、側部底削り	口縁部模様で、側部底削り		1,258
H-151	1	土師器	口付	4.6	2.0	2.4	普通	純い黄褐色	白色粒 褐色粒	はげ完	口縁部～底部底削り	口縁部～底部底削り		20
H-151	2	土師器	高环	8.8	8.0	7.2	普通	淡黄褐色	白色粒 褐色粒 鐵	2/3	表面黒れ質感不明瞭、側部孔3箇所	口縁部～底部底削り		74
H-152	1	土師器	环	11.8	—	—	普通	褐色	白色粒 褐色粒 角閃石 石英	下位3/5	口縁部模様で、体部上位面で、下位～底部底削り	口縁部模様で、体部～底部底削り		93

第25表 出土土器総観表(17)

遺物名	番号	種類	断面	法螺		成・鑑形技法の特徴						備考	重量(g)
				口径	底径	高さ	①焼成	②色調	③微土	残存	外端	内面	
H-152 2	土師器	杯	(12.1)	—	4.9	普通	褐色	角閃石	2/3	口縁部模様で、体部～底部削り	口縁部～体部模様で後削き、底部削り流れ削痕有り		167
H-152 3	土師器	杯	(14.2)	5.2	9.4	普通	純い褐色～灰褐色	白色鉄・白色鉄	1/2	口縁部模様で、体部～底部削り	口縁部～体部模様で後削き、底部削り流れ削痕有り		496
H-152 4	土師器	小形瓶	(10.4)	5.0	9.1	普通	純い黄褐色	白色鉄・白色鉄	3/4	口縁部模様で、肩部削りと底部削り	口縁部模様で、肩部削りと底部削り、下位～底部削痕有り		240
H-152 5	土師器	片口	(12.4)	6.4	12.8	普通	純い黄褐色	白色鉄・角閃石	3/4	口縁部模様で、肩部削りと底部削り	口縁部模様で、肩部削りと底部削り、底部削痕有り		442
H-152 6	土師器	甕	16.8	4.8	30.3	普通	灰褐色～黑色	白色鉄・黑色鉄	7/8	口縁部模様で、肩部削りと底部削り	口縁部模様で、肩部削りと底部削り、底部削痕有り		1,690
H-152 7	土師器	甕	15.0	(7.0)	28.1	普通	純い黄褐色	白色鉄	4/5	口縁部模様で、肩部削りと底部削り	口縁部模様で、肩部削りと底部削り、底部削痕有り		1,490
H-153 1	土師器	甕	—	—	—	普通	純い黄褐色	白色鉄・褐色	—	肩部～底部上位部で、中位部削り、下位～底部削り	肩部～底部削痕で、底部削痕有り		138
H-153 2	土師器	甕	15.0	—	—	普通	灰褐色	白色鉄・黑色鉄	2/3	口縁部模様で、肩部削り	口縁部模様で、肩部削り		1,033

第26表 出土土器調査表(18)

<参考文献>

- 寺村光晴 1966 「古代玉作の研究」吉川弘文館
- 龜井正道 1972 「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第8号
- 寺村光晴 1980 「古代玉作形成史の研究」吉川弘文館
- 田口一郎 1987 「生原地区遺跡群」箕郷町教育委員会(現高崎市)
- 女屋和志雄他 1986 「下佐野遺跡Ⅱ地区」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 女屋和志雄 1988 「群馬県における古墳時代の玉作」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大賀 健他 1989 「高島井遺跡」「妙義東部遺跡群(II)」妙義町教育委員会(現富岡市)
- 田口 修他 1990 「松井田工業団地遺跡」松井田町教育委員会(現安中市)
- 大工原 豊 1991 「新守地区遺跡群」安中市教育委員会
- 若狭 徹 1992 「北西関東における弥生土器の成立と展開」『駿台史学』84 駿台史学会
- 大工原 豊他 1994 「中野谷地区遺跡群」安中市教育委員会
- 篠原祐一 1995 「白玉研究私論」『研究紀要』第3号(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 篠原祐一 1996 「剣形模造品の製作技法」『研究紀要』第4号(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 大工原 豊・外山政子他 2001 「安中市史」第4巻 原始古代中世資料編
- 大工原 豊・右島和夫他 2002 「安中市史」第2巻 通史編
- 大工原 豊・井上慎也・志村 哲・荒木勇次他 2003 「築瀬二子塚古墳・築瀬首塚古墳」安中市教育委員会
- 井上慎也 2004 「中野谷地区遺跡群2」安中市教育委員会
- 井上慎也 2004 「天神林遺跡・砂押Ⅲ遺跡・大道南II遺跡・向原II遺跡」安中市教育委員会
- 井上慎也・三浦京子 2007 「加賀塚遺跡!」 安中市教育委員会
- 千田茂雄 2004 「古屋地区遺跡群」 安中市教育委員会
- 寺村光晴編 2004 「日本玉作大観」吉川弘文館
- 埋蔵文化財研究会編 2005 「古墳時代の滑石製品—その生産と消費— 発表要旨・資料集」
- 井上慎也・外山政子他 2005 「載畠遺跡」安中市埋蔵文化財発掘調査団
- 脇塚徳司他 2009 「丹生地区遺跡群」 富岡市教育委員会

発掘調査報告書 抄録

ふりがな	かがづかいせき
書名	加賀塚遺跡 2
副書名	横野平工業団地分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	3
シリーズ番号	
編著者名	井上誠也・石丸敬史・三浦京子・菅原龍彦・日沖剛史
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀 245 TEL 027-382-1111
発行年	西暦 2011 年(平成 23 年)2 月 28 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
加賀塚遺跡	安中市中野谷字 加賀塚・北原	102113	G-46	36° 17' 20"	138° 51' 03"	2008/001 ~ 2009/0331	34,000m ²	工業団地分譲

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加賀塚遺跡	集落	縄文前・中期 弥生 古墳前~後期	竪穴 1 なし 住居址 102 周溝状遺構 1 竪穴状 土坑 溝 1 古代以降	深溝、石器（石器・打鍛石斧他） 土器片、石器（磨製石器・石鏡） 土師器・須恵器 石製品・石製模造品（毘柱形・ 勾玉・管玉・劍形・白玉等、筋 鉢等） 石器（底石）、鐵製品、土製品（鉢 等）	古墳時代前期～後期にかけて の集落址。 石製模造品製作址。 伊から塚への変遷過程が認め られる。
要約			平成 17 年度に調査を実施した加賀塚遺跡の 4 次調査。今回の調査では、古墳時代前期から後期にかけての集落跡が 確認された。前回の調査分を含め、150 戸以上の住居址が確認された。古墳時代中期全期にわたっての集落変遷が認めら れた。集落内では石製品・石製模造品の製作と消費がみられた。また、単独で東日本では少ない「毘柱形石製品」が出 土した。古墳時代中期の鉄器生産と関係する高坪軒用羽口・鉄斧・鉄製品なども出土している。		

加賀塚遺跡 2 横野平工業団地分譲事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集 発行日 平成 23 年 2 月 28 日 編集・発行 安中市教育委員会 群馬県安中市松井田町新堀 245 印刷 上海印刷工業株式会社 群馬県前橋市天川大島町 305- 1
--